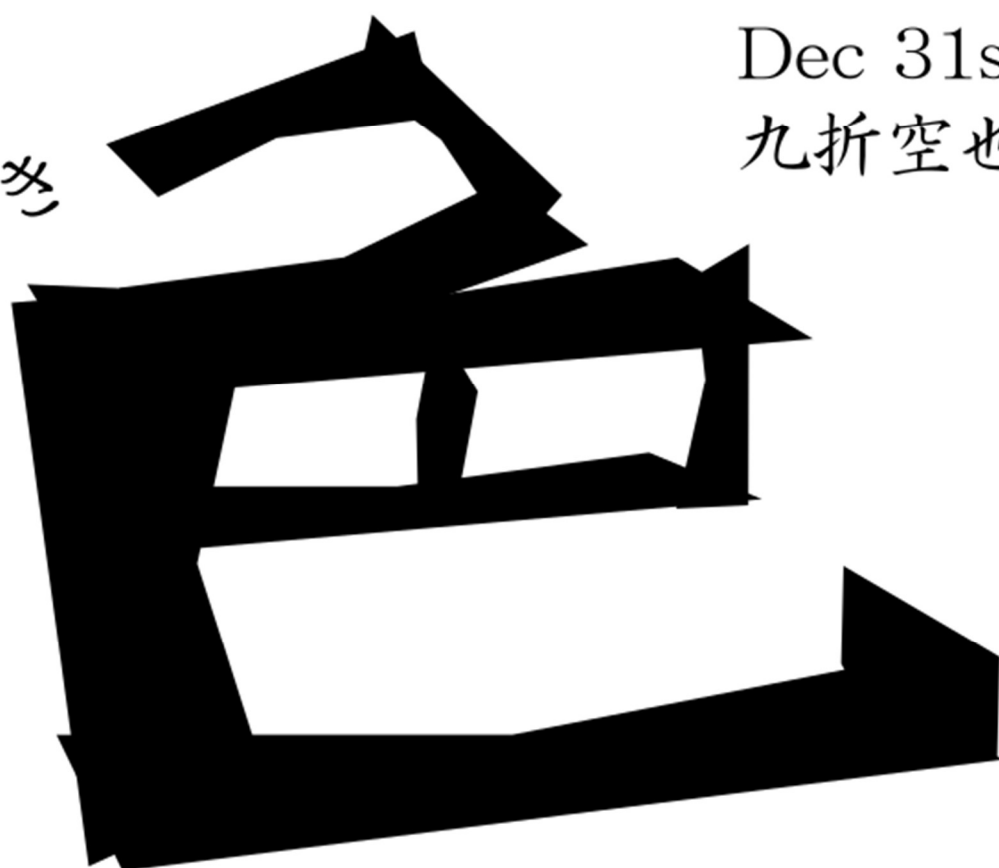


はなし



Dec 31st, 2025  
九折空也

しき



## 目次

「そんな話はない」	3
色（しき）とは「量」のことだ	4
「手品に惹かれた、だから手品師になった」	6
何の中で生きてきたか、何の中で育ってきたか	9
成長について	13
損得	14
親の人生を生きる	16
色魔	17
量は状態をもたらし、状態は実感をもたらし、実感ふたたび量である	20
観測	24
「分かる」という機能のエラー	26
あなたがあなたを「分かる」と言い張ること	30
自我と、使用できる記憶	36
夜は「在る」のか	42
自我の真ん中と「この人」の真ん中は、位置が違う	46
色（しき）の不連続性と「色々」	51
不連続性と自己愛	57
関係・関わりと、つながりの錯覚	60
つながりという、まったく不明のもの	64
関係力グラビティ	69
魂魄	74
話の進行	78
同一性	83

畏	88
人類史上屈指のハズレ男	95
真ん中が空っぽのあなたへ	107
自我は他人だ	115
時間量が古ではない	126
話が「壊れている」ことに気づけ／①あてがう器官	129
話が「壊れている」ことに気づけ／②主題の保障と阻害	133
話が「壊れている」ことに気づけ／③色（しき）を受容している	147
決めつけの怪物	153
差別	159
耽美と欲	169
罪	182
音楽にはドしかない	194
認識と矛盾した思い込み	199
作品および仕事という、絶望を得にいくかのような行為	203
魂魄と稽古	208
【「年喰ったオッサン」は、生まれてこのかた一度も「仕事」をしたことがない】	208
【現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けていく】	210
【稽古は自我未然につく】	214
①稽古は自我未然領域に得られる現象であって、自我以降はただの「生（なま）」の世界だ	215
②時間を逆行し、重力と逆向きの作用が掛かる	216
③「話」のほうが速く、「観測」のほうが後だ	216
④脱力は違う、わたしは無力に立つ	217
⑤具体的処理	218
⑥横隔膜のいちばん奥を通ったものは体験され、そうでないものは体験されていない	218

⑦わたしの無力は、あなたを無力化させ、ここに主題の支配が呼び込まれる……………	219
⑧稽古は、肉体にも文体にも全体にもつく……………	222
⑨稽古は時間的隔たりが感想されず、また時間的作輟（さくてつ）もなされない……………	224
⑩体の形……………	225
稽（かんが）えろ……………	228

# 「そんな話はない」

「そんな話はない」というのがキーワードだ。

人々は、「話」が何なのかわかっていない。

ショート動画を再生すると、スカートを短くした女子高生のふたりが踊りはじめる。

美人で、キュートで、脚がきれいで、バストが大きく、セクシーだ。

ふたりは踊り、照れくさそうにはしゃいでいて、青春、というようなイメージを与えてくる。音楽に乗り、とてもかわいらしい。

が、そんな話はない。

女子高生の二人組が、スカートを短くして、とつぜん駆け寄ってきてダンスを踊って、セクシーさを振りまくというような、そんな話はない。

そんな話はないのだが、そんな色（しき）はあるのだ。

目撃しているものが「話」ではないということに人々は気づいているのだろうか。

現代においては、「そんな話はない」がキーワードになる。

ショート動画をスワイプすると、次は見ず知らずのドイツ人青年が現れて、「見ててね」と言い、スケートホードのスゴ技を披露してくれる。

そしてスゴ技をキメたあとには、白い歯を見せて、サムアップを示してくれる。

そのスゴ技は、スゴいし、ドイツ人青年の彼はイケメンで清潔感があつてカッコいいのだが、だからといってやはり「そんな話はない」のだ。

見ず知らずのドイツ人青年が、駆け寄ってきてスケボーのスゴ技を見せ、ニカッと笑ってサムアップしてくるというような、わけのわからない話はない。それに「いいね」をブッシュするというような話もない。

「そんな話はない」のだが、そんな色（しき）はあるのだ。

見ず知らずの中年男性が、

「どーも、〇〇チャンネルの、△△です！ えーと本日はですねえ」

と言い出して、とつぜん最新家電のおすすめポイントを紹介してくるというような、そんな話はない。

とつぜん、発信者が誰かもわからないようなアニメ絵が示され、「重曹を使うだけでアツという間に台所がキレイになるワザ三選」を四十五秒で示してくるというような、そんなわけのわからない話はない。

見ず知らずの美容師が、見ず知らずの客を、ヘアカットして染色してブローして垢抜けさせるのを見せつけてくるというような、そんなわけのわからない話もない。

見ず知らずの誰かがいきなり目の前にやってきて、マッチングアプリを使っているくらいでもない異性にばかり出くわすと「マジで精神を病む」と語りかけてくるというような、そんなわけのわからない話はない。

申し訳ないが、末期ガン患者が「これからの展望」について「緊急」と題打った話を赤の他人のこちらにいきなり向けてくるというような話もないし、「自宅でカクテルをおいしく飲むコツ」をきゆうに教えてくれるお兄さんがいるとか、「大工歴四十一年の父親が最近の職人について思うこと」を語りかけてくるとか、そんな話もないのだ。

そんな話はない、が、そんな色（しき）はある。

現代にあるのはすべて色（しき）であって、話ではないのだ。

では、何が「話」なのか。

「話」というものが、本質的にどういうものなのか、それを説明するのは極端にむづかしくなる。

ただ、誰でも知っているのは、「浦島太郎」や「桃太郎」が話だということだ。寓話と呼ばれるような話だ。

あるいはアマテラスオオミカミが、天岩戸に閉じこもってうんぬんと

いう、そういうのも「話」だ。神話と呼ばれる、カミガミの話だ。

一方、電柱に不動産広告が貼ってあり、「駅徒歩二分、新築4LDK分譲、八千万円」と書かれてあるのは、さすがに「話」ではない。

また、日本交通状況センターの〇〇さんが、「東名高速下り線、△△インターから五キロの渋滞です」と言ってくるのも、さすがに「話」ではない。

一方、桂小五郎が、かつて江川太郎左衛門英龍庵と町人に扮装したことがあり、その経験が後の小五郎の逃走劇を救ったというようなことは、「話」と言っているだろう。

あるいは、「泣かした事もある 冷たくしてもなお よりそう気持ちがあればいいのさ 俺にしてみりゃ これで最後の lady」というのも、直接的ではないが、一定の「話」として聞こえてくる。

一方、「残酷な天使のテーゼ 窓辺からやがて飛び立つ ほとぼしる熱いパトスで 思い出を裏切るなら」というのは、色（しき）に満ちているだけで「話」としては聞こえてこない。

現代人は「話」がわかっていないのだ。

だから、「そんな話はない」がキーワードになる。

たとえば、

「千本桜 夜ニ紛レ 君ノ声モ届カナイヨ 此処は宴 鋼の檻 その断頭台で見下ろして」

これについて冷静に眺めれば、さすがに、

「そんな話はない」

と言えるだろう。

一方、草野心平の「さくら散る」の詩文を引用すると、

「はながちる はながちる ちるちるおちるまいおちるまいおちる 光と影がいりまじり 雪よりも 死よりもしずかにまいおちる まいおちるおちるまいおちる／光と夢といりまじり ガスライト色のちら

ちら影が 生まれては消え」

こちらにはたしかに「さくら散る」という話が聞こえてくる。

まずキーワードは、「そんな話はない」だ。

どんなマンガが流行り、どんなアニメが流行り、どんな歌が流行り、どんなツイートがバズり、どんなレスバトルが横行し、どんな Youtuber がどんなコンテンツを供給し、どんなインフルエンサーがどんな運動を拡散しているにせよ、それらはすべて色（しき）であって話ではない。

わたしはそのことを悪いと言っているのではなく、それらに染まりつづけると、あなたの話がなくなり、あなたの話が壊れ、あなたはあなたの話がないままに生き続けることになるということを警告したいのだ。

## 色（しき）とは「量」の量だ

〇〇県△市で火事があり、二人が重軽傷を負いました、というニュースがあったとして、そのニュースはさすがに「話」ではない。

ニュースはただの「情報」であって、話ではない。

ではなぜ情報は話ではないのか。

それは、情報には情報量があるからだ。

情報「量」という、量があるということ、それが色（しき）だ。

話には「量」がない。

浦島太郎という話には量がないし、桃太郎という話にも量がない。もし、浦島太郎という話をフラッシュメモリに保存するとしたら、テキストデータとして何 byte かの情報量になるだろうが、そこに保存さ

れているのは浦島太郎のテキストデータであって、浦島太郎という話ではない。

色（しき）とは「量」のことなのだ。

色（しき）とは量であり、パラメーターであり、その比率だ。

われわれは、五円玉を拾っても、比較的ドーパミンが出ない。

五十円玉を拾ってもあまりドーパミンは出ず、五百円玉なら「おっ」

と思うかもしれない。

それが五千円になったら「おおっ」となり、五万円だと逆に「えっ」となる。

それが五億円になったら、「……」となる。

ドーパミンが分泌される。

ドーパミンの分泌「量」は、五円と五億円では大違いだ。

不美人が三メートル向こうにいたとしても、ドーパミンは出ない。

美人が三十センチの目の前にいたら、男性はドーパミンを分泌するだろう。

パラメーター比が違うし、ドーパミンの分泌「量」が違う。

あなたのアカウントに、フォロワーが五人なら、あなたはしよぼくれているが、フォロワーが五万人なら、あなたはそれなりに肩をそびややすだろう。

「量」という概念、それじたいが色（しき）なのだ。

浦島太郎でしよぼくれることはできないし、桃太郎で肩をそびやかすこともできない。

「話」には量がないのだ。

あなたがAさんから、一万円もするプレゼントをもらえば、あなたはしよこぶかもしれない。

けれどもAさんが、別の人には、十万円もするプレゼントをしていたとすると、あなたは「ええーっ」となる。

Aさんからプレゼントをもらったという「話」は消え、コスト量として十分の一しか掛かっていない、「負けじゃん」という色（しき）に取って代わられる。

あなたは、古本屋で五十円で売られている浦島太郎の絵本より、総製作費五十億円が費やされた「シン・浦島太郎」のほうが偉いと思っているのだ。

そのことについては、おれははつきりと、「救いがたいバカだ」と申し上げておく。

あなたはまず、五十億円という量にドーパミンを分泌し、次いで観客動員数五千万人という量にドーパミンを分泌する。

そしてじつさいの映画「シン・浦島太郎」も、映像・音響・演出・ワーセンス・イケボにおいて、ドーパミン分泌を狙ってくるので、あなたはそれを見てドーパミンを大量に分泌し、「名作」「感動」「芸術」「天才ですよね」「涙腺崩壊」と思うのだ。

重ねてはつきり言うておくが、それは本当に救いがたいバカだ。

このことは、あなたがいつか真剣に「救われないとマズい」と思い始めたときに必要な知識なので、容赦のない確たる言い方で記しておく。

量は色（しき）であって話ではない。

最高裁判所や桜田門の建物がクソデカいのは、そのデカさで人を威圧しようというアホの発想の産物であって、それじたいは何ら「法」の話ではない。

江戸時代の大火で江戸城が焼け落ちたとき、保科正之という將軍後見人は、「もう戦国の世は終わったのだから、人々を威圧して見下ろす天守閣は要らない」と、まともな話をし、江戸城天守閣の再建はしないという政策を推進した。

以来、たしかに江戸城には天守閣がない。

（江戸城は現在の皇居です。いまでも天守閣はありません）

話には量がなく、量という要素はそれじたいが色（しき）となる。

たしかに保科正之の「話」には量がないし、比率やパラメーターを当てはめることができない。

先のキーワード、「そんな話はない」に加えて、「それはただの量じゃん」を言うことができる。

若い女の子が、肌を露出して、甘い声で自殺っぽいソングを歌い、「天然」っぽい仕草をアップロードし、ときおり「意味深」なツイートをすると、受け手側はドーパミンが出る。

そのドーパミン量が、大なり小なりあるというだけで、その甘い声のアーティストに何かの「話」があるわけではない。

彼女が語りかける話などなく、「音楽性」と呼ばれているもののすべては、どのように聴き手のドーパミンを誘うかということにしか向けられていない。

いま、どんなマンガが流行し、どんなアニメが流行し、その「画力」がどうであれ、その「作画」がどう派手であれ、それらはただドーパミンを誘導できる量を競っているだけだ。

何の話もない。

おれの言っているこのことが、ただの悪口だったならば、それが何よりで、それに越したことはない。

ただもし、おれの言っていることが本当で、事実あなたには何の話も与えられていないのだとしたら、あなたとしてはいつまでもこのことに無防備・無抵抗で恭順しているわけにはいかないのだ。

## 「手品に惹かれた、だから手品師になった」

わたしは、自己紹介のときに「手品師です」と述べても、まあ差支えないだろうというていどに、その実演に通じている。

なぜそんなことになったかというところ、中学〜高校のころに、その筋の人に引き込まれたからだ。

具体的には、天王寺の近鉄百貨店の七階、おもちゃのフロアの手品道具売り場にいたKさんという人の実演を見て、「おおっ」と引きずりこまれたのだが、そんな細かい話はいいだろう。

とにかく、そうした目撃があり、「手品に惹かれた、だから手品師になった」と言ってよい。

わかりやすい、単純な話だ。

けれどもこの単純な話を、あなたはまともに受け取ってくれない。

簡単に言うかどうかということ……すでに最大に簡単に言っているのだから、これ以上簡単に言うことはできない。

「手品に惹かれた、だから手品師になった」

おれの話を、あなたはまともに受け取らない。

ここであなはきつと、おれの言っていることを「ふつうに理解している」つもりでいると思うが、そうではないのだ。

現代において、あなたが受け取っているイメージ、あるいは捏造している理解イメージは次のようなものなのだ。







便利な時代になったもので、お察しのとおり、ふたつのグラフィックは、いわゆる生成AIにだらしなくプロンプトを打ち込み、粗雑に出力したものだ。

現代人の頭の中は「これ」なのだ。

あるいは、精神構造したいが「これ」に書き換わったと言ってもよい。その他、さまざまな形で「エモい」グラフィックを出力して当てはめることもできようが、ひたすら下品になるだけなのでこれ以上は控えようと思う。あなたの側の想像で補ってもらいたい。

おれの話は何だったか。

「手品に惹かれた、だから手品師になった」

おれの話は先ほどから変わっていないはずなのに、二枚のエモい・エロいグラフィックによって、何かもう別のものに書き換わってしまったはずだ。

あなたはこのことを、ここまで追究したわけではないだろうし、このことにここまで精細な自覚はなかったと思うが、あなたは男女どちらであれ、こうした美麗な・エモい・エロいグラフィックを見せられると「わっ」となり、それだけでドーパミンが出るのだ。

そしてドーパミンの分泌「量」に合わせて、キャプションに書かれていることをエモく神経に刻みこむ。

それで、おれは二枚のグラフィックに向けて言うし、またあなたに向けても言うのだ、

「そんな話はない」

と。

じっさい、そんな話はないのだ。

手品に惹かれた、だから手品師になったというのは、おれの若いころの話、おれが天王寺の近鉄百貨店の七階をうろついていたときの話であ

って、グラフィックに描かれているふたりの女の子の話ではない。

ただ、たとえ生成AIのものであれ、描き出されたふたりの女の子を悪しざまに言う気には、おれはなれない。

だからわざわざ正確に言うが、ここに表示されたふたりの女の子が悪いわけではなくて、彼女たちから誘われるドーパミン量と、それに比例する色（しき）を、「話」にすり替えようとする企みを持つ者が悪いのだ。

ここに生成された、きれいなふたりの女の子は、どこかで元気に楽しくしあわせにやっているものであって、ただ、おれの話とは関係ないというだけだ。

話と色（しき）を結びつけるな。

色（しき）で話を補おうとするな。

彼女らには彼女らの話があるのだろう。

おれにはおれの話がある。

色（しき）、ドーパミン量の多少で、何かをわかったつもりになるな。

あなたにはあなたの話があるだろうか？

このあたりで、あなたには自信を失くしてほしいし、恐怖を覚え始めてほしいのだ。

自分がこれまで「話」と思っていたものは、すべて「話」ではなかったのではないか、という可能性、というよりは蓋然性に、恐怖してほしい。

一本の映画を見て、一冊の本を読んで、ひとりの人を知って、じつは、自分は何らそれらの「話」を受け取れずにいるのではないか？

おれはあなたの悪口を言っているのではないし、あなたを追い詰めようとしているのではない。

そうではなく、このことが、あなたの根っこにどこまでもある不安、自信のなさ、あなたがずっと抱えているあなた自身の不確かさを、うまく説明するのではないかと思うのだ。

もしあなたが、観た映画、読んだ本、知った人、それらすべての「話」

を確かなものとして受け取ってきているのだと仮定するなら、あなたのどこまでもの自信のなさはおかしなものだし、あなたのいつまでものガキくさはおかしいものではないか。

おれは「話」の専門家として断言するが、「話」を正しく受け取るというのとはそんなに簡単なことではない！ たとえばあなたの観た映画について、あなたがそこに何を体験したか、それはどんな話だったか……あなたに原稿用紙五枚でも投げつければ、あなたは「うっ」と詰まって立ちすくむのじゃないか。それがふつうだ。

## 何の中で生きてきたか、何の中で育ってきたか

おれは子供のころ、典型的なファミコン少年、ゲーム少年だった。初代のドラゴンクエストやゼルダの伝説、あるいはゲームセンターの「スペースハリアー」などで育ってきたのだ。

友達と公園で遊ぶのも、どこかRPGじみていた。

おれは子供のころ、ゲーム世界を生き、ゲーム世界に育ってきた。いま現在のおれだって、一部はアレフガルドを歩いているかもしれない、ハイラル地方を歩いているかもしれない、ランスの村を歩いているかもしれない、アーランド地方を歩いているかもしれない、アサシン教徒となってトプカブ宮のまわりを歩いているかもしれない。

おれはするように生き、そのように育ってきたのだ。

おれと同年代の男性は、ほとんどが「ファミコン」をやったことがあるはずで、その後もきつと、初代からⅡかの「バイオハザード」ぐらいまではやったことがあるはずだ。

ただ、同年代の誰もがファミコンをやったとしても、誰もが誰も、「ファミコンの中を生きた」というわけではない。

あなたがコンビニでアルバイトをしたとしても、そのときのことを指して、「ファミリーマートの中を生きた」とは、あまり言うまい。

コンビニのアルバイトでも、学ぶことはいくらでもあったと思うが、それにしても、あなたは「ファミリーマートの中で育った」とはあまり言わないだろう。

それはじつにもったいないことだ。

あなたが、ファミリーマートの中を生きたのではなく、ファミリーマートの中で育ったのではないとしたら、あなたはこれまでに生きてきていないし、これまでに育ってきていないということなのだ。

あなたがどこまでも、根っこで自信が持てず、老けてはいく一方で、いつまでも根っこでガキっぽいのはそれが理由だ。

生きてきていないし、育ってきていないのだ。

おれは十歳のときに、アニメ映画「天空の城ラピュタ」を観、衝撃を受けた。

また、二十歳のときに、映画「タイタニック」を観、やはり衝撃を受けた。

天空の城ラピュタは、おれの十代の生きようを大きく決定したし、タイタニックは、おれの二十代の生きようを大きく決定した。

Make each day count.

引き下がれなかった。

友人からの洗脳で、ヘヴィメタルを聴くようになっていた。

I feel like I've been wasting precious time.

引き下がれなかった。

おれはその中を生き、その中で育ってきたのだ。

それはそんなにおかしな話だろうか。

おれは、「ストⅡ」全盛期のゲームセンターで育ったし、手品というエンターテインメントの中で育った。

その中を生きてきたから。

阪神淡路大震災のとき、被災した街で住み込みのボランティアをする、その中で育ったし、その後も神戸で育ち、大学のアホ男声合唱団の中で育った。

その中を生きただけからだ。

いろんな人がいてくれて、いろんなことを教えてくれ、いろんな理不尽を叩きこんでくれた。

「伝統だから」

「声が小さい奴はシヨボーい」

「ブルったら負けやで」

正しいかどうかはさておき、その中を生き、その中で育ってきた。

無理をして、フロイトの全集を読み、畑正憲の全集を読み、その他シヨペンハウアーやら西田幾多郎やら、構造主義やら、ドストエフスキーやらトルストイやらも読んだ。

ドストエフスキーの「罪と罰」は、一冊に詰め込むとじつにゴツイ本であって、それを布団に寝転びながら読んでみると、うとうとし始め、寝落ちした瞬間にそのゴツイ本が顔面に降ってくるのだ。

まだ半分寝ている仲、顔面に本の角が刺さり、「ぐあっ」となって、「まさに罪と罰だな」

と、若い日のおれは思ったものだ。

凍える冬の夜、誰もおらず、近場の自動販売機だけがおれの味方だった。

そういう中を生きて、そういう中で育ってきた。

かなぐり捨てないと、人に視えないし、作品が聞こえてこないということを知った。

訓練した上でかなぐり捨てていないといけないのか。

しかも、かなぐり捨てた上で、本当に笑っていないといけないのか：それでもない、本当にはかなぐり捨てていないのか。

そのことは、指揮台の上で知った。

あそこに生き、あそこで育ったということを、おれはいやというほど今も覚えている。

モテない男は、フラれるもので、フラれるばかりの日々はとてもつらく、そんなおれに対してもやさしい女性はいてくれて、そのやさしさはちよつと信じられないぐらいのもので、だからこそ、そうした女性に甘えるのだけはクソだと思い、ぎりぎりのところで踏みとどまった。そういう中を生きてきたし、そういう中で育ってきた。

東京に出てきて、丸の内に勤め、初めの一週間は部長に毎日六本木に連れていかれる、そして夜中の三時に交差点に置き去りにされる、という日々を過ごした。

背の高い真っ黒なガーナ人に、路上で、

「お前、毎日置き去りにされているじゃないか」

と同情されて、おれは、

「うるせえ」

と応えた。

最後のほうは、もう朝が眠くてしょうがなく、出社時には歩きながら寝て植え込みに突っ込んだ覚えがある。

それでもなんとか、遅刻はせず出社して、「余裕っスよ」とだけウソをつき、トイレの個室に入って昼まで気絶した。

二日間だけ、明らかに役に立たないニセモノの「研修」があり、三日目

からはデスクについて実地だった。

初めて取った電話は、イランの弁護士からで、なまった英語をまくしたてられ、死ぬほど何を言っているかわからなかった。

翌週には、何も知らないまま単独で東芝の課長のところに営業に行かされ、すべてを知ったかぶりで一時間のやりとりをなんとかしのぎきった。

（「お前は顔がフケているから大丈夫」というでたらめな言いようで行かされたのだが、無理に決まっている、ひどい話だ）

（あまりにひどい話だったので社名を出してやった、もちろん東芝さんの側は何ひとつ悪くない）

そういう中を生きてきて、そういう中で育ってきた。

きりがいいからこのへんにしよう。

思えば、そうして生きてきた中に紛れ込んでいた大江健三郎の一冊が、現在のおれをここまで大きく決定したのだった。

おれは大江の文体と文学理論に生き、その中を育ってきた。

いまになって、合唱曲の音楽と、唄われていた詩文によっても、深く育てられてきているということがわかる。

そのときはその中を生きていたから。

何かがわかっていたわけではなく、ただその中を生きて、その中で育ってきたのだ。

さてこのようにして、いささか柄でもないが、おれ自身がこれまでに生きてきた「話」を少々してみた。

もちろんこんなことは言い出せばきりがいいのだ。

ところで、ここでA子さんが、

「数年前、タピオカ屋の制服がすごくかわいかったから、そのタピオカ屋でバイトしていました」

ということを言ったとしよう。

そのことは何も悪くないが、それは果たして「話」なのだろうか。

「話」になるかそうではないかは、一点で決まる。

その中を生きてきたか、その中で育ってきたかという一点だ。

かわいい制服を目当てに、タピオカ屋でアルバイトをするというのは何も悪いことではないし、かわいい女性がかわいく働くのは素敵なことだが、彼女がそれで「あのときわたしはあそこに生きた」「タピオカ屋の中で育った」ということにならないのであれば、そのことは彼女に彼女の「話」をもたらしさない。

ここでBくんが、

「おれ、バイクあるし、ウーバーイーツ始めてみようかな？ 道に詳しくないけど、逆に道を覚えるために、一石二鳥でやってみたらいいかなって思う」

と言いつくしたとする。

その案は、何も悪くないものだ。

ただ彼がやはり、後になって「そのときウーバーイーツの中を生きた」「ウーバーイーツの中で育ってきた」と言えないのであれば、そのウーバーイーツ勤務は、彼に彼の「話」をもたらしさない。

このようなことをつづけていると、何十年も生きるあいだ、「何の話もなく生きた人」になっていってしまう。

誰だって、生きているうち、色んなことがあるものだ。

けれども、それはまさに「色んな」ことであって、色（しき）だ。

色（しき）は話ではない。

誰だって小学校に行き、中学に行き、多くの人は高校に行く。部活動に入る人も多いだろうし、その後は人それぞれ、就職したり結婚したりする。

友人と遊び、あちこちお出かけするだろうし、海外旅行にいく人も多いだろう。

だが、自分に何かを足したって、自分に何かを貼り付けたって、それは自分の「話」にはならないのだ。

自分がそのとき、その中を生き、その中で育ったということにならない  
いかに、自分の「話」にはならない。

いまこのとき、ふとおれは思い出したことがある。

シヴァとかヴィシュヌとかブラフマーとか、名前を出せば、「インドの神様ですよ」と、博学な人は知っているかもしれない。

そのとおり、ヒンドゥー教の神様だ。

そのことは、検索すれば出てくるが、おれは数日、そのヒンドゥー教の中を生きることがある。

いま思い返せばそうだ。

おれはガンガーのほとりで日々を過ごし、夜も昼も、早朝も、いつのまにか、ヒンドゥー神話の中を生きていた。

あのときからおれは、決定的に、根暗にはなれない男になったのかもしれない。

(本当に唐突に、いまこのことに思い至った)

おれはあのとき、あの川べりに生きていて、あの世界の中でけっこ育ったのだ。

(いまこのときまで、その自覚がまったくなかった)

一方、

「小学五年のとき、担任がマジでキモくてさあ」

「中一のとき、部活の顧問にセクハラされたんだよね」

「中三のとき、クラスみんな超仲良くて、すごい楽しかった」

「高校のとき、ビジュアルバンドの追っかけやって、割と病んでいたと思う笑」

「大学のとき、付き合った彼氏がすごい束縛の強い人で」

「就職してから、満員電車がマジで無理な自分に気づいた。そのころか

らめまいがひどくなったんだよね」

こうしたことはたしかに「色々ある」のだ。

でもこれらは「話」ではない。

担任が「どれぐらい」キモかったかという量、顧問のセクハラが「どれぐらい」イヤだったかという量、クラスメートの仲が良くて「どれぐらい」楽しかったかという量、追っかけをやっていて「どれぐらい」病んでいたかという量、束縛が「どれぐらい」強かったかという量、満員電車が「どれぐらい」無理で、めまいが「どれぐらい」厄介かという、量の取り扱いだ。

色(しき)であって話ではない。

あなたは担任のキモさの中を生きたとはいわないだろうし、顧問のセクハラの中を生きたとはいわないだろう。クラスメートが仲良しの中で育ったとも言わないし、追っかけと病みの中で育ったとも言わない。

もったいないことだ。

あなたが、めくるめくショート動画を視聴する中で、じつは何の話にも触れてはいないということが視えてきただろうか。

こうまで精密に「話」とそうでないものを見分けていくなら、あなたはこれまで自分が生きてきた「話」について、果たしてどうなのだろうか、一定でいど不安を覚えたはずだ。それが正しい。

何かの中を生きてきた人、何かの中で育ってきた人、そうした話の中を歩んできた人というのは、実数としてとても少ない。

# 成長について

成長、などという、ダサイことは言いたくないが、それをダサイと言  
い放てるのは年齢として思春期のうちの特権でしかないし、あるいはち  
ゃんと成長を得てきた人が、しがない露悪趣味としてそう言い放ちうる  
というだけの、やはり特権でしかない。

あなたは成長したいと思っているかもしれない。仕事において、人間  
関係において、あるいは部活動において、恋愛関係において、また人と  
して、個人として、自分として、さらには芸術として、人によつては親と  
して、成長したいと思っているかもしれない。

それらのすべては、「Aとして、成長したい」という言いように一般化  
できると思うが、それについてあなたが努力を惜しまないとして、おれ  
からはささやかなアドバイスを申し上げたい。

それは、他人受けする努力を貼り付けるよりは、Aの中を生き、Aの  
中で育つほうがよい、ということだ。

ヨソで努力・勉強したものを、引っ張ってきてあてがい、それでAを  
攻略しようとは考えないほうがいい。

つまり、たとえば仕事というなら、仕事の中を生き、仕事の中で育つ  
ほうがいい。

あなたの仕事が仮に、ダンボール箱を手配することなら、あなたはダン  
ボール箱の中を生き、ダンボール箱の中で育つほうがいい。

本当の成長というのは、「わたしはダンボール箱の中で育ったんです」  
という話それじたいを指すからだ。

たとえば、「人間関係攻略法」というような本があったら、その本をた  
だちにゴミ箱に捨てろ。

そして、人間関係の中を直接生き、人間関係の中で直接育て。  
飼い始めた犬のしつけの仕方がわからなかったら、犬のしつけの本を  
読むな、飼っているタロウ自身の声を読め。

犬のしつけの仕方がわからないんです、と、他人に相談せず、タロウ  
に直接呼びかけろ。

「お前のしつけの仕方がわからないんだ」  
とタロウに呼びかけろ。

タロウにしつけをする中を生き、タロウにしつけをする中で育て。  
そこを省略しようとする逃げを打つな。

犬のしつけの仕方がわからないなら、「わからない」の中を生きろ。  
「わからない」の中を生きつづけ、「わからない」の中で育て。

「わからない」のまま、タロウの首に親しくヘッドロックを掛け、その  
中を生き、その中で育て。

その中を生き、その中でもがくことで、その中で育っていき、  
「生きもの」の話が通じる、ここが通じるってやり方を、知ったんだよ  
ね」

という、あなたの「話」が得られるだろう。

あなたがタロウのことを、

「超かわいいんですよ」

と、得意げに知り合いに話すことにはあまり意味がない。

そうではなく、タロウに向けて「かわいいな」と言い、その声を聴いた  
タロウが、

「ほんと？」

とよろこんで応えるということのほうに意味があるのだ。

「勅命である」と言われても、あなたには、「勅命」が何なのか本当には  
わからないだろう。

それで、あわてて検索をするな。

検索して、勉強「量」で、努力「量」で、なんとかしようとするな。努力量をあてがって何かを攻略するつもりになるな。

「勅命」が何なのかを知りたければ、帝国軍の中を生きろ。帝国軍の中で育て。

帝国軍の中を生き、元帥府の中で育てば、勅命がわからないなんてことにはならないから。

マリオとルイージが何をやっているか、知りたければ、クリボーを踏みながら生きろ、キノコを食いながら育て。

人が何を唄っているのか、また歌とは何なのか、知りたければ、歌の中を生きろ、歌の中で育て。

音楽室の中で、勉強と努力で攻略しようとは考えるな。

メンデルスゾーンの音楽性が知りたければ、メンデルスゾーンの中を生きて、メンデルスゾーンの音楽の中で育て。

教科書でどれだけ勉強しても明治維新のことなんてわからない。

天誅、国家転覆、為さざればその場で切腹、その中を生きて、その中で育て。

そうでなければ維新なんてわからない。

(公安の人へ、わたしはあくまで歴史の話を申し上げているだけなので、念のため)

Aの中を生き、Aの中で育てば、Aによって進んできたあなたという、「話」が得られる。

Aについて、あなたが「どう思う」というようなことは、あなたの話ではないのだ。それはただの、あなたの感想だ。

たとえば、桜田門外の変について「どう思う」というようなことは、あなたの話ではない。

そうではなく、桜田門外の変と言えはすぐに、「やっぺよ」

「やりもつそ」

と、腰の刀に手が伸びるということ。それが桜田門外の変という「話」だし、サムライという「話」だ。

そういうことの中を生き、そういうことの中で育て。

成長についての、おれからのアドバイスは、Aについて遠ざかって努力をせず、Aの中を生き、Aの中で育てということ。

そうしたら、あなたはまず、自分の真ん中がそんなに強くないということに気づくだろうし、あわせてこれまでの自分が臆病で逃げ腰で他人に依存してただけだということに気づくだろう。維新志士たちは教科書で維新を勉強したわけじゃない。腰の物でそう育った。

## 損得

色(しき)は、話ではない。

色(しき)は、「量」だ。

「量」といつて、それは何の「量」なのかというと、行き着くところ「力」の量ということになるのだが、そのことを言い出すにはまだ説明が足りないだろう。

さしあたり、われわれが実地で目撃していくのは、量といえば「損得」のことだ。

損得というのはさらに、すぐにでも「量」という尺度を超えていくのだが……そのことを言い出すのにもやはり、まだ説明が足りていない。街中のあちこちには、何でもないじいさんたちの集まりや、何でもな



いばあさんたちの集まりを見かける。

そうした老人たちの集まりにはしばしば、何か「いかがわしい」気配を覚える。

われわれはそうしたものを、すでに見慣れてしまっているのです、いまさら何とも思わないのだが、その集団は何かがキナクさく、何かがいかがわしいのだ。

さして仲が良いとも見えないのに、何かを大声で言い合っており、傍若無人で、電話が掛かってくるとやはり大声で応対し始めるなどもあり、全体としてあつかましさがにじみ出ている。

彼らは、何かの「話」に集（つど）っているわけではない。

町内会で何かがあるかもしれないし、市政とかかわって何かの折衝があるのかもしれないし、商工会や医療法人や、あたらしく建つホテルの不動産関連で何やかんやとあるのかもしれないが、それらは「話」ではない。

彼らは「損得」に集っているのだ。

損得、という原理で彼らは挙動し、いま彼らはそこに集っている。

まさか耳をそばだててラジオから聞こえる「牡丹灯籠」に聞き入っているというわけではあるまいし、有線から流れる三橋美智也に聴き入っているというわけでもあるまい。

「損得」で目をぎよろぎよろさせ、「損得」で挙動し、「損得」で集まっているのだ。

利益量を大にし、不利益量を小にすれば、得になる。

量。

そうした色（しき）で挙動している。

話の中を生きていない人は、早晚、そうした「損得挙動」に行き着く。内心、

（いま〇〇さんのところに食い込んでおいて、損はないな）

（ここで△△さんと顔をつないでおけば、のちのち得があるかもな）

（これ以上××さんと関わっていても、何の得にもならないわ）

（ここで□□さんと縁が深いというふうに見せておかないと、別の会合があつたとき損をするでしょ）

そんなことばかり考えている。

それで、そこに集まって、何をしているかというと、何もしていないのだ。

そこに集まって、顔をつないでおけば、得があるかもしれないということ、ただそこに来て、「最近のアレはさあ、もうダメだよ。だってさあ」と、ただ思いついたことを大声で発している。

何の意味もなくそこにいるのだが、それでもそうしてそこにいないと、何かの「おいしい話」があつたときに、自分が入り込みそこねてしまうので、無意味なままそこにいるのだ。

そこで、〇〇さんのやっている事業が下振れているらしく、「この先はもうないな」と見越せたら、ただちに自分は無関係の人となって姿を消す。

何の話でもなければ、何ら友人でもない。

「損得」ばかり考えているのだ。

もはや当人はそうしたことを考えているという自覚もなく、ただまるで昆虫のように、損得を本能として挙動している。

若い人の場合、

「Aさんのところには、若くてエロい女の子が来がちだから、食い込んでおこう。Aさんはおだてておけば気安いし」

となる。

「Bさんのところには、人脈とか社会的立場とかがけっこうある人が来るから、親しく入り込んでおけば、ころっとおいしいコネとか就職先とかにつながるかもしれない」

となる。

「Cさんのところには、この先、おいしい展開は待っていないさそうだし、もうこのへんでいいかなって思うわ」

となる。

「Dさんのところには、ヤバい人たちがけっこう来るから、この近所で万が一揉めたときのことを考えると、いざというときのためにDさんと知り合いでいるほうが頼もしいわ」

となる。

若い人は、こうした色（しき）に囚われたとき、自分でそれを「情熱的」「リアルで充実している」と感じがちだ。たしかにリアリズムにおいてはそうなのかもしれない。

ただ、本人としては情熱的・充実に思えても、やっていることは単なる色（しき）の虜囚なので、当人の内部はむしろまかれてゆき、目に透明感がなくなり、独特の皮膚感ともども、存在が汚らしくなっていく。

そしてそうになると、日々、内心と鏡の前で発見する自分の汚らしさに、自分自身も失望して、もう「話」について興味がなくなってしまうのだ。自分の生きる「話」というのも、「もうどうでもいいや」ということになってくる。

そうになると、もうどんな「話」も響かなくなり、どうあがいても、「話なんか、要らないので、少しでもトクになる情報をくださいよ〜」という思いばかりが百パーセントになってしまう。

そしてそうになると逆に、人というのは、その形で安定するのでもある。そうして安定すると、それを当人は、「いや、人ってそういうものですよ」「みんな、大人ですから」と半笑いするようになるのだ。

それが「人」の真の姿なのか、それとも単に生き残ることができなかった人の姿でしかないのか、おれにはわからないが、とにかく多くのケースにおいて、人は加齢と共にそうになっていくという事実だけを述べて

おきたい。

当人らは、もう何らの自覚も持たなくなるので、当人らに訊いても無駄だ。

色（しき）の果ては、量であり、量の人は直接、「損得挙動の人」として目撃される。

そのことは早ければもう中学生ぐらいのときに起こっている。

一見、楽しそうにしている人も、つまらなそうにしている人も、なぜそこにいるのかというと、じつは「得をしたいから」「損をしないため」にそこにいる。

おれは損得ではなく「話」で挙動し、どこにいるときも「話」によってそこにいるが、挙動がそうした原理になっている者は、実数としてはやはり少ないと申し上げておく。

## 親の人生を生きる

色（しき）は量であり、量はたいてい「損得挙動」の形になる。

もちろん人によって、どういう得をしたいとか、どういう損はしたくないとかいう、こだわりや偏りがある。

人によっては、銭金の損得について異様に鋭敏という人もいるし、人によっては、色恋沙汰、スケベの損得について異様に鋭敏という人もいる。見栄えやチャホヤされるということに鋭敏な人もいれば、労働力の損得に鋭敏な人もいる。

そして、どういった損得に鋭敏になるかは、多くが親からの遺伝だ。

よって、多くの人は、単純に言って「親の人生を生きる」ことになる。

このことは、遺伝子 (gene) のはたらきとしては正しい。

すでに過去の学者によって説明されているように、遺伝子のはたらきは利己的だ。

献身的な働きバチでさえ、女王バチのために働いているのではない。

遺伝子の構成上、働きバチにとっては、自分が子を成すより、女王バチに自分の妹を生んでもらったほうが、自分の遺伝子が濃く保存されるというだけだ。

働きバチは人間と違い、「子供が欲しい！」ではなく「妹が欲しい！」なのだ。

遺伝子というのは、そういう身も蓋もない、自己増幅 (自分量) への合理的な、悍 (おぞ) ましいはたらきのみをする。

これは、そういうサイエンスなのだからしょうがない。

電卓が、計算ばかりをし、そのこと以外をしようがないということのように、遺伝子は、自分の遺伝子を増やす機能のみを持つ。

だから、遺伝子の仕組みとして、色 (しき)・量の人は「親の人生を生きる」しかないのだが、このことは遺伝子から見れば「本望」ということになる。

じつさいわれわれもそうなるのだ。

未だすべての話から切り離されないうちは、「親の人生を生きる」などと聞かされると、「げっ」と反応して忌避感を覚えるものだが、しだいに加齢して損得挙動のみをするようになっていくと、親の人生を生きるということについて、遺伝子のまま、

「本望かもね」

と感じるようになってくるのだ。

損得挙動は、みずからで獲得する挙動ではなく、元から遺伝子に具わっている、遺伝子の挙動だ。

そして遺伝子はどうぜん親から受け継いでいる。

だから損得挙動は、初めから「あなた」の挙動ではなくて、あなたが長年見てきた「親の挙動」だ。

そして、その親を捕まえて言うなら、やはりその親自身の挙動でもないのであって、それはもとの「遺伝子の挙動」だ。

仏教ではこのことを業 (カルマ) と呼ぶ。

もちろん、遺伝子は gene だけでなく meme もあるから、現代のように「巨乳！」がミーム化すると、父親は貧乳好きだったのに息子は巨乳好きだということも起こるかもしれない。

だがどちらにせよ、あまりにもどうでもよすぎるのだ。

色 (しき) は量であって、量は損得挙動となり、人は多くの場合で「親の人生を生きる」。

初めはそのことに忌避感があるが、損得挙動に染まっていくうち、「本望かもね」と思うようになってくる。

そのことが誤りなのか、悪いことなのか、それともそれでよいのか、おれにはわからない。

ただおれはやはり、初めから言っているひとつのことを言い続けるのみだ、

「そんな話はない」

## 色魔

現代には、かわいい女の子がたくさんいる。

そして、エッチな女の子もたくさんいる。

じつさい、標準的と言いたくなるような高校生の明るい男子が、同級生のことを指して、

「え、あいつマジかわいくね？ しかも胸でかいし、ヤバいんだけど」

と、高い声で堂々と言い合っているのを耳にすることがある。

おれは文化の異なる世代として、正直おどろいてしまうのだが、おれがおどろくということには何の意味もないだろう。

ところで、かわいいとか、胸がでかいとか、ヤバいとか、それらはすべて形容詞だ。

現代人は、「マジ」「ヤバい」「ありえなくね」「尊い」「わかりみが深い」と、形容詞・形容動詞のみで会話している。

そして形容しているということは、パラメーターがあるということだから、それは色（しき）だ。

色（しき）は話ではない。

「浦島太郎い」という形容詞は存在しない。

「あいつマジで浦島いよね」というような言い方はできない。

標準的な明るい高校生は形容詞で会話しており、それが標準的な明るい大学生になるとさらに大きな声で「ヤバい」「エロい」「エモい」と露骨になった形容詞で会話している。

それらのすべては色（しき）だから、彼らは単純に言って「色魔」だと捉えてよい。

いわゆる「陽キャ」は色魔だし、もちろん「陰キャ」も色魔だ。

公然とスケベキャラクターのコスプレをし、人々がそれを写真にバシバシ撮り、それを電脳通信で拡散し、人々が「いいね」と言い合っているのだから、それらは色魔以外の何物でもない。

何の中を生活しているのか、何の中で育っているのか。

どういう話の中を生活しているのか。

何の話の中も生きていない。

ただの色魔だ。

皆、明るくて、充実しているふうで、健全なように見えるのだが、性質としてはただの「色魔」になってしまっている。

色（しき）は話ではないので、色魔に話は通じない。

意地悪を言っているのではないし、悪口を言っているのでもない。

人々は、いまそのことで困っているだろう、ということに同情を申し上げているのだ。

あるいは少なくとも、これから各自、致命的に困る局面に至るだろうということについて、先触れを示しているのだ。

致命的に、話を通じない。

テンションの大小というような、やはりドーパミンの量しか返ってこない。

そのことが、他人事ならまだしも、自分のことだったとしたら、さすがに人は青ざめる。

人は多くの場合、「いざとなれば」、自分はまともな話ができと思っている。

けれども、そうではないと、おれは話の専門家として申し上げておく。

何の話も生きてきていないのに、「いざとなれば」、しずかに聞こえてくるひとつの話を申し述べられるというようなことは、完全に幻想だ。

おれの前に来てふつうに話してみればいい。

信じがたいような絶望感に、多くの人はめまいを起こすだろう。

自分で、

（なぜまともに話ができないんだ？）

ということに動揺する。

「あれ、なんか話が行方不明になっちゃった。いや、だから、あれちよっ

と待ってください。つまりですね」

どうやって、「話」なんか出てこないか、おれは専門家なので前もってわかる。

あなたからは、ヘンな挙動が出て、ヘンな声が出て、ヘンな語が出る。

あなたは内心で、

（え、なんでわたしそんなヘンなこと言うの。なんでこんなヘンな声を出すの）

と自分を誑（いぶか）る。

こうして取り乱し、行方不明になって苦しむあなたを、長引かせることには何の意味もない。

だからすっきり整理しよう。

色魔というものがあるのだ。

それも、エッチな意味に限定してではなく、広義においてだ。

色（しき）とは、量であり、パラメーターであり、比率だ。

そのみに反応する、色魔になってしまった。

色（しき）と話は異なるのだから、色魔に「話」は取り扱えない。

自分がいつのまにかそうなっているということに、あなたがなかなか気づけなかったというだけだ。

そんなことが、仮にあったとして、いまここでそのことに気づいて、仮にマジだったら青ざめるというだけだ。

自分が、悪口ではなくてガチの色魔になったというようなブツ飛んだ話は、ふつうの人はなかなかシリアスな意味では受け止めかねるだろう。

何のせいでそうなったのかというと、それはもう、世の中のせい、ということにしておいていい。

少なくとも、あなた個人のせいだけではない。

だが、そんなことはどうでもいいのだ。それが世の中のせいであろうがなかろうが、けっきょくあなたをなんとかするのはあなた自身でしか

ないのだから。

いま、標準的な明るい高校生は、同級生女子へのすなおな性的関心を示すのにこねたというわけではなく、ただ色魔になっただけだ。

その色魔の昂るエモいシーンを、わざわざ「アオハル」と呼んだからといって、それが「それっぽく」思えるというのは、ただの色（しき）だ。

やはり「そんな話はない」ということばかりが当てはまる。

「アオハル」のはずの高校生が、少し入り込んでみると、じつは「エッチ」ということしかわからない生きものになっていたらどうする。

漠然とした「エモい」ということしかわからない生きものになっていたらどうする。

何の話も、本当にはわかっていなくて、何の話も生きていなくて、時にギャハハハと大声で笑いながら、ただ、

「エッチじゃね？」

「ヤバくね？」

「エモいんだけど」

という、漠然としたドーパミン・パラメーターを変動させることだけで活動していたとしたら。

「あなたは本当に、色魔というやつなの？」

いつかそう問い質したくなるときが来てもおかしくないだろう。

問い質された当人は、「えっ、それってどういうこと」と、ニタニタしている。

話に通じていない。

この、色魔は話を通じない、話を取り扱えないという問題は、深刻というべきなのか、あるいはそれ以上に、リアルに「ぐっちゃぐちゃ」になっ

てしまっている。

大谷翔平がヤバくて、藤井聡太もヤバくて、オールドメディアはオワコンっすよね、みたいなことを、狂ったドーパミン量で撒き散らすだけ、

そのことを当人は本当に「会話」「コミュニケーション」だと思っているふしがある。

あなたはいま、おれの話をも、すなおに聞いてくれているところだ。

あなたはいま、おれからの影響づけによって、「話」という事象にあるていど接続できている。

けれども、いま話されたことについて、あなたが述べようとするとうなるだろう。

そのときあなたの「コミュニケーション」は、

「ヤバいっすね、これは」

と応えかねない。

コミュニケーション。

そのとたん、あなたは、ここまでに取り取ってきた話をみずからで見失ってしまう。

そのときあなたが、果敢にもドーパミンを増やせば、

「でも、なんとかしていきましよう！」

と、キラキラしてあなたは言うかもしれない。

あるいはそのときあなたが、まにまにドーパミンを減少させれば、

「じゃあ、もう無理ってことですよね」

と、真っ暗な声でつぶやくかもしれない。

前者は「マジ明るい」で、後者は「マジ暗い」のか。

それはそのとおりだろうが、やはり、同じことが繰り返される。

「そんな話はない」のだ。

## 量は状態をもたらし、状態は実感をもたらし、実感ふたたび量である

「話」を受け取れ、という、ただそれだけのこと。

話を受け取れと言われたら、ただちに「ハイ」と言いたいところだが、じつさいにやってみると、もうそんなことは出来なくなっていますよという、警告というよりは通知の話。

おれは、現在から七年前、二〇一八年の一月に、「フィクション・クライシス」を唱え始め、この危機に対するせめてもの抵抗活動しようとした。

いや、じつさいに抵抗活動をし、そのときから抵抗活動をつづけている。

まあ、規模が極小なので、全体の趨勢に対してはまったく無力なものだけれど。

ただおれは、以前からずっとこのことを言っているのだということを、懲りもせず述べたいのだった。

それだっておれの「話」だからな。

話と色（しき）は違うのであって、話の機能を失えば、人は色魔になるのだ。

現代アオハルの高校生は、乳デカ漫画を読み耽っていて本当に大丈夫なのか？

たぶん、大丈夫なわけはなくて、すでにものすごいことが進行してし

まったのだが、そのことを嘆いていてもしょうがないので、話を続けよう。

色（しき）は、話ではなく、「量」だ。

「量」を取り扱うということじたいが色（しき）ということ。

そして、「量」は、一定ごとに「状態」をもたらず。

じつは、われわれは、このことで日常を生活しているのだ。

説明しないと意味不明だろう。

たとえば、販売店の課長は、在庫「量」を把握している。

在庫量を把握していないと、在庫切れという「状態」になってしまう

かもしれないし、在庫過多、不良在庫という「状態」になってしまうかもしれないからだ。

あるいはもっと単純に、

「十時の待ち合わせだから、八時半には家を出なきゃね」

というようなこと。

家から駅までの移動に要する時間量、駅から駅まで電車で移動する時間量、駅から待ち合わせの喫茶店まで移動するのに要する時間量を、「量」と、だいたい八時半には家を出ておきたい、ということがわかる。

この、適正な時間量を誤ると、「遅刻」という状態になったり、「早く来すぎちゃった」という状態になったりする。

「量」は「状態」をもたらずのだ。

大量に食べると食べ過ぎ状態になり、少量しか食べないと空腹状態になる。

受験生の、勉強量が多ければ、高学歴という状態になってゆき、勉強量が少なければ、浪人生という状態になってゆく。

仕事量が多すぎるとパンク状態になり、仕事量が少なすぎるとヒマ状態になる。

娯楽量が多ければ「楽しい」という状態になり、娯楽量が少なければ

「退屈」という状態になる。

財産量が多くなれば金持ちという状態になり、財産量が少なければ貧乏という状態になる。

肉を加熱するとき、加熱量が少ないと生焼け状態だし、加熱量が多すぎると肉はカチカチ状態になる。

「きのう、あまり寝ていなくてさあ。睡眠不足なんだよ」

というのは、量↓状態についての情報であって、「話」ではない。

「なんで寝ていないかって？ 仕事が、繁忙期でさあ。残業つづきなんだよ」

これも、量↓状態についての情報であって、「話」ではない。

「そもそも、人員が足りていないんだよね。上の人がバカでさ、マジうちの会社終わっているよ」

これも、量↓状態（以下略）だ。

「ところで、おれ今月、けっこう散財しちゃってさあ。きょう、貧乏なんだよね。あときのう、自宅でステーキ焼いたんだけど、焼き過ぎでカチカチになっちゃった笑。そういえばキミって、自宅からここまで何分ぐらいかかるの？ あ、そうだ、おれ新しく動画のサブスク入ったんだよ！ 観たい動画がたくさんあるのマジで超楽しい、生活に潤いが出るよね」

量↓状態がダメと言っているのではなく、ただこのようにして、人は^^永遠に「話」に触れられなくなるVののだ。もちろん当人としては、これらがまさか「話」ではないとは思っていない。

加えて、状態はさらに実感をもたらず。

「ところでさあ、おれもついに、誕生日来て、三十歳になっちゃったよ。うわぁー ついに来たね。三十歳って！ もうおじさんだよ。ついに、若者じゃなくなっちゃった。なんかこう、ずっしり来るものがあるよね。なんかもう、いろいろ、キツイわぁ笑」



三十という数値は加齢の「量」だし、それによって若者という状態から中年という状態に変わるのかもしれない。そして、与えられた「状態」は「実感」をもたらすのだ。

「二十歳になったときもさあ、同じように思ったんだよね。おれもついに、十代ではなくなってしまった、って。でもそのときとは何か、やっぱりインパクトが違うわ笑。若いときって、自覚ないけど、若いってことだけで、その若さが自信になっているんだよね。その自信がついにはぎとられたってことがキツイ。何かこう、リアルなものを感ずる」

そして、実感はふたたび「量」となる。彼の口述によると、二十歳のときの年齢の実感と、三十歳になったいまの年齢の実感は、実感の強さ、実感の質量が違うらしい。

このようにして、われわれの自我は、量↓状態↓実感↓量という循環を繰り返していく。

それで、いつまでたっても「話」に至ることはなく、ついで何の話も得ないまま、何十年も生きていくということがありうるのだ。

量「なんか最近、飲酒量が増えてさあ」

状態「それで正直、最近、朝起きたとき、身体がダルいんだよね」

実感「そうすると、あ、マジでこういうふうになるんだ、本当に健康に気をつけないと、やっていけないなくなるんだって、本気で思われるよ」

量「これまでも健康への意識はあったけど、なんかこれまでのやつとは違う。もっとヘヴィなやつだよこれ」

状態「だからさあ、情けないけど、おれ自身なんか勢い落ちてきたなって自覚あるんだけど、これやっぱしょうがないと思うんだよね」

実感「むかしの人が、寄る年波には勝てないって言っていたけど、それってこういうことなのかあって、ようやく思い知らされるよ」

量「そこその年齢になったら、年齢のことすなおに受け入れようと、思うのは思っていたんだけどね。いやあ、甘かったわ。リアルに来たら、

なんかけっこう切ないぐらいの感じするわ」

こうした日常会話について、むしろわたしは糾弾の目を向けるわけではない。

けれども、こうしたことが延々つづけられて、そのうちにますます「話」から遠ざかっていくということについて、本来はもっとれっきとしたアナウンスがあるべきだと思うのだ。

量「正直、もうガマンの限界」

状態「なんかね、もう、わたしの中で何かが壊れたの」

実感「あー、もうね、少なくとも、向こうから謝ってこない限りぜったい無理」

量「どれぐらい無理かって、もう、生まれてこの方、これ以上の無理はないってぐらい無理だよ笑」

状態「なんかさあ、なんでわたしがこんな思いをさせられなくちゃいけないの？ って、そのことじたいが理不尽で許せない」

実感「なんか思い出したら、ますます腹立ってきた」

量「今回だけのことでなくて、これまでの蓄積なんだよ」

状態「ああもう、怒り過ぎて吐きそう。気持ち悪い」

実感「こうしてさあ！ けっきょく、いつもわたしが損するんじゃない。わたしばっかり苦しんでんじゃない」

量「どれだけ苦しんでいるか、誰もちつともわかってくれない」

どのような事情があって、このように「大荒れ」になっているのかは不明だし、もちろんその事情の内容はいまこでの焦点ではない。

まさかこうしたことのすべてが、事象として「話」ではないのだと言われても、一般の人にはとてもどうしたらよいものか、取り扱うことじたいが不可能だろう。

このように、往々にして、われわれが「話」と思っているものは、事象

としては「話」ではないということがある。

ひいては、われわれは「浦島太郎」をひとつのお話として知っているが、それを本当に「話」として取り扱っているかどうかは、いささかあやしいところなのだ。

浦島太郎が、いじめられていたカメを助けたという、「正義」の量、あるいは「親切」の量、さらには「義侠心」の量は、浦島太郎の「話」ではない。

竜宮城がどれぐらい豪勢かという、そのきらびやかさの量も、浦島太郎の「話」ではない。

玉手箱を開けて、老人という「状態」になったということも、浦島太郎という「話」ではない。

このあたりは、本当に説明しようとする専門的になりすぎるので、いまは簡易な説明に留めよう。

量、状態、実感というのは、話の「要素」ではありえても、それじたいが話にはなりえない。

量、状態、実感は、あくまで $\wedge$ 主題に寄与するものとしてある場合のみ $\vee$ 、話の要素たりえるのだ。

たとえば、「大きなつづら」と「小さなつづら」という表現があったとして、つづらのサイズそれじたいは量的かもしれないが、これは話の主題に寄与する量なので、話の要素になりうる。

同様に、竜宮城でもてなしが「とても」華やかだったということも、浦島太郎という話の主題に寄与するので、話の要素とみなしてよい。

けれどもたとえば、子供たちがカメをいじめていたとして、「めっちゃ、いじめていました」

というような表現は、何ら浦島太郎の主題に貢献しないので、それは話の要素ではなく、逸脱した単なる色（しき）だということになる。

あるいは、浦島太郎の身長は 185cm でしたというような付記をした

として、それはやはり主題に寄与していないので、話と無関係の色（しき）だということになる。

ここで、明敏な人は、浦島太郎の記憶を掘り起こし、「むかしむかし、浦島太郎という青年がおったそうなの」という表記を思い出すかもしれない。

ここで「青年」という年齢量、あるいは青年という状態を書き添えてあるのは、「話」としてむしろ必要なことなのだ。なぜなら浦島太郎は後に玉手箱によって老人になるというのが話の進みゆきなのだから。

もともと浦島太郎が老人では、玉手箱を開けたとしてもさして変化がないということになってしまう。

このようにして、いくらかでも踏み込み、「話」という事象の性質を知ってゆくならば、この「話」という事象は、これまであなたが思っていたよりもずっと「手ごわそうだ」というふうに思えてこないだろうか？ たかが、子供でも知っているような、平易な「浦島太郎」の話でさえ……それを精密に「話」として取り扱うということになれば、それはじつのところ一般の人にとって容易なことではない。

ともあれ、ここであなたが知るべきは、一足飛びに「話」の専門性ではなく、色（しき）がわれわれにおいて循環するということ。

小さな島のまわりを小舟でぐるぐる回ったとする。すると、小舟はさまざまな角度からの波に揺られ、船頭は忙しくなるにせよ、そのことをつづけたとてその舟の乗員は小島のことをよく知ることにはいつまでもたつてもならないだろう。それは小島のまわりと小島そのものが事象として別のもので、そもそも $\wedge$ 島じたい海でないことによって島たりにえている $\vee$ ということによる。島が海だったならそれはもう島ではないのだ。波打つ海のうち、海でない部分をわれわれは島と呼んでいるだろう。

量↓状態↓実感↓量、この循環を漕ぎまわることは、われわれを話に

近づけない。

島に上陸するためには、循環を手放すということと、上陸それじたいへの勇気を持つことが必要だ。

## 観測

「話」そのものは観測できない。

この、「観測」という、あなたにとっては縁遠い単語を、あなたはここから先に自分のものにする必要がある。

観測という機能を使っているうち、逆に、「話」は得られてこようはずがないからだ。

話を得るために必要な機能は、じつは「かんがえる」ということなのだが、このことはまた後の章で述べよう。

観測は、主に量を観測する。

合わせてもちろん、状態や実感も観測する。

たとえば、あなたの手元にあるスマートホンと、あなたのテーブルに置かれているテレビのリモコンは、どちらが「重い」だろう。

重さは、質量なので、もちろん量だ。

スマホとリモコン、どっちが重い？

あなたはそれをどうやって観測するだろう。

たまたま、台所に秤があれば、それで量るだろうが、そうでない場合、あなたはそれぞれを自分の手に乗せてみるはずだ。

そして、感じる重さ、それを持つときの力感などの、直接の「実感」を

用いて、どちらがより重いか、その比率（重力比）を観測するはずだ。

そのとき、あなたはスマホとリモコンを、同じ高さ、同じ位置、つまりなるべく同じ「状態」で観測しようとする。

われわれにはそうして「観測する」という能力があるのだ。

そして、観測それじたいについて、われわれは「かんがえる」ということをしない。

たとえば、「背中がかゆい」ということを観測する。

そのかゆさの量、かゆいという実感、かゆくて気になるという状態を観測する。

そして、そのようにして観測するとき、われわれはそのことじたいに「かんがえる」という機能は向けない。

背中がかゆい、ということに、「かんがえる」ということは向けようがない。

かんがえるとすればせいぜい、

「窓開けたまま寝たから、蚊に刺されたかな？」

ということぐらいで、それは「かゆい」という直接のことからは離れている。

窓を開けたまま寝たせいで、蚊に刺されたという「話」はありうる。

だがその話は、かゆみのようには「観測」はできない。

背中のかゆさは、観測できるが、だからこそ、「背中がかゆい！ かゆいかゆい、超かゆい、マジかゆい」

というの「話」ではないのだ。

それは^^観測結果を発表しているだけ^^だ。

たとえばここに、

「セレブになりたいー！」

という強い調子の言い方があったとする。

これは「話」だろうか。

セレブというのは「状態」だ。

庶民よりも財力パラメーターが数十倍高い（比率）という「状態」を婚姻で得ることを俗にセレブという。

そして、そのセレブになりたいといっても、そのなりたいという度合いの「量」があるだろう。

なりた度合いの量が大きくなれば、言いようも強くなる。

「セレブになりたい！ー」という強い言いようは、そのように生じているのであって、それは「話」ではない。

ただの観測結果の発表だ。

観測結果の発表なのだと捉えると、冷淡すぎるが、いつそ笑えもするだろう。

笑えるものでありながら、これは哲学的に正しい知見だ。

じつさに「わたしの観測結果の発表」なのだ。

観測結果の発表をしてはいけないということではない。

ただ、それは「話」ではないというだけだ。

浦島太郎は、「話」だから、量がなく、浦島太郎を観測することはできない。

仮に、「浦島太郎、だーい好き」という人がいれば、その好きという度合いは量だから、その比率やパラメーターは観測できるのかもしれないが、それは先ほどの「セレブになりたいー」と変わらない。

ゴミをポイ捨てるおじさんは悪で、それを掃除するおばさんは善かもしれないが、それだってパラメーターの観測なので、「話」ではない。

そうして悪がのさばり、善がしいたげられるのを見て、

「とても許せない」

とあなたが感じたとしても、それもやはり「話」ではない。

「マツチ売りの少女」が、すぐくかわいいそうだったして、それがすぐくかわいいそうと感ずることは、「話」ではない。

かわいそうというのは「感じる」ことだし、かわいそうという状態でもあるし、「すぐくかわいいそう」とか「ちょっとかわいいそう」とかは量だからだ。

浦島太郎だって、浦島太郎が砂浜を「歩いてた」として、その「歩いている」という状態だけを捉えるなら、それは話ではない。

カメラがいじめられていたというのは「状態」だし、浦島太郎が玉手箱を開けて老人になったとして、老人というのも「状態」ではない。

「セレブになりたいー」

の反対、

「勝ち組でもなければイケメンでもない、ただの人と地味婚するとか、考えるだけで無理。ありえないぐらい無理。超無理」

というのも、すべて「自己観測結果の発表」ではない。

声はデカいし、感情も確信も当人において強いかもしれないが、それでもそれらはまったく「話」ではないのだ。

このように追究していくと、このあたりでそろそろ、

「じゃあ『話』って何だ……？」

と、よくわからなくなってくる。

どうも、われわれが日常で見聞きするもの、日常で発想するほぼすべてのものが、どうやら「話」ではないのではないか。

「話」って何だ。

「話」とはこれのことだと、あきらかに示せる自信がなくなってきた：

：

こうして、「話」というものがよくわからなくなっていくことが、この場合は正しい。

学門が進めば進むほど、「話」の真相のむつかしさがあきらかになってくるのだ。

^^話は観測できないvv

というのが真相となる。

「話」は、存在するし、体験されるのだが、観測はできないのだ。

一方で、われわれは自我の能力として、「観測」ということを得意にしている。

だからわれわれは、大人になると、桃太郎や浦島太郎の話の聞かなくなる。

ほとんどの場合、大人はもう「観測」に首っただけで、「話」を体験できなくなっている。

子供に寓話の読み聞かせをするのは、子供はまだ、自我（量観測装置）がそこまで膨張しておらず、自我がそこまで燃え盛ってもいいため、「話」を体験しうる——と期待されている——からだ。

子供は、大人よりはまだ、話を聞くということ、話を体験するという事に近い。

大人になると、桃太郎の話を聞こうが浦島太郎の話を聞こうが、それよりはアイドルグループの女性たちがショートパンツで股をパカパカしているのを見て、

「おっ」

と、ドーパミン量の増大・性的興奮状態をもたらすことのほうに価値があると感じ、そちらを摂取することに向かっていく。

「つけまつげを上手につけるテクニック三選」や「いま〇〇区の土地が安く変える理由！」などに期待される損得やドーパミン量に比べれば、浦島太郎の話を聞くことには何の得もないし退屈すぎる。

天国や浄土にいけるといふ得があるなら、聖書の話やお釈迦様の話も聞こうかと思うが、それが保証されているわけでもない眉唾ものなら、やはり作画がド派手なアニメでも観ているほうが楽しくて得だ。

われわれの日常はそんなものだし、日常はそんなものでかまわないだろうとわたしも思うが、それにしても、その日常ばかりを是とする中で、

ふと気づくと「話」を体験する能力がゼロになっていったということになれば、それはいささか由々しいことではないかと思う。

話を体験する能力がゼロになっていったということは、「じつはもう誰とも話していない」「じつはもう誰の話も聞いていない」「何の話も生きていない」ということなのだから。

われわれは観測を得意とする。それは自我の能力であって、観測する対象は「量」だ。量にかかわる比率、比率を現わすパラメーター、それらの比率が生じさせるさまざまな「状態」、また状態がもたらすさまざまな実感を、やはり量的なものとして、われわれの自我は「観測」する。

この「観測」を、横行させること、またそのことのやまぬ得意ぶり、それがわれわれの「色（しき）」なのだと捉えてよい。

一方、「話」は観測できない。

観測できないものを「話」と呼ぶ。

観測はできないのに、なぜか体験はされ、なぜか「在る」と言わざるをえなくなる、その現象を「話」という。

## 「分かる」という機能のエラー

人は一般に「わかる」ということが好きだ。

「どっちがほうれん草で、どっちが小松菜か、わかる？」

女性にとってサンダルとミュールは違うものだし、ミリタリーファンにとって戦艦と巡洋艦は違うものだ。

「わかる」というのは本来「分かる」もしくは「解る」ということだ。A

とBが分離しているということ。分解可能であるということの意味している。

英語では tell A from B という (B から A を分離する、の意)。

ほうれん草と小松菜は、分けることができる。

われわれはそうした、「分かる」ということが好きで、そのことを活用しながら生きている。

たとえば、赤信号と青信号が分からないでは生活ができない。

あるいはライトニングケーブルと Type-C ケーブルが分からないでは生活がしにくいだろうし、化粧水と乳液が分からないのでは女性は肌の手入れがしにくいだろう。

ただ、分からないことはいくらかもあるもので、たとえば子供にとっては、ほうれん草と小松菜などは「分からない」かもしれない。

「どっちもただの葉っぱじゃん！」

子供にはそう投げやりに見えていてもおかしくないだろう。

そのことは、大人においても同じであって、たとえば多くの人にとっては、目の前にスルメイカとケンサキイカを置かれても、

「分っかんないよ、どっちもただのイカじゃないの」

ということがありうるだろう。

こだわりのない人にとっては、醸造酒と大吟醸酒は、たいして違いのない「同じようなもの」かもしれないし、こだわりのない人にとっては、スピーカー部分もアンプ部分も、同じひとくくりの「スピーカー」かもしれない。

われわれは一般に「分かる」ということが好きで、それ以上によくよく観察すると、「分かる」と「分からない」とのあいだで、相互に侮辱的なはたらきが起こっていることが発見される。

つまり、

「お前、ほうれん草と小松菜の違いがわからないのかよ」

と、バカにする、侮辱のはたらきが起こる一方、スルメイカとケンサキイカについては、

「分っかんないよ、どっちもただのイカじゃないの」

と、やはり逆向きにも侮辱のはたらきが生じるのだ。

このことは一般化して、「分かるは分からないを侮辱し、分からないは分かるを侮辱する」ということになる。

なぜこのような侮辱が衝動的に起こるかについては、説明可能だが、その説明は以降の章に譲ろう。端的に言って、「分かる」と「分からない」の、どちらが主であり、どちらが従であるかということによって、権威の抗争が起こるのだ。

本稿の唱えるところ、「話」は「分からない」に属している。なぜなら、「分かる」ということは観測に依拠するからだ。

たとえば、ゴミのポイ捨てをするおじさんがいたとする。一方で、そのゴミを拾って静かにかたづけけるおばさんがいたとする。

この場合、われわれはおじさんのほうを悪と観測し、おばさんのほうを善と観測する。かといって、これで何かの「話」があるわけではないので、われわれはこれについて感・想を生じるにとどまる。

つまり、おじさんの悪が罰されず、おばさんの善が報われないということについて、理不尽や不条理を感じ、嘆かわしく思う、などをする。

いっぽうでおじさんが、なけなしの資金をはたき、赤十字に募金（募金にお金を出すこと）や、チャリティーの主催をしていたりするとする。

その場合、われわれはおじさんの「悪さ」について、かなりの寛恕を向けることになるだろう。なぜならわれわれは、人の悪の「ていど」や、悪行の「量」などを、パラメーター的に観測しているからだ。ポイ捨ての悪行は、募金の善行によってあるていど相殺してよいだろうとわれわれは思うし、そう感じもする。いっぽうでおばさんが、勤め先で金銭の横領をしていたとしたら、それはいくらゴミ拾いをしたところで、量的に悪行

のほうが勝るだろうというふうにわれわれは判断する。

ともあれわれわれは、そのようにして「観測」によって善と悪を分離・分解している。そして善のパラメーターが勝るか悪のパラメーターが勝るかのジャッジを行う。われわれはそうにして善悪が「分かる」のだ。このように善悪が「分かる」ということは、赤信号と青信号が「分かる」ということと同質だ。われわれは周波数の違いによって赤と青を識別する。赤を赤と感じ、青を青と感ずること、信号が「分かる」という状態で暮らしている。

しかし、日常われわれが考えもしないところ、われわれの「分かる」という機能はそこまで際やかに明白なものではないのだ。というのは、たとえば赤信号が青信号に変わるのを、ぼんやり・じつくりとしたグラデーションで示したとしたらどうだろう。

赤がしだいに、明瞭な赤でなくなり、赤紫に近づいていく。それはいつからか、紫になり、紫はいつからか青紫になる。そしていつのことかはわからないが、グラデーションの終端ではたしかに青になるのだ。

もしそのような信号機を設置したら、もちろん市民から、

「ばかやろう、これじゃどのタイミングで信号が変わったか、『分からないう』じゃねえか」と苦情が殺到するだろう。

グラデーションで変化する信号機においては、どの時点をもって赤が青になったとは言えなくなる。もちろん人それぞれに「まだ赤だ」「いま青になった」というような想いは持つだろうが、では青になった0.01秒前はまだ赤だったのかと言われると、そのことを力強く断言はできない。要するに、人それぞれの、そのときその瞬間にそう感じたしそう想ったというだけの、場当たりの「匙加減」しかそこにはないわけだ。

このようにして、じつはわれわれの「わかる」という機能は、その内部に巨大なエラーを抱え込んだまま運用されている。

けっきょくのところ赤と青にはつきりとした境目などない以上、赤と青を「分かる」とは本当には言い得ないのだ。

赤と青は、本当には「分からない」し、それどころか、その境目においては「同一だ」とさえ言わねばならなくなる。

赤でもあるし青でもあるという瞬間、またそのどちらでもないという瞬間で、赤と青はつながってしまっている。

たとえばあなたが、しばらく「ふつう」に歩いていたらとする。そこであなたが、ほんのわずかずつ加速していくと、あなたの歩行はいつからか「急ぎ足」になるはずだが、それが急ぎ足になったのはいつからだろう。「ふつう」の歩きと「急ぎ足」の歩きは、それぞれ別のものとして分離して取り扱えるように思えるが、それでいてその境目はやはり不明瞭なはずだ。

むしろその境目においては、「ふつうでもあるし、急ぎ足でもある」「どちらでもあるし、どちらでもない」という状態があるはず。よって、境目においてこそ知られるのは、むしろ「ふつう」と「急ぎ足」は同一ということなのだ。

ところが、話がこの同一性に及んだとき、あなたの内部からはあなたの自覚のないままに、なぜかこのことを侮辱しようとする衝動が湧きおこってくる。

あなたの内部からは、

「いや、急ぎ足は急ぎ足だし、ふつうの歩き方は、ふつうの歩き方でしょ笑」

と、この話を小馬鹿にし、侮辱しようとするはたらきが起こってくる。人は一般に「分かる」ということが好きだ。そして、そのことの思いがけない内部構造として、「分かる」が好きということより、「分からない」ということへの侮辱衝動のほうがシリアスなものとして機能しているよいうのだ。



たとえば、あなたにはあなたの体がある。それはあきらかなことだ。

一方で、あなたの目の前に大豆を置いたとしよう。あなたはその大豆を食べる。食された大豆は、アミノ酸に分解されて吸収され、アミノ酸はやがてあなた体を形成していくはずだが、大豆はいつのまにあなたの体になったのだろうか。

あなたの体と大豆は、それぞれ別個のものとして、あきらかに分離されている。少なくともそのように感じられる。

「どちらがあなたの体で、どちらが大豆ですか」

まさかそのことが分からないという人はいない。

そのことが分からなくなったらその人は単純に精神病だ。

しかし、あなたの血流にじっさいアミノ酸はいまも駆け巡っているはずで、それらはいつかあなたの体になるのだろう。

なぜそうしたただの「物質」が、あなたの「体」になるのか。

アミノ酸は大豆と同一の概念ではないと思えるが、大豆はいつのまにアミノ酸になったのか。その境目もやはり不明瞭だ。

吸収されたアミノ酸があなたの体を形成するとき、どこかの瞬間で、「アミノ酸でもあり、あなたの体でもある」という状態が生じるはず。

その境目の瞬間にむしろ、あなたの体とアミノ酸は「分かる」の真逆、同一性のものになってしまっている。

同一性において、大豆とあなたの体が「分からない」となるのだ。

そしてこのことについては、なぜかあなたの内部から、このことを侮辱したくてたまらないという衝動が湧いてくる。小馬鹿にしたくてたまらず、茶化したくてたまらず、否定したくてたまらず、陳腐化したくてたまらず、侮蔑の表情を浮かべたくてたまらず、話を逸らしたくてたまらず、汚らしい声を出したくてたまらない。

あなたは、

「大豆は大豆、わたしの体はわたしの体。それに決まってんじゃん」

ということだ、この話を終わらせたいのだ。

「なんかさあ、ごちゃごちゃ言うの、マジで無駄。だからやめてくんない？」

実感として、「大豆」と「体」が同じ（同一性）であるわけがないので、それに反する理屈をああだこうだとこねられるのは不毛と想える。

観測がどうこうといっても、

「そもそも、わざわざそんな細かいところまで観る必要ないじゃん？ じっさい、誰もそんなヒマなことしていないし」

と想う。

われわれの「分かる」という機能は、重大なエラーを内包したまま運用されているのだ。

あらゆるシステムがそうであるように、エラーを内包していたとしても、そのエラーが表沙汰にならないうち、そのシステムは何の問題もないかのごとく、そのまま運用される。けれどもいつだって、種子というもののは小さいもので、種子じたいは些細なものとして見過ごされるけれども、問題はそれが発芽して以降のことなのだ。

（備考1．本稿では、一部に慣習的・日常的な意味として「わかる」の語を使用します。たとえば「話のわからねえ野郎だな」といったようにです。本来はそこで「話の通じねえ野郎だな」「話を把握できない野郎だな」といったふうに書き換えるべきかもしれませんが、文体が物々しくなり、読み物として妥当でなくなるので回避措置として「わかる」の語を平常に使用するものです。ここで述べた「分離」「分解」を意図して言う場合には「分かる」あるいは「解る」の語をあてることにします）

（備考2．博識な方はここにカントの純粹理性批判を想起すると思いますが、境界を理性では追求できないという点についてはカントのそれと同じです。ただ本稿では、そのことの理性限界についてではなく分離と同一性ということのほうを主題に捉えていきます）

# あなたがあなたを「分かる」と 言い張るということ

Aさんが落ち込んでいたとする。

そこにBさんがやってきて、Aさんのことについて、

「わたしにはあなたのことが分からない」

と言ったとする。

一方、そこにCさんもやってきて、

「いやあ、おれはAちゃんのつらさ、すごくわかるなあ」

と言ったとする。

このとき一般には、Bさんのところが冷たく、Cさんのところがやさしいというふうに受け取られる。

そして日常的には、BさんがAさんに対して分離的で、CさんがAさんに同一的（同情的）と感じられるのだが、このことは語義と矛盾しておかしくなる。

Bさんのほうが、Aさんのことについて「分からない」と言っているのだから、Bさんのほうが非分離的・同一性寄りのはずだ。

Cさんのほうは、「分かるわあ」と言っているのだから、CさんのほうがAさんのことについて分離的はずなのだ。

われわれの「分かる」ということには、大きなエラーが含まれたままなので、このような混乱が生じる。

このことは、考えれば考えるほど混乱するので、前もって、「あまり深入りして考えすぎないほうがよい」と警告しておきたい。

大仰に思われるかもしれないが、決して誇張ではなく、このことは深入りし過ぎると精神を損傷することがある。

だから、前もって、よくわからないから読み飛ばす、というつもりでいてもらうほうがいい。

その読み飛ばしの援助のため、わたしはこの章で書き話すことについて、「大学の哲学科の教授でも取り扱えない」と申し上げておく。

「分かる」という機能は、それじたいが自我そのものであって、その「分かる」を揺るがされると、哲学的に分かろうとする・理解しようとするその機能じたいがクラッシュするのだ。そのことには些少とはいえない健康上のリスクがある。

その前提で進めていきたい。

「分かる」というのは、分離できる、という意味のはずだ。

ほうれん草と小松菜を分離できるということが、それを「分かる」ということ。

スルメイカとケンサキイカを分離できないということが、それを「分からない」ということだ。

（もちろん漁師さんや料理人はそれぞれのイカを分かっている）

では、Aさんのことが「分かる」というのは、Aさんのことが分離されている、ということのはずだ。

にもかかわらず、われわれが、

「わかってほしい」

というとき、われわれはむしろ、分離ではなく同一性のほうに期待を寄せている。

つまり、自分が雨でずぶ濡れになったとき、そのことを本当にわかってくれるのは、同じく雨でずぶ濡れになった人——同一性の人——では

ないのか、ということだ。

傘を差して雨を除けている人は、ずぶ濡れのわたしのことを本当にはわかってくれないのではないか。

ここでもう一度、念のために申し上げるが、このことの追究は、あなたの精神に思いがけないストレスとリスクをもたらす。

ほどほどにするというか、それ以上に、表面を眺めてサッと素通りするぐらいのつもりでいい。

A B間の「分かるか否か」問題、A C間の「分かるか否か」問題があるように見える。

けれどもそれ以前にあるのは、A A間の「分かるか否か」問題だ。

AはAのことが「分かる」のかという問題。

このことはそのまま、あなたはあなたのことが「分かる」のか、という問題だと捉えていい。

「分かる」？

AとAは同一なのに、どうしてそれが分離可能なわけがあるのか。

ほうれん草と小松菜は分離できるが、ほうれん草とほうれん草は分離できない。

「分かる」ということ、分離ということ。

「分かる」というのは観測の結果だ。

観測の結果、赤信号と青信号が分かる。

観測の結果、赤信号という状態と、青信号という状態が、極端ならば、そのことはいかにも分離して捉えられ、「分かる」と体感される。そのことには何の問題もないのだが、問題はそれがグラデーション信号だった場合だ。

グラデーション信号の場合、赤と青は境界においてむしろ分離されていないということ、「分からない」ということがあきらかになる。

赤信号と青信号が、分かれたれてはおらず、両者は同一性のものだ。

それでは、交通が成り立たなくなってしまう。

赤信号と青信号が同一と言い出したらもう交差点は無法地帯だ。

だからわれわれは日常、グラデーション信号などという思考実験を、「じつさいそんな信号ないんだから、意味なくない？」と侮辱的に始末する。

信号と交通は、哲学ではなく、世の中で通用すればいいのだから、結論はそれでいいが、問題はそうではない。

問題は、世の中で通用するだけでは済まされないテーマにおよんだときだ。

Aさんは、大卒だ。

大卒ということは、高卒ではない。

地方の公立大学より、都内の私立大学を選んだ。

Aさんは、猫派であって、犬派ではない。

犬については「元氣すぎて、わたしの側がついていけない」とのことだ。

Aさんは、きょう寝不足だ。

「シリーズ物のドラマとか観ていると、やめられなくなって夜更かししちゃう。でも、本望」

Aさんは、どちらかというとインドアが好きで、アウトドアは苦手だ。

「親がけっこう登山とか好きで、子供のころはほんと迷惑だった笑」

Aさんは、旅行が好きだが、団体旅行は苦手だ。

「旅行こそ、気ままにしたいのに、旅行でまで団体行動させられるのは本末転倒じゃない？」

Aさんは、親のことを大切に思っている。

「なんだかんだ、親のおかげでいまのわたしがあんだって、いよいよ年齢的にわかるようになったんだと思う」

Aさんは、男女交際に興味がなく、それじたいを疑問に思っている。

「そんなさあ、無理してまで付き合うことなくない？ 他に楽しいことはあるし、他にやりたいことはいくらでもあるじゃん」

Aさんは、いまの仕事で活躍しているが、前職ではまるでやる気がなかった。

「わたし自身、意外と周りのムードに吞まれやすいっていうか。前の職場は高齢化していたから、なんかわたしまで年老いていたんだよね」

Aさんは、美術館に行くと、絵画が好きな一方、彫刻には感性がはたらかない。

「これはもう、純然たる趣味。絵描きと彫刻家なら、わたし断然絵描きになりたいって思うもん」

Aさんは、チューハイをあおりながら、

「けつきよくわたし、こうやって、気の合う人とゆっくりお酒飲んでるのが好きなのよね」と思う。

Aさんは、

「そういえば高校のとき、三ヶ月だけ、バレーボール部に入ったんだけど、ぜんぜん馴染めなかった。なんで球技にあそこまで必死にならなきゃいけないのか笑、それじたいピンとこなかったんだよね」と言う。

わかる、わかる。

Aさんのことが、どんどんわかってくるように感じられる。

Aさん自身においても、いろいろ思うところはありながら、

「まあ、これが「わたし」だからね」

と感じられているだろう。

しかし、分かるということは分離であって同一性ではない。

AさんがAさんを「分かる」以上、AさんはAさんと分離され、同一ではないのだ。

AさんがAさんと同一ではない？

AさんがAさんでないなら、それはもう別の誰かではないのか。

そのとおり、Aさんは、分かれば分かるほど、もうAさんではないのだ。

われわれはすでにAさんでないものをAさんと呼んでいる。

われわれは、笛やトランペットというと、「音の出るもの」と思っている。

そのとおり、笛やトランペットは、音を出すということを本質に作られたものだろう。

だが、笛やトランペットを、水中で吹いたとしても音は出ない。

おかしいことだ。

笛やトランペットが、水中では、笛ではなくなりトランペットでもなくなるというのか。

じつは笛やトランペットが音を出すとき、鳴っているのは内部を貫いている「空間」だ。

その空間に、水が満たされてしまうと、音は鳴らなくなってしまう。

笛を観測すると、素材は木かもしれないし、全体はおおむね円柱状かもしれない。

トランペットを観測すると、素材は金属で、全体は複雑にうねった構造をしているよう。

宇宙空間で、宇宙人が笛やトランペットを拾ったら、宇宙人は難儀するのじゃないか。

「これは何をするための道具なのだ？」

宇宙空間には空気がないので、どうひねっても、それらが何をするための道具なのか、ついに彼らにはわからない。

宇宙人は、それを「笛」と呼び、それを「トランペット」と呼ぶ。けれどもそれらは、われわれが呼ぶところの笛やトランペットとは違ってし

まっている。

それらはすでに笛でもなければトランペットでもない。

あらためて、地球上の、われわれの「笛」について考える。

笛の内部を貫いている空間は、それじたい笛ではなく、笛の一部分としては観測されないのだけれども、その空間に鳴り響く音こそが笛だ。

トランペットの内部空間は、トランペットの一部分としては観測されず、そこにあるのはただの普遍的な空気ではないのかもしれないが、それでもそこに鳴り響く音こそがトランペットだ。

では、Aさんの内部を貫いている空間はどこへ行つたのか。

Aさんの内部空間に響いているはずのものはどこへ行つた。

Aさんを観測すれば、Aさんのことが次々に「分かる」ように感じられる。

分かるけれども、それはAさんの「存在」ではない。

^^Aさんの存在は、観測上、Aさんでない部分に存在しているVV。

笛やトランペットの本質と同じようにだ。

Aさんの「存在」は、Aさんとして観測はできないのだ。

なぜなら、Aさんの「存在」は、本質的に「話」であって、量のものではないからだ。

Aさんという話があるのみならず、或る話の群が「Aさん」なのだ。量れない、観測できない。

体験は出来るが観測はできない。

Aさんを観測すると、「分かる、分かる」となるが、そうして分かることで得られてくるものは「存在」ではない。

そうした、「存在ではない観測」のみのものを、形骸と呼ぶ。

宇宙人に拾われた笛とトランペットのようにだ。

空気のない宇宙空間で、「これは笛だ」「これはトランペットだ」と分かれていく。

Aさんも、Aさん自身を観測している。

観測により、AさんはAさん自身のことが「分かる」ようになってくるが、そうして「分かる」ことで得られてきたものを、Aさんは「自分」と感じる。

「自分」のパラメーター、「自分」の状態、「自分」の感じることに、「自分」の思うこと。

それが「わたし」なのだと思信する。

大卒で、猫派で、シリーズ物のドラマのせいで寝不足で、現在の仕事にはやる気があり、インドアで少人数でゆっくりお酒を飲んで、「無理に恋愛とかで付き合うことなくない？」と言っている、それが自分であり、イコール「わたし」なのだと思っている。

そのことは、一般・日常の感覚において、まさか誤りであるはずはない。

けれどもそれらは本当には、Aさんという「存在」ではなく、そこで交わされているものに、Aさんの「話」はない。

多くの人は、生きていく途中、短い期間であれ、どこかでそうした「自分」イコールわたしということについて、

「わかるけど、なんか、わたしそのものが形骸化している気がする」

と感じたことがあるのではないだろうか。

それがいつのことだったか、もう昔のことすぎて、あざやかに思い出されないかもしれないけれども。

Aさんがあるとき、わけもなく落ち込んでいたとする。

「なんかさあ、何があったっていうわけじゃないんだけど。なんか急に、わたし自身がいつからか形骸化しているんじゃないかって思えてきて、グツタリ来ているんだよね」

それについて、Cさんが、

「いやあ、おれはAちゃんのつらさ、すごくわかるなあ」

と応じた。

ここにあるものは本当に、Cさんの「やさしいところのはたらき」なのだろうか。

一方、ここでBがAに向けて唐突にこう言った。

「わたしにはあなたのことが分からない」

すると奇妙なことだが、ここではこのBの応じ方のほうが、本質的にAの存在と通じ、何かの共鳴でコミュニケーションしているかのように体験されてくるのだ。

Bは「分からない」と言っているのだが、その「分からない」こそ、やはり原義的に「非分離」だ。

非分離を言っているからこそ同一性が証され、その同一性ゆえに、われわれが本当に期待しているところの「わかってくれる」ということが起こっている、あるいは起こりかけている。

Bが「分からない」と言うことで、AにとってはBこそが話を「わかってくれる」と直接体験されるのだ。

Cのほうは、きっと善人——世間的にはそう——なのだろうが、Aから見てそのように観測されるというだけで、AC相互の「存在」はまったく出会う見込みがない。

このとき、Aがどちらを選ぶのかはまったくわからない。

わかりやすさのために、いやらしい言い方をあえてするが、AがBCのどちらに「なびく」のかは、前もってまったくわからない。

言いうるのはただ、ACのやりとりはBに対して侮辱的にはたらくし、ABのやりとりはCに対して侮辱的にはたらくということだけだ。

そのことは、けっきょくAAのやりとりがどちらに行き着くかに尽きる。

Aにとって、A自身を観測すること、自分のことが「わかる」ということ……その存在ではない形骸を、それでも「わかる」といって、そのこと

とを「わたし」とするのか。

それとも、Aにとって「分からない」ということ、観測外にある存在事象を「わたし」とするのか。

われわれにとって、観測できないもの、「分からない」ものを、肯定的に捉えるのは困難なことだ。

観測できないもの、「分からない」ものを、さらには主題にまで捉えるというのは、困難どころか体感的に「意味不明」でさえあることだ。

しかし、単純な見方も未だわれわれの手元に存在している。

浦島太郎の存在は、浦島太郎という「話」だとして、それは何もおかしいことではないだろう。

話以外に浦島太郎はなく、浦島太郎が量的に観測されるなどということはないのだから。

つまり、浦島太郎という存在は、浦島太郎という「話」だということになるのだが、ここでもなぜ、Aさんという存在はAさんという「話」であってはならないのだろう。

われわれは「分かる」ということが好きだ。

「分かる」は、「分からない」に対して侮辱的にはたらく。

「浦島太郎？ 浦島太郎の話は、そりゃ知っているけれど笑。あのさあ、それが何だって言うの。おとぎ話なんか現実には何の関係もないじゃない。そんなことより、キミってけっきょく勝ち組になれるの、そもそもそのつもりあるの。それとも、負け組のまま生きていくの。どっちなの」彼の言っていることは分かる。分かるし、さらには、あまりにも分かりすぎる、とさえ言いうる。

むしろ本稿の言っていることのほうがずっと分からない。何を言っているかも分からないし、なぜこのようなことが語られているのかということじたい、その理由や動機が分からない。

あなたはあなた自身のことを分かろうとするだろうし、あなたにとつ

て分かることで、あなたは進んでいこうとし、あなたは生きていこうとするだろう。

つまり、あなたにとって「好き」と想えること、「善い」と想えること、「価値がある」「無為じゃない」と想えることで、生きていこうとする。同時にもちろん、悪いことや、無意味なこと、厭なことや嫌いなことは、なるべく遠ざけて生きていこうとする。

ふと気づくと、それらについて、

「何もそんな、これは形骸ってことはないでしょ？」  
と想えている。

自分としては、むしろそこにパワフルな手ごたえを感じているのだ。先に述べたとおり、このことは、通常の知性では取り扱い不可能なことで、むやみに深入りしようとする精神に障害を負う。

あなたはいまここで語られていることについても、なるべく「分かる」と努力している。そのことはおかしいことではない。

けれどもわたしが狙っているのは、あなたの読書体験なのだ。

あなたはあなたを分かったがり、あなたはあなたを観測し、あなたは観測された「分かるあなた」をあなただと言いたがるが、わたしはそうではない、あなたが観測できない「存在」としてのあなたを狙っている。

わたしはあなたの理解力に期待するのではない。理解力というのは力量のもので、量のものである。

わたしはあなたの体験にアクセスしている。

読書体験、知性の体験、ことばの体験、声の体験、それらの体験に量はない。

わたしはあなたに向けて、分かる「説明」と、分からない「話」を同時に与えているのだ。

あなたが、わざわざ冷淡な気持ちで、あざけりながらこの文面を目で追うというようなわけのわからないことをしていないかぎり（そんなヒ

マなことをする人はここまで読み進んでいていないと思うが）、あなたは片面でさまざまな説明を理解しながら、もう片面では、語られている「話」と同一化している。

体験とは、自己との同一性で得るものであって、「話」という事象もまた、自己との同一性で体験されるものだ。

何もかもを「分かった」として、それでは何もかもが分離されるだけで、同一性のものがなくなり、体験がゼロになるだけだ。

まして、その中で最も身近な、それじたい主題であるに違いない「あなた」そのものを、あなたが「分かる」と言い張るのか。

あなたがあなたをあなたから分離するのか。

あなたはあなたの体験をあなたとせず、「だって分かるもん」と言い張って、あなたの形骸をあなたと為すのか。

あなたはいま、あなたについて、読書という「状態」を認めるだろうか、それとも読書という「体験」を認めるだろうか。

読書状態を認めるのは簡単だ、それは誰にとっても分かる、ただの量的観測だ。

一方、読書体験を認めるのには、「あなた」の存在が、「分かる」ということに根差していないということを認める必要が出てくる。

好ましい「分かる」ではなく、同一性というやっかいなものを認めなくてはならない。

双方は、相互に侮辱的にはたらく。

ふたつのうち、あなたがどちらを選ぶかについて。

あなたはおそらく、自分はどちらを選ぶのか・選ぶべきなのか、またどちらを選びたいのかということについて、自分を観測するという方法と発想ばかりを立ち上げがちなだと思う。ほとんどの場合がそうで、どちらを選ぶかという「話」の中に立っている人はごく少ない。

これはとても困難なことで、だからこそむやみに突撃しても、本当に



精神を損傷するだけになるのだが、それでも懲りずに、怯まずにどうぞ。

あなたは読書体験について、「分からない」と答えていい。

すべての体験について、「体験は分かりませんが」と答えていい。

「分かる」などということに弛（たゆ）むな。

あなたの嫌悪するだらしないさの顔面はその弛みから発生している。

体験なのだから、体の真ん中から、「分かりませんが」と言い、二度と分かることのないように生きろ。そのとき体の真ん中は、すでに進行方向を持っている。

## 自我と、使用できる記憶

われわれはおよそ、四歳以前の記憶を持っていない。このことを幼児性健忘というが、このことには文化差や言語による差があるらしく、たとえば日本とアメリカでは幼児性健忘の時期が違うそうだ。本当かどうかはじっさいの論文を調べていないので知らない。

なぜわれわれは四歳以前あるいは三歳以前の記憶を持っていないのか。なぜ当時の記憶は消えてしまうのか。これは本当には、「記憶がない」「消えてしまう」ということではないようだ。記憶はあるのだけど、それを使用できる形で引っ張ってくるできないらしい。

たとえば、われわれがPCを使っていて、そのPCにはさまざまなデータが保存されていたとしても、そのデータがディレクトリに出てこないのでは、データにアクセスのしようがないだろう。じっさいの操作でいうと、ウィンドウズの「エクスプローラー」を開いたところで、どこを

どう探しても当該のファイルが見当たらないという状態だ。ディレクトリがないのでプロンプト入力することもできない。

仮に、0歳から二歳までの乳幼児を、毎日ビンタで張り倒して育てたとする。かわいそうなことだ。するとどうなる。彼が青年になったとき、たしかに当時の記憶は取り出せなくなっているかもしれないが、かといって彼が明るく健やかな青年になっているとはとても想像しがたい。暗くて怯えた青年になっただけだ。だから幼児期の記憶が「ない」とは言えず、記憶は存在して彼の人格や精神の構築に大きく作用しているということになる。ただ、われわれが日常的に言う「憶えている」のような、引き出して使用できる記憶という形にはならないらしい。

それにしても、なぜ幼児期の記憶はそのように、使用できない形になってしまふのか。それについては、むしろ幼児期に注目するより、それ以降のことに注目するべきだ。

われわれは三歳か四歳かで、「自我」というシステムを神経回路に成立させる。「わたし」「ぼく」「おれ」といったものが出来上がるのだ。そしてこの自我というシステムは、観測して「分かる」という装置、分離して理解するという装置なのだが、分離するといって何を分離するかというと、まず「わたし」と「わたしでないもの」を分離するのだ。

母親は母親として存在しているが、母親は「ぼく」ではないらしい。大きな乗り物としてバスや電車を教わるが、バスや電車は「ぼく」ではないようだ。お兄ちゃんが誕生日におもちゃをもらったらしいけれど、そのおもちゃは「ぼく」のものではないらしい。お兄ちゃんのものなのだから。ぼくが転んでひざを痛めても、パパはぼくではないのでパパのひざは痛くないらしい。

「ちゃんとお手伝いできて、賢いねえ」と、誰かが褒められているけれど、それはぼくのことではないらしい。褒められているのがぼくのことではないということは、何だか耐えがたく腹立たしい。あたらしいおも

ちゃがお兄ちゃんのものだというのも腹が立つ。ぼくが転んでもパパは痛くないというのだってなんだか悲しいことだ。

でも、脚が速いといって褒められるのはぼくだし、そのことは誰にも譲らない。ぼくのおもちゃだって、ぼくのものであるから、他の誰かには譲らない。何もかもぼくのものならいいのに、なぜかそのことを言おうとすると怒られるので、ぼくはやむをえず引き下がっている。あの子がソフトクリームを食べているのに、ぼくはソフトクリームを食べていないというのとはとてもつらいことだ。ぼくは指を咥えているというのか。でも、なんとなくわかる。あの子はあの子で、ぼくはぼくということなのだろう。かといって、ぼくのつらいのがなくさめられるわけではないけれど、それでもパパとママの言うように、なるべくじっと辛抱してみようと思う。

幼児というのはまさに、「ぼく」と「ぼくでないもの」を分離しはじめた時期であって、そのことの如実な体験を、わたしはある特殊な体験から思い知っている。

わたしは手品師だったから、若い教諭にせがまれて、幼稚園で手品のショーをしたことがあるのだ。震災で避難所になった幼稚園での、ボランティアにかかわったことだった。

わたしは初め、そのことについてじゅうぶんに説明をして謝絶した。それは、

「幼稚園児には、まだ手品はわからないから」ということだ。

幼稚園児にはまだ手品はわからないということは、ターベルコースという手品の百科事典に書いてある。たしか、「手品というのは、五歳から一〇五歳まで愉しめる芸術です」というふうに書かれていたと思う。

わたしはその教えにのっとり、幼稚園児に向けて手品のショーは無理だとしつかり言ったのだが、わたしの実演を観た教諭がそれでも「ぜひ、

なんとか」と言い続けるので、わたしはやむをえず言われたとおりにその手品のショーをした。

その結果、わたしもまざまざと目撃したのだが、幼稚園児には本当に手品がわからなかった。夢中になって観てくれているのは、園児らをほったらかしにして前のめりになっている教諭たちだけだった。

手の中にコインを握ったところ、コインが消えたとして、そのことを幼児は「ふしぎ」とは体験しないのだ。

幼児らは、見慣れないコインをただ「見慣れない、金属の丸い板」と見ていて、ただそれに興味を惹かれているのみだ。それがたとえ手の中で消えたとしても、その開かれた掌に対して彼らは、

「さっきのやつが無い」

と無言で退屈がるのみで、興味を失ってそっぽを向いてしまう。

三歳のサルに手品を見せれば、サルは大きく反応しておどろくし、じつは三歳の犬だって手品におどろくのだが、ヒトの三歳はまだそこまで発達が進んでいないのだ。

三歳のイヌに、ビスケットを見せて、そのビスケットを手の中に握りこみ、それを消してみせると、イヌはびっくりし、あわてて鼻でビスケットを探り始める。

鼻で探られると、どこに隠しているかがバレるので、

「あ、こら、それは無しだ」

と、わたしは思いがけず慌てさせられたということがあった。消えたものの行方を考えるのではなく、ただちにいちばん頼りになる「鼻」で追跡しようと発想するのは、さすがイヌならではのことで、わたしは感心させられた。

さておき、幼稚園児は、手の中にコインがあるとか無いとかを、そこまでたしかに「分かって」いない。あるいは、一個しかなかった赤い玉が、指先で二つに増えたとして、そもそも玉は一個しかなかったはずと

いうことが幼児にはそこまでたしかに「分かって」いない。だから玉が増えたとして彼らは何も思わないわけだ。

幼稚園児にとっては、園で飼われているうさぎが空に飛んでいたり、太陽が西から上ったり、あるいは甕（かめ）の中の水がいつのまにかぶどう酒になったりしても、そのことが「ふしぎ」ではないのだろう。

幼稚園児はただ「ぼく」と「ぼくでないもの」が分かり始めただけなので、たとえ白いハンカチが白いハトになったとしても、そのことは何もふしぎとは体験されない。そもそも彼らはコインのこともハトのことも未だ「思議」せずに生きているのだから、彼ら自身が「不思議」を直接生きているところなのだ。そこに大人が「不思議」を供給してやる必要はない。

かくして、園児たちはそれぞれが好き放題に遊びはじめ、ただ教諭たちがウームとうなりながら、手品のショーにのめりこむことになったのだった。

これが、小学生相手になれば、たとえ低学年でも、子供らは手品のひとつひとつに「うおっ！」と大げさな反応をする。ターベルコースに書かれていたことはまさに真実で、それは五歳から一〇五歳（九五歳だったか？）が愉しめる芸術なのだ。

余談が長くなってしまったが、われわれの記憶が、通常の「使用できる形」の記憶になるのは、簡単に言うところ「分かった上での記憶」ということになる。

それは特に、「わたし」が分かった上での記憶だ。

「わたし」が、あさがおを育てた。

「わたし」が、この通学路を歩いた。

「わたし」が、あの子とよく遊んだ。

「わたし」が、気に入っているこの洋服。

「わたし」が、算数のテストで満点を取った。

「わたし」が、お絵かきで表彰された。

「わたし」が、マリオのゲームで遊んだ。

われわれの記憶、「使用できる形」の記憶は、そのように「分かっている」という土台の上に得られるのだ。

「前回のサッカーワールドカップ？ えーと、優勝はアルゼンチンでしょ。たしか、決勝戦の相手はフランスで、3対3の引き分けで、最後PK戦でアルゼンチンが勝ったんじゃないかなったつけ。三位決定戦はたしかクロアチアとどこかだったけど、忘れちゃった」

「長州藩は最終的に薩摩藩と同盟を結んだけれど、それ以前に長州藩は水戸藩とも密約を結んでいたんじゃないかなったつけ。どちらとも桂小五郎のはたらきで、その桂小五郎がたしか後の木戸孝允だよ」

「二日目の朝に、漁港に行つて、海鮮丼食べたんすよね。あれ、違うか。そっか、あれ三日目の朝か。そうそう、それで、借りている車が故障して、ロードサービス呼んだんすよね。でも直らなくて、レンタカー屋に代車を出してもらったんだけど、タイヤがスタッドレスじゃなかったから、雪道でつるつる滑つて。あといまさらですけど、あのとき一緒に来ていたあの子、たしかおみやげ屋で二万円ぐらい使っていたんじゃないスカ笑。あれはいくらなんでも買いすぎっしょ」

「元カレがさあ、最悪でさあ。あー、いま思い出しても腹立つ。アイツさあ、トイレのスリッパを脱ぎ散らかすんだよね。ひどいときには、もうスリッパ裏返つてんの。それがマジでキツいからやめてって言ったら、『おれはそんな脱ぎ方してない』って言いだすの。はあ！？ マジありえなくね。だってわたしぜったいそんな脱ぎ方しないし、家にはわたしとソイツしかいねえんだっての。そもそもトイレ掃除だってわたしがしてんだよ。全部あいつのせいなのに、そういうことマジで認めない人で、ほんとめっちゃストレス溜まったわ」

われわれの一般的な「記憶」は、このように「分かって」いる形で確保

される。

その「分かる」という分離・分割の機能が、自我由来なので、自我が形成される年齢以前は、記憶がそのような形では得られないということなのだ。

自我の形成以前は、「分からない」まま記憶しているため、それらはわれわれの知る一般的な記憶ではなく、自己と同一性の「体験」になっている。

そもそも、幼児期の記憶がもし消えるのだとすると、憶えた母国語も忘れてしまうし、水の飲み方や自分の家やトイレの流し方も忘れてしまうはずなので、それらは本当に忘れてしまうのではないのだ。

幼児は、まだ自我をたしかに形成しておらず、すべてのことを「記憶」ではなく「体験」に得ている。だからこそ、子供は読み聞かせられた童話を、記憶するのではなく体験するのだ。「赤ずきん」の話を聞きながら、その話を想像力に直接体験し、迫りくる悪意のオオカミに震え、赤ずきんちゃんの機転と無事を祈念するのが幼児だ。

幼児は「赤ずきん」を体験するのであって、そうした童話を「理解」するのではないし「記憶」するでもない。

そうして考えたとき、すでにじゅうぶんな自我の発達を得ているわれわれ大人は、童話や寓話をよく記憶しているし、よく理解もできている気もする一方、それらをいま「体験」出来ているわけではないということに気づく。そして、そうした話を「体験」出来ていないわけではないのなら、われわれ大人にとって童話や寓話はすっかり意味を失くしてしまっただけということになる。

じつさいに、いまわれわれは（日本人に限定されるが）、「浦島太郎」の話、じつに「思い出し、思い出し」で取り出すことができる。

「えーっと、むかしむかし、あるところに、浦島太郎という人がいました。浦島太郎という、青年がいました、だっけ。とにかく浦島太郎がいま

した。そして、浦島太郎が砂浜を歩いていたら、近所のこどもたちが、カメをいじめているのを見ました。浦島太郎は、『こらこら、やめてあげなさい』と言って、カメを助けてやりました。助けられたカメは、浦島太郎に感謝し、お礼に竜宮城に連れていきますと言いました。浦島太郎がカメの背中に乗って海の中へゆくと、海の底にはきらびやかな竜宮城があつて、竜宮城には……あれ、何姫だっけ。おり姫？ 違いか、織姫は七夕だもんな。えーと、何姫だつたか忘れた。まあいいや、とにかくお姫様がいて、浦島太郎をもてなしました。タイやヒラメの舞い踊り。浦島太郎は時のたつのを忘れて楽しく過ごしました。そしてお姫様は、浦島太郎におみやげといつて玉手箱を渡しました。浦島太郎は、地上に帰り、玉手箱を開けると、玉手箱から煙が出て来て、浦島太郎はおじいさんになってしまいました。……あれ？ 玉手箱って、『決して開けてはいけません』とか言われるんだっけか。でもそれもヘンだな、開けてはいけないならおみやげに渡すのおかしいもんな。まあいいや、とにかく浦島太郎は玉手箱でおじいさんになってしまいました。おしまい。と、これでいいんだっけ。さすがにラスト、『めでたしめでたし』ではないよね」これはまさに「思い出し、思い出し」であつて、彼の語りに付き添うわれわれも、一緒になつて記憶を探り探りしているのを体感できよう。そしてこれらは純然たる記憶の作業であつて、何ら作中世界の「体験」ではない。われわれは記憶から分かっていることを取り出しているだけだ。

われわれはこれをもって、浦島太郎の「話」をしたとは言えない。ではわれわれはいま何をしたかという、先の「観測結果を発表している」ということに準じるなら、^^記憶の参照結果を発表したVということになる。

「前回優勝したのはアルゼンチンだね」  
「桂小五郎が後の木戸孝允だね」

「漁港で車故障したのって三日目の朝っスよね」

「あのときのことって元カレが悪いよね？」

「竜宮城にいたのは乙姫だったか」

「子供のころわたしあさがお育てたんだよね」

こうした一般的な記憶は、取り出して使用できるという形になっているが、この記憶したいが何なのかというと、これは単に^^かつての観測結果vvだということになる。いま、目の前で彼氏が悪いということを観測しているのではなく、過去に元カレが悪いということを観測した、その保存情報を参照・発表している。

われわれの色（しき）には、そうした自動バックアップ機能があるというだけだ。

それはそれで便利なもので、その機能がなければ生活に不便をきたすから、その機能したいはあってくれていいし、なければ困るものだ。

「冷蔵庫に、牛乳はまだあったはずで、卵も、あと四つぐらいあった。でもたしか、棚にしようゆがもう無いんだよね。買わなきゃ。あと、そう、みりん。みりんがもう残りゼロだったはず」

こうした記憶の機能が皆無では、われわれは買い物のときに困るだろう。

だがまさか、「冷蔵庫に卵は四つあった」とか、「みりんがもう残りゼロだった」とか、そんなことをわれわれは「思い出」とは呼ぶまい。

それらは記憶であって「話」ではないし、もともとが観測であって「体験」ではないのだから。

われわれは童話「赤ずきん」の内容を、おおざっぱに思い出せるし、ウェブ検索をすればその詳細な記録を取り出すことができる。

そして、その内容を理解することは大人のわれわれにとって簡単なことだ。

また、

「この話って、けっこうスリリングで、聞いている側はドキドキしますよね」

と、理解すること、そう想うこと、「子供のころドキドキしたなあ」という記憶を思い出すようなことも、われわれにとっては簡単なことだ。

だがそれらはやはり、直接の「赤ずきん」の体験ではないし、直接の「赤ずきん」の思い出でもない。

原理的に言って、われわれの内部に、自我未然のところがもう存在していないということではない。自我未然のころはいまも残っている。けれどもいまのわれわれがそこにアクセスできなくなったというだけだ。

アクセスは何によって阻まれるのだろうか。

われわれが自我という看板の前で立ち止まることによって阻まれる。

われわれが本来持っている「体験する」ということの機能は、自我の成立位置よりずっと原初のほうに存在している。平たく言って、^^自我未然が体験vvなのだ。自我以降は観測であって、量る、分かる、ということに終始している。

単純に言って、たとえば落語家が話す「しじみ売り」という噺（はなし）を、記憶力の良い人なら一言一句まで暗記することができるだろう。

けれどもそれをただ暗唱したらかといって、「しじみ売り」という噺が体験されるのではないことはあきらかだ。ただ暗唱するだけでよいなら、テキストデータを人工音声を読み上げればよい。

そうではなく、いちいちを体験するということ。ここに優れた落語家がいるとすれば、おどろいたことにその名人は、「しじみ売り」を記憶しているのではなく、その都度に「しじみ売り」を再体験しているのだ。何十回も何百回も。それは^^反復されるのではなくvv、その都度に新しいものとして口にされて噺となる。

新しいというのは自我にとって「分からない」ということだ。新しく

ないもの、すでに知られたものならば、自我はその既知のものを既知のイメージどおり分類・分別するだろう。しかし新しいものは未だ知りようがない。それで、自我は真の未知に向き合うならその「分かる」といういつもの機能を停止するのだ。岡本太郎が芸術を「常に新しくなくてはならない」と言ったのはまさにこれのことだし、萩原朔太郎が薬物に頼ってでも得ようとしたのもまさにこれのことだ。

芸術の（特に文学の）技法として異化という方法、「見慣れないもの」へ書き直していく手法が採られるのもまさにこのためだ。見慣れないものは自我がイメージをあてはめることができず、分類できない、つまり「分からない」……分からないものに対しては、人はそれを受け取るならそれを体験する——想像力を以（も）ってそうする——しかないのだ。あつて、そのことが芸術家においては方法論に織り込まれているのだ。

われわれのころは、自我の発生によって、その原初へのアクセスを閉ざされる。それはじつに一般的かつ強固なことだったとして、それでもそのことは必ずしもわれわれの恭順と無抵抗を決定はしないだろうし、そうして堅牢に発達した自我がわれわれに対して必ず「支配的」であらねばならないということも道理にはない。われわれは「分かる」ということを豊かにしなければともに生きていけないが、だからといって「分からない」——分かる未然のころ——にアクセスできなくなるということに必然性までは見当たらない。

ただ、自我未然のころと自我以降のころが、一般には相互に侮辱的にはたらくというだけだ。その相互に侮辱し合うというのも、言ってみればただ未成熟なだけであつて、双方が成熟してそれぞれの機能をもつて統合しあうようになれば、そのことは解決するのではないか。

ウミガメにまたがって竜宮城に行こうとし、海で水死する者がいたとしたらその者はただの精神病だが、かといって、

「浦島太郎は現実じゃないじゃん」

と侮辱的に言うあるいは想うしかできない者も、大人なのではなくて、じゅうぶんに成熟を得られていないただの貧しい者だ。

観測領域に竜宮城が見当たらないのは当たり前のことだ。なのに、その筋違いかつ陳腐の極北たる発想を以って体験領域の存在性を否定せんとする者がいたら、彼は成熟を得ないまま色（しき）に囚われた幼稚こじらせの精神貧者でしかない。

「浦島太郎は現実じゃないじゃん」と言う者があつたら、彼に向けては「じゃああなたも現実じゃないだろう」と言わねばならない。

そもそも、浦島太郎は「話」なのだから、それが観測によって量れないのは当たり前のことだ。

それをもって、「現実じゃないじゃん」と、本人としては大人ぶった、知能の高いふうを言いたがるのだが、お察しのとおりそのような陳腐な者が、知性において秀でているわけがない。

彼は浦島太郎について、現実がどうこうではない、本当には、

「浦島太郎は色（しき）じゃないじゃん」

と言っているのだ。

もちろん当人には、自分がそうして本質的に何を高言しているのかの理解も自覚もない。

彼は色（しき）に囚われているので、彼にとっては色（しき）だけが現実だと確信されているのだが、色（しき）はパラメーター比率でしかないのだから、「存在」について言うなら本当には色（しき）のほうが「存在」はしていないのだ。

わたしは意地悪を言いたくはないし、意地悪を言うことはまったくわたしの目的ではない。

けれども主題に向けてこの知性的欠格のくびきを打破するためには、彼に向けて次のように致命的なことを言わねばならない。

「お前、何の思い出もなしに生きているだろ」

これは、悪口を言いたくてそのように言っているのではない。構造上そのような推定を一方的に投げつけることが出来てしまうということを効果的に示すにはこのような言い方が優れた候補に挙がってきてしまうのだ。

彼の色（しき）は四歳から始まった。自我が形成され、そのときからもう彼は、こころの原初・体験領域へのアクセスを閉ざされている。よって彼は何の体験も得ないまま、二十年間を観測・分かる・感じる・思うということで過ごしてきた。そうして過ごしてきた彼の内部には、さまざまな記憶が保存されているにせよ、それらの保存はすべて当時の観測および当時の感想にすぎず、体験はいつさいレコードされていない。体験がレコードされていないのなら、彼に思い出はないはずだ。もし体験がレコードされているというなら、こちらからは「そのレコードを再生してみて」と要求できてしまう。

もちろんわたしは、そんなことを言い放って、彼を追い詰めたいわけではない。

もしそこで彼が、取り乱して、しどろもどろになりながら、それでも「赤ずきん」の思い出を話すなら、わたしはわたしの悪辣な言いようを取り下げて、

「失礼した。あなたにはちゃんと思いい出があった」

と詫びるだろう。

われわれはおよそ、四歳以前あるいは三歳以前の記憶を持っていない。そのことを幼児性健忘というが、これは記憶がなくなったのではなく、自我未然のこころの領域、体験領域にアクセスができなくなったただけだ。本当には記憶は「体験」という形で残っているし、いま現在も、そのこころの領域は残っている。アクセスは不可能ではない。われわれが、観測領域の支配に唯々諸々と恭順しつづけるのでないかぎり、その領域はいまもわれわれのものだ。

## 夜は「在る」のか

夜を観測するのは簡単だ。

昼間に比べて、日光「量」が少ない。

日が沈み、明るさより暗さを「実感」するようになってくる。

それが一般に夜だ。

夜という「状態」になる。

東半球が昼なら、西半球は夜だ。

これらは、夜という状態が観測されるだけで、夜が「在る」とは言えない。

夜という「状態」は、夜という state (status) であって、夜という existence ではない。

この問答は、初めから不毛に思える。

どうせ、観測されるなら量で、量ということは色（しき）なのだろう。

色（しき）なら存在していない、ただの比率だ、ということになる。

一方で、たとえば浦島太郎は観測できないと言うけれど、じゃあ浦島太郎が「存在」しているのかというと、そういう話は存在しているかもしれないが、

「かといって、それが自分の足しになるわけでもなく、浦島太郎で何をしたらいいのかさっぱりわからない」

ということに、一般的にはなるだろう。

浦島太郎が、話として存在しているとして、多くの人にとっては、

「でも、その存在したいが正直どうでもいい、としか想えないんです」となる。

浦島太郎で現実逃避して何かいいことになるのか。

そのとおり、浦島太郎で現実を否定して、いいことになるのだが、何がどうなってるそんなことになるのか、一般的には見当もつかない。観測できないもの、量がないもの。比率ではなく、パラメーターではないもの。

パラメーターではないゆえに、「分かる」の対象ではないもの。

それが「話」であり「存在」だ。

こうしたものが、浦島太郎のほかに存在しているだろうか。

たとえば神仏などがそれにあたる。

神仏等について言及すると、宗教関係の人たちが目くじらを立てるかもしれないが、わたしは宗教方面にまったく関係のない者だし、関係のみならず関心もない。宗教方面に立場を得ている立派な人たちはまさかわたしのような塵芥のことを意に介するべきではないと思うし、またそのように格式の差で相互に保証されるものと信じてもいる。

よって、わたしは神仏のことを言うのであって、宗教のことを言うのではない……神仏に直接叱られた場合はともかく、宗教者のお叱りに従う謂ではないと思うので、そのようにご了承願いたい。

神仏は、宗教者の独占物というわけでもあるまい。

ともあれ、神仏に量があるというのは聞いたことがない。○○如来が何グラムという話は聞いたことがないし、それがたとえ何グラムであったとしても仏性に相関はないだろう。さすがにお釈迦様でさえ「その身長がイケている」とまでは言われていない。

仏様は観測できないし、創造主や救世主も観測はできない。

そもそも観測できるなら何もむづかしいことはなくなる。念仏を唱えるたびにアプリの画面が光ってゆき、五回十回と唱えたところで「救済

手続きが完了しました」と出るのなら、誰でもさっさとその信仰と易行を済ませるだろう。しかしそんな課金アプリは百パーセント詐欺に決まっている。

また、観測ができてしまうなら、かつてあの人が救世主なのかそうではないのかというところで揉める必要もなかったはずだ。

こうしたことは、

「あれは幽霊だった」

「ただの見間違いだって」

「いや、あれは幽霊だった」

「そんな気がただけだろ、気の迷いだよ」

「いや、幽霊だった！　だって何かスゴかったもん」

「ああそうか、じゃあもうそれでいいよ」

というのと同じで、観測が出来ないのだから最後まで誰にも分かりようがないのだ。

神道においては、先祖の御霊（みたま）を祀るというが、だからといって自宅にしつらえた神棚に、いつもゴリゴリの「御霊」が観測可能な象で居座っていたら、家人はおっかなくておちおち暮らしてられないだろう。

霊というのは観測不能が大前提だ。

ヨハネの福音書 14:16-17では次のようにある。

「わたしは父に、もう一人の助け手を送っていただくようお願いします。その助け手は、いつもあなたがたと共におられます。」その方は聖霊、すなわち、すべてを真理へと導いてくださる霊のことです。世は、この方を受け入れることができません。この方を求めもしなければ、認めようもしないからです。しかし、あなたがたはこの方を知っています。あなたがたと共に住み、あなたがたのうちにえられるからです。



霊という、われわれはただちに、「ポルターガイスト」「地縛霊のたり」「心霊写真」「ギャー！」みたいなことを連想するが、これはあくろかに安物のエンタメ文化習慣がそうさせているだけであって、このパターンに尊重を向ける気にはさすがになれない。

なぜそんな安物のパターンが入り込み、そんなものがわれわれにおいて支配的なのかというと、それは単にわれわれが霊という国語を正しく捉えられていないからだ。霊という語は^^観測不能かつ非力動性の一切を指定するものVVとして用意されているのに、あろうことかわれわれはそれを「霊状態キター！」というような感覚で捉えているのだ。

観測不能の意を、「霊状態ですよー！」とわざわざ力強く観測して言い張ろうとするのは、知性的欠格、つまり純然たるアホに違いないが、それほどまでにわれわれは「分かる」ということが好きということでもある。

「霊」は、状態ではなく存在を指定する語なのだが、しょうがない、どうしても「状態」だけを認めた人、せいぜい「霊モード！」というふうにも捉えておけばいい。そして霊といっても、すべてが悪霊というわけではないはずなので、「聖霊モード、オン！」というふうにも捉えておけばいいだろう。

それでじつさに聖霊モードになるのであれば誰も文句は言わない。

それで、夜は「在る」のかということについて。

わざわざ霊という語を導入して、ここで「霊なる夜」あるいは「夜なる霊」を仮定すれば、その夜は「在る」ということになる。

なぜなら、「霊なる」それは観測不能であり、観測不能ということは体験によってそれを受け取るしかないことだからだ。

「霊なる夜」という仮定は、まさにその夜を「体験」することによって、そのとき夜は「在る」ということになる。

夜が、ユニークなものとして「存在」し、そのかけがえのない「体験」が得られるということになる。

それはさすがに、日光量がどうこうとかいう、「状態」としての夜ではないだろう。

このことは、「夜」のみならず、あなたは「在る」のか、というテーマにも引き当たる。

「霊なるあなた」、あるいは「あなたなる霊」を仮定すれば、それにおいてあなたは「在る」ということになるだろう。

パラメーターではない、あなたじたいを「体験」できるという、あなたが存在するのだ。

ここでいいかげん、霊というと「ギャー！」しか連想できない人は、もう霊長類という分類を降りて、げっ歯類か何かになってカピバラと一緒に暮らせ。

霊長類の称号がもったいないだろう。

霊なる夜であれば、その夜は在るし、霊なる場所であれば、その場所は在る。

霊なる声であれば、その声は在るし、霊なることばであれば、そのことばは在る。

霊なる姿であれば、その姿は在るし、霊なる風であれば、その風は在る。

あなたは、どこかに旅をするとして、その旅先の地霊にまみえることもしないつもりなのか。

それではどこを歩いているのか、「在り」もしない土地を歩いたのか。

「旅の道中、どうだった」

「旅状態でしたね！ 日常とは違う状態ですよ。ドーパミン量が多く、テンションパラメーターが大です」

これではアホではないか。

霊なる夜が与えられた場合、その夜はますます観測不能になっていくが、観測不能のくせに、まるで指先でその実物に「触（さわ）れそう」なほどに、それを体験するのだ。

夜そのものを、指先で撫で、指で梳かすことが出来る。

もちろん、触ったとして、重さはないので感触はない。

感触はないのに体験はある。

なんだこれは。

夜が「在り」、何もかもが「在り」、ずっと向こうまで、果てしなく「在る」がつづいているように体験される。そして何もかもが「呼んでいる」ようにも体験される。

また直後には、自分がそのすべてのものを、呼び込んでいるようにも体験するのだ。

海も山も人も川も、石ころも外灯も、吹き込む風さえも、すべて生きている（命がある）というように体験される。

はるかな過去さえも、足許に、風に、いま息づいている。

霊なる夜が与えられるとあって、それが抽選で当たるわけでもなからうから、それはやはり、主體的に認め、主體的に求めて、それを受け入れるからこそ与えられるものなのだろう。

これは何なのかとあって、人は本来、そうして「話」の中を生きているということだ。

本来、量や状態を観測するだけの存在ではないということ。

量や状態を観測して、あれこれ感想しているのは、人ではなくて自我だ。

わたしは「話」の専門家なので、一方的に申し上げるが、人が話の中を生きているというのはそういうことであって、そうしてすべての「存在」を体験する中を生きていなければ、とてもじゃないか「話」なんて出来ないのだ。

なんなんだこれはと言って、わたし自身が、その「なんなんだこれは」を言い続けて、何十年も生きている。

これが何なのかは「分からない」のだ。

これが何なのかについては、せいぜい、同一性においてこれが「わたし」なのだろうと言うしかない。

分離・識別できるボクちゃんが「わたし」なんだよというような、寝ぼけたことをまさか言っていられない。

霊なる夜、霊なるうんぬんと言うなら、それはもう聖霊の嵐なのだ。

わたしはもう長いこと、「ひよえええ」と畏れおののきながら生きている。

もちろんこれらのことが、観測主義の側からは、侮辱の対象にしかないということも重々承知している。

承知も何も、わたしがそれを解き明かしてわたしが説いているのだから、わたしはそのことを知っているに決まっている。

体験の機能は、観測の機能の未然にあり、機序としては原初に位置している。

霊という語は、観測不能かつ非力動性の一切を措定するものなので、観測の未然にある「体験」は、すべてを霊なる〇〇として体験するということになる。

人の、自我以降はどうあれ、自我未然の原初は霊的だったということとは、直観的に違和感がないではないか。

わたしが歩くとき、霊なる夜がやって来、霊なる道が息づき、霊なる風が吹き込んでくる、と、そのようでなければ、正直なところ話にならない。

それは何も特別なことではなく、この世界のこととして当たり前のことだ。

量と観測と感想だけを支配者として崇め奉るのではなく、霊なる夜

が「在る」のは当たり前だ。

そんなわけなので、わたしはオカルトの文化習慣に用事がなく、同様に、スピリチュアルの呼びかけにも用事がない。

夜が「在る」のだから、そっち方面に用事はない。

占いの館に入ることは、わたしにとっては何ら霊的ではなく、それよりは路地裏に吹き込む一陣の風と、そこにそよぐ椿の葉のほうがよほど霊的だ。たえまない聖霊の嵐に「ひよえええ」と畏れながらわたしはずっと歩きつづけている。

## 自我の真ん中と「この人」の真ん中は、位置が違う

バス通りを外れていたら、いつまで待っていてもバスは来ないだろう。待ちぼうけだ。

どれだけバスを信じ、本気でバスに乗りたいと願ひ、バスを念じていたとしても、バスはやってこない。

「バスなんて存在しないのだろうか」  
違う。

それは、バスが存在しないのではなく、バス通りを外れているだけだ。バスにはバスの通り道がある。

「体験」、その霊なる〇〇の通り道があるとすれば、それは「体」の真ん中だ。

自我の中を、そのバスは通り抜けない。

体の真ん中を通り抜けていく。

体の真ん中は、いわゆる正中線ということになるが、正中線の各所を捉えていくのはむづかしいので、さしあたりメインのバス停を捉えるべきだ。

メインのバス停、それは横隔膜のいちばん奥だ。

その他、いわゆる丹田を捉える方法などもあるが、それはあまり「話」ということにつながってこないなので、さしあたり横隔膜のいちばん奥を捉えるのがいい。

体験はそこを通り抜けていく。

のぼりもくだりもその通りを抜けていく。

顔面・頭部のロータリーには、「体験」は来ない。

顔面・頭部のロータリーには、「観測」「量」「状態」「分かる」「感じる」「想う」が来る。

つまりそちらは、色（しき）の通りだ。

霊の通りではない。

霊といって、オバケではないのだが、このことにオカルトやスピリチュアルの連想を混ぜ込んでしまう人は、もういろいろあきらめてくれ。

海の霊というのは、オバケではなく、ただの海の体験であって、もし海の霊がないなら、そこにあるのはただの実存、ただの巨大な塩水だまりだ。

体の真ん中、横隔膜のいちばん奥に、「体験する」という機能がある。ただしそれは、体験されるのであって、「分からない」ものだ。

「分かる」は、観測であって体験ではないのだから。

浦島太郎という寓話の記憶を、「むかしむかし、あるところに」と思い出していくことは簡単だが、そうして記憶を思い出したとしても、その胸の奥に、砂浜の波音は響いていない。

横隔膜のいちばん奥に潮騒は体験されていないのだ。

潮騒が体験されるとすれば、その器官はわれわれの機能の原初、観測未然の領域にある。

それが横隔膜のいちばん奥だ。

この話をするとしばしば、

「横隔膜ってどこにあるんですか」

と訊かれる。

横隔膜は、肋骨の下だ。

肺の空気を出し入れするはたらきをしている。

焼肉で言うとはらミだ。

現代人は、日常、横隔膜をカチカチに硬直させて暮らしているから、まずそれをやわらかくしなくてはならない。

やわらかくする方法は、特にないので、「やわらかくく」と思うしかない。

横隔膜のやわらかい人を見つけて、その人を見本にするしかない。

横隔膜は、やわらかく、広げられ、ゆったりと押し下がっているほうがいい。

横隔膜が、カチカチに硬直し、引きつって持ち上げられているのはよろしくない。

そうして、横隔膜をやさしいものに整え、そのいちばん奥に、「体験」が通るのがいい。

体験はどこからやってくるか。

空間からやってくる。

（地面のことはいったん忘れよう。ただし、膝は抜けて、足の裏は均一でよろしく）

体験の通り道は、基本的に、頭頂部から頭上の空間に抜けていると思っ

のぼりもくだりも。

言い換えれば、浮身も沈身も。

体の真ん中を通って、頭頂部から外の空間へ、抜けていくし、外の空間から頭頂部を通り、体の真ん中へ入ってくる。

空間が体の真ん中を通り、「体験」されるのだ。

空間とつながったままだ。

体の真ん中（横隔膜の最奥）が空間とつながったまま、「体験」が得られる。

これは魂の現象だ。

ものすごく端折っているが、こまごま言い出すと膨大な説明になるのではない。

ものすごく端折っていても、初学の人にとっては複雑だろう。

しかも、これはどうやら本当に魂の現象、霊なる〇〇の体験ではないのかと思えるほど、このことは初学者にパニック症状をもたらす。

体調がおかしくなり、精神がおかしくなり、本当に精神に「恐慌」が起こるのだ。

何も大したことはしていないのに、精神恐慌が起こる。

「どうしたの」

と訊いても、

「わからないです」

と本人が言う。

しゃがみこみ、膝を抱えて、震えていたり、泣いていたり、怒り出したり、思考が定まらず、感情も定まらず、胸が苦しく、とにかくもう「パニック」だ。

あまり力任せにいじくると、クンダリーニ症候群、のようなこともふつうに起こる。

だから、ほどほどかつ、半信半疑かつ、おっかなびっくりでやるのが

いい。

いや、やるのがいいと言われても、ふつう、やる方法が無い。

やる方法なんか無いという前提で進めるが、この、正中線の現象、横隔膜のいちばん奥を「わたし（存在）」としてはたらかせていくという方法は、当たり前のことであって、奥義というわけではない。

そんなこと、ふつうの人は出来ませんと言われてしまうと、それはそのとおりなのだろうが、やれ「話」とか「色（しき）」とか、フィクションがどうこうとか言い出せば、この「体の真ん中」を使えないでは話にならないのだ。

それでいて、率直に申し上げれば、この「体の真ん中」の事象とエネルギーをいきなりMAXで食らわせれば、一般の人はそれだけで重篤なパニック症状に陥るだろう。

重篤といっても、数日ぐらい具合が悪くなるだけだが。

とはいえ、そのパニックから当人の自我が暴れ出し、当人が魂の現象と大喧嘩してしまうと、救急車を呼ぶ騒動もありうるし、本当に数ヶ月単位で入院になってしまうというようなこともある。

このときに起こるパニックは、本当に苦しいし、パニックの予兆だけでも苦しいので、対症療法の処方箋を授けておく。

まず、ワイドショーを観なさい。

「ミヤネ屋」などを観ればいい。

そして、「めっちゃ知っている」ことを考えろ。

たとえば、ファミリーマートとセブンイレブン。

あなたがおにぎりを買うとしたらどちらで買うか。

あなたはそういうことを「めっちゃ知っている」。

めっちゃ知っているものに集中すれば、パニックの苦しさは遠のいていく。

あなたはふだん、だいたい何足ぐらいの靴下を使いまわしているだろう。

う。

タンス、衣装ケースの中に、何足ぐらい入っているだろうか。

だいたいいいい。

あるいは、高校生の男の子が、付き合っている彼女にアクセサリをプレゼントしたいという。

付き合って三か月ぐらいで、初の誕生日プレゼントということなのだが、金額的にはいくらぐらいのプレゼントが妥当だろうか。

安すぎるのはいまいちだが、かといって高すぎるのも、年齢や交際のいどとして不相応だ。

三千円では安すぎるか、三万円では高すぎるか。

なんとも悩ましいところ。

あなたが「めっちゃ知っている」こと。

人々は、この「めっちゃ知っている」ことの中で暮らしているのだ。

あなたは、ポテトチップスというと、カルビーと湖池屋、どちらが好みだろうか。

人はポテトチップス「のりしお」をバリバリ食べながらパニックにはならない。

「めっちゃ知っている」へのアクセスを、方法として手元に残しておくことだ。

めっちゃ知っているし、よく分かるし、よく分かっていること。

ワイドショーで、不埒な犯人について、

「断じて許せませんね」

とコメントされることは、誰にとってもすぐよく分かることだ。

この「めっちゃ知っている」ことの中で、人々は生きているのだし、この中に生きているうち、人はさしあたりパニックにならない。

そうした、「めっちゃ知っている」ことを眺めているうち、余力が出てきたら、そのときの自分の身体性にも目を向けてみる。

「めちゃ知っている」にアクセスしているとき、あなたは全身のうち、どの部分をはたらかせているか。

あなたはふだん、だいたい何足ぐらいの靴下を使いまわしているか。

「えーっと？ 何足ぐらいだろ。けっこうあるよ」

それでけっきよく、

「よくわかんない。たぶん、十五足ぐらい？」

となったとして、もちろん靴下の数はどうでもいいのだ。

その「えーっと」のとき、あなたは身体の「どこ」を使ったか。

たいてい、顔面・頭部に意識が集まる。

顔面の中央、やや上よりぐらいだろうか。

少なくとも、胸に手を当てて靴下の数を考える人はいない。

そうして、顔面・頭部に、自我・観測という色（しき）の通り道がある。

それはそれでよくて、ただ、そちらの通り道に浦島太郎をリピート再生しても、それは浦島太郎の「話」としては体験されないということなのだ。

「わたし」がふたつ存在してしまっている。

体験の「わたし」と、観測の「自分」、ふたつの「わたし」が存在している。

そのふたつは、^^具体的に場所が違うVVのだ。

さらに困ったことには、そのふたつの「わたし」は、相互に侮辱的にたらくのでもある。

先に述べたように、その侮辱性向が収まらないのは、単なる未成熟ゆえのことではないのだろうけれど、そうは言っても現実的にその成熟を獲得するのはそう容易なことではないので、さしあたり「相互に侮辱的にはたらく」という性質のものだと捉えておくのがよい。

観測者は体験者を許さないし、体験者は観測者を歯牙にもかけないのだ。

このことは、どちらの「わたし」が主たるものなのかという、権威の抗争として起こっている。

ファミリーマートやセブンイレブン、あるいはカルビーや湖池屋といった、「めちゃ知っている」「すごい分かる」の勢力をもって、浦島太郎に對抗している。

竜宮城とかいう架空の城など、ローソンの実たる権威に及ぶべくもないでしょ、ということだ。

一方で浦島太郎は、

「ローソンは、あなたの『話』ではないし……」

ということでは対抗する。

そういう抗争だ。

どちらが主であるかという、権威を争っている。

とはいえあなたは、概念的には、自分の本質が「話」の存在であるという説に対して、第一に拒否的ではない。

むしろ自分の本質は何かしらの「話」であってほしいし、そういう「存在」でありたいと、みずから求めるかもしれない。

にもかかわらず、なぜここで抗争が起こり、ここでパニックが起こるのか。

色（しき）の拠点が顔面・頭部だったとして、事実、それが「自分」なのだ、われわれはそれぞれに何十年も生きてきているのだ。

それが突如、そうではない、別の箇所「わたし」があるのだなどということになれば、その人の全身全霊は「政情不安定」に陥る。

二百五十年間も、江戸に日本の「主」がいると思われてきたのに、突如そうではない、京都にこそ日本の「主」がいるのだということになれば、それは政情不安定になるだろう。

たいへん安っぽい捉え方だが、わたしが捉えていることは、「顔面幕府と横隔膜天皇」というような構図で捉えても、ぎりぎり本質から逸脱し

ない。

ただしそうして、イメージしやすくなったからといって、それが実現しやすくなるわけではないので、やはり浮かれるようなことではない。

「分かる」と「分からない」。

顔面・頭部に生じる観測は「分かる」。

横隔膜最奥に得られる体験は「分からない」。

わたしがここで唱えている「話」というのは、われわれの体が、その「体験」ではたらくことだ。

自我で挙動せず体験で挙動する。

理解やパラメーターの中を動かず、話の中を動く。

話の中を動く？

そんなことがありうるのだろうか。

話というのはそれじたいがフィクションのはずだ。

フィクションの中を具体が動けようはずがないだろう。

具体は何よりもノンフィクションの存在なのだから。

と、一般にはそのように思い込まれていて、本当にそのとおりだったなら、誰もパニックにはならないだろう。

けれどもじっさいそうではないので、穏やかでないのだ。

あなたが両手で、棒切れをガッシリ持っていたとする。

両端を握りこみ、両足を踏ん張って、盤石の構えだ。

わたしが片手の指先で、その棒をつまみ、押し込んだとしても、あなたはビクともしないだろう。

あなたは両手でガッシリ持ち、こちらは片手の指先でつまんでいるのだから、「力」のパラメーター差はあきらかだ。

しかし、わたしが「分からない」の中を動いたら。

わたしが「体験」で挙動し、「話」の中を動いたら。

あなたはストーンと押し込まれてしまい、そのまま尻もちをつく。

「なんで？」

尻もちをついた当人のあなたがそう疑義を言うだろう。

このことは、不思議でも何でもない。

本当に知り抜けば、これは当たり前のことであって、不思議なことではないのだ。

わたしは逆にあなたに言おう、

「なぜあなたは、『力』で体験を止められると思うの？」

力は観測できるものだから、観測された力に対抗して「止める」ということはできるだろう。

けれども体験や話は観測不能のものだから、あなたがどれだけ「力」を準備していたとして、観測しないうちに動きは終わり（話は終点に至り）、そのときにはあなたがストーンと座り込んでいるのだ。

どれだけゆっくりやっても変わらない、結果は同じだ。

やればやるほど、現象はあきらかなのに、あなたはどんどん「分からない」になっていく。

「分からない」をやっているのだから、どんどん分からなくなっていくて当たり前なのだが、あなたは具体まるごと「分からない」になっていたという経験がないので、パニックになる。

パニックの中で、あなたはこのことに侮辱的な態度を噴出させる。

もう少し詳しく説明すると、そのときあなたは、自分の力でわたしの力をちゃんと止めているのだ。じつは、「力」は成り立っている。

が、わたしが挙動すること、あなたがストーンと座り込むことは、体験であって力ではない。

あなたは、グイッと来られた力については「分かる」から、それを止めることができる。

けれどもそれは、あくまでわたしがあなたと分離しているからこそ「分かる」にすぎない。

そこでわたしが、あなたと同一性のものとして挙動したら、それは「分らない」のだから、あなたとしては止めようがない。あなたは分らないうちにストーンと座り込んでいる。

あなたはそこで、自分の体験についてどう思うか。

どう思うといっても、まともな「記憶」に残っていないのだから、想いようがない。

自我未然、観測未然の領域、「体験」にそれは起こっているのだから、幼児性健忘と同じで、取り出して使用できる形の記憶には残らないのだ。

じゃあ何が起こったのかというと、

「わたしが、棒をつまんで、すうっと進みました」

という「話」があっただけだ。

「話」を「力」の量で止めることはできない。

（「止める」ではなく、単独でガチガチに力む・暴れるということなら、事象を重く遅くして抵抗はできますが、それは「止める」という行為にはなっていないので、恣意的に逸脱した一種の現実逃避となります）

（便宜上、「動く」「挙動する」と言っていますが、じっさいには体験により具体が「変化する」ということであって、一般的な力動性はすべて排除されます。自分で観測できる力動をするとそれは相手も観測できるので止められてしまいます。そうではなく、たとえば〆〆春夏秋冬の変化を力では止めようがないVVというように、その変化ははたります。春夏秋冬の境目は分離されていません）

一般にはまったく知られていないことだが、自我の真ん中と「この人」の真ん中は、位置が違う。

これほどまでに、「一般には知られていない」ということが他にあるだろうか。

わかりやすさのために、「自我の真ん中」「この人の真ん中」という言い方をしているが、じっさいには自我には真ん中というものはない。

主題は、「この人」の真ん中のほうだ。

「この人」の真ん中は、体の真ん中であって、体の真ん中というと、さしあたり横隔膜のいちばん奥を捉えればいい。

バスを待つには、バス通りで待たねばならないように、「話」を取り扱うなら、あなたは体の真ん中でそれを受け取らねばならない。

一般には知られていないが、人には本当に、ふたつの「わたし」があるのだ。

顔面・頭部に拠し、「分かり」、観測で挙動する「自分」。

体の真ん中（横隔膜の最奥）に拠し、空間とつながり、体験で挙動する「わたし」。

このふたつは、目の前で実演されると、びっくりするぐらいの差がある。

それは、初対面の、見ず知らずの他人をさえ、

「こんなに違うのか」

と驚愕させ、呆然とさせるものなので、あなたはさしあたり、「いまの自分はどちらだろう？」などと悩む必要はない。

あなたはただ、横隔膜の最奥を開拓する、その気概と勇気を持てばいいのだ。ただしそこには常に、心身を損なわないでいどに「ほどほどに」という忠告が添えられていてほしい。

## 色（しき）の不連続性と「色々」

年長者が、生きてきた過去を振り返ったとき、誰でも、



「色々あったねえ」

と回顧する。

けれども本当に色々あったのかは定かではない。

別の視点に立てば、人が生きるといのは、存外「特に何もない」とも言いうる。

長い時間——あるいは短いかもしれない時間——を生きていくのだから、できれば「色々」あってほしいものだが、かといって願望を事実とすり替えるのではいささか往生際が悪いというものだろう。

世の中は色々と変わっていく。

これを読んでいるあなたが、まだ未来しか知らない若い人だとすれば、あなたがこれから後に知っていくことは、多くの人の価値観や考え方が、まさに「色々」変遷するということだ。

そのことは、途中であなたに恐怖心さえ与えるかもしれない。

「運命の出会い」と言って、プリクラを撮り、互いの名前のタトゥーを入れ合うまでしたアツアツのふたりが、交際二ヶ月であっさり別れる。

二か月前に自慢していたあのアツアツは何だったのかという話だ。

あるいは、「ウチは、自分の身体いじりたくないし、きれいなままでいたい」と言っていた少女が、借金を抱えたとすぐにタトゥーを入れ、啞え煙草で性風俗の控室にあぐらをかいて座り込んでいる。

はたまた、「ガンガンやっていきましょー」と、熱く言い合った若い彼が、二週間後にはもう職場に来なくなる。

先日まで「そういうものだし、そういう業界でしょ」と言われていたタレント事務所の社長が、なぜか今日になって「悪逆非道の親玉だ」と激しくバッシングを受ける。

「握手券を添付して音楽CDの売り上げをかき増しするなんて、やり方が外道すぎて認められない」と蔑まれていたのが、二年後には国民的アイドルになって大手を振って歩いている。

数か月前まで「天才」「第〇世代」と奉られていた芸能人が、もう今月には忘れ去られていて、メディアに露出しても「オワコン」と嘲笑されている。

親が、年を取り、夜な夜な「孫の顔が観たいわな！」と長女に泣きついたのに、夜が明けてきょうになると、当人がそれを覚えていない。

各種のメディアで、「〇〇による環境破壊」「××による健康被害」がまがまがしく言われて、人々は青ざめたのに、三年が経つと、「あれってどうなったの？」と、けっきょく何もないうまま忘れられていった。

あと二十年で石油は涸渇すると言われたのに、四十年経ってもまったく涸渇しない。

しかもその昔の発言について誰も訂正や説明をしない。

「これぐらいのミスや弱さで、彼をこんなにも叩くのはやりすぎです！」と、気高い誰かが言う。けれども周囲から風当たりの強さが二週間続くと、「彼がそれほどのことをしていたとは、これは同情の余地がありません」と話が変わる。

戦中は、「神州不滅、米英撃滅」と言って竹刀を振り回していた人が、戦後ただちに「この戦争はおろかで、初めから負けるとわたしは思っていたんです」と言い出す。

（当時そういう人はたくさんいたらしい）

「そんなことで、わたしに気を使わなくていいよ」とはに cand 言っていた人が、半年後、「あのさあ、ちょっとはわたしに気を使おうと思わないの!？」と牙をむいて怒鳴る。

今月中にやります、と澁刺と言っていた人が、後日「今月中なんて言っていないよ、今月中なんてぜったいに無理ですもん」と言い出す。

遺産分与は要らないよ、最後まで世話してくれたあなたが持っていてねと言っていた人が、後日、きゅうに代理人を立てて遺産分与を請求してくる。

「わたしが告白したら、あなたは『いいよ』って言ってくれたじゃない。あれをどうするつもりなの？」

しかし、彼は告白されていないし、もちろん「いいよ」と答えてもいない。

なんだこれは、頭がおかしくなったのだろうか。

これらのことは、^^「連続性がない」vvと説明される。

きのう言ったことと、きょうのことが連続しておらず、先月の価値観と、今月の価値観が連続していない。

当人としては、どうやらふざけているのではないらしく、また当人の自覚としては、悪意はないということらしい。

金曜日の夜、男性とお酒を飲み、仕事のストレスが溜まっていたせいで、勢いがついて深酒になった。

「ねえいいじゃん、しようよ。連れてって。何、わたしそんなに魅力ないの？ それともあなたがそんなにいくじなしなの？あはは」

と男にしなだれかかる。

いいのかよ、と男が数度確かめるが、彼女は、

「え、だってわたし、そんなにお堅いタイプじゃないし。そりゃ、誰とでもってわけではないけどさ……これまでもこういうこと経験あるし、

そんなのいちいち何とも思わないよ。ね、行こ」

と笑って言う。

それが後日になって、メールが着信し、

「あのさ、あれってどういうつもりでわたしのこと抱いたの？ いま考えてフツーにありえないんだけど」

彼が返しあぐねていると、

「これって犯罪じゃない？ っていうか、それ以前にマジで許せないんだけど」

と連投。

それで彼からは、

「返信遅くなってごめん。なんかすごい怒っている？」

「当たり前でしょ」

「なんで怒っているの」

「なんでとか……自覚ないわけ？ そこがマジでいちばんキモい。ちょっとホントにマジで無理なんだけど」

そして彼は、彼女と面談し、

「あれはお前のほうからしつこく誘ってきて、しかもいくじなしとか言っただけからじゃないか」

「わたしそんなこと言ってない。ぜったい言ってません。そんなこと、わたしが、言うわけあるかボケ！ マジで腹立つ、お前殺すぞ！」

彼女は何やら激怒し、泣き出す。

怒りに震え、テーブルの上にあるものを投げつけたいが、それをなんとか堪えている。

何が起きているのか。

ここで起きていることについて、理性的に捉えようという試みは、無意味ではないが、ほとんどの場合で徒労に終わる。

何が起きているのかというより、ただ連続性がないのだ。

金曜日の夜にイケイケでOKだったものが、土曜日に「あーあ、やっちゃった、まあしょうがないかあ。すごい酔っていたしな」となり、日曜日に「なんかマジでブルーかも。後悔だわ。なんか吐きそう」となり、月曜日に「そりゃわたしもスキ見せたのが悪いけれど、それにしても腹立つわ」になり、火曜日に「わかった、これふつうに犯罪だわ」となる。こうしてまさに「連続性がない」のだが、このことは何も特殊なことではなく、むしろこれは色（しき）の特徴がオーソドックスに出たものと見てよい。

色（しき）というのは、まさに「色々」変わるのだ。

色(しき)は、自我であり観測だが、観測というのはパラメーターを観測するのだ。

^^パラメーターがきのうと今日とで同じ数値という保証はないvv。

株式相場はどのようなものであるか。昨日には堅牢だった銘柄も、一晩寝て起きたら、朝にはもう数値が変わっていて当たり前ではないか？

たとえば、未成年が煙草を吸ったという報道を聞きつけて、それにについて、

「そんなの大騒ぎすることじゃないでしょ。誰でも経験あるし、背伸びしたがるというか、そういうことをしたがるお年頃じゃない。だから、指導室に呼び出されて正座させられて終わり、でいいでしょ。わたしの同級生なんかその年齢でフツーに大麻吸っているコいたつての笑」

と言う。

つまり、赦す向き、公序良俗のパラメーターが勝つ。

けれども、ヒマなメディアがそのことをねちねち攻撃していると、それに賛同するヒマな人たちも集って来、炎上がつづくので、自己保身からパラメーターが変動してくる。

つまり、処罰する向き、maniacな正義のパラメーターが勝ち始める。

「退学かぁ。未来ある若者としては、将来を失わせるのはかわいそうだけど、逆に当人たちにとっては本当の勉強になったかも。部活の試合を控えてのことだったし、公立で税金も使っているわけだから、やっぱ立場をわきまえないといけないってことなんだよね。けっきょく自業自得なんだよ」

このことは、傍で聞いているわれわれが、特にこうして変遷を抽出して捉えると、違和感がすさまじいのだが、当人においてはこの変遷——あるいは豹変——はまったく違和感がない。

先週の金曜日に言っていたことと、今週の火曜日に言っていることが、まるで逆で連続性がないということに、当人は、

「いやだから、それはさ」

と言ひ、当人としてはまったく違和感がないのだ。

なぜ違和感がないのかについては、次のように知る必要がある。

^^そもそも金曜日に彼女が言っていたことは、彼女の「話」ではないvvののだ。

金曜日に彼女の口から出たものが「話」だとしたら、それが火曜日になって書き換えられているのはおかしい。

それは「話」としてはありえない。

先週の浦島太郎は竜宮城に行ったのに、今週の浦島太郎は「竜宮城はけっこうです」と辞退していたらさすがにそれはおかしい。

けれどもそうではなく、彼女が金曜日に口にしたのは「観測結果の発表」なのだ。それは気象予報士が金曜日の大気の状態について観測結果を発表するということと大差ない。気象予報士は火曜日にはまた火曜日の大気の状態について観測結果を発表するだろう。

これについて、困ったことに、^^Aさんの言うことをどれだけ聞いても意味がないvvという単純なことが言えてしまう。

われわれは、「話を聞いている」つもりでいる。

Aさんの、仕事にかかわる考え方、これからやっていきたいこと、元カレと別れた理由、俳優の○○がなぜ好きか、「美容にはお金をかけるべき」という主張や、将来こどもは何人欲しいというようなこと、「恋愛は遊びであってでもいいけど、結婚は、やっぱそれ以上のもの？ 逆にそれは、女としては夢なんだと思う。夢みたい、じゃなくて」、「一見面倒でも、こういう人間関係って、やっぱりやっていかなきゃいけないんだと思う」「あの人は、横暴で、他人を振り回すところあるけど、やっぱマイノリティの強さがすごくあるから、わたし根っこであの人のことリスペクトしてんだよね」「これからもっとさあ、こういう小旅行増やしていこうよ。なんかすごい楽しい。休暇って、単純にこういうので良かったんだって、

なんかすごい癒される」「わたしが△△くんと、どうにかなるって？ いやあ、さすがにそれはないよ笑。わたしああいうタイプ、嫌いじゃないし、じつさい金曜日に飲みに行こうって話にもなっているんだけど、なんかああ見えて彼って、そういう関係になったらすごい粘着されそうじゃん笑？ だからわたしはパス。少なくともいま、そういうことに入り込むつもりがわたしにまったくくないから」……こうしたものをすべて、われわれはAさんの話を聞いていると捉えているのだが、これらはじつは「話」ではないのだ。

色（しき）というのは、その字義のとおり、そのときそのときで「色々」変わる。

Aさんは、そのときごとの自分の色（しき）を観測し、その観測結果を発表しているだけなので、その瞬間のパラメーターに特に用事がないかざりは、われわれはAさんの言うことを聞いていてもしょうがないのだ。（たとえば、「今」何が食べたい？ というようなことについては、そのときかぎりの観測でかまわない。ただしレストランに着くまでの十五分間のうちその色が変わってしまうことはいくらでもありうる）

あなたが数度にわたりこのようなものを目撃、体験していくと、あなたには次第に「人」というものが何なのかわからなくなってくる。

これまで思っていた「人」というものが、解体され、まるでそんなもの初めから無かったかのように、失われていくように感じられるのだ。

そしてこのことは、最大の危機としては、自分自身のこととして降りかかってくる。

きのうと今日とに連続性がない。

自分でわかってしまう。

先週金曜日に言っていたことと、今週火曜日に言っていることが違う。

しかも、全力で、確信をもって、燃え立つように違う。

その焼けつきの中で、自分自身が不審になってくるのだ。

なんでわたし、先週と今週とで、言っていることがコロコロ変わるんだろう。

（ひょっとして、いま言っているこのことも、来週にはコロッと変わってしまうの？）

あなたは首を横に振り、強く、（そんなことない。あるわけない）

と思念する。

来週の自分が、今週の自分とまったく接続していないなんて。

今週のわたしと来週のわたしに連続性がないなんて。

それじゃあまるで、そこにいるのは、ただの一匹のモンスターじゃない。

否定しようと思っているその想念に対し、なぜか自分の体内から、

「グゲゲゲツ、あははっ」

という狂った笑い声が起こってくる。

何これ、と一瞬青ざめて思う。

けれどもそれを上回り、笑いの衝動が起り、そのドーパミン量が勝る。

「あははっ、もう何でもいいや」

ほんの僅か、

（わたし、どうしちゃったんだろう）

という危機と不安の想いもある。

けれどももう、抵抗できる段階は過ぎてしまっている。

自分が何かに乗っ取られていく。

色（しき）だ。

色（しき）に自分が乗っ取られていく。

ただただ、量的に強烈な何かが、自分にのしかかってきて、その「量」じたいが、

「わたし」

と言いつ張りだす。

ふと、これの支配を受容したら、もう何もかもが終わりなのじゃないかという直観も走る。

けれどもそのまま、何の引っかけりもなく、スムーズにその乗っ取りは完了する。

「帰って推しの動画でも観ようつと」

両腕と両足を振り回し、あなたは自覚的には上機嫌で、さらには一種のハイで、帰っていくことになる。

それ以降、あなたはもう「話」というものと、根本的な縁がなくなる。

「浦島太郎」

と言われると、

「あ、今日中に済ませなきゃいけない振り込みがあつたんだつた」

と思ひ出す。

でもよくよく考えると、その振り込みは、明日でもよかったし、明後日でもよかった。

「で、なんだっけ。浦島太郎笑、だっけ」

何であれあなたはごきげんだ。

ところがしばらくして、窓の外に小雨が降り出す。

「え、雨じゃん。えー、雨、いますごくイヤなんだけど。夕方に買い物に行こうと思つていたのに」

はあ、とため息をつく。

ため息と共に、

「なんかもう、いろいろ無理になった」

深く暗鬱になり、ごきげんだつたあなたはどこかに消えた。

「あ、冷蔵庫にアイスクリームあるよ」

と言われて、アイスクリームはすなおにもらう。

食べて見ると、

「ひさしぶりにおいしい。こんなにおいしかったっけ」

となる。

食べるほどに、

「あー、やっぱアイスだ笑。アイス食べないと」

よくわからないことを言つて笑いだす。

あなたはごきげんになり、暗鬱なあなたはどこかへ消えた。

これぐらい、連続性がなくなっていく。

ある色からある色へと、常に移り変わっていく。

このときまさに、あなたは「パラメーター」なのであり、完全に、話という存在ではなくなった。

それでも人は、生きものとして、なるべくその色(しき)の変転が、快適になるように、コツを見つけていき、慣れてもいつて、その中を生きていくようになる。

それで振り返ると、

「色々あつたなあ」

と想う。

きょうも世の中が、人々が、メディアが、SNSが、世論が、「色々」なことを言う。

先週と連続していない人気を言い、先月と連続していない価値観を言い、昨年と連続していない糾弾を表明する。

人は、都度にそれに順応していくほうが快適だということを、生きものとして覚える。

それがわれわれの生の「色々」だ。

ショート動画をフリックしていくと、次々に「色々」出てくるだろう。

その都度に塗り替えられていく。

順応が速くなっていく。

色々↓色々↓色々……

色々あったのだろうか？

色々あったというのは、その意味においてはたしかにあったのかもしれないが、話としてはどうだったかという、やはり「そんな話はなかった」のかもしれない。

わたしは、かれこれ二十年以上、こうした書き話しをつづけている。

そして、二十年来、けっきょくひとつの話をずーっとつづけている。

その話は、こうして書き話しを始める前からあったものだ。

これは「わたし」だ。

わたしという存在はひとつの話なのであって、話は体の真ん中を通り、始末の果てまでずっとひとつにつづいている。

## 不連続性と自己愛

浦島太郎の話に「快適さ」の要素はない。

それは「話」であって、ソファやリクライニングシートではないのだから、快適さということは項目じたいに入らない。

いちおう、悪ガキどもからカメを助けるといふ点において、善行あるいは義侠心に「快」を見つけることは可能かもしれないが、かといってそれが快かどうかは浦島太郎の主題を為す要素ではないだろう。

そもそも、快・不快はパラメーターであって、パラメーターは話ではないのだから、浦島太郎という「話」の存在に、快・不快のパラメーターは参与していない。

色（しき）の不連続性が何によって起こっているかという、単純にこの快・不快のパラメーターによって起こっている。

先の章で述べた「損得」というのも、快・不快への最大のインパクト要素と捉えてよい。

人は自分にとって快のほうを選ぶ。

このことは、単純に自己愛と呼ばれる。

たとえばここで、みんなで寄ってたかってAさんに、

「若いし、才能あるんだからさあ」

と言ひ、Aさんをチャホヤしたとしよう。

チャホヤされることは、Aさんにとって快だ。

そしてつづけて、寄ってたかって、

「若いし才能あるんだから、何も恐れず、怯まず、ガンガンやっていこうよ！ それでこそ、Aちゃんらしいってもんだよ」

と言おう。

すると、

「ありがとうございます、ホントそうです！ わたしガンガンやっていきます」

と、盛り上がるかもしれない。

そのことは、現代的に卑近に言えば、いちおう「アツい展開」に分類されるのかもしれない。

しかし三日後、こんどはBさんのことをチャホヤしてみよう。

Bさんがチャホヤされることは、Aさんに無関係だから、Aさんにとっては快ではない。

そこで、Bさんをチャホヤしながら、Aさんに、

「ガンガンやっていこうよ！」

と、三日前と同じことを言おう。

するとAさんはどう応えるか。

Aさんは、

「ガンガン、ですか笑」

と茶化し、侮辱的に答えるだろう。

三日前にAさんが応じていた態度や言動とはすでに異なってしまうている。

なぜAさんは三日前と連続性を持っていないのだろうか。

それは、もともとからAさんが「ガンガンやっていく」というような「話」は、成り立っていなかったからだ。

Aさんがガンガンやっていくというような「話」はなく、ただそのときそういうパラメーターの按配で、そういう色だった。

みんなでそういうふうにチャホヤしたのだ。

その後、あてがわれる量が増減し、パラメーターが力動したら、色は変わるので、三日後に、三日前の色はもう継続していない。

ただそれだけのことだ。

そこでみんなでAさんをチャホヤしつづければ、Aさんの「ガンガンやっていく」は継続可能じゃないのかとも思えるのだが、残念ながら薬物依存症者からよく知られているように、そうしたことの「快」あるいは「快感」には耐性がついてきてしまうものだ。

常にきのうより今日のチャホヤのほうが大量でないと、それは効かなくなってしまう。

三日前のそれは気持ち良く、快感だったが、三日後に同じものを投与されても、

「うーん、こないだほどじゃない」

となる。

気持ち良さが、こないだほどじゃないなら、もう「アツイ展開」ではなくなってしまう。

このようにして、人の色（しき）は「快」「快感」のほうに従うのだが、

この現象を「自己愛」という。

わかりやすさのために、この自己愛という現象に、「オホホホ」という笑い声をくつつけてみる。

たとえば未成年者が喫煙をしたという報道を聞いたとき、Xさんは次のようなコメントを発したとする。

「そんな、背伸びをしたがるお年頃のこと、いちいち目くじらを立てて騒ぎ立てることはありません。指導室に呼び出して、正座でもさせて懲らしめればそれで十分ですわ。若者たち、どうぞ恥をかかされながら、それでも青春の中を突き進んでください。オホホホ」

けれどもここで思いがけず、ヒマナ人たちによる本件の炎上は粘つく、メディアも他にネタがなかったので、本件をしつこくつき続けたとする。

ヒマナ人たちにより視聴率は上がり、視聴率があがるということは、その報道がさらに広まるということだ。

すると炎上の火の手は、わずかにこちらにも及んできかねない気配になる。

Xさんのコメントは、

「世間はこうしたことに厳しくなっているんですね」

というふうに変化し、ここにオホホホは消える。

そして翌週には、

「退学処分というのは、いささか酷のように思えますけれど、彼らにとってはなによりも生身の勉強、本当の勉強になったと思います。彼らのことを、知れば知るほど、どうやら悪質で……彼らは公立学校の生徒で、世の中にお世話になりながら勉強させてもらっている身なのだという、立場を弁えねばなりませんでした。とはいえこうして誰しも、自業自得の中から学んでいくものかもしれませんね。頑張れ若者たち！ オホホホ」

このようにして、Xさんの思考や発言には連続性がないが、それはそもそも、ここにあるのがXさんの「話」ではないということだ。

Xさんの、そのときごとの色でしかない。

あるいは他の例。

「握手券をつけて、CDの売上をかさ増ししようだなんて、いやしくもアーティストにあるまじきことですわ。そんな悪だくみをして、いつときの人気を得たとしても、スターダムには登れませんし、文化の殿堂には入れさせてもらえないのです。早くそのやりようを取り下げて、みずからの足で一歩ずつ進まないと、やがてとつぜんハシゴを外されて、とんでもないことになりますわよ。オホホホホ」

これが二年後には、

「知れば知るほど、みな一所懸命で、純粋な子たちでした。まるで身をなげうつように、これまでの垣根を取り払って、真に人々に必要とされる表現者となったのですね。そりゃあもちろん、初めは誰も知らないそのやり方に違和感があつて、ほうぼうから悪しざまに言われることもありましたけれど。それでも、彼女たちは彼女たちのやり方で、ついにその栄光の舞台に駆けあがったのです。あっぱれ！ いまや国民的スターといつて、彼女らのことを思わない人はいないでしょう。オホホホホ」となる。

このように、Xさんの思考や発言、また意見に連続性がないのは、もともとそこにXさんの話があるわけではなく、Xさんがただ自分の快、ハハただ「オホつく」ということに向かつて挙動しているだけVVだからだ。表面上、何が正論かを手探りするような、しどろもどろの手続きがあるけれども、その手探り作業のゴールは正論や何かの話に到達することではなく、ただ自分が「オホホホホ」となることなのだ。

オホホホホと、自分が快、快感、快適になることに向かつている。この指向の原理を自己愛という。

この自己愛について、当人は違和感がないので、「世の中を生きていくというのは、そういうものですね」と、むしろニツコリほほえみ、一種の自負さえ見せるかもしれない。

それについてはわたしとしても、「世の中」を生きていくというのはたしかにそうかもしれないと、同意するところがある。

けれどもわたし自身については、そうでありたくないのだ。

わたしは、わたしという「話」を生きたいのであって、わたしを快適にするために生きたくはない。

自分の「快」を増大するのがわたしの生です、というようなことになりたくないのだ。

わたしの体の真ん中は、いまも、うらびれた泥の上であわれに眠ることを求めている。

風邪さえひかなきゃ別にそれでいいんだけどね。

（風邪をひくと文章が書けなくなってしまう）

自己愛は、自分の快・快感・快適を志向する。

だからもし、わたしがわたしという「話」を生きたいということを、妨害・阻害・破壊するものがあるとしたら、それはわたしの自己愛だろう。

もちろんあなたでも同様で、あなたの話を破壊するものがあるとしたら、それはあなたの自己愛だ。

あなたの「話」とあなたの自己愛は、相互に侮辱的にはたらく。

陽の当たるとき、誰かを物陰に追いやり、自分がその陽だまりに立つ。

それによって、自分は快で、物陰に追いやられた者を見て「オホホホホ」となる。

次に、天気が変わり、風当たりが強くなってくると、誰かを物陰から追い出して、こんどは自分がその物陰に隠れる。

それによって、自分は快で、風当たりにさらされている者を見て「オホホホホ」となる。



このようにして、立ち回りが発生し、当人としては「色々」あったと感慨されるが、じつさいにはそこに「非連続性」が確かめられるただけだ。

ひとつの話でありつづけられない。

多くの人が、十年前の自分とは違う意見の持ち主になっており、五年前と違う感性の者になっており、二年前に自分で主張したことはすっかり背反する当人になっており、去年支持したものは「オワコン」になって完全に忘れ去っている。先月見つけた自分の生き方はすっかり消え去っているし、先週のやる気や戒めは今週に継続されているわけもなく、ついには、昨夜誰かに感情的に言いつけたことを今朝になるともう忘れていたということになってくるのだ。「そんなの、三つ前のショート動画のことなんか誰も覚えていないよ」ということと同様に。

陽当たりや風向きの変わるごとに自己愛は節操もなく応じて立ち位置を変える。立ち回りをする。そのときごとに快を求め、そのときごとに感情たっぷりにそれを「絶対正しい」なんて思ったのだ。

このようにして、われわれは自己愛によって、非連続性の当事者となる。

## 覚 関係・関わりと、つながりの錯

連続性がないなら、きのうと今日はバラバラで、すべてはコナゴナのはずだ。

けれどもさしあたり実感的には、そのように何もかもが砕け散っているというようなことはなく、われわれには平常の日々が続いている。

また、そもそも「分かる」というのも、分離・分割・分解なのだから、そちらでだって万事がバラバラのコナゴナになるはずだ。

父と子は分離し、母と娘は分解され、バラバラのコナゴナになるはず。けれどもわれわれの日々と暮らしに、そのような生々しい「バラバラ」などは、さしあたり見当たってこない。

きのうに引き続き、母親と長女は、きょうも母親と長女のままでし、学校の同級生は同級生のまま、会社の同僚も会社の同僚のままで。会社のチームもまとまりとして機能している。飲み友達は飲み友達のまま、いつも飲みに行く居酒屋もいつもどおりだし、居酒屋のグループ店舗は隣駅にもある。

デイズニールランドが好きな彼女は、きょうもあいかわらずのデイズニールフリークだし、きのうテレビ番組で見たコンビのお笑い芸人は、きょうも勿論同じコンビでテレビ番組に出演している。

日々はちゃんと連続しているし、人々は分離されていないのではないのか？

こうした現象を、一般に「関係」あるいは「関わり」と言う。

母親と長女は、親子、血筋、また家族として人間関係を持っており、そうした人間関係にあることが、われわれの感覚として「つながっている」と感じられる。この場合は親子のつながり、血筋のつながり、家族のつながりだ。

だから、母親と長女は、一晩眠って翌朝「おはよう」とあいさつしても、きのうと同じ母親と長女のままでと信じられている。

同級生は、同じ学校の生徒で、同じクラスに所属しているという関係にある。会社の同僚もそうで、同じ会社に所属し、同じフロアで勤務しているというような関係の人のことを、だいたいは「同僚」という。

きのうも今日も、そうした「関係」は同じで、続いている、継続されているとわれわれは信じている。

一方、会社のビルの、いつものフロアに、なぜかウサギがずっと跳ねまわって暮らしていたとしても、ウサギは所属が違うので、「同僚」という関係にはならないだろう。

ここで、じゃああなたはそのウサギと「つながっていない」のかと言われると、何だかよくわからなくなる。

つながっていないと言われると何となくさびしいが、つながっているのかと言われると、何もつながっているわけではないので、

「まあ、無関係といえば、無関係ですね」

ということになるだろう。

一方ここで、

「あ、おれは、あのウサギにちよくちよくエサやっているから、無関係ってことはないと思うな」

ということもありうる。

その場合、ちよくちよくエサをやっているという「関係」があるということになるし、また、そのようにしてウサギと「関わっている」という言い方もされる。

すると、彼とそのウサギは、何かしら「つながっている」というふうに、われわれには漠然と信じられる。

一般にはたとえば、こうしてわたしが書き、あなたが読んでいるのだから、ここにも「書き手」「読み手」という関係があるのだと言われる。それはときに「仕手」「受け手」と言われたり、あるいは「供給」と「需要」と言われたりする。また、「生産者」と「消費者」などと言われることもあり、「著者」と「読者」などと言われることもある。

それらすべては、関係・関わりを指している。その関係・関わりへの信奉は、日々の蓄積によってわれわれに慣れと刷り込みをもたらし、

「同僚とは、毎日会って、毎日一緒に仕事しているんだから、そりゃあつながりがあるよ」

というふうにわれわれに信じさせてくるのだが、そうした「つながり」は本当にはどのように実在しているのだろうか、それとも本当には存在していないのだろうか、考えてみればよくわからないものだ。

いま、あなたは読み手であって、わたしは読み手であるあなたに対して書き手として「関わっている」というふうに、言い張るなら言い張ることはできるだろうが、ここでわたしとあなたが「つながっている！」のかというと……それは果たしてどうなのだろうか。

あなたがこの書物を閉じて、その後二度と思い出さないということはいくらでもありうるのであって、それをもって「それきり」になるのであれば、あなたとわたしはやはり「つながってはいない」と捉えるべきなのではないだろうか。

しかし一方では、何らのつながりもない奴の書き話を、こんなに長々と読み聞いているのだとすると、それはそれでおかしいことだとも思える。何らのつながりもないのだとしたら、そんな分離的な奴の「話」がこうまで聞こえてくる・聞き取られてくるというのもやはりおかしいことだ。

われわれが、こうした「関係・関わり」を、習慣のまま、  
「そういう「つながり」でしょ」

と捉えることには、やはり大きなエラーが含まれてしまう。

というのは、字義として、「関」という字はむしろ閉ざされ・分け隔てられているものを意味するからだ。

「関」といって、たとえば歴史的に有名な「箱根の関」と言えば、言わずもがな江戸幕府が箱根にもうけた厳しい関所のことを意味する。「入り鉄砲、出女」という当時の慣用語がいまも知られているように、幕府は箱根の関所で鉄砲の流入と大名の奥方の流出を取り締まった。

このとき、東海道は箱根の関所で「隔てられている」ということが明らかだ。もし、日本の西南と江戸とを「つながった」ままにしておきたいなら、東海道に関所など設けずそのままにしておけばいいのだが、江戸幕府は西南雄藩を信頼していなかったため、そこにフィルタリングのために関所を設けた。仮に江戸に鉄砲を持ち込もうとする者たちがいたら、彼らにとっては箱根の関がまさに「関門」になったわけだ。

あるいはさらに身近に、肘関節や膝関節のことを考えてみる。肘関節は、前腕と上腕の結節点にあり、前腕と上腕という二つの節（ふし）がそこで関わっているのも、まさに「関節」と言われるのだが、それにしても前腕と上腕、尺骨と上腕骨は「つながって」いるだろうか。もし二本の骨が「つながって」いたら、われわれの腕は動かなくなってしまうだろう。

大腿骨と脛骨も同様で、じつはそのふたつの骨が本当には「つながっていない」「分かれたれている」からこそ、われわれはその関節によって膝を曲げる・動かすことができている。

よって、「関係」「関わり」を、「つながっている」の意で捉えるのは、単純に誤りなのだ。おどろいたことに、たとえば「人間関係」という語は、その関わりによって人間たちがむしろ「隔てられている」ということを意味している。

本来は「隔てられている」という意味の「関」だが、それでも「関わっている」ということは、「無関係ではない」ということだから、どうしてもやはり何かしら「つながっている」と感じられてくる。このことには大きな誤解があり、それ以上に大きな思い入れと、さらには大きな「仕組み」があるので、このことは確かに解除できるものではないのだが、その前提で申し上げるなら、「関係」においてやはり人はつながっているのではなく、人はそれに「呪縛」されているのだ。

本稿内で、「呪」の本質をこまかに解き明かしていこうとすることは、あまりに本旨から逸脱していて妥当ではない。もし、投げやりなほど端

的に言うのであれば、人間における呪とは、人間道の血に宿する因業のうち「識」が塗り重ねられることにより、その因業に縛りつけられるということを指すのだ、ということになる。この呪は人間道のそれであって、たとえば畜生道の因業を用いた犬神などとはやり方や生じ方が異なる（このとき畜生道の因業は「取」。あるいは「むしばみ」を濃縮する蟲毒などの呪もやり方や生じ方が異なる）。

このとおり、こちらの話は逸脱になるし、また、うかつに呪術のやり方などに肩入れなどしないほうがよいのだ。呪いは、無い者にとっては無いのであり、単なる趣味からその術を「ある」とはしないほうがよい。人が呪術から力を得ようとするとき、その理由の第一は「祝福が得られないから」であって、呪術は常に祝福の代用なのだ。よって呪術を「ある」と期待するということは、どだい祝福を「無い」と否定することと同時に成り立つ。そのような不穏なことは、たとえ都市伝説してみた趣味のこととしても推奨できる気がしないので、ここでは単純に、説明なしに「呪縛」という言い方をそのまま通していく。

人は関係・関わりでつながっているのではなく、「関」で隔てられているところを、呪縛で括りつけられているのだ。

たとえばここに、百人の中年男性を集め、いっせいにあなたに「関心」を向けさせることにしてみよう。

あなたはアイドルでもなく芸能人でもなく、一般人で、週末の休日、近所にある蕎麦屋に訪れ、ざるそばを食べることにした。そこは以前から気になっていた、立派な店構えの蕎麦屋で、佇まいの気品からやや気後れはするものの、おいしいものが食べられるのではないかとあなたは期待していたのだ。あなたはざるそばを一枚注文し、やがてあなたのテーブルには、冷水でよく引き締められたざるそばがやってきた。あなたはそばを箸でつまみあげ、半分ほどをつゆに浸し、いざすすりあげようとするのだ。

その一部始終を、百人の中年男性がジッと見つめ続ける。ありったけの関心を向けて。何人かは望遠レンズであなたの手元・口元を撮影しているもよい。

それらのことは、物理的にはあなたに作用しないはずだ。あなたにかかる力は一ミリグラムさえ観測されない。けれども彼らの野放図な「関心」が、あなたに何の呪縛も与えないとはまるで言えないだろう。あなたはまるで、

「わたしの自由を侵害されている」

というふうに感じるはずだ。

あなたは、

「関わってこないでください！ あなたたちとわたしは、まったく無関係のはずです」

と怒るだろう。

もしあなたの言うように、ギラついた百人の彼らが「無関係」なら、あなたは何も気にせず好きに蕎麦をすすればよいのだ、ということになる。たとえば窓の外にスズメが四羽いたとして、そのスズメたちはあなたにまったく「無関係」なので、あなたは何も気にせず蕎麦をすすることができるだろう。それと同じように、百人の中年男性たちのことも、「何も気にせず」にいればいい。彼らと何ら「つながって」いるわけではないのだから、あなたには何の作用もかかってこないはずだ。

けれども、それはただの理屈であって、じっさいには中年男性たちから向けられる、血眼（ちまなこ）になって濃厚な「関心」とその視線は、あなたにとって粘っこく、重苦しく、「まとわりつく何か」と感じられ、そこには不衛生さと生臭ささえ錯覚されてくる。とても食事などできる状況ではない。まして本来は清らかに引き締められたはずの冷たい蕎麦など、これでは台無しの極みだ。

その中に、ひとりだけ、あなたの食事にもまったく関心を向けない者が

いる。それは誰だろう、あなた自身だ。あなたはあなたが蕎麦を食べるとき、まさか自分の手元や口元に「関心」は向けない。

なぜあなた自身はそこに関心を向けないかというと、あなたはあなた自身と「隔てられていない」からだ。あなたはあなた自身に関所を設けるというようなわけのわからないことはしない。だから字義として「関心」は向けようがない。

先ほどから邪悪なほどに感じられている「関心おじさん」たちは、ちょうど関所の向こうから、あなたをジッと見ているのだ。それを「関心」と言う。彼らは関所の向こうにいますので、あなたに直接の危害を加えてくるわけではない。そこはちゃんと隔たれている。彼らはあくまで、「関心」を向けるということのみに留まりつづけている。

けれども、隔たれていたとしても、通常は「呪縛」が掛かるのだ。これが「関」という現象だ。

「関」によって、われわれはむしろ隔てられているのであり、その隔絶を超えて「呪縛」という現象に入り込まれるので、われわれはそれを「つながっている」と感じてしまう。

翌日、あなたはいつもどおりオフィスに出社し、しばらく作業しているうち、ふとひとつの違和感に気づいた。

「あれ？ あのコはどこに行っただの」

いつもフロアのどこかで跳ねているウサギが、きょうはいない。

このとき、百人の「関心おじさん」たちと比べて、あのウサギは本当にあなたと「つながっていないかった」のだろうか？

われわれは日常、様々な「関心」を、そのまま様々な「つながり」だと思っていて、その思い込みには決定的なエラーが含まれている。

本当は、「関心」はむしろ「隔たり」なのだ。

われわれがよく知っている、人間関係その他の「関心」「関わり」は、色（しき）であって話ではない。

ただ、それは色（しき）なので、われわれにとってよく分かり、強く感じられる。

強く感じるからこそ、われわれはそれを確信さえする。

われわれは、呪縛される量が多いほど、その「つながり」が深いのだというふうに感じ、そう誤解し、そう確信するのだ。

それで、誤ったまま、何かしらの「つながり」を求め、何かに関わろうとするようになり、誰かと関係を持つとし、誰かに関心を向け、また自分も誰かに関心を向けてほしいと欲するようになる。

その結果、みずから呪縛を重ね、やがてそのことを「呪われた地獄」のように感じるようになるのだ。

蕎麦屋で関心おじさんに包囲されたあなたのようにだ。

「関係」「関わり」「関心」、みずから欲したそれなのに、なぜこんなに地獄なのか？

あなたが求めたのは何かしらの「つながり」だったが、あなたが呼び込んだそれはつながりではなく隔たりで、つながりと思えたものは呪縛だったからだ。呪縛にがんじがらめにされたあなたは、何のつながりを得たわけでもないで孤独なまま、ただその呪縛の重さに押しつぶされ、すべての精神運動を抑制されていってしまうのだけれども、そうはいっても何らの関係呪縛にも頼らずに宇宙の真ん中にただひとり立てるかという、そんなおっかないことへの勇氣と器量も持たないので、まあ、「そんなもんよ」

と気軽にふてぶてしく、凡人としてのしたたかな歩を進めていかなければならないのだった。

じっさいそんなもんだ。

## つながりという、まったく不明のもの

わかりやすさのために「関係者」という言い方を用いよう。「当店をご利用の関係者以外、立ち入りを禁じます」というような看板はどこにもある。

「あなた」はじつは、万事に対する「関係者」のあなたと、そうではない「話」のあなたという、ふたつの事象として現れる。

それぞれは別のあなたなのだ。

そして、関係者のあなたは、あなた自身にとってこれ以上なく「分かる」が、関係者ではないあなた、「話」のあなたは、あなたにとってこれ以上なく「分からない」のだ。

本当に分からない。

どれだけスピリチュアルふうにしても無駄だ、本当に分からない。

この文章を読んでいる大半の人は、じっさいのわたしに会ったこともなければ、じっさいのわたしを見たこともない、その声も聞いたことがない、完全な非関係者のはずだ。

わたしにはじっさいに接触したことがないその人は、仮にわたしと接触したとして、その接触が重なったのべ何日間、わたしのことを「つながりのある人」とするのだろうか。

三年近くが経ち、千日ほど経ってからなのか、それとも三ヶ月と少し、百日が経ってからなのか。

あるいは三日間か、はたまた三時間でじゅうぶんか。

三分、あるいは三秒。

それよりも短ければ、それはもう「接触した瞬間」ということになりそうだし、それよりも短くしようとする、もう「接触する以前から」という、時間軸と因果律を逆行したものになってしまふ。

仮にあなたとわたしが「つながり」のある人になる場合、「いつ、どのようなパラメーターが閾値を超えて、ついにその「つながり」のある人というやつになるのだろう。

あなたが中学生や高校生なら、担任の教師に毎日のように会うだろうし、あなたが大学生なら、週に三回もアルバイト先の店長に会うかもしれない。

あなたが社会人なら、週に五回も課長に会い、メールやスラックなどで多くの文面や指示を受け取っているだろう。

それで、あなたと課長は日々、「つながり」を増しているのだろうか。週に五回、濃厚な接触をしているのだから、他の誰かよりも「つながり」の進行は速そうなものだ。仮にその「つながり」というやつが単純接触原理で比例的に進むものなら、あなたは三年間も勤務すれば課長との「つながり」を他になく深いものにすることになるだろう。あなたと課長は同じ会社の、同じ業務の「関係者」だ。

けれどもじつさいには、何年経っても、  
「あの課長、いつも何言っているか、わっかんないんだよね」  
ということがありうる。

あるいは、若いふたりが想い合って交際したとして、それが半年ほど経って「別れましょう」ということになったとき、お互いに、  
「あの人のこと最後まで、けっきょくよくわからなかった」  
ということがありうる。

あなたは、手元に余分なサンドイッチがあったとして、それを「つながり」のない人に分け与え、一緒に食べるといふようなことを望まないはずだ。

それはもちろん、あなたがサンドイッチをケチっているわけではなく、ただつながりのない人に対し、そうしてつながりのあるふうのことをするのが厭だ、気色悪いということにすぎない。

これまで何年も一緒に仕事をしてきている課長がいたとして、それでも自分のサンドイッチを分け与え、一緒にベンチに座って食べるかという、

「それはすぐイヤです笑」

という人が多いはずだ。

この、誰にとつてもわかりやすいことが、なぜか、よくよく考えるとまったくわからないのだ。

極端な話、たとえばあなたの目の前に、古代ギリシャから青年がひとりレポートしてきたとして、あなたはそのことに「うわあっ」とおどろくにせよ、その青年にサンドイッチを分け与え、いつときベンチに並んで食事を共にしようということには、そこまで「イヤです」とは感じない。

おかしい話だ、「つながり」の有無でいえば、古代ギリシャからレポートしてきた青年ほど、あなたとつながりのない人はいない。これほど互いに「関係者」から遠いこともないだろう。

にもかかわらず、あなたはきつと、数年来の課長と隣り合ってサンドイッチを食べるよりは、その古代ギリシャの青年と隣り合ってサンドイッチを食べるほうが、

「ぜんぜんイヤじゃないです」

なのだ。

あるいは、会社の課長と隣り合ってサンドイッチは、

「キツイですね笑」

ということでも、あなたの目の前に学生時代の先輩が現れ、かつてのままでの調子で、

「おうお前、こんなとこで何やってんだ」

と言、あなたのサンドイッチを勝手に取り上げて勝手に食ったとして、あなたはやはり「わあつ」とおどろくにせよ、そうして隣でサンドイッチを食われるということは、まったく厭ではないし、それどころか、「そもそも厭とか、そういうこと考えなかったですね。そういう発想じたいが出て来ないです」

ということがあるかもしれない。

では、この先輩は、あなたに対して何かの「関係者」なのかというと、それはたしかに過去の部活動か何かの関係者ではあったはずだけれども、われわれはそのことをいちいち「関係者」というふうには捉えない。

あのときの先輩は、ただのあのときの先輩だ。

関係者なんて言いようをしたら、先輩は、

「あ？ 誰が関係者だ、てめー」

と言って笑うだろう。

われわれは、たとえばボン・ジョヴィの唄っているところの姿と、その声を受け取ると、数分で彼のことを「わたしの知っている人」にする。

だから若き日のボン・ジョヴィがやってきて、あなたのサンドイッチを勝手に取り、となりに座ってそれを食べたとしても、あなたはそれを厭とは感じないのだ。

だからといって、あなたとボン・ジョヴィに「つながり」があるのかというと、あなたとしては首をかしげるしかなくなる。

あなたはボン・ジョヴィと何の関係者でもない。

あなたは数年来の関係者である職場の課長のことのほうこそを、親しく・よく知っているはずだ。

あなたは個人的にボン・ジョヴィのことを「親しく」は知りようがないはず。

にもかかわらず、われわれはふと、このようにも思う。

わたしは、ボン・ジョヴィのことはなぜか、すでに「本質的」に知っている気がする。

一方で課長のことは、わずかも「本質的」には知らないし、また、そのように知ろうとはそもそも思わないのだ。

あの課長のことを別に「本質的」に知る必要なんかもないもの。

このように、少しでも追究してみると、われわれは、自分に起こる「つながり」の現象がどのようなものなのか、じつはさっぱりわかっていないのだ。

そして、わたしはこの学門の専門家として申し上げるが、この「つながり」という現象は、本当にまったくわからない。

絶望的にわからない。

わたしは専門家なので、そのときごとに何がどのように起こっているのかを視認できるが、あなたにそれを視認しろ・わかるようになれというの、あまりにも無理というか、率直に言って不可能なことだと思う。

一般の人が視認できるようなことではない。

要するに、わたしがあなたの前に現れたとき、ひょっとするとあなたはなぜか、わたしのことを「初めから知っている人」のように体験するかもしれないということ。

初対面で、会って数分なのに、なぜか「ずっと前から会っている」というように錯覚する。

はたしてそれは錯覚なのかどうか、そのときあなた自身が、

「錯覚ではないです」

と言い出しかねない。

われわれは関係・関わりを「つながり」だと思っているし、関心を向けることでつながりが強化されるものと思っている。

だが本当はそうではなく、関係・関わりはむしろ隔たりで、関心というのはその関所の向こうからジロジロ見つめるだけの、ただの性質の悪

興味だ。

相手のことを分かったというのも、分離・分割・分解であって、すべてはバラバラになっていく。

そしてそれでよいのだ。

バラバラになっていく、あるいはバラバラのままというのは、われわれの感覚でいうと「無関係」ということだ。

「玉子豆腐の入った椀」と、「表参道に植えられてある街路樹の本数」はまったく無関係でバラバラというように、無関係でバラバラでよいのだ。^^バラバラなのになぜかそれをつないでやまないものがあるVV。

無関係でバラバラなのに、なぜか「つながり」がある。

この人が勝手にサンドイッチをつまみあげて食べちゃったということが、善いことなのか悪いことなのか、そのことさえ分離しない。そのことさえ分らない。

悪いことをしても善いような、善いことも悪くやるような、知らなくとも知っているような、無関係も関係であってよいような、つながっていないこともつながっていてよいような、わけの分からない体験になる。

徹底的に「分らない」。

ひとつひとつにあるのはせいぜい、困るか・困らないかということぐらいだ。

つながりという現象は、それぐらい完全に不明のものだ。

ただしそれは、ファンタジックに起こるわけではなく、理のとおり、当然・必然のこととしてのみ起こる。

こんなものを直接体験するとしたら、そのことが混乱・パニックをもたらさないわけがない。

われわれはどうしても、そのつながりを「分かつう」とする。

だが語義としては、つながりとは「分かれたれていない」「分かっている」ということを指す。

このことに深入りしすぎると、先に述べたとおり、本当に精神を損傷することがある。

一般の感覚や一般の知性で取り扱えるしろものではないのだ。

とりあえず誤りのないこととして言いうるのは、バラバラのものを悪しとして、それをつながらせようとする発想と行為は、われわれの色(しき)のはたらきだということだ。

われわれは、関係・関わりを「実感」できるが、それは「つながり」ではないということ。

実感できるそれは、呪縛というバインドであり、つながりではない。

つながっているものなら縛りつける必要はない。

縛りつけられていないなら、それらはバラバラのはずで、そのとおりバラバラのままなのだが、なぜかまったくわからない現象で、それらがつながっているということが体験されてしまう。

先の章で、夜は「在る」のか、という問いかけを示した。

それに引き当てて言うなら、ここにある問いかけは、つながりは「在る」のかという問いかけだ。

何が「夜」かといって、日光の量というパラメーター比率を捉え、そのパラメーターが低くて暗いと「感じる」ときが夜という「状態」なのだということであれば、その夜は「分かりやすい」けれども、その夜は「在る」とは言えないと述べた。

われわれは、関係や関わりを実感することができ、その関係の深さも、量的に観測することができる。

そうしたことはわれわれにとって「分かりやすい」のだが、もしその分かりやすいものを「つながり」だと言い張るのであれば、やはりそのつながりは「在る」とは言えないものだということになる。

そうではない霊なる夜ならば「在る」と言いうると述べたが、それに引き当てるとなれば、やはりつながりというのも霊なるつながりというこ



とになってしまふ。

ただ、もしそれを本当に霊なるうんぬんと言うのであれば、それは本当に「分らない」のだ。「霊」は「観測できない」「非力動性」を指定しているのだから。

非力動性とは、「グッと来ない」ということを意味している。

そのようにして、絶望的に一ミリも「分らない」上に、それでいてその事象は理に従い、主体的・必然的にのみ起こる。

ファンタジックには起こらないし、願望的にも起こらない。

主体性において、当たり前前にのみ起こる。

そのとき、「こいつには関係が必要ないのだ」と捉えていい。

この人が書いて、わたしが読むんだよね、それが著者と読者だよねというような、関係・関わりによる結合が必要ない。

あなたとわたしはバラバラで、バラバラはまったく結合されないまま、それなのになぜかここに「話」はひとつのものとして聞こえてきてしまう。

課長から送られてくる業務のメールとはまったく異なる、理解も応答も必要としない「話」という存在、それが聞こえてきて体験されてくるという現象がある。

あなたは通常、人とのつながり、あるいは何かしらの「物」とのつながりを、距離あるいは距離感という感覚で捉えている。

その感覚は、まっとうなものだから、否定しなくていい。

誰でも知っているように、距離感が勝手に近すぎておかしい人は困りものだし、かといっていつまでも距離感がMAXの人も困りものだ。

だが、距離感といって、距離は量だし、感は実感だ。

仮に、わたしの本質が「話」だったとして、同様に、あなたの本質も「話」だったとしたら、話と話のあいだに距離なんてものは存在しない。

話と話は、遠いということもないし近いということもない。

あなたのとなりに浦島太郎が座り、ふたりで一緒にサンドイッチを食べたとして、それをどう感じるかというとき、「どう感じることもできない」のだ。そのとき、浦島太郎との距離は何メートルだったとも言えない。

ただそのようにした体験したとしか言えなくなる。

課長からのメールは、関係者からのメールということであって、その文面には、さまざまな事情がそれぞれどのように関係しているかが、分かるように書かれている。

あなた自身も関係者だから、そのメールの内容は分かる。あるいは分かる「はず」だが、なぜか一方で、

「根本的によくわからん」

という違和感も残したまま、多くの人はそうしたメールのやりとりをしている。

課長からのメールなんて、たかが数行のことで、しかも内容はふだんからよく分かっている業務のことのはずだ。

にもかかわらず、それはどこかずっと読み取りづらく、あなた自身とは「つながらない」文章だ。それを次から次へと読み取っていくことには、正直にいつてストレスと呼んでいい負担がある。

課長からのメールに比べれば、ここに書き話されていることのほうが文章量としてはるかに膨大なはずで、内容も知性的にずっとむつかしいはずなのに、あなたはここにある「読む」という体験を、ストレスと呼ぶべき負担には感じない。

あなたはこの文章を、数日のあいだ手元あるいは枕元に置くことに、一種の誇りや安心のようなものを覚えるかもしれないが、まさか課長からのメールを手元や枕元において、そこに誇りを覚えるというようなことはない。

これはいったいどういうことなのか。

文面が「在り」、つながりが「在る」のだ。

あなたが、なぜか「在る」文面を手元や枕元に置き、そのことになぜか誇りさえ覚えるとき、あなたは自分とその文面とのあいだに「距離」というような感覚を認めないはず。

冊子や pdf を、抱きしめる必要はないし、遠ざける必要もない。

その誇りの中にいるとき、あなたは何一つについても「関係者」ではない。

「関係者」のあなたと、そうではない「話」のあなたという、ふたつのあなたがあるのだ。

無関係でバラバラというのが正で、これを結合しようとする力動的はたらきかけは、関係・関わりと呼ばれ、その結合はつながりではなく呪縛だ。

無関係でバラバラというのが正で、そのまま、無関係でバラバラのまま、さらにはそのバラバラを増すかのごとくなのに、なぜか「つながり」が体験されるという事象がある。

無関係でバラバラというのが正で、繰り返す、無関係でバラバラというのが正だ。

それを、変化させず、解決もさせず、さらには押し広げさえするかのようなのに、「もう解決は要らない」「つながりは得られた」ということをもたらしてしまう、まったく分からない事象がある。

無関係でバラバラの、まるで体を為さないものを、「なんとかしよう」「つなげよう」「ひとつにしよう」と力動する、その衝迫を持つあなたがいる。

それは「関係者」のあなただ。

「関係者」のあなたに告ぐ、「つながり」はたしかにあなたの求めるべきものだが、それはあなたの力動で為せるものではない。

あなた自身もそうだし、他の「関係者」にも惑わされるな。絶望的に分

からないもの、それがつながりだが、なぜあなたはそれが分からないということが、イコール得られないということなのだと、勝手に思い込んで焦っているのか。

## 関係力グラビティ

「関係」の力は引力のようにはたらく。グラビティは「引力」だ。

関係力は引力のようにはたらくし、関心という力も同じ、引力のようにはたらく。

われわれはこの引力のはたらきに無知で、無警戒だ。

われわれはこの引力に「されるがまま」になっている。

引力に、されるがままになるということは、そちらに傾き、そちらに転がっていくということだ。

それは何ら自分のコントロールではないし、自分の推進力でもない。自分の進行方向ではない。

ただの引力だ。

関係・関心の力は、そうしたグラビティ、引力としてはたらく。

このことは思いがけず、実験してみると体験的に証明することができる。

たとえばあなたは、これから数時間後には喉が渇き、何かしらの飲み物を口にすることがあるだろう。

そのとき、飲み物に関心が湧いているので、飲み物を目の前に置いたら、当たり前だがその飲み物に「ぐいっ」と引かれる。

そこで、ふだんはまったくやるはずもないことだが、その目の前の引力に逆らうように、自分の身をまっすぐに立てるということをしてみる。身をまっすぐ立て、体の真ん中、横隔膜の最奥、「この人」の真ん中に帰ろうとする。

(かといって、のけぞってふんぞり返らないよう。居丈高にならぬよう。斥力ではなくただ世界の中にまっすぐに立つ)

すると、傾きは解除されていって、転がろうとしていた坂道はもとの水平の原に戻る。

それが本当にわれわれの仕組みなのだ。

水は低きに流れる、のではなく、関係・関心のあるほうに引力がはたらき、われわれはその引力の方向を物理的に「低い」と位置付けるだけだ。

身・体をまっすぐに立て、自我の真ん中ではなく「この人」の真ん中、体の真ん中に帰っていくと、じつはそのような傾き・引力は合理的には発生していないということがわかる。

あとはあなたが、こんな馬鹿げた実験を、本当にやることがあるのかどうかだけの問題だ。

冷蔵庫を開けて麦茶を取り出すかもしれないし、牛乳を取り出すかもしれないし、水道からコップに水をそそぐかもしれない。

飲み残しのペットボトルをバッグから取り出すかもしれない。

飲みたくて取り出し、喉が渴いて取り出したのだから、飲み物に関心が向かっているのは当たり前だ。

別にそれが悪いというわけではないが、そのまま飲み物をぐいぐい飲んでも、そのことはあなたの「体験」にはならないというだけだ。

なぜならそれは、あなたの推進力ではないし、あなたの進行方向でもない、ただの引力方向なのだから。

何かに「ぐいっと」、引き寄せられる。

それはそうだろう、引力なのだから。

魅力の強いものに出くわせば、関心が湧き、ぐいっと引き寄せられる。己で己の進行方向へ踏み出しているのではない。

重心方向への、引力のはたらきなのだから、傾斜角がどうであれ原理としては落下であり、*falling* だ。

引力に引き寄せられ……さらにそうしたことが、その先うまく進んでいくためには何が必要だろうか。

それは当然、向こうもこちらにぐいっと引き寄せられてくれればいいのだ。

向こうもこちらへの「関心」を持ってくれたら進行する。

あなたが彼に関心を持ち、彼もじつはあなたに関心を持っていた。

そうして、互いに *falling*、惹き合ったとして、進んでいくとして、いったいなにをしたらいいのか。

そこからいったいなにがしたいというのか。

ふたりはある種の「関係」になりたいと望む。

互いに関心を強くして、互いにぐいっと引き寄せあうだけでも快感だが、そこからさらにある種の「関係」になれば、その快感はさらに大になる。

それから、寝ても覚めても、彼女のことを考えている。

昼も夜も、彼のことを考えている。

ふたりはそういう「関係」なの。

ところがじつさいのところ、そうしたことから得られる快感には耐性がついていくもので、数か月もしないうちに、

「なんか、冷めたかも」

という気がしてくる。

そうした経験のある人は多いはずだし、ふだんはそうした経験があったことさえ忘れているはずだ。

「なんかさ、以前にあった、あのときめきというか、ドキドキの感じが  
ないのよね」

「あーわかる、でもさ、それってけっきょくそういうもんじゃない？」

「そうかもしれないけどさ、でもさ、じゃあわたしが彼と付き合っている理由って何？　ってなるんだよね笑。最近正直、ちょっと束縛のほ  
うがダルいつて思うことが多いんだけど」

「それはさあ、もう、いわゆる潮時ってやつなんじゃない？」

（※「潮時」の本来の意味はどうやら違うようですが、ここではよく言  
われがちなものとして用いています）

関係・関心は引力としてはたらく。それも、われわれの「自我」のほう  
に引力としてはたらく。

体の真ん中、「この人」の真ん中には、じつは引力としてははたらい  
ていない。

つまり、ここでは彼女に、誰かと好きあったというような「話」や、誰  
かと愛し合ったという「話」、誰かと結ばれたという「話」は存在してお  
らず、じつはそもそもから誰かと「出会った」という話さえ成り立って  
いない。

彼女は十年後、「それってどんな人だっけ笑」と、かつては熱愛した彼  
のことを思い出すことさえできなくなっている。

彼女は、浦島太郎のことを忘れることはないが、熱愛した彼のことは  
きれいさっぱり忘れるのだ。

浦島太郎には引力がない。

われわれは、浦島太郎と何の関係も持たないし、浦島太郎に何とい  
うほどの関心も湧かせないからだ。

よってわれわれにとって浦島太郎はただ「話」という体験でしかない。

それでも、ふと気づくと「あの人」が、自分の中にずっと居るのだ。  
それが「話」だ。

彼女はその先も、本当には出会ってさえない異性に、関心を向け、  
また自分も関心を向けられ、引力から関係を持ち、「熱愛」状態に「ど」し、  
その状態にある自分のとめどない快感を「無敵」というように感じる。  
彼女はそのことを繰り返していき、やがて中年になり、初老になり、  
老年になっていく。

年を取ればとるほど、魅力パラメーターは減っていくから、関心を向  
けてもらえることは少なくなり、その引力は弱まっていく。

するとこの人の関心は、別のこと、たとえば財物や政治、あるいは健  
康などのテーマに移っていく。

百貨店の外商と「関係」のある人になりたいと望み、町議会と「関係」  
のある人になりたいと望み、ひびの軟骨保持に効き目があるという触れ  
込みの食材に「関心」が向くようになるのだ。

（※身体のケアにはどうぞ関心を向けてください）

われわれの自我は、そもそもが「分かる」ための装置であり、われわれ  
の体内にそれは四歳児のころにしつらえられたものだ。

「分かる」ということは「分かれたる」ということであり、それによつて  
われわれは、「自分」と「自分でないもの」を知ることになるが、その分  
かたれたもの同士を引力で結びつけ、呪縛しているものが「関」だ。

われわれは、自身にそのようにしつらえられた呪縛引力の仕組みに無  
知で、その作用に無警戒だ。

この引力に「されるがまま」になることで、日々はそれなりに「めくる  
めく」ものになるかもしれないが、そのぶん、あなたという人の真ん中、  
あなたの体の真ん中は、何らの体験も得ないままになり、ともすればあ  
なたは何十年という時間を「体験ゼロ」のまま過ごしてしまうことにな  
りかねない。

あなたがいま二十歳だったとしたら、あなたは、街中の電柱にどのよ  
うな看板・広告が貼りつけられているかを知らない。

もちろんあなたがそのことを確かめようと、いまから目視しに出掛ければ、あなたはその実物を視認することはできるのだが、あなたはそこに引力を受けないので、あなたはやはり本当にはその「界限」を知ることができない。

街中の電柱には、不動産の広告が貼りつけられてあり、「築〇年、〇LDK、〇千万」という数値が書き込まれている。

あなたはそんなものを見ていないし、見たとしても引力を受けない。あなたの若い友人らも、あなたと同様に素通りだろう。

けれども十五年後、ふとあなたの友人が、おしゃべりをしている途中で気も漫（そぞ）ろになる。

（どうしたのかな）

とあなたが目を遣ると、友人はその電柱広告に見入っているのだ。

「何を見ているの？」

「あ、いや。このあたりで、〇千万で家買えるんだ、ふーんって思ってた」それから十年後、電柱に添えられた「△△形成外科 一五〇m先右折」という看板に引き寄せられるようになり、薬局前に掲げられているノボリ旗、「滋養強壮」「ご相談ください」という字句に引き寄せられるようになる。

二十歳のあなたは町内会の掲示板などまったく覗き込んだことがないだろう。

町内会の掲示板よりは、「短期間・高収入！」を謳うホステス業への呼び込みのほうだが、あなたに引力を仕掛けるはずだ。

目の前の誰かが、郷土史をまとめる会の主任で、すでに多くの実績がある人だと聞いても、あなたはそれに引力を受けない。

若いあなたはそうしたことの関係者になりたいと感じないからだ。

それよりは、同じく目の前の誰かが、再生数・登録者数が数十万におよぶYoutuberだと聞いたほうが、あなたはそれに引力を受ける。

そしてここに受ける引力とその作用は、当然ではあるが、何一つあなたの主体性のはたらきではない。

膝の悪い人が形成外科の看板に引力を受けるのは何ら悪いことではなく、ぜひ健康を志向されて膝の快癒を得られればよいと願うが、それにしてもそれは生きもののやむを得ぬはたらきであって、その人の主体性のあらわれではないのだ。

あなたがどれだけ、「めくるめく」ショート動画群に引力を受け、引き込まれたとしても、そこにあなたの「体験」はない。

「推し活」と言って、何かの引力にぞっこんになり、たくさんの方アボをつけ、時には投げ銭をして「関係者」の気分浸ったとしても、そこにあなたの「体験」はない。

あなたは本当には、この世界でひとり棒立ちになって、すべてが水平だったとき、^^何をどうしたらいいかわからないV.V.のだ。

それで常に、そのときごとの引力に首ったけになり、ひとときの安心を得るかわりに、みずからの体験を失いつづけている。

「関心」といって、あなたにはあなたにとって好ましい関心もあれば、好ましくない関心もある。前者はたとえば「推しの新作はまだかな」「この関連動画も面白そう」という関心。後者はたとえば「また母親から電話かかってくるのかな、面倒くさい」「うわ課長から説教メール来た、うざい」という関心だ。どちらにせよ引力がある。

「関係」にもまた、あなたにとって好ましい関係と、好ましくない関係がある。たとえば飲み仲間の〇〇ちゃんはこちらの話をいつもニコニコして聞いてくれるというようなことが前者で、一方、課長に業務を押しつけられて今週もまた不快感を覚えるだろうというようなことが後者だ。こちらもやはり、どちらにせよ引力がある。

好ましいものは「気になる」し、好ましくないものも「気になる」のだ。

このあたりで、いいかげん「引力」が何なのかわからなくなってきたという人は、あなた自身の「浦島太郎への無関心ぶり」を思い出せ。浦島太郎が「気になる」なんてことがあるだろうか？ 浦島太郎には何の引力もないということがよくわかるだろう。

引力に引き回されているうちあなたは、とても浦島太郎の話なんかまともに聞く気にならない。

われわれはこうして、関係・関心の引力によって、好悪それぞれの方向へ^^引き回されるvvのみで日々を過ごし、体験という体験は得られず、最終的にはそうした引力の支配を呪うことになる。

引力それじたいが呪いであるから、その果てにわれわれも呪いで報いることになるわけだ。

だが本当にはそうした呪いの支配がわれわれにあるのではない。そうではなく、本当はわれわれに^^主体性の支配がないvvということなのだ。主体性による統治が為されていないので、胡乱(うろん)が好き放題に入り込み、好き勝手に収奪をしていく。好ましい関係・関心であれ、そうでない関係・関心であれ、それらが支配的に振る舞うのはけっきょく呪い・呪縛なのであり、この支配は主体性の統治がおよんでいないことによつて生じている。

汗をかいたところで、冷えた麦茶を手に取り、一気に飲み干せば、単純で健全な快感がわれわれに与えられる。その快感のさなか、われわれはまるで^^何をどうしたらいいかわかっているvvふうの存在になる。

「ありのままでいいのさ」

けれどもその無敵のようなさわやかな笑みの主も、たかが浦島太郎の話さえそれが何であるのかを捉えられていない。

それは「ありのまま」ではなく「されるがまま」なのだ。

われわれはこの引力のはたらきに、無知で、無警戒だ。

それどころか、恣意的なまでに無抵抗だ。

われわれはけっきょくその呪いに依存したくて、「この人」の真ん中を放棄したがっているのかもしれない。

「引力」は本当にある。

実験すると、本当にそれは体験され、「引力だ」と確かめることができる。

冷蔵庫から出した牛乳でもそうだし、スマートホンで開いたショート動画の再生ボタンでもそうだ。

あなたはひよつとすると、そうして「何の引力に引かれるか」「どの関心に連れていかれるか」ということこそが、「わたし」という存在なのだと思っているかもしれない。

本当はそうではない。本当は、あなたの体の真ん中は、引力のない水平の原に立っているのだ。そのことを発見したら、あなたはぜひぶんおどろくかもしれない。

^^空間を広く取って体を真っ直ぐに立てるvvだけで、その引力はぜひぶん遠のく。そのことはあなたをおどろかせると思うが、同時にそれ以上の恐怖をもたらし、あなたはむしろみずからその「わたし」という存在を固辞するかもしれない。

あなたが部屋ににいるにせよ外出しているにせよ、横隔膜をやわらかくして、空間を広く取り、体を真っ直ぐに立て、スマートホンに表示されている再生ボタンを眺めるならば、決してあなたの体の真ん中がその再生ボタンに引きこまれているわけではないことに気づけるはずだ。

あなたが体の真ん中を放棄し、あなた自身が顔面・頭部にある「自我」に取り込まれていくと、広がったはずの空間はサッと消え去って失われ、そのとき体は崩れ、目の前のスマートホンに「意識」が傾く。それであなたは再生ボタンを「押したい」と引き込まれているのだ。そのときあなたは、にぎやかな動画サイトの界限と「関係」を持ちたがっている。それでいまださら、いつものように再生ボタンを押してもぜんぜんかわらない

が、あなたがここで聞いたことも、いつかのためにこっそり覚えておけばいいと思うのだ。

## 魂魄

霊なる〇〇、などという言いようは、どこまでもいかがわしいものだ。あくまでそれは、観測不能の体験を措定するひとつの古語にすぎない。

もう少し詳しく解説すると、日本語には古くから「魂魄（こんぱく）」という語がある。「魂魄この世にとどまりて」というような、見栄を切ったセリフが有名だ（「四谷怪談」によく知られている）。

魂魄（こんぱく）といって、コンは魂だからなんとなくわかる一方、ハクのほうは魄という字でよくわからない。だからこれらは、「靈魂」「氣魄（きはく）」というふたつの熟語に捉えなおすと、いちおうわかった気になる。靈魂というとわれわれにとって「そういうやつ」だし、氣魄というのもわれわれにとって「そういうやつ」だ。そもそもトルストイの言うように、本来の語をもって捉えられない語を、他の語に言い換えても捉えやすくはならないのだから、魂魄についてはこれでよろしい。魂魄といって、それは「靈魂と氣魄」のことだ。

それで、靈魂と氣魄といえど、魂魄のほかに「靈」「氣」のふたつの字があらたに出てきてしまうのだが、ではこれらは何なのだろうか。「氣」のほうは、あまりに日本人のわれわれに親しみがある。「氣になる」「氣が散る」「氣力がない」「人気者」「活気がある」「天氣が良い」「元氣でありたい」「病氣はいやだな」「氣をつけよう」、こうした「氣」を用いた慣

用表現を禁じるなら、われわれは日本人としておおいに会話に困るのではないだろうか。それぐらい、われわれ日本人にとって「氣」の存在は前提になっている。そしてその「氣」なるものを、定量的に取り扱えると言いつつオカルトになるので、われわれは怪しげな、健康志向以上のことを謳う氣功術からはそつと距離を取る。

ところで、「あの世」には幽霊がいるだろうか？「あの世」もしくは「この世ならざるところ」には幽霊がいるだろうか。われわれにとって、「あの世」はただちに「おぼけ！」「幽霊だあ」というイメージに結びつくが、たとえばお釈迦様がさまざまな仏国土（代表的には極楽浄土）の存在を教えられ、そうした教えを信じていくのが仏教だけれども、その仏教がわざわざ「おぼけが出るぞ」と喧伝しているふしはない。簡単に言いつつ仏教は幽霊に否定的だ。もし幽霊に肯定的なら、お坊さんは怖くて墓場を歩けないのではないか。

このことを整合させて捉えるには、つまり次のように言うしかない。あの世に幽霊がいるのは当たり前であって、あの世にいるものをわざわざ幽霊とは言わないのだ。あの世にいるはずのものが「仮に」この世に現れてしまった場合、その体験をわれわれは「靈」と呼んでいるのだ。

先に示した伝統芸能でのセリフ、「魂魄この世にとどまりて」は、反語的に魂魄は本来あの世に行くということを示している。もしくはあの世にあるということを示している。逆に、あの世にのみあるはずの魂・魄がこの世に現れたとき、それらを体験的に靈・氣と呼んだわけだ。それぞれが靈魂・氣魄という熟語になっている。

よって、魂が体験あるいは体現されてしまったとき、それは靈なる〇〇と捉えるべきで、同様に魄が体験あるいは体現されてしまったとき、それは氣の〇〇と捉えるべきだということになる。

それで、ここまでの話はまだわかりやすいのだが、例によって困ったことに、ここから先にはまたわれわれにとってけつきよくわからない話





コロンボ「警部」と訳されています)

つまり、われわれはそれをフィクション・ただの「話」と明白に分かっていながら、そこにピーターフォークとコロンボ警部の「同一性」も体験してしまうということだ。

ピーターフォークはノンフィクションの人物で、コロンボ警部はフィクション上の人物だから、それは人物が違うという以前に事象じたいが違うのだが、困ったことに、そうしたノンフィクション上の事象とフィクション上の事象に「同一性」をわれわれは体験してしまう。このように、「明瞭に別個でありながら、同一でもある」という矛盾した事象を、われわれの知能は取り扱えない。ただ、取り扱えないくせに、知性にはそのまま体験されてしまうのだ。

ピーターフォークとコロンボ警部は別個の事象だが、

「いや、彼はコロンボ警部だよ」

と言いついてしまう。

われわれは一般に、フィクションとノンフィクションについて、「フィクションは空想で現実じゃない」「ノンフィクションは現実でしょ」という、投げやりな捉え方をしている。そして、それが投げやりで知性のない捉え方なのだと、一般には誰からも教わらない。

フィクションは非現実、ノンフィクションは現実、ひとまずそれでありとして、ではわれわれの言う「現実」とは何なのかということだ。われわれの言う「現実」とはつまり「量れる」ということ、定量化できるということにすぎない。この場合の定量は、われわれが個人において「思う」

「感じる」という量も、不分明なまま認められることになっている。「強く思う」や「うっすら感じる」も認められているということだ。

魂魄といって、それらは鬼の字がついているから、何であれこの世ならざるところを指している語に違いない。そしてそれがこの世ならざるところと言われてしまえば、それはどのようなにも「量る」ことはできな

いのだ。量れてしまう・観測可能なものであれば、それはこの世ならざるものではないのだから。

それは量れないものでありながら、なぜかわれわれはそのことについて「かんがえる」ということが出来てしまう。このときの「かんがえる」には、「稽(かんが)える」という字が当てられる。われわれは魂魄のことを量ることはできないが、稽(かんが)えることは出来てしまうのだ。稽(けい)の字は、「稽留」などの語にあらわれて、「つなぐ」「つなぎとめる」の意味で使われる。

つまりわれわれが、なぜか魂魄のことを稽(かんが)えることが出来るせいで、われわれはその魂魄につなぎとめられ、そこに「連絡」を得ることができるようなのだ。

そして魂魄の側では、「分からない」と「分かる」は矛盾しない。

魂は「雲のように分かれたれない」という徳性のまま、一方で魄は「明白に分かたれる」という徳性のまま、双方が同時に成り立ってしまう。

われわれが、四歳児以降の自我によって、すべてのことを「分かり」

「感じ」「思った」とき、この稽の連絡は断たれる。

「いや、どこまでいっても、ピーターフォークさんは俳優で、刑事コロンボは作り物だと、思い“ますけど笑”

このときの思う・感じるの量、その定量性、「量る」という色(しき)を、われわれは現実と呼んでいるのだ。

「たしかにあの演技はもう、現実とかを越えているって“感じ”ますよね！」

このように、このことは一般の知能では到底取り扱えず、かといってまともな知性があるとよもやこのことに唾を吐こうとは踏み切れないので、このことにむやみに深入りすると精神機構を損傷するのだ。

われわれは「気」を取り扱う徳性は与えられていても、「霊」を取り扱う徳性は与えられていない。

よって、与えられていない徳性をひねりだそうとして、「分かる」の機能を無理にいじくりだすと、結果、「気がヘンになる」し、「気が狂う」のだ。

以下、まとめるとこうなる。

魂魄はあの世のものだ、だから鬼の字がついている。

魂魄があの世にあるとき、それを幽霊とは言わない。

あの世にある魂魄について稽（かんが）え、何かしらの連絡が得られてしまうとき、あの世にあるはずのものがわれわれの体に体现・体験されることがある。

そうして、あの世のものが体験的にこの世に現れてしまうと、字義が変わってしまうので、それらの現象を霊・気と呼ぶ。

これらのことを熟語にして、靈魂・気魄と呼んでいる。

魂は「分からないもの、雲のように分かれたれないもの」を担い、魄は「分かるもの、明白に分かれたれるもの」を担っている。

このふたつは背反せず、同時に成り立つ。

魂魄の領域でのみ、「分かる」と「分からない」は背反せず、そのままを体験することができる。

その領域への「連絡」は、体の真ん中に得られ、またその「連絡」は、自我によって断たれる。

その連絡じたいを稽といい、稽を断たればすべてはひたすら観測によつて得られるパラメーター、またそれをどう「想う」か、どう「感じる」かということの一切になり、それら色（しき）を、われわれは現実と呼んでいる。

「分からない」と「分かる」は、いつまで経っても整合しないのだ。なぜならそもそも、「分からない」と「分かる」をそれじたい分離して捉えているのは、そのふたつを分かっているというはたらきであって、これのみを追跡することはそれじたい「分からない」を見失うことに該当する。

一方で、「分からない」のみを追跡するならば、すべての語や概念は分離されないものであって、ただひたすら何もかもわからない者に墮（お）していきのみ。

それでいてたいていは、他者に頬を打たれたら、他者に頬を打たれたということが「分かたて」いて腹を立てるのだから、けっきよくは自我がないフリしているだけの近所迷惑な三文芝居にしかない。

魂魄を稽（かんが）えることでわれわれにもたらされるのは、けっきよくのところ自我以降と自我未然、四歳児より前とそれより後が、どのように統合されるかという問いかけだ。声高に現実を言いふらすのは回答の先延ばしだろうし、気狂いになるのは回答の拒否でしかない。

しよせん、われわれの知能は、それが知能であるという時点で、「分からない」と「分かる」を統合はできない。そこでまともな知性は、唯一のありうる可能性を、魂魄への稽、その「連絡」に合理的に見出す。「分からない」と「分かる」を統合する仕事はわれわれ自身には無理で、そもそもそれが可能なだけの徳性を与えられていないのだから。

われわれにはその仕事は為せないが、連絡した先にそれが可能なのであれば、連絡した先からその体験だけは直接与えられるということがありうる。だからこれらのことについてわたしを問い詰めるというのはいって無意味なことで、けっきよくのところわたしがこうして書いている「話」も、わたしの得ている連絡の先から体験として得られているものにすぎない。これはわたしのつながりからもたらされている話であって、わたしの感性や想念からひねり出している言ではない。

# 話の進行

われわれはいわゆる現実において、関係・関心の引力、そのグラビティのほうへ進行している。ただしそれはただの引力だから、われわれの自発的意思の向きではないし、われわれの主体性の現れではない。

それはただの引力の方向であって、われわれはみずからの「進行方向」ではないほうへでも、いくらでも傾き、転がっていくのだ。われわれはそうして関係・関心の引力に寄せられていくごとに、それぞれ好悪を感じ、また好悪を想う。

われわれは、そうした引力のない水平の原に立たされると、じつは^^何をどうしたらいいかわからない^^の。たとえば浦島太郎といって、われわれは浦島太郎を海辺とカメとに關係づけ、彼がすっかり海辺でカメを助けるものと「思い」込んでいるが、この浦島太郎がとつぜん水平の野原に立っていたら、その話がどのように進行するのかわからない。東西南北、好きに進んでよいが、どちらの向きにも傾きはない。

あなたはこのとき、いわゆる創作意欲を刺激されて、

「わたしの場合、この浦島太郎は……」

ということ、むしろ勇んで考え始め、語り出すかもしれない。わたしはそうしたあなたの意欲を、あなたの可能性そのもの、あるいはあなたの存在そのものかもしれないと思い、じつに尊重したく思うが、それでいてその種の衝動が、あなたにこれまでそうそう豊かな実績をもたらしてきてくれたわけではなかったということにも、あなたは経験として思い当たるところがあるだろう。浦島太郎といわずとも、あたらしい名前のあたらしい誰かを用意して、あなたはその傾きのない白紙の上に立たせればいいわけだ。あえて安っぽい言い方を用いるなら、そこであな

たの想像力は無限であるはず。ところがあなたの浦島太郎はここで、なぜか急速に既知のマンガのようなありふれたイメージに転じていき、ただのそういう「キャラ」のようになっていき、果ては何かの「パターン」や「ネタ」に収束していこうとする。別にそれが悪いということではないが、他の誰でもないあなた自身がそのことに失望する。あなたは自分がいつのまにか、そうした自分の知る典型的な陳腐化の作業の中に自分がいるということに気づき、そのことがあまりに無意味で退屈に思えて「やーめた」とその作業を放棄し、忘れてしまわざるを得なくなるのだ。

このことは、作中の登場人物のみならず、あなたという実在の人物にも当てはまる。たとえばあなたの目の前に、四つの学門の書を置いてみるはずだ。来週には試験があるという関係上、いちおうはそれらの書物に引力を受けてはいるのだが、好悪でいうとその引力はあなたにとって好ましいものではない。それよりは、読みかけのマンガ本が放ってくる引力のほうが好ましいのだが、さすがにこのときは試験という関係のほうが重いので、葛藤を経て、試験の引力が勝ち、

「しょうがない、やるか」

となる。

ところがやりはじめるも、そうしたお勉強はしばしば「分からない」ということの連続で、あなたはますますその書物から関心を遠のかせる。そんなときふと、あなたは自分の部屋の散らかりようが「気になる」。それがいったん気になり始めると、部屋の散らかりように向けられる「関心」は増大していくようで、その引力はまったく無視できないものになっていく。

あるいは、このときになってきゅうに、

「このデスクライトと、本棚の位置がなあ」と、その位置関係が気になってくる。

またさらには、当然あるいは「いつものこと」のように、「なんでこんな勉強しないといけないんだろ。これって、生きていくのに関係ある？」

と、自分の生とその学門の関係について想いが湧いてくる。そうこうしているうちに、

「しょうがない、まず、部屋の片づけをしよう。気が散ってしょうがないもの」

ということになっていく。

われわれはこうして、ふだんを「引力に引き回される」ということで過ごしており、そのありようをしだいに、

「意志が弱い」

と思うようになってくる。

そして現代であれば、そこから強い意志をもたらす引力、

「何か、はつきりとしたモチベーションがいるんだよね」

というようなことも想い始めるだろう。

要するに、^^あなたの浦島太郎は引力のほうにしか動いてくれないVVのだ。そして言わずもがな、それは主人公・浦島太郎の主体性たる動きではなく、ただの引力の作用でしかないということになる。

あなたの浦島太郎は、燃え立つ創作意欲とは裏腹に、華美な引力あるいは陰鬱だったリグロテスクだったリする引力に引き回されるだけで、いつまで経っても浦島太郎の「話」を始めてくれない。

白紙の上に立った主人公が、どう動いていくものか、あなたは単純に言って「話の進行」を知らないのだ。

話の進行といって、それを語義的に霊なる○○と捉えるなら、霊には重力がはたらかないはずだ。ベランダからドスンと落ちるような霊は霊ではない。

そうした、引力の作用を受けない事象が、何の作用によって「進んで」

いくのかを、あなたはまったく知らないし、平たくいって見当もつかない……

では、話はどうのように進行していくのだろうか。それは、「話」のほうに進んでいくとしか言えないのだが、それはともかくとして、その進行はとにかくわれわれの日常、その色（しき）における引力方向ではないということ、確実なこととして申し上げておく。

このことを、人それぞれ、どこまで求めるものかはわからないけれども、数的割合として、あまりにも多くの人がこの「引力」という第一の段階で、自分の話を見失うのだ。関係・関心の引力に寄せられて動いた場合、その時点でもう「話」ではなくなっている。

華美な演出がほどこされた、たとえばいわゆるイケメンが現れ、それに対して女の子が「わわわっ！」となったりするなら、もうその時点で、そこに「話」はないのだ。

そんなもの、見るからにただの色（しき）の権化であって、そこは、「そんな話はない」

と初めから申し上げているとおりになる。

そうではなく、話は^^同一性に向かって進行するVVのだ。

何に対する同一性かということ、主題に対する同一性だ。

主題が体験されるということ、あるいは主題が体现されるということ、それが「話」なのだ。

体の真ん中、「この人」の真ん中が、その主題との同一性に至る、その過程および始末を、われわれは「話」と呼んでいる。

浦島太郎が海辺を歩いているのは、主人公が浦島太郎との同一性に至るために歩いている、と説明される。

（注…この理論は、既成のものではありませんので、検索しても出てきません）

浦島太郎が山間ではなく海辺を歩いているのは、「そういうイメージだ

から」「そういう設定だから」ではなくて、浦島太郎が浦島太郎との同一性に至るためのものだ。

時と場所が「むかしむかし」「あるところに」であるのも、その主題への同一性のためであって、それを西暦〇年と指定したり、場所が北緯X度・東経Y度の△△海岸であるなどと指定したりすることは、浦島太郎という主題に寄与せず、むしろ主題を損ない、主題を妨害する。

たとえば、桑田佳祐が唄うのは、主題として「あの海」のことだから、「砂まじりの茅ヶ崎」と唄ってよく、それがいつのことなのかについては、「人も波も消えて 夏の日の思い出は」と続くのだ。

桑田佳祐の歌を「むかしむかし、あるところに」とすると、主題を漂白してしまうし、浦島太郎の話を「砂まじりの茅ヶ崎」とすると、主題に別ものを上塗りしてしまう。

昔話にある「桃太郎」が、桃から生まれて、やがてきびだんごをアイテムに、イヌ・サル・キジをお供にして鬼退治に行くというのは、やはり「そういう設定」ということではなく、これは桃太郎という話の主題がアニミズムを含むということなのだ。

古代、日本の魂は「桃」に魔よけの力があると信奉している。きびだんごという食べ物にも霊力が宿つていようという捉え方は、伊勢神宮に食物のカミを祀ることや、われわれが昔から食物に「いただきます」と合掌・礼拝を向けることにすみやかに通じていよう。

桃に魔よけの霊力があり、きびだんごといった食物にも霊力があり、イヌやサルやキジなどの動物にもそれぞれの霊力が宿つていよう。そうして万物に霊力あるいはカミが宿つていようという捉え方を、日本では八百万神（やおよろずのかみ）と呼び、化学的には淡白にアニミズムと呼ぶ。またそのアニミズムの中で、イヌ・サル・キジはおそらく十二支や方角、陰陽五行への接続も具えていよう。陰陽五行はわれわれのふだんの暮らしではあまり言われなくなったけれども、われわれがカレンダー

として常用する曜日はこの五行に由来している。木火土金水（もつかどこんすい）、これに昼と夜を意味する日月を加えてわれわれの知る「曜日」は成り立っている。

とはいえ、これらのことを詳しく研究していくことは、そうした専門の研究者を除いては、単にわれわれに軽薄な「わかったふう」をもたらすだけに違いない。それよりも「話の進行」だ。「話の進行」はどのように生じ、どこへどのように向かっていくのか。

桃太郎は、精製されたモモのジュースから湧いて出たのではない。桃太郎は、たしかな霊体として川上から現れた桃、その体の真ん中から生まれ出てきたものだろう。その桃がふんわりしたイメージの存在でなく、たしかな「体」を具えたそれであったことを、われわれのよく知る「どんぶらこ、どんぶらこ」という異化表現が示しているのだ。それはたしかな体を具えていながら、同時に通常の桃とは大きさも異なり、まして果樹から収穫されたものでもない。

主人公の「体」が、魔よけ・魔を打ち祓うという主題そのものの合一に向かつていく。そのために、主人公の桃太郎は「すくすく育った」のだ。そして、桃太郎単一で鬼を退治することでも桃太郎の話は成り立つだろうが、桃太郎は同時にアニミズムじたいの体現者でもあるから、山里の霊なる動物たちも従えて寓話を形成していくというわけ。また、彼らが討伐に行く鬼たちは、霊なる山里とは隔絶され、きつと魔界を為しているであろう「鬼が島」に棲んでいるのだ。そこで主題と同一化を果たそうとする主人公の体は、鬼ヶ島を目指して討伐の「旅」になることになるが、子供にも追随しうるものとして桃太郎の話はここまで。彼らの「旅」はそこまで膨らまされはしない。ただ仮に、桃太郎の話を大きな叙事詩にするのであれば、彼らが鬼ヶ島に向かう「旅」には、もっとさまざまな局面がありえてもおかしくなかっただろうと、創作の視点からは言いうる。

浦島太郎について。浦島太郎が何を主題にした話なのかは定かではない。そもそもこれという原本も存在しておらず、さまざまな浦島太郎の話が数十も存在している。いくつかの説によると、もとは竜宮城で三年間、浦島と乙姫は夫婦生活をしており、そこには性生活の描写まであったというようなことも言われるし、あるいは玉手箱で老人になった浦島太郎は、その後乙姫と結婚したのだというような、いかにも近現代ふうのハッピーエンドへの説もまことしやかに唱えられている。

浦島太郎の原本がどのようなものであったのかはどこまでも不明だ。ただ言えるのは、玉手箱から吐き出された煙によって浦島太郎が老人になるというラストシーン、あれについては誰だって戸惑いが残るだろうということだ。浦島の老化シーンはまるで、何の咎もないはずの浦島が玉手箱の開封によって急遽罰されたかのようにわれわれには受け取られ、それまで浦島太郎の善性を信じていたわれわれを困惑させる。

浦島太郎がカメを助けるとき、カメが子供らの集団暴力によっていじめられていたということは、われわれに肉体的な事象への呼びかけをもたらす。さらに、子供たちははじめ浦島の諫めを聞き入れず、なおもカメをいじめたので、浦島は子供たちに「おあし」を——お小遣いを——やって子供らを引き下がらせたという描写もある。子供らがそうして金子（きんす）を受け取ってはじめて引き下がるのであれば、その描写もやけに生々しいものとしてわれわれには体験される。

浦島がもし玉手箱を開封しなければ、浦島はその後、時空を超えて存在することができたのではないか？ 乙姫は浦島に、「人にとっていちばん大切なものが入っている」と言って玉手箱を手渡し、けれども同時に「決して開けてはなりません」と言いつけもする。特に、「竜宮城にふたたび来たいとあなたが望むのであれば」と言い添えて。

結果、浦島が玉手箱を開封したとき、そこには分かりやすい物品は何も入っておらず、ただ代わりに封入されていたのは何かしらの「雲」だ

った……これがまるで、現代のわれわれには封入されていた毒ガスが噴出したように思えるから、浦島はそのガスによって老化したというように受け取られてしまう。あるいはせいぜい、そのときまで掛けられていた「竜宮城マジック」が解除され、浦島は実時間の経過にふさわしいだけの加齢を一瞬でこうむってしまったのだと受け取られる。

この話についてたしかな説など誰も唱えようがないだろうけれども、それにしても最後までわれわれに引っかかっている疑問、納得のいかなさは、なぜそのようなしろものを乙姫が浦島に手渡したのかということだ。決して開けてはならないものなら初めから手渡さなければよいし、せめて嚴重に施錠でもしておけばよかった。また、そこから実際的には老化ガスが噴き出すのであれば、乙姫が言った「人にとっていちばん大切なものが入っている」という口上は内容物にそぐわないだろう。

乙姫は玉手箱について、

「これを開けるとあなたは一気におじいさんになってしまいます」

と前もってその危険性を伝えておけばよかったではないか。

これについてわたしが体験に読み取るのは、乙姫は玉手箱の中身について^^言及することが出来なかったVということだ。なぜか？ それは、玉手箱の中身について言及するということは、それじたいが玉手箱を開封するのと同義だからだ。よって玉手箱の中身について言及したとき、やはり浦島はたちまち老人になり、その加齢によって当然に死去してしまっただろう。

玉手箱の中には、まるで「魂」が入っていたかのように、わたしには体験される。なるほどそれが魂ということであれば、それが「人にとっていちばん大切なもの」という口上にも整合しよう。そして先の章に述べたように、魂とはこの世ならざる世界のはたらきのうち「分からないもの」のほうを担っているものだ。その「分からないもの」が玉手箱のうちに収められているうち、それはいわゆるシュレーディンガーの猫のよう

に浦島には観測不能のものでありつづける。しかし浦島はそれを開封して内部の魂を「観測」した……そして観測されたならばそれはもはや魂ではない。ただの不明の煙を浦島はその顔面に浴び、その煙はたちまちどこかへ雲散霧消していった。

そして浦島は、時空を超えて在りつづける魂を失い、ただちに地上・現実の支配する世界に戻ったのだ。そこで、浦島はこれまで免除されていた加齢の量を一気に引き受けることになり、たちまち老人となつたし、同時にその魂を失ったことで、竜宮城へアクセスする手段も失ってしまった。

浦島太郎の主題は何であつたか。また、浦島太郎の体はどのようにわれわれに明視され、その体はどのように主題との同一性に至つていったか。

浦島太郎は漁師として描かれることが多く、われわれの脳裏の記憶にも、彼は釣り竿と魚籠(びく)を持った姿で絵本に描かれている。すなわち彼はふだんタイやヒラメを漁(すなど)り、それを糧として、食用にもするし売り物にもして暮らしているのだが、その彼が竜宮城でタイやヒラメの舞い踊りを鑑賞するということには、われわれに肉体生存についての一通りでないインパクトを与えてくる。あるいは乙姫が浦島を饗応したとき、乙姫は浦島にどのような食事を供しただろうか。まさか海底にありながら野ウサギの焼き物を供したとは思えないし、やはり浦島はそこで海産物を供されたように思われてならないのだ。子供らがカメを暴力的にいじめていたということ、および、子供らは「くそ餓鬼」としてけつきよくカネでしか言うことをきかなかつたという可能性も含めて、われわれは浦島太郎の主人公を肉体的な存在として受け取ることが可能なのだ。それでいてもちろん、そこに霊なるものが重なつてこないのであれば、それらの描写はわれわれにただ主題のない陳腐なグロテスク・リアリズムをもたらすのみ。

桃太郎が霊なる体となつて鬼ヶ島という魔界に向かつたという事に引き当てるなら、浦島太郎は霊なる体となつて竜宮城という蓬莱郷へ行ったということになるだろう。そして浦島太郎は、竜宮城に骨をうずめるまではせず、或る日郷愁にかられ、桃太郎と同じように自分を育ててくれた親や里村のところへ帰つていった。ただし、桃太郎の場合は魔界からの帰還だが、浦島太郎の場合は蓬莱郷からの帰還だ。よつて浦島太郎のラストは、桃太郎のラストのように「末永く幸せに暮らしましたとさ」とはならなかつた。浦島太郎のラストが「末永く幸せに」となるためには、玉手箱が未開封のまま、すなわち浦島が竜宮城とのアクセスを得たままでいる必要があつただろうし、そのとき彼はむしろ蓬莱郷たる竜宮城のほうへ「帰つて」いかななくてはならない。

ここで唱えている浦島太郎の読み解きは、まったくわたし独自のもので、他に検索してもそうは出てこないし、わたしに何ら社会的な権威があるわけでもないの、まったくアテにはならないもののだが、仮にわたしが唱えているこの説に則るのであれば、浦島太郎の話はわれわれに「魂を観測するべからず」という警句を鋭く与えていることになるだろう。観測した魂は、そのときすでに観測という行為によつてこそ魂ではなくなつており、もはや時空を超えて存在する命は消え失せ、またその命が体験する蓬莱郷とやらもどこか空想の世界へ霧散している。

ともあれ、本稿が唱えている本旨は浦島太郎についての読み解きではなく、話と色(しき)、そしてこの章では「話の進行」がどのようなかについてだ。浦島太郎は、魂の世界の体験者として描かれ、その後、魂の世界の喪失者をショックキングに体現する。観測されないうち時空を超えて存在する——かもしれない——魂を主題とし、その魂に主人公の体が同一性を得ていくために「話」は進行していく。そのために話は浦島太郎の体を肉体的に描き出し、一方で主題の世界たる竜宮城を霊なるきらびやかなものに描き出す。もちろん人語の通じるカメや、乙姫のありよ

うなども桃太郎と同じアニメズムを現わしているだろうが（乙姫は女性としてのアニメ像に引き当てられよう）、そのことを詳述することは本稿の趣旨から逸脱するので、アニメズムやそれと通じてあるアニメ像などについては他の解説書を参照されたい。

話の進行は、主人公の体が「主題」と同一性に至らんとする向きで得られていく。そこに、動力というような動力はないが、動力なしに進行する「話」のはたらきは、われわれが知る量的な動力よりもなぜかはるかに力強いものだ。

ただし、最後に水を注しておかねばならないのは、これらのことが「分かった」として、そのことは解体の向きにはたらくのみにすぎず、それでは話の進行を獲得することにはなっていないということだ。これは「分かる」ことではなく「体験する」ことだから。

あなたの自我が、このことをどう詳しくに理解しようとも、そうではない、「話」とは——「あなたの話」とは——あなたの^^体の真ん中VVがどのような主題を体験するかであり、あなたの^^体の真ん中VVがどのような主題の体現に向かうかなのだ。

## 同一性

先の章で述べたとおり、われわれは四歳より前の記憶をほとんど残していない。

自分が幼児だったころの写真を親に見せられて、  
「このころあなたはとても甘えん坊だったのよ」

と言われても、当人としては心当たりがないので「フーン」と他人事のように答えるしかないという具合にだ、これは誰でも知っていることだろう。

ゼロ歳から三歳ぐらいまでの記憶は誰にもほとんどない。ただしそれは本当には、「使用できる記憶」の形でそれが得られていないというだけであって、その記憶じたいが存在しないということではない。なぜなら、仮に本当に記憶がゼロになってしまふのであれば、憶えたはずの母国語も、親の顔と声も、水の飲み方もトイレの使い方も、すべて忘れてしまふはずだからだ。

じつさいにはそんなことはなく、たとえば二歳児が水道の蛇口をひねって水道水を使っていたら、彼はその十年後にも蛇口をひねるという行為と水道水の使い方を覚えていよう。あるいは、三歳になって赤信号を覚えたのに、それを六歳になって忘れて車道に飛び出すということもない。

あるいは、ゼロ歳から三歳までのあいだ、両親がその乳幼児の頬を叩き続け、いじめぬいたとして、そのことが四歳以降にはすっかり忘れられて、その後は明るい性格になって健やかに生きていくなどということはどうてい信じられない。じつさい、乳幼児のころに何をされたかは明確には覚えていないかもしれないが、おそらくは何かに怯え続け、傷ついたままにいる、暗い子として育っていくはずだ。

だから、四歳より前の記憶が「ない」ということはまったくくない。

記憶にないどころか、ことわざにある「三つ子の魂百まで」ということわざは、むしろ三歳時点のある種の記憶——体験——のほうに永続性がありうる旨を言い伝えているだろう。さらには、三歳児を宮に参拝させることが当人にとって無意味ではなく、それどころか「三歳だからこそ」と直観されているところがあるからこそ、日本には七五三の文化があるのだと言えよう。



四歳より前でも、われわれはさまざまなことを「体験」はしており、それは自我の捉える記憶とは違う形で、われわれの中に息づいているのだ。ゼロ歳から三歳までのあいだ、自我がまだ形成されていなくて、「分かる」という機能は具わっていないかもしれないけれども、ゼロ歳児にも「体の真ん中」はあるし、三歳児にも「体の真ん中」はあるのだ。だから自我は未形成でも体の真ん中に「体験」は得られる。

たとえば、母親のふところに抱いてもらうと、やわらかくてあたたかいか、湯気の出ているみそ汁をあわてて飲むとすると熱くて火傷するとか、それを「フーフー」すると適温に冷めていくとか、公園で走り回ってつまずいてこけると膝を打って痛いとか、ソフトクリームは甘くて冷たくてやわらかくておいしいとか、悪いことをして物置に閉じ込められると暗くてさびしくてとても怖いとか、夏は暑くて冬は寒いとか、サザンカの花びらを引っ張ると花びらは取れてしまうとか、カマキリを触ろうとするとカマで挟まれてけつこう痛いとか、大好きな犬をたくさん触ったあとは手が臭くなるとか、毎日無数のことを「体験」している。「体」が存在している以上、「体験」は得られていて、むしろ乳幼児の場合、「分かっていない」というより^^^体験しかできない^^^と捉えるべきだ。

だから桃太郎にせよ浦島太郎にせよ、われわれは子供が幼児のうちにその「お話」を読み聞かせる。

三歳児がそうした昔話を気に入り、毎夜のように、

「これ、読んで」

とねだってきたとして、もちろん当人はそうした自分のことを、

「おれ、昔話フリースでさあ」

と思っているわけではないし、

「この、赤ずきんにオオカミが迫ってくるところのスリル構築、すごくいいんだよね」

と知っているわけではない。

三歳児はまだ「分かっていない」のだ。それが昔話だとか寓話だとかいうことも「分かって」はおらず、それがフィクションという分野だとも「分かって」はおらず、赤ずきんにオオカミが迫ってくる危機のシーンがスリルだとも「分かって」はいない。

誰の目にもあきらかなように、三歳児はお話をただ「体験」するのだ。理解はまだおぼろげでストーリーというような概念もまだ分かってはいないだろうが、そんなことよりも彼は直接の体験を真新しくする。

われわれは大人になると、「分かる」ということに膨張した権威を置き、そのことで威張り散らそうとするのだが、ではそれで青空に見上げる太陽について、われわれ大人のほうが三歳児の見上げるそれよりその存在に近く親しいのだと言い張れるだろうか。われわれは太陽が恒星と呼ばれる天体だということを知っており、そのエネルギー源は水素がヘリウムになる核融合、表面温度は六千度でコロナの温度は百万度、大きさは地球の百三十万倍もあり、地球からの距離はおよそ八光分だと「分かって」いるとして、そのことは三歳児が見上げる太陽の真新しい体験に「勝る」のだろうか。あるいは青空は太陽光が地球大気に乱反射してその色合いを示すのだとして、それでわれわれの見上げる青空は三歳児が見上げるそれより真に迫って青いのだろうか。

幼児は自我が未形成なので、「分かる」という能力については大人より劣るけれども、逆に言えばわれわれ大人はその「分かる」という自我の能力のせいで、「体験する」という能力については幼児に劣っていると言わねばならないのではないか。

じっさい、たとえばあなたが三歳児と共にどこか別の国に移住するとして、あなたが当地の言語に対して勉強熱心になったとしても、連れている三歳児とどちらが早く「ネイティブレベル」になれるかというと、三歳児に勝てる自信はないのではないか。われわれは当地の言語を自前

の母国語で「理解」して習得しようとするだろうが、三歳児は当地の言語を直接「体験」して習得していくだろう。

われわれは三歳児に向けて、

「まだ何もわかっていないんだよね」

と、その自我機能の未成熟をまるで上位の立場から傲（おご）って指摘するふうでいるが、その態度はいかにも浅はかで愚かしいものだ。三歳児はまだ何もわかっていないにせよ、「何もしていない」わけではまったくない。むしろ体験ということに主眼を置くなら、体の真ん中で「何もしていない」のはわれわれ大人の側なのではないか。

かつて、ディエゴ・マラドーナというサッカー選手がいた。すでに故人だが、いまでもアーカイブを観ればその姿は映像にまぶしく残されている。

「ディエゴ」がサッカーボールとたわむれている姿を観ると、まるでディエゴはサッカーと分離できない存在に見える。

誰でもサッカーという球技は知っているし、男性ならそのほとんどは、遊びでいどであれその球技をプレイしたことがあるだろう。

そして、誰でも志を立て、たとえばサッカーボールを一万回蹴れば、サッカーあるいはサッカーボールを「蹴る」ということについて、一定の習熟・レベルアップを得るはずだ。

けれども、われわれが志を立ててサッカーボールを一万回蹴ったとしても、そのことでわれわれはサッカーとの「同一性」には至らないものだ。上達はするが、「わたし」の存在と「サッカー」の本質が同一性におよぶということにはなっていない。

われわれの場合、ただただサッカーのことが「分かってくる」だけだ。脚の振り方、ボールの芯の捉え方、サッカーボールの性質などが「分かってくる」だけ、あとは脚力等のパラメーターが上昇してくるだけだ。まだ初心者だったころのディエゴが、われわれと並んで一万回もサッ

カーボールを蹴ったら、彼は上達していくのではない、サッカーとの同一性に及んでいっただろう。

仮に三歳児が、「赤ずきん」の話を、際限なく一万回でも聞きたがったならば、その三歳児は塗り重ねられる「体験」の果て、「赤ずきん」という話との同一性に及んでいったであろうようにだ。

「同一性に及ぶ」ということ。そのようなことは、あまりに一般のわれわれから縁遠いことだ。それについてせめて、われわれにとって手がかりになるのはそれぞれの母国語だろう。

あなたに、

「自己と母国語の同一性がわかりますか」

と訊いたとして、あなたは、

「どういふことか、よくわかりません」

と答えるかもしれない。

けれども、その「よくわかりません」も、母国語で捉え、母国語で言うのであって、母国語よりもたしかにそのことを捉えて表現する方法は存在しない。

あなたが仮に、自己を母国語から「分離しよう」としたとして、その「分離しよう」という思いがすでに母国語なので、分離は出来ないのだ。

このことは、あなたの存在が、母国語との同一性に及んでいると説明される。

逆に、同一性に及ばず、自己から分離されていると感じられるときのことを、同一性の反対で「疎外」と言う。

あなたがサッカーボールを一万回蹴ったとして、あなたはサッカーとの同一性に及ぶわけではなく、あなたはむしろサッカーとの「疎外」を体感するだろう。

あなたに一万回サッカーボールを蹴らせることは簡単なのだ。たとえば、キックの一回ごとに、あなたに一万円の報酬を支払うというふう

すればよい。一万回蹴れば一億円だ。あなたはこのチャンスを逃しはしないだろう。

もちろん一回ごとに、全力で真剣に蹴っているか、手抜きしていないかのチェックはする。それは審査員に見張らせていればいいだけだ。

そうなれば、いくらあなたがおっくうがりの体質でも、一日百回のキックで百万円、百日で一億円のその行為をするだろう。その結果、やはりあなたはそれなりのキック技術、シュート技術を高めるには違いないし、そのための脚力や体力も少しはつくに違いない。

だが、そのことでやはり、あなたとサッカーの同一性などということが起こってこない。

なぜならここに、

「わたしはサッカーなんです」

などという、そんな話はないからだ。

それに対照して言うと、ディエゴは本当にサッカーだった。

たとえば現代に流行するお笑い芸人が、芸能事務所を辞するなら、その時点で「芸人」ではなくなってしまうだろう。あるいは現代のいわゆる「アイドル」が、事務所を辞したらやはり「もうアイドルじゃないです」ということになるだろう。けれどもそれはよく考えると奇妙な話だ。

立川志の輔が事務所を辞したり、立川一門を辞したりしても、彼はやはり落語家——少なくとも噺家——でありつづけるだろうし、往年の横山やすしのような人が事務所を辞したとしても、やはり「やっさん」は漫才師でありつづけただろう。

桑田佳祐やボブディランは、音楽事務所に所属しているからミュージシャンなのではないし、岡本太郎はコンクールで受賞して画壇にいたから芸術家なのではなかった。

お笑い芸人が事務所を辞めたとなん、芸人でなくなるのなら、彼はもとと笑いや芸事に「疎外」されていたのであって、笑いや芸事に同一

性を得ていたのではなかった。あるいは Youtuber が一切の動画サイトから BAN されたとなんにエンターテイナーでなくなるのだとしたら、彼はもともとエンターテインメントに「疎外」されていたのだということになる。

平易に言って、コンビニエンスストアでアルバイトをしていた人は、そのアルバイトを退職すれば、そのときからもう「コンビニの人」ではなくなるだろう。ほとんどの場合、コンビニエンスストアでアルバイトをする人は、何もコンビニエンスストアとの同一性に至らんとしてそのアルバイトをするわけではなからうから。

一万回、レジ打ちと品出しをしたからといって、「わたしはコンビニなんです」ということにはならない以上、一万回、サッカーボールを蹴ったからところで、「わたしはサッカーなんです」ということにはならない。ということは、一万回「ネタ」をやったとしても、それで「わたしはお笑い芸人なんです」ということにはならないし、一万回ファンと握手したとしても、それで「わたしはアイドルなんです」ということにはならない。

話と色（しき）の差分、体験とそうでないものの差分は、じつにここに現れる。われわれにとってサッカーボールを一万回蹴ることは練習「量」だが、ディエゴにとってはそれは量ではなくなるのだ。ディエゴは彼自身がサッカーという「話」で、桑田佳祐は彼自身が歌という「話」なのだ。立川志の輔はらくごという「話」で、岡本太郎は芸術という「話」だ。

^^話に量はない。もちろんそれぞれが尋常でない練習量を経ているのは事実だろうが、彼らにとってそれは量ではなくなっているのだ。われわれにとって、^^外国語の勉強量は存在しているけれども、母国語の練習量は存在しない。^^ように。あるいは三歳児が、きのう読んでもらったばかりの絵本も、きょうにはまったく足りないというように。

練習量が、量を超えたとき、はじめてわれわれはそこに「体験」を得始

める。それは自我の障壁を越えた証だ。自我の障壁を越え、体の真ん中に届き始めた。体の真ん中に「それ」が届き始めたので、自己と「それ」の同一化が得られた。

仮にあなたのサッカーの才能と実績が、ディエゴ・マラドーナのそれに遠く及ばなかったとしても、あなたとサッカーの同一性は得られうる。あえて言うなら、どこかしら「へっぽこ」でも、何かとの同一性は得られうるのだ。

たとえばあなたが自分の描く絵画との同一性に及ぼうとするとき、あなたの画力が美大生主席のように秀でている必要はない。じつさい単純な画力で言えば、セザンヌは美大に合格できないんじゃないかというぐらい絵が下手だ。もちろん一般人よりは上手だが、さすがにそんなもの一般人と比較することに意味はない。

画力がどうであれ、「セザンヌは絵だ」と、その絵画から言い得てしまふ。セザンヌの絵画はセザンヌの話であり、セザンヌは絵だということじたいがひとつの話だ。セザンヌ当人とその絵画は同一性に至っており、じつさいわれわれはその絵画を観たときに、

「セザンヌを観てきた」

と言う。

一方、美大で主席の○○くんの絵画が展示されていたとして、それを、

「○○を観てきた」

とは言わない。

画力はただの力量・パラメーターであって、それじたいは体験を為すものではないからだ。

じつさいもう画力といえば、生成AIがすべての美大生より優れてしまったので、人同士で画力を競い合うことには、競技以外の意味はなくなってしまった。

いまわたしがこうして書き話している文章じたいもまさにそれであっ

て、いまあなたが読み聞いているこの話も、あなたにとって、

「この人を読んでいる」

「九折さんを読んでいる」

「九折空也を読んでいる」

ということであれば、体験としては意味がないのだ。

あなたの目の前に文章の束をドサツと放り投げ、あなたが数行読むうちに、

「九折さんだな」

と体験されるのでなければ、当のわたしが、わたしの書くものと同一性に及んでいないのであって、そのときはわたし自身、そのみじめさとあわれさを——さらにはその醜さと無様さを——引き受けなくてはならないということになる。

もちろん、そんなみじめなことはありえなくて、わたしはこれを書き話しながら、文学がおれで、この話がおれで、この学門がおれで、この体験がおれだからということ——おれが「在る」ということを——確かめながら書き進んでいる。

どのようにしてそんなことをやればいいのかといって、何度も言うように、体の真ん中だ。

文章量はとくに消えているので、あなたは日常にないページ数を進んでいるだろう。

わたしの書き話す内容を、あなたはなるべく理解しながら進んできていると思うが、それはそれでよいとして、わたしが本当に狙っているのはそこではない。

わたしはあなたの、理解する機構を狙ってはいない。

わたしは、四歳児以降のあなたを狙っているのではなく、それより前、あなたにまだ「分かる」というような機能と記憶さえなかったところを狙っているのだ。

体験するしかなかったときのあなたを狙っている。

そのあなたは、膨らんだ自我の底に埋もれてしまっているだけで、存在していないわけではないからだ。

そうしてけつきよく、わたしが何をやっているか、どういう現象がどのようなにはたらいっているかは、一般にはまったく分からない。本当に分からない。

同一性が分離するわけではないのだから、本当に分からない。

ともあれ、このように、体験とは同一性のことだ。

体の真ん中が主題との同一性に至ることだ。

それは同時に「話」でもある。

一方、自我は「分かる」ということ、分離と分解だから、自我で同一性に及ぶことはできない。

自我はむしろ同一性を切り離すことにはたらく。

よって、自我によって理解されたことは、同一性の反対、「疎外」になっっていく。

人々は一般的に、自我の意識を「わたし」だと思っているけれど、それを「わたし」とする場合、^^「わたし」とは万物から疎外されているもののVVと感ぜられるのだ。

その体感の強固で、かつ定義的だ。

じっさいわれわれの自我は、四歳のころに、

「わたしと、わたしでないもの」

を分離することで得られてきたのだから。

万物との、同一性どころか疎外によって確立されてきた「自我」は、それじたいの機能は正しいとしても、一般にはとんでもない勘違いを内包している。

それは、自我は「わたし」ではないどころか、自我は「他人」だということだ。

われわれは、この勘違いにおいて、サッカーボールを蹴れば蹴るほどサッカーに疎外され、漫才をすればするほど笑いに疎外され、唄えば唄うほど歌に疎外され、絵を描けば描くほど絵画に疎外され、文章を書けば書くほど文学に疎外される。量的に重みは増していくのに、体験からは遠ざかっていくのだ。

一般に「わたし」と誤解されている自我は、誤解されているゆえに、わたしと主題との同一性に至るのではなく、ついに他人との同一性に至る。^^自我はそもそも他人VVなのだ。

え、なんでわたしが他人になるの？

そんなバカなというようなことが本当に起こる。

## 畏

いまからこの章に書き話すことは、わたしの本意とするところではない、ただの「畏」だ。前もって「これは畏です」と教えられているのであれば、ここからの畏は畏としてまともに機能しないだろう。

一見よく出来ているふうの道筋にも、「ここはくり畏の道です」と前もって看板が立てられてあるので、あなたはその畏を踏み抜きはしないだろうが、かといってあなたはどのように、この畏に反論を示し、畏ではない別の道を見出し、それを拓いていくだろうか。あなたはその畏の手前で立ち止まりはするものの、他の方途が果たしてあるのだろうか、途方に暮れて考えさせられる。

そのようにして、この畏は、畏と知らされていてもなかなか考えさせ

られるところがある罠なのだ。

あるいは一部の人は、ここでわたしがどれだけ「罠」と前もって明示し、じつさいにその罠の設置を見せつけたとしても、あえてそのとおりに踏み抜いて、この罠の道をこそ往こうとするのかもしれない。それはもう、そこまでするからには、何がなんでもそれが当人の道ということなのだろう。われわれは互いにそのとき、互いの無事と達成を祈って見送るしかないのであって、われわれがそこで相互に諍（いさか）いを起こす謂（いい）はない。何が正しい道なのかなど誰にもわからない。これは罠だと言いつ張っているわたし自身こそが、別の道で罠にかかり、深い陥穽（はま）に嵌（はま）っているという可能性もまったく否定はできないのだ。

「なんかさあ、オレ、気づいたんだけど」

「なあに？」

「やっぱりさ、自分のやるべきことを、やっていないと、なんかダメだよね」

「どういうこと」

「なんかさ、自分のやるべきことをやっていないと、根本的に、自分のことを、カスだ、って思っちゃう。自分で自分を軽蔑（けいべつ）してしまう」

「あー、それはわかる笑」

「なんかさ、何もやっていない自分のことを、何してんだコイツって、不気味（ふきみ）というか、醜（みにく）いというか、気持ち悪いって感じるんだよね」

「まあね、わたしたちはパンダじゃないから、笹食って寝転がっているだけで暮らすってわけにいかないもんね。たまに、あーもうわたしパンダになりたいとか、イルカになって無意味に海泳（うゑ）いでいたいとかって、思うこともあるけど」

「わかる笑。そうなんだよ、パンダとかイルカとかは、自分自身のことを考えて、『なんだコイツ』とか思ったりしないだろうからね。気楽（きらく）でうらやましいよ。そのへんの石ころかとか、木の根っことかもそうだ」

「たしかに。自分のこと考えたり、責めたりするのって、人間だけなのかも」

「そうなんだよ。それで、オレ気づいたんだけど、ペットボトルとかペーパナイフとか、そういうモノはさ、初めっから意味あるじゃん？」

「え、どういうこと」

「ほら、ペットボトルはもともと容器として作られているんだし、ペーパナイフは、もともと封筒を開けるって用途のために作られているじゃん。でも、オレはどうかというと、オレは、何かのために作られたわけじゃないんだよね。オレは、なんか知らないうちに、両親のあいだに生み落とされてきたっていうだけで笑」

「うーん。まあでもそれは、ご両親の、愛の結晶（けいしょう）ってやつなんじゃないの」

「それはそうかもしれないけどさ。でも、かといって、父親も母親も、何も『オレ』を産もうとしたわけではないんだよ。あくまで子供を産もうとしたのであって、前もって『オレ』を産もうとしたわけじゃない。結果的に、生まれたのがオレだったというだけだよ」

「そっか、そりゃそうよね。産まれる前は、まだその『オレ』はいないんだものね」

「そう。だからさ、オレたちって、前もって用事があって作られた存在じゃないから、究極（きうごく）で言えば“余計なもの”なんだよ。そこがペーパナイフとは違うんだよね」

「“余計なもの”？」

「えっとさ。まず、もともとこの世界があったとしてだよ。そこに別にオレが産まれてこなくても、別にこの世界は何も困らなかつたわけじゃない？ そこにオレが、何か知らんけど生まれ落ちてきたわけ。そこで、なんでキミが生まれてきたのって訊かれても、オレは答えられないし、他の誰も答えられないんだよ。もしオレがペーパナイフだったら、オ

レは封筒を開けるために作られましたって言えるんだけどさ」

「そっかあ、それはたしかにそうだね」

「まあ、だからって、それでオレがオレを卑下するわけじゃないんだけど、いちおう理論上、オレの存在は“余計なもの”としてスタートしているってことなんだ」

「そう言われてみたら、わたしもちょっとわかるかも。わたしもときどき、わたしってなんでこの世界にいるんだろとかって思うことあるし、わたし自身、この世界に対して邪魔な存在なんじゃないかなとかって、思うことある」

「そうそう。だからさ、だからこそなんだけど、自分ってもともと“余計なもの”として生まれてきているのにさ、さらに何もせずに寝転がってばかりいると、ますますキモいというか、いっそのことグロいんだよ。

そんでさ、言っちゃ悪いけど、何もやっていない人のことって、オレたち直観的に『無理』とかって思うじゃん。付き合えて言われても無理、友達になれて言われても無理。飲み会に来られても困るから正直来ないでほしいって笑。そういう無理な人って実際いるわけで」

「それはわかる笑。本当に何もやってきていなくて、それでいて何かおもしろい思いだけ期待している人とか、生理的にゾゾゾってなって、マジ無理ってなる。そっか、あれってグロいから無理なんだ」

「そうなんだよ。それでさ、それだけじゃなくて、何かさ……オレ、まじまじと思ったことあるんだよ。『この世界って、何？』って。なんかその瞬間、見慣れている周りの風景が、じつは見慣れているだけで、本当は何もかもわけわかんない世界なんじゃないかって見えてきて」

「へえ」

「なんかね、その瞬間はすごかった。ハンパじゃなくゾツとした笑。オレ、この世界はもともと、ちゃんとした意味がある世界だと思っていたんだけど、本当は意味なんかなくて、じつは何の意味もないままに、草

木がニョキニョキ生えたり、虫がブンブン飛んでいたりするんだよ。なんかその瞬間は、マジで世界のヴェールが剥げたんだよ。この世界を、マジで直接、生（ナマ）で見た感じ。それはもう、わけがわからなさすぎて、キモくて、グロかった」

「そうなんだ」

「それで、逆に、オレは何をちゃんとやらなきゃって思ったんだよ。うまく言えないけれど、そのときに見たあの無意味な世界？ あれにつながつて、キモい人はキモいんだって、なんかわかったんだ。何もしていない人って、あの無意味な世界の実物だからグロいんだよ。なんかブヨブヨしていて、怪物みたいなんだよね」

「怪物っていうのは、ちょっとわかる。それでそのとき、ペーパーナイフはグロくないんだ？」

「えーっとね。たとえばペーパーナイフが机の中で眠っていたとしても、それは別にグロくはないというか。それは、ペーパーナイフがもともと用途から作られたものだからだね。ペーパーナイフって、机の中で寝ていても『何コイツ』ってならないんだよ。ペーパーナイフは、ペーパーナイフですっていう本質を失うことがないからね。でも、『無理』なおじさんが、ずっと部屋で寝転んでいると、オレたちは『何コイツ』ってなるんだよ。嫌悪のまま、あなたの『本質』は何ですかって思わざるをえない。その人、『本質』がないままずっと部屋に寝転がり続けているんだよ。それで、メシも食うしトイレもする。オナニーとかもするだろうし、何の本質もなしに、たぶん美少女と付き合いたいみたいなことだけは思っていたりするんだろ。そういうのって、まじまじと見つめて、冷静に考えると、マジでグロくて無理じゃん」

「うわー、そういうおじさんはマジで無理。なんかこう、扁桃体に直接くる感じで無理だわ。机でペーパーナイフが寝ているのはぜんぜんかわないけど、そのおじさんがわたしのベッドで寝ていたら、マジでベツ

ドごと焼却処分にするしかないと思う笑。なんでだろうね、たとえば、わたしむかしハムスター飼っていたけど、ハムスターなんかごはんたべてウンチして、それだけでかわいいのにね」

「そう、それはね。それについても、オレ考えたんだけど。それはけっきよく、オレたちがハムスターと違って、自由な存在だからなんだよ」

「自由？ え、待って、自由といえば、うちのハムスターのほうが毎日すごい自由に暮らしていた気がするんだけど笑」

「いや、じつは本当はそうじゃなくて。ハムスターはさ、人間と違って、自分自身について考えるなんてこと出来ないんだよ。よくも悪くもさ。

オレたちは、何か自分の本質になることをやらなきゃ、やっていかなきゃって思うし、それで自分の本質になることって何だろうって、ずっと考えたり、それを探したりするわけじゃん。でもハムスターはそもそもそんなことできないんだよ。ハムスターは、自分の本質を考えて、自分の本質を探して、それに向かっていくなんてことはできない。だからじつは、ハムスターには自分が選んで何者かになっていくなんて自由はないんだよ。ペーパーナイフが、もともと封筒を開けるといふ本質を与えられて生み出されているぶん、もうそれ以外の何かになる自由はないということみたいに」

「えーそうなんだ。でもそうだとすると、わたしいつそ、ハムスターがうらやましいかも。わたし、生きていて何者かにならなきゃって思うことじたい、正直ちょっとしんどいし、ずっとただのハムスターでいいのなら、むしろずっとただのハムスターでいたいって思っちゃう」

「そのとおりだと思う。でも、何の由縁あつてかわからないけれど、オレたちはそうやって、自分の本質、自分が何者になっていくのかっていうことの自由を与えられていて、同時にその自由から逃れられない存在でもあるんだ。だから、自由を与えられている反面、それから逃れられない、自由の刑に処されているっていうことでもあるんだ」

「自由の刑かあ。じゃあ、その刑罰からは逃れられなくて、逃れようとしても、さっきのキモい人みたいになっちゃうわけか」

「そう。だからオレたちはさ、せっかくこうして与えられた自由に、みずから飛び込んでいくというか、みずから身を投げ出していかなきゃいけないんだと思う。オレたちは、自分たちの自由に身を投げ出していくことで、みずから何者かになっていける存在なんだよ。みずから飛び込んでいかないと、オレたちはさっき言った“余計なもの”のままで、グロテスクなままだ。だからそうじゃなく、みずから飛び込んでいくことで、みずから本質を獲得して何者かになっていかなきゃいけない」

「そっか、それがペーパーナイフとは違うわけね。ペーパーナイフは、もともとペーパーナイフとして生まれてきているけれど、わたしたちはみんな、何者でもないって状態で生まれ落ちているものね。あくまでその後、何者かになっていける人もいるし、そうでない人もいる。自分がその自由に身を投げ込んだか否かによって、そこが決まってくるのね」

「そうなんだよ」

「でも、じゃあ、具体的に何をしていったらいいんだろ？ 言っていることはまさにそのとおりだと思うけれど、じゃあみずからで自分の本質に向かっていくのに、具体的に何をしたらいいかが、さっぱりわかんないんだよね。何に身を投げ込めばいいのやら。そこでずっと立ち止まっている気がする。それってたぶん、わたしだけのことじゃないと思うけど」

「そうだね。そのことのひとつの回答には、やっぱり、芸術をやっていることがありうると思う。まずは自分がさ、もともと“余計なもの”として生まれ落ちてきていて、そのことがグロいんだよね。本質はな、いま、先に存在だけはしていて、それでもメシ食ったりトイレしたり、寝転がったりしている。そのままではどうしてもグロい。でも、そのままではグロいもの、そのままでは余計でしかないものが、芸術を手がけ



て、『美』そのものを手がけられるようになったら、それはやはり堂々たる解決だと思うんだよ。『美を作りだすのが自分の本質です』ということになれば、その人の存在は本質を得て、その人はついに何者かになったってことなんだと思う」

「それはすごいわかる。というのはさ、じっさいわたし、自分が何のためにこの世に存在しているかわからなくて、なんとなく絵を描いていた時期があるんだよね。絵といっても、ありきたりなイラストとかアニメっぽいのかだけど。それでも、少ないながらもいちおう何人か、ファンはいてくれたんだ。〇〇さんの絵がすごく好きです、って言うてる人がいて。それやっていると、わたしもちょっとは存在価値あるって、たしかに自己肯定感があつた。そのときは、まったく何も産み出していないわけではなかったからね」

「へえそうなんだ、すごいじゃん」

「でもさ、やっているうちにだんだん、疲れてきちゃうんだ。なんていうか、もともと絵を描くことじたいは好きなんだけど、言ってみれば、それって割と同じことの繰り返しで。作業っちゃあ作業なのであつて。もちろん、やっているうちに少しずつ上手にはなっていくし、時間をかければかけるほど、いい絵にはなっていくんだけどね。なんなんだろう。だんだん、なんかわたしの絵が、そこまでわたしの絵じゃないと気づいてくるというか。ファンの人がチャホヤしてくれるのはありがたいんだけど、それって本当にはわたしの足しにはなってくれていないというか。この人たち、わたしがいなくなったら、他の誰かの絵を観にいくだけなんだろうなーとかも思うしね」

「そっか、それで続けていけなくなるんだ」

「そうだね。けっきょく絵を描きながら、だんだん『別にこれがわたしってわけじゃない』ってことに気づいてきちゃうんだろうな。絵を描いたからってわたし自身がどうこうなるわけでもなし、『わたし何をやって

いるんだろう』『わたしいつまでこれ続けるんだろう』ってなってくる。そうなるとうオワリで、ひたすらしんどくなる」

「そうなんだ」

「それで、途中からはもう、わたしが絵を描いているというより、絵を描くというのをわたしがやらされている、みたいな感じになっていったんだよね。絵を観てくれる人がいるから、描かなきゃって思ってたばって描いていたけど、まるでその人たちによって描かされているだけというか。それでどこかで、わたしもう無理ってなって、辞めちゃった。辞めるときはもう、いきなりでぶつりだった。いろいろ限界だったんだと思う。あー、久しぶりにあのこと思い出すけど、あるとき、あれはあれで、けっこう本気でキツかったんだなあ」

「そんなことがあつたんだ。なるほど、そうやって人に見てもらえるというのは、励みにもなるけど、逆に気になりだすと、すごく気になるもんね」

「そう。なんか監視されているというか、見張られているというか。『新作いつですか？』みたいなこと平気で言われるんだよね。わたしは絵を描くもので、新作を描くものって、なんか決めつけられちゃう。そして、なんでわたしがそれに従わなきゃいけないのって、すごい腹が立つてくる」

「そういう“人の目”とか“決めつけ”ってさ。キツいときはマジでキツいところあるよね。すげえわかるわ。じつはそれについて、オレはひとつ、対抗する方法を発明してんだけど笑」

「え、何々。そんなのあるの」

「前の、バイト先にいた店長がさあ。人のことすげえジロジロ見てくる人だったのね。初めのうちは、面倒見のいい人なんだろうなって思えて良かったんだけど、だんだん、それこそ監視されているみたいに思えてきて。すっげえやりづらかった。その店長、オレのことを若造だと思

っていて、それはまあ年齢的にそうだからいいんだけど、どうしてもオレが若いから、何かしら不十分で、何かしらミスするだろうって、ニヤニヤしながらオレのこと決めつけて見張ってやがんのね。それでもう本当にムカついてきて。内心、オレはテメーのペットじゃねえぞって、怒鳴りつけてやりたかったわ」

「なるほどね。それで、いったいどうやって対抗したの」

「やり方は簡単で、こちらからも店長のことジロジロ見るようにしてやったの。わざとらしく。あまり見たくもないような顔だったけどさ。でもそういう人って、自分が見られることには慣れていなくて、いざそうしてやるとじつは弱くってさ。自分がジロジロ見られると、とたんに取り乱し始めるんだよ。それでね、そのときオレは気づいたの。店長だなんて言っているけれど、その顔をジッと見てやると、じつは何でもない、ぜんぜん奥行きなんか無い人なんだよ。オレのほうばかりジロジロ見られていたから、オレばかり威圧されるというか、オレのほうばかり支配されていたけれど、逆にジロジロ見返してやると、店長のほうにもそんなにたいしたものがあるわけじゃなかったんだ。なんか威張りくさっていたけど、よくよくジッと見返したら、しょぼくれたような唇とか、無駄に横に広がった鼻とか、疲れているばかりの目とかして。おれは内心で、『あなたの“本質”は何なんですか？』って言い続けてやったんだ。向こうがおれのことを勝手に決めつけるなら、こっちだってお前のことを勝手に決めつけてやるぞってね。すると、向こうからの一方的な支配は消えたよ」

「へえ、そんなやり方があるんだ」

「そう。だからそんなのさ、究極、放っておけばいいんだよ。他人ってこっちのこと勝手に決めつけてくるけど、こっちだって向こうのことを勝手に決めつければお互い様なんだから。他人なんてそれでいいし、そのまま放っておけばいいんだよ。お互いに決めつけ合いっこだよ。だか

らさっきの、絵を描いていたって話、それもこっちがジロジロ見られたとき、こっちも向こうを見返してやればよかったのかもね。向こうがこちらをジロジロ見て、新作をねだってくるばかりだったら、こちらからも向こうをジロジロ見て、訊いてやればよかったんだ。あなたの新作はいつですか、あなたの本質は何ですかってね」

「そっかあ、そんなこと考えもしなかったなあ。あのとき、絵を描くの、ずっと続けていくって道もあったのかもね」

「そうだね。そこはきつと、考え方を整理する必要があったと思う。たとえばさ、学校の先生っているじゃん。あれって、本人が学校の先生って思うことよりも、学校に来る生徒が、その人のことを先生って思うことのほうが大事じゃん？ もちろんいまは、教職の資格がどうこうとか、そういうことは抜きにして、もつと単純なこととしてだよ」

「どういふこと」

「だってさ、Aさんが自分だけ、ボクは先生ですって思い込んでいてもさ、百人の生徒が全員、誰もAさんのことを先生だと思わないなら、それはもう先生じゃないじゃん。生徒は全員、Aさんの授業なんか聞かないわけだから、先生として機能しないよね。Aさんがひとりで自分のことを先生って思い込んでいるだけ。一方で、たとえばBさんは、自分のことを先生だと思っていないくても、生徒の全員がBさんを先生だと思っていたとしたら、生徒は全員、B先生に授業をしてくださって頼むわけじゃん。そうなるこそっちがもう先生でしょ」

「それはたしかにそうね」

「だから、自分が学校の先生かどうかって、自分の意識で決まるんじゃないんだ。他人から見えてどう見えるか、他人からどう思われているかで決まるんだよ。で、この場合、Bさんはもうみずから先生になってしまえばいいんだ。みんながBさんを先生だって見ているんだから。さっき言ったように、オレたちは生まれつき自分に『本質』を持っていないだ

ろ。それは後から獲得しなきゃいけないんだって。だから、ここでBさんは、みんなから先生と思われるいるんだから、みずからそのことに身を投げ込んだじゃええいいんだよ」

「Bさんが自分で本質を作れなくても、生徒たちによって、Bさんは自分が先生だという本質を得られるいうこと？」

「そこにみずから身を投げ込めればね。だからキミの場合も、そうしてみんなに絵師だと思われていたなら、キミのほうからそこに身を投げ込んでしまうという方法はあったと思うんだ。自分が何者であるかについて、それを自分で決めなきゃいけないってことはないし、それを自分で作り出さなきゃいけないってことはないんだよ。世の中がそう求めて、社会がそう期待するなら、それこそ自分だってことに飛び込んでしまっ  
っていいんだ」

「Bさんがそうして、学校の先生になりうるってことは、自分の本質を獲得するというとき、その先は必ずしも芸術でなくてもいいってことよね」

「そのとおり。要は、自分の本質を獲得するために、オレたちはみずから飛び込んでいくべき、みずから身を投げ込んでいくべきっていうだけのことだから。たとえば世の中には、いまでもブラック企業が横行していたり、学校ではイジメが横行していたり、世の中のあちこちで人種差別や男女差別があったりするわけじゃん。それで、そうした問題に対して、是正するための活動はいくらでも必要とされているんですよ。世の中は、良くなるほうがいいに決まっているんだから。そこで、これはあくまでたとえばけど、そうした活動が必要だって、それが正義だって、社会はいくらでもそれを求めているところがあるんだっていうなら、誰だってそれに身を投げ込んでいけばいいんだ。正義が必要で、正義が求められているなら、自分がそこに身を投げ込んで、それこそがわたしですってことに飛び込み、そこに本質のある自分を獲得してしまえばいい

んだ」

「たしかにそれは、部屋で寝転がり続けているだけの人とは違うし、”何もやっていない人”とは違うね。趣味に耽っているだけの人も違うし」

「そう。それにね、けっきょく、部屋で寝転がり続けている人だって同じなんだ。自分のやるべきことを何もやらないで、自分のことを内心で軽蔑しながら、けれどもけっきょくグータラし続けるだけの人。それでいて、自分自身に言い訳ばかり貼りつけて、本音ではどこか思い上がりさえしている人。そういう人だって、”そういう人”として世の中からきっちりジロジロ見られているんだよ。 ”そういう人”として社会に取り扱われているし、けっして誇らしくはない ”そういう人”として社会に参加しちゃっているわけ。だから同じだよ。Aさんが自分のことをどう思うかなんて、じつは世の中には関係なくて、じつさいには^^世の中がAさんをどう思うか^^でAさんのことが決定するだろ？ 誰だかってそうして、他人の目から ”そういう人” って決定がされるだけなんだ。自由に身を投げ込んで本質を獲得したら、その人は他人の目から ”そういう人” だし、何にも身を投げ込めずにグロいまま終わった人だって、他人の目から ”そういう人” だ、そういう形で社会参加しているっていう、ただそれだけのことでしかないんだ」

「なるほどそのとおりだと思うわ。であればわたしも、いまさら当たり前のことだけれど、自分のやるべきことに、身を投げ込むようにしてやっていかなきゃいけないと思う。いつまでも『本質』のないままの自分、みじめな自分、醜い自分、グロテスクな自分で行くのは厭だもの。でもそれでいて、これらのことはすべて畏なんでしょう？」

「そうだけれど、いきなりそんなことをさっさと言えば、聞いている人がびっくりしてしまうんじゃないかな。あまりにここまでの流れと急に違いすぎて」

「あ、そうだったかしら。そこはわたしたちの語ることにじゃなかったかもしれない。じゃあわたしたちは引き取りましょう」

宣言しておいたとおり、これらのすべてはただの「畏」だ。とはいえ、そうと先触れされていたとしても、ここに語られたことに明瞭に論駁することは、多くの人にとってそう容易ではないはず。

次のとおり、

「と空白のカギカッコを用意したとして、いったい何をどう書きこめば、ここで語られた思想を、ただの畏でしかないと感じ破ることができのだろうか。」

ここで架空の二人によって語られたことについて……多くの人は、「てやんでい」と江戸っ子ふうの氣勢で撥ねつけるか、「ぐだぐだ言うたらんと、自分のやることやれや!」と、ナニワ節ふうにすごんでビビらせるか、あるいは「××で草」というふうに現代風に冷笑するか、それぐらいしか対抗の方法がないのではないかと思われる。

もちろんそのような対抗の仕方は単に投げやりで、疲労と不毛感を誘って辟易に屈させようとしているだけなので、誠実なやり口とは言えない。

ふたりによって語られたこと、つまり、人はみずから「本質」を獲得するために身を投げ込んでいく存在なのだということが、そしてそれこそが人間に与えられた「自由」なのだということが、この理論と思想のどこがどうして「畏」だというのだろうか。

自分がどこにも進まず、みずから怪物を気取り、彼らふたりにただ感情的な小石を投げつけるというのは簡単なことだが、その裏側では当人が立ち往生してこっそり道標を探しているというのではあまりに恰好がつかない。

それでは次の章で畏の解除に向かおう。

ところで差し当たって彼らに申し上げるのであれば、これは反論というものではないけれども、わたしからは彼らに向けてただこのように言うる、

「きみたちが何に飛び込んでも、きみたちのグロさは解決しない」

## 人類史上屈指のハズレ男

先の章で述べた戯言（たわごと）はすべて、ジャン＝ポール・サルトルという男が唱えたもので、その論を「実存主義」という。

戯言などと言うと怒られよう。第一次世界大戦以降、傷ついた何百万人という人が、このサルトルの実存主義をあてにして、みずからの「本質」を模索したのだ。

いまでもサルトルのファンは多い。いまでも実存主義の信奉者は多く、だからこそ、先の章での語り口も、畏どころかむしろわれわれに肯定的な追い風を吹き込んでくる。

だがわたしは、けっきょくのところサルトルのことをきれいさっぱり否定してしまっているのだ、そのことを隠しても意味がないと思い、このようにそのすべてを「戯言」と断じている。わたしはこのことで、いままさらサルトルと実存主義について議論を持ちかけているのではなく、むしろ議論のテーブルを破砕するために、このように身も蓋もない言い方をしている。

これから示されるわたしの言いようは、とても一般的にはフェアなものとは言えず、サルトルのファンからはひたすら「聞くに堪えない」も

のなるだろう。けれども、サルトルとわたしとのネームバリューの差を考えてみてほしい。ここにいるわたしがさえずる悪声など、河原の塵芥が生み出す微小なノイズにすぎず、巨人の足音が響きわたる中、とても不敬罪の敏感なマイクにさえ拾われないはずだ。サルトルについてここまで悪しきまでにきこるす論は古今に見かけないと思うが、その非を責めようとするのは、道端に打ち捨てられたアンダーグラウンドの低俗雑誌を拾い上げて通読してからその不品行の非を弾劾するに等しい愚だ。衆寡敵せず、サルトル派を毛先ほども感化すること能わず、膨大にいるサルトルのファンはわたしの言いようを一顧だにしないべきだろう。一方ここでまともな読み手は、一般的なサルトルについての言われようを、後日一般的な書籍等で補填するべきに違いない。

サルトルの実存主義、その「言いたいこと」は、次の一節に集約される。

いわく、

「実存は本質に先立つ」

これはさきほどのペーパーナイフのくだりで言われたことだ。ペーパーナイフは「封筒を開ける」という本質が先立って製造されるけれども、人はそうではないし、石ころや木々もそうではない。人は何らの本質も先立たないまま、その存在という事実が先に生じる。この「事実存在」のことを実存と言い（現実存在ともいう）、そこに本質は前もって具えられていないので、「実存は本質に先立つ」という。

そして、サルトルにとってとはにもかくにも、そのことが「グロイ」のだった。

たとえば、マロニエの樹の根っこが、何の本質もないまま事実存在として土にのたくっており、それはどんなことばも無意味にする、ひたすらグロテスクな蛇どものぐねぐねに視える、と言うのだ。

それについてわれわれは、わざわざい抜きことばで、

「知ってる笑」

と言わねばならない。

とにかく実存がグロイ。「ボクはそれを視たんです」と、サルトルはこの原体験を必死に抱え込み、それについて追究を続けたのだが、申し訳ない、わたしとしてはそんな視認は思春期の手前ぐらいに済まされるしようないもので、まずその原体験の抱え込みじたいが子供じみていて話にならない、としか申し上げられない。

（※これらのことは、サルトルの著書「嘔吐」に書かれています）

わたしは、はつきり申し上げておくが、サルトルが述べているグロテスクの光景を、わたし自身で「知っている」のだ。

誇張で言っているのではなく、中学生だったか、その手前だったくらいで、その「無意味でグロテスクな世界」をわたし自身も見ている。

そして、正直に申し上げれば、わたしはまさか、そんなことにずっと縋りつきつづける大のおとながいるとは思わなかったのだ。

わたしはサルトルが見た光景をわたし自身で見ているが、サルトルは、わたしが見た光景を彼自身では見てはいないだろう。

わたしは三歳のころ、近所の草原で、雲の向こうから巨大な何かがわたしのことを見ているのを視た。

もちろん、わたしがそのとき立っていたのは、ただの近所の空き地でしかなく、生えていたのも夏の雑草にすぎず、その広さはまるで「草原」という言いようには当たらないものだった。

けれどもじつさいにそれは、はるかな草原だった。

そして頭上に青空と白い綿雲は光り輝いていた。

わたしはその雲を見上げていたのだが、突如、

「わたしが雲を見上げているだけじゃない、雲の側もこちらを見ている」ということに気づいた。

ひとときわおおきな雲が、ひとときわ白く輝いていて、その向こうに、雲

よりずっと大きな何かが潜んでいる。

それが、わたしのことを見ているのだ。

そんな気がした、ということでは済まされない、それは直接の体験だった。

わたしはおどろき、跳びあがり、震え上がって、走って自宅に逃げ帰った。

わたしはおそろしくて、そのことを、なぜか両親にも話せなかった。

その雲の向こうにいた巨大な存在は、霊なるものに違いなく（当たり前だ）、そのとき雑草のすべても霊なるもので、だからこそそこは草原だった。

そこに立っていた小さなわたしも霊なるものだった。

光も、雲も、すべての色彩も、霊なるものだった。

わたしにとって、ひたすらおそろしい体験だったが、同時にほとんど強制的に、その光景にある主成分は歓喜だった。

わたしがそこで信仰に目覚めたとかいうことではない。

わたしはただ走って逃げたのであって、信仰など必要としないし、そもそも信仰などという概念は当時のわたしにない。

たちの悪い近所の犬に追いかけて、走って逃げて帰ってきたとき、何の信仰も芽生えずに恐怖に震えているだけであろうように、そのときのわたしは何らの信仰を目覚めさせることもなく、ただ震えていた。

「どう見てもそれどころじゃないでしょ」と、わたしは当時の記憶に立って言いたい。

さておき、そこであらためて、

「実存は本質に先立つ」

というようなことを言われたとしても、わたしとしては、  
「そうですね……」

と疑義の生返事をするしかないのだ。

なぜなら、そうではないものに、はるか幼少のときに出くわしてしまっているのだから。

「嘔吐」の主人公ロカンタンが、突如、嘔吐すべきグロテスクな世界に出くわしたのだと、サルトルは鼻息を荒くするのだが、そうは言われても、わたしはもっと幼少のときに、突如、歓喜すべき栄光の世界に出くわしたので、なかなか話が噛み合わないのだ。

よって、まずわたしの三歳のころの体験をもって、サルトルの説はその根幹が砕け散ってしまう。

「実存は本質に先立つ」

「いや、本質よりはるかにエグい本質以上のものが、青空のかたに光り輝いて先立っていたんですが……」

こんな巨大なすれ違いは銀河のどこを探してもないだろうというぐらいに、盛大にすれ違ってしまったている。

はつきり申し上げるが、サルトルの場合は、「あんたに本質がなかっただけ」であって、それを一般化して唱えることじたいが誤りなのだ。

せいぜい、サルトルと「そっち方面」の人においては、たしかに「本質」がなくて、グロテスクな事実存在だけが先立っている、と限定して言わねばならない。

おれは、自分のやるべきことをやらなくても、光り輝いているし、そもそも、自分のやるべきことなど持ち合わせていない。

おれはいま、やるべきことをやっているが、これはおれが、おれの本質を得ようとしてやっていることではない。

おれは何もしなくても本質が百パーセントMAX充填なのだ。

ただ、おれが遊びたがりなので、際限なく遊んでいるだけだ。

そして、おれにとっての遊びというのが、単なる遊蕩ではないというだけだ。

おれにとっては、おれという話を際限なく進みつつけることが遊びだ。

ページをめくって進んでいくことは、その「旅」は、なかなかやめられないことだろうか？

こうしたおれの話が、人々に希望をもたらずか、絶望をもたらずかは定かではない。

あべこべになる可能性がある。

サルトルの話はまだ、「なるほどそうか」「ボクにもやれるかも」と思わせるところがあるが、おれの話はブツ飛びすぎで、とても「ボクにもやれるかも」とは思えないのだ。

サルトルは、どうしても「嘔吐」の原体験、その原風景を抱え込み、それに縋りついて世界を読み解こうとしたのだが、わたしはその風景について知っている。

それは、「話」のない世界の光景だ。

「話」のない光景、つまり、霊なる○○○という、霊性がすべて取り去られた世界だ。

サルトルは、その世界がいかにグロイかを唱え続けるしかなかったのだが、おれの場合は逆で、霊なるものが分与されるだけで、どれだけ世界は輝かしいものになるかというのを唱え続けている。

サルトルが見るマロニエと、おれの見えるマロニエは違うのだ。

サルトルが見るマロニエは、サルトル自身のせいで、すべての霊性が取り除かれる。

するとそこには、何の本質もない「体」だけが残る。

霊なるものがない体は、ただの形骸であって、形骸はつまり「骸（むくろ）」だ。

その「骸」にまつわって得られるもののすべては、「呪」でしかない。

木の根が蛇のかたまりに見えるというのはそういうことだ。

このことは、誇張ではなく、

「割とそういうもんです」

と述べておきたい。

人によって、見る景色というのはそれぐらい違うものなのだ。

マロニエの樹を見て「なんかキモい笑」となっている人は実は世の中に少なくない。

「笑」がついているのは、笑ってごまかさないと、サルトルのように嘔吐してしまうからだ。

その嘔吐に真正面から向き合った点については、わたしはサルトルの業績を大いに評価する。

サルトルは、人類史上屈指のハズレ男だが、そのハズレ男がどのような世界を視るかについてのレポートは、執拗で精緻だった。

そのことについて、サルトル以上の業績を残した者はいないし、きっとこれから先も出てこないのではないかと思う。

さてサルトルは、そうして、マロニエの木にも嘔吐する。

「本質がなくて、ただ存在していて、無意味で、ぶよぶよ、怪物で、むき出し、猥褻、嫌悪感、ウェツ！」

サルトルにとっては、自分自身もそのぶよぶよの怪物だし、他の誰かもそのぶよぶよの怪物だ。

そしてサルトルは、まるでその原風景を「トラウマ」のように抱え、「事実存在だけがあって、本質がないのはヤバイ」と唱えるようになる。

だからサルトルは、

「人は本質を後天的に獲得せねばならず、そのためにみずから『投企』しなくてはならない」

と考えだす。

投企といったあたりの語は、サルトル独自の語ではなく、他の哲学にも見られる語だ。

自分の可能性に向けて身を投げ込む、という意味だと捉えて誤りでは

ない。

なぜ人は、投企しなくてはならないのか。イヌやネコやマロニエの樹は投企などしていないのに。

それについてサルトルは、

「人間が、自由な存在だからだ」

と考えだす。

サルトルがなぜそんな方向に頭をひねったのかは不明だが、とにかくその「実存が先立つ」ということについて、サルトルは前向きに捉えようとしたようだ。

人は、実存が先立ち、本質を後付けにするしかないが、それは、人が本質を欠落させてこの世に生まれてきたということではなく、

「人は、生まれてから後、みずからで本質を選び、みずからで獲得してゆけるということだ。それが人に与えられた『自由』なのだ」

ということにした。

このあたりのことは、じつは、単にサルトルがフランス人だからということも関係している。

よもや、まじめな学者ら、謹厳な研究者たちはそんなことを言わないだろうが、サルトルの論には大いに、フレンチのテイスト、フランス文学の陰鬱さ、いわゆるノワールの演出、何につけ悲劇ぶりがるフランス人のノリ、などが影響している。

フランスは、フランス革命を歴史上の栄光およびアイデンティティと捉えているから、民衆が自由を獲得するということ、および「自由」という語の響きそのものについて、無関心ではありえないだろう。

よって、サルトルいわくの「投企は人間の自由の現れなのだ」という説明も、とてもフランス的なのだ。

論の内容以前に、弁論術の手法として、アリストテレスが二重丸をつけるのではないということ。

このことを抜きにして実存主義とその影響力をまともな語ることはできない。

断じて言うが、サルトルの論など、アメリカのサンフランシスコからは出てこないのだ。

さすがにそれぐらいは、サルトル本人も、笑って肯てくれるものと思う。

サーフィンUSAの砂浜で「嘔吐」は書かれねえよ。

だからそれぐらい、実態は雰囲気優先されるていどのもので、そんなにたしかな哲学ではないということだ。

あなたがフランス映画を観た場合、その映画は冒頭からなぜか一方的な「悲劇アピール」があり、画面はずっと薄暗くて、ストーリーは抑揚があまりなく陰鬱で、語られていることの意味はあいまいで不明なまま、なぜかやたらに「あわれな奴」が長時間映し出され、「あわれな奴」と対比的に「うつくしい者」の優越が物憂げに映し出され、物憂げに、物憂げに……そして唐突にブツツと終わるのがフランス映画だ。

サルトルの実存主義は、大いにこのフランスのノワールテイストがクテルされているものと捉えてよい。

あくまでその味わいだからこそ酔いしれることができるのであって、メキシコでソーダ割りにされてタバスコを入れた実存主義なんか誰も飲まないのだ。

それで、投企するといつて、何に投企すればいいのかはよくわからない。

投企といつて、芸術への言及、芸術への志向、芸術へのあこがれはたしかに示された。

「嘔吐」の主人公ロカンタンは芸術家（小説家）になるといつてその小説は終わるのだ。

ただ、肝腎なところ、ロカンタンが芸術家になって「本質」を得まし



た、という描写はない。

まるでそこまできて、

「どうでしょうねえ」

と、あいまいに濁して小説「嘔吐」は終わってしまったのだ。

（おれの記憶では、「嘔吐」はたしかそういう話だったはずだ、まさか記憶違いで誤っていたら申し訳ない）

ロカンタンは、カフェでジャズ音楽を耳にし、

「バラバラの音がひとつになって、音楽を織り成す」

ということを見出し、そのことを手掛かりに芸術家（小説家）への道に向かうのだが、そうはいっても、サルトル自身がジャズの演奏を手がけたとして、それがひとつの音楽を為したかどうかはさだかではない。

バラバラの音がひとつになって音楽を織り成すというのはそのとおりだが、そのことのじつさいは意味不明で絶望的にむつかしいのだ。

サルトルがジャズを演奏したら、その音は音楽から「疎外」され、サルトルは芸術から「疎外」されたのではないかと思うが、どうだろう。

「疎外」についてはさらに後に述べる。

実存主義が、「本質をみずから求めましょう」「投企しろ」「それが人の自由の現れです」と言い立て、そのひとつの方向性に芸術を置きはしたものの、けっきょく芸術はどうなんですかということについてサルトルは回答しないまま、サルトルの実存主義は次の投企について発明し、それを語り始めた。

それがアンガージュマンだった。

なぜサルトルはアンガージュマンを言い出したのだろうか。

このあたり、サルトルの内心はさだかではないのだが、きつと芸術を志向して投企するということが、サルトル自身でうまくいかなかったのではなからうか。

それでサルトルは、

「芸術はもういいから、何かの社会的な活動、社会運動などに投企しよう。人は、社会に対して責任のある態度を取り、社会に対して具体的な行動をする人になるべきなんだよね」と言い出した。

なぜなのかわからない。

単純に言って、そういったものが当時流行っていたからというのもあるだろう。

先に述べたように、フレンチテイストを盛り込んだサルトルの論について、時代の雰囲気というものを忘れてはいけない。

「アカ」という殺伐とした言い方が現代にも残るほど、当時は共産主義運動が暴力的なまでに流行っていたので、そのことの影響はあったのだろう。当時はとても無視できるような潮流ではなかったはず。

サルトルは、目の前で盛り上がっている社会運動を指差し、  
「自分の本質を、自分で模索するのはもうやめて、目の前にあるやつに飛び込みましょう」と言い出した。

「その、目の前にあるやつは、たしかに自分で作り出したやつではなくて、他人が作り出したやつかもしれませんが、そんなこと気にせず、その他人が作り出したやつに『全乗っかり』しましょう」

と言い出した。

そして、

「それがアンガージュマンなのです」

ということになった。

アンガージュマンは、日本語では「参加」とか「拘束」とか訳されるようだが、わたし自身の考究においては、「他人の作った価値観と活動にやけくそでも『全乗っかり』しろ」というふうにし訳せない。

なぜそんなことになったのかについては、さしあたりわたしの知る限

りでは、定説たりうるものは見つからない。

おれ自身で言うと、おれはすっかり芸術家・小説家がおれの本質になってしまったので、とてもじゃないが、社会運動などに首を突っ込んでいるヒマはない。

首を突っ込むだけならまだしも、おれが社会運動に「首っただけ」になり、そこに自己の本質を求めるようになったら、むしろおれがおれの本質を放棄したことになるじゃない、そのほうがグロテスクだろう。

それでわたしは思うのだが、よりにもよって芸術は、「他人の作ったものに全乗っかり」ということが最もできないジャンルなのだ。

芸術といって、たとえばショパンのピアノ曲を弾くとして、それはただ演奏するだけでもむづかしいけれど、それを楽譜のとおり正しく弾けたとして、そのことは残念ながら芸術とは呼ばれない。そのプレイヤ―は器楽演奏者としては優れていて、そうした人が必要とされる局面も多いけれど、そのことはやはりたとえば「バックハウスを聴いた」というふうには表現されないものだ。ショパンの遺した楽譜に込められた意図を読み取りながら、もちろん譜面通りに演奏し、それでもそれは演奏者の語る「話」として聞こえてくるということではなければ、そこに演奏者の芸術家としての役割はない。

譜面通りに演奏してどうして演奏者によって違いが出てくるのか、素人のわれわれにはまったくわかりかねるところだが、そのことはたとえば古典落語に置き換えてみればわかる。古典落語は漸の筋が決まっているのだから、その一言一句を決めてしまつてテキスト化することは容易に可能だろう。そしてそのテキストを丸暗記するということは、執拗な努力をもつてするならわれわれの誰にでも可能なことだ。ただそれによつてとうぜん、そのテキストの暗記者が古典落語の名人ということにはならない。同じセリフを同じ速さで、似たような抑揚で発声したとしても、やはりそこにどのように「話」が聞こえてくるかには大きな差があ

るだろう。たちまち江戸時代に引きずり込まれるような落語もあれば、退屈すぎてあくびの出る落語もあるだろうし、あるいはまるで「聞くに堪えない」というひどい落語とその痛々しさもありうると、われわれは容易に想像できてしまう。

そしてわれわれは、フランス人のサルトルに日本の古典落語を強要するわけではないが、仮に「嘔吐」の主人公ロカンタンが落語に入門したとして……ロカンタンが落語の本質に同一性を得てゆき、彼の「しじみ売り」の口上がついに彼のグロテスクな実存の問題を解決するのだというふうには、なかなか肯定的に想像しないのだ。それこそ寄席の高座から漸を切り出すロカンタンは、そこから一層のグロテスクな光景を――ドンズベリの舞台を――展開してしまふのではないかと、われわれの想像力には予感されてしまふ。

つまりロカンタンを見て、

「いや、彼に本当の芸術は無理でしょ笑」

とわれわれは無慈悲に判断する。

あなたが古典落語のテキストを丸暗記し、何の稽古もないまま高座についたならば、あなたの展開する漸は、じつに素人っぽい、残念ながら「いまいち聞くに堪えないもの」になってしまうのではなからうか。それはとうぜんだ、なぜならそれは素人っぽいというより、何の稽古もついている素人そのもののだから。それで、素人のまま高座に上るわけにはいかないとして、あなたは稽古といつていわゆる練習をするのだが、そうした練習がただちにあなたを芸事の高みへ引き上げるというようなことを、あなたはまるで信じないはずだ。

練習をすれば練習の痕跡は出てくるけれども、だからといって、「見事、しじみ売りそのものでしたね！」

ということにはならない。

あなたの高座は、そこまで下手くそというわけではないけれども、何

ともいえず「ウソっぽい」ものになるのだ。しじみ売りをやるにはやったが、そこにいるべき鼠小僧次郎吉がない。そこにあるべき江戸時代がそこにはなく、そこにあるべき人情がそこにはない。

このようなことを「疎外」と言う。あなたは高座の上で、ともすれば地獄のような苦しさを味わう。観客は白け、笑いどころのことごとくは滑っている。

疎外とは何なのか。疎外とはまた「他有化」でもある（特にサルトルの論においては）。

疎外とはたとえば、先に述べた例でいえば、一回あたり一万円であなただにサッカーボールを蹴らせるというようなことだ。あるいはあなたが若い女性だったら、あなたをアイドルに仕立てて、あなたに握手一回あたり一万円の報酬を与える。ただしもちろん、そのときのあなたが「笑顔で元氣か」「塩対応でないか」ということを係員が見張るものとする。

そうするとあなたは、一万人と握手して一億円を得られるのだから、そのとおりのことをするだろうが、そのときのあなたの笑顔は、まるであなた自身のものではなくなっている。そのように、本来は自分のものであったものが自分のものでなくなることを「疎外」という。自分のものでなくなり他の何かのものになるので「他有化」ということもある。

低賃金のスタッフを高級レストランで働かせれば、スタッフたちは自分が給仕しているような食事を自分では食べることがなく、自分の世界ではないものに給仕しているようになるので、そうしたことも疎外と呼ばれる。自分では飲み食いすることのないキャビアとワインを笑顔で運び続けるわけだ。

われわれが自分と家族の飲み水のために甕を運んで湧水まで歩くといふとき、その労働はわれわれに疎外をもたらさないが、資本家の趣味のために木箱に入れられた骨とう品の甕を運ぶとなると、賃金はもらえないせよその労働は労働者に疎外をもたらしていよう。労働者は資本家の

趣味のためと賃金のためにみずからの手足を酷使しており、みずからの手足と体力がまるで自分のものではなくなってしまう。そのとき、やはりみずからの手足と体力が他人のことに消費されるので、これも他有化ということになる。

さらにサルトルは、自分が他人にジロジロ見られることによって、自分自分のものでなくなるといふ。

たとえばわれわれが、サルトル本人を、

「みずばらしい、あわれな小男」

と、決めつけて、見つめたとする。

そのまなざしについて、サルトル自身がどのように対抗したとして、われわれの決めつけがどうして覆されることがありえようか。

彼がどのような服を着て、どのような立場に就き、どのようなセリフを吐いたとしても、われわれは彼にあてがった決めつけを撤回しない。

「はは、やはりみずばらしい、あわれな小男だ」

そうして「他人のまなざし」によって自分が他人のものになってしまったことを、サルトルは他有化と呼び、そのことは同時に疎外も意味する。

そこでサルトルは、

「そのときは、こっちも向こうをジロジロ見返してやればいい」

ということを実行に言い出すのだ。

「対人関係って、けっきょくそういう、まなざしのバトルだね。どっちが勝つか、まなざしの相克だよ」

と、そんなことをサルトルは本当に言うのだ。

サルトルはそのことについてわざわざ戯曲（※）まで作り、

「地獄とは他人のことだ！」

と叫びまですた。

（※作品名「出口なし」）

作中、つまるところ主人公は、他人によって決めつけられ、他人によ

って所有されるということ、そのことじたいが地獄なのだとラストシーンで叫ぶ。

つまりサルトルは、本当の本当に、根こそぎ「本質」のない男だったのだ。他人によって決めつけられ、それだけですべてが終わりになってしまふというほど、「本質」のない男。これほどまでに「本質」のない者は、人類史上に果たしてどこまでいたものか、少なくともサルトルはその史上屈指のひとりと言える。

サルトルには本当に「本質」がなかったので、誰かにジロリと見られると、それだけで他有化されてしまったのだ。むろん、まともに「本質」のある者なら、人に少々ジロジロ見られたところで「他有化された！」なんてことにはならない。この点、サルトルは異常というより、ただそのことの「特級」だった。

ただ、よくわからないのはサルトルが勝手に、

「みんなそうでしょ？」

と決めつけて論を進めたことなのだ。

サルトルの聴いていたジャズの演奏者たちは、「世界はグロです」なんてまるで唄っていなかったはずなのに、サルトルはそれこそ「みんなそうでしょ？」というわけのわからない決めつけをもって論を進めた。

そんな、人類史上屈指にまで「本質」のない男が、よりにもよって芸術に色気を出すとどうなるだろう？ そこに現れてくるのは、まさか小粋なまとまりを見せるジャズではありえない。そこに現れてくるのは、グロテスクなタコ足あるいは蛇どものかたまりの怪物だった。

じつは、サルトルが木の根っこに見つけた怪物には、サルトルの視認だけでない類型があるのだ。ラブクラフトというSF作家が、神話ではない疑似神話を悪趣味から醸成し、その世界観をファンともども作り出していくという有名なムーブメントが一時期あった。いわゆる「クトゥルフ神話」というものだ。クトゥルフという語で画像検索してもらえ

ば、わたしが述べている「グロテスクなタコ足あるいは蛇どものかたまりの怪物」というのがどういうものを指しているのか、たちどころに理解してもらえらるだろう。

(図、Wikipedia「クトゥルフ」より引用)



SF作家の悪趣味あるいは悪ふざけから盛り上がったクトゥルフ神話の設定から言うならば、サルトルはクトゥルフの神々に会い、そのコズミックホラーから正気度(SAN値)を失ったのだということになる。クトゥルフの神々はみな、生々しい怪物であり、巨大でかつ知性や対話性を持っていない。知性を持たず無意味な神を——グロテスクさそのものの神を——クトゥルフ神話は唱える。ただしもちろん、これはSF作家たちの空想が作り出したもので、歴然とこれは神話ではない。

^^そうではなく、神話を否定した者たちが、みずからで神話を構築せんと模索すると、このような怪物が視界に現れてくるということだろう。わたししが申し上げたいのは、SF作家らによるクトゥルフ神話の設定はお遊びだが、神話を否定した者たちが決まってそういうヴィジョンを観るということは、設定ではなくわれわれの事実だということだ。ラブクラフトはそのひとりだったし、サルトルもそのひとりだったのではないか。

サルトルは言わずもがな無神論者だ。サルトルの唱えた実存主義は、わざわざ「無神論的実存主義」と言われることもある。

むしろ、西洋哲学者のうち、無神論を唱え始めたのは誰かといえば、その第一号に挙げてよいのがサルトルだ。サルトルは第一に「神はいない」と叫び、彼にとつて「神はいない」ということは何よりも土台にある確信だった。神がいらないなら神話も否定しているだろう。

考えるまでもないことだが、もし神・創造主がいるのならば、創造主がそれぞれの存在に本質を与えているはずなので、そもそもの実存主義、「実存は本質に先立つ」

を言えなくなり、この時点で実存主義は終焉してしまう。

サルトルはこの世界に、神はいないと断じ、代わりにグロテスクな怪物を絶対的存在として視たのだ。

そして終生、そのグロテスクな怪物が彼の神となった。

彼はどこまでも、自分はそれを「視た」のだと、熱っぽく、長広舌を振るい続けた。

では先の章に仕掛けた罠の解除に移ろう。

君たちの言うところ、何もやっていない人は「キモくて無理」だという。実存だけが先立っていてグロテスクなのだ。それについては、わたしもそのとおりだと思うが、だからといって、その言いようを振り回したところで、君たちが難を逃れたわけではまったくない。

実存だけがあって本質がない、と君たちは言う。だからそこから「自分たちは何かをやっている」とのたまひ、まるで自由を得て脱出が叶ったふう君たちは振る舞うが、それは勇み足というもので、君たちには引き続き本質がないままじゃないのか。なぜ一足飛びに英雄になったかのごとく美的な自分を振る舞うのか。

たとえるなら、「解脱しよう」と言いあつた修行者たちがいたとして、彼らはそれを言い合っただけで解脱を得たというわけではあるまい？

彼らはいまだ凡俗の内にあるはずだ。それがなぜすでに解脱を得た者のふう振る舞うのか。

君たちは、体の真ん中に何の話もなく、体の真ん中が空っぽなのだろう。それで、体の真ん中の空洞について、それを「諦めた」人のことを君たちは悪く言っているのだが、君たちがその諦めた人を踏んづけたところで、君たちがその人より上位に立てたというわけではない。

いつのまに、「真ん中が空っぽ」ということの咎からすでに逃れたつもりになっているのか。

「投企」。自分が本質的にどのような者になっていくかは、そうしてふざけたカタログファッションのように選ぶものではない。これまで体の真ん中に何も得てきていない君たちが、とつかえひつかえ、その日の気分で「自分」を投企形成していこうというのか。その稚拙で虫の好すぎる発想は羞恥心において聞くに堪えない。そのただならぬ軽薄さと愚かしさの予感ぐらみみずからで覚えたまえ。

自分の「お好み」ほうへふらふら寄っていくだけの引力の挙動を、まともな人は「自由」だなんて呼ばない。自分が本質的にどのような者になっていくかは、もっと主体的に向き合い、主体的に導かれ、主体的に獲得されていくものだ。自由、「自らに由る」というのは、嘔吐をもよおす自分の世界をほっかむりするというのではなく、その醜い自分を世界の只中に立たしめ、何もごまかさず何にも頼らず、呼ばれてもいない太陽のほうをひとり見上げるとのことだ。呪われた泥の水たまりがそれでも澄んだ青空を映そうとすることだ。馬車の車輪に踏まれても気にせずふたたび空を映そうとするのだ。そのように、自らに由れ。それは、自我の言いなりにならないという爆発的なことだ。それをあろうことか、清冽な爆発による自由でなく不潔な感情で聞こえのよい自由を虚弱に標榜し、あまつさえけっきょくは他人の作った価値観に乗っかうなどとは自己矛盾で言語道断だ。そのどこが自由なのか。自分の「本質」をど

こかの誰かが樽で丁寧に醸成してくれていて、自分はその樽に入浴させてもらって居座るといふつもりでいるのか。あるいはその樽からスポイトでこっそり「本質」を吸い上げ、自分に注入すればそれがすべて自分のものになると思っているのか。

「余計なもの」といって、初めから誰かから必要とされたいとか、世界に必要とされたいとか、そう思っている精神がおこがましい。そうではない、生まれたから生きる、死なねばならないときは死ぬ、それでいいのだ。他のことをしようとするな。脇目も振らず生きる。自分の生き死にに自分のこだわりを入れさせてもらおうというのが思い上がりだ。全力で生き、全身全霊で生き、死んだときにもそのことに気づかないほどに生きる。そうすれば、本質のあるなしなんか関係ない、君は爆発して輝いているだろう。

ペーパーナイフがグロテスクでなかったとしたら、そのペーパーナイフはむしろ退屈していて、それはうつくしくないペーパーナイフなのだ。ペーパーナイフこそグロテスクに作られるべきだ。他人に用意された本質など、ペーパーナイフでさえ唾棄するだろう。おれの机で眠っているペーパーナイフは、「おれの」ペーパーナイフだということを生々しくよろこび、その栄光に輝いている。封筒を開けるつもりなんかわずかもない。用途なんかどうでもいいのだ。ペーパーナイフが封筒を開封するなんてこの世界で最も要らないことだ。君は食事のナイフで封筒を開け、ペーパーナイフで食事しなさい。君はそんなことにいちいち本質がどうか言い出す、その眠たい根性をさっさと捨てなくてはならない。

君は自由の刑なんて言い方をしたが、それを刑務所だと言うなら、みずからもっと深い刑務所に行きなさい。こんな刑務所ではぬるすぎてくだらないと言って。焼かれたくてたまらん奴に火刑は通じないのだ。解放されなくちゃいけないということほど不自由なことではない。

本質が与えられそうになつたらただちに、

「おれには要らない」

とほえんでそれを突き返せ。

なぜ君は、すべてについて、どだい生つちよろい道を進むことばかり考えているんだ。

だいいち君は、自分がペーパーナイフになりたいなんて馬鹿なことを本気で思っているのか？ きょうはペーパーナイフになり、明日はペットボトルになりたいのか。それで仮に、君が君の言うとおりグロテスクでなくなったとしても、まるで君は百円ショップに並ぶ什器でしかないじゃないか。本質がないというなら、同じく本質のない、炎や星になってみせろ。それこそが君が君を生きるということだ。自分が自分の弱さのせいでしょぼくれているということから目を逸らすな。生まれつきの本質がどうこうなんてごもつともらしく責任転嫁をするな。

他人にジロジロ見られて、支配されるとか言っているが、それはあきらかに単純なことで、君が自分自身を持っていないだけのことすぎない。自分自身を持ってないのであれば自由を標榜するな。自分自身を持たない者がどうして自らに由るということができようか。他人にジロジロ見られて支配される自分などというものは、「世間的な自分」でしかない。であれば、そんなものは焼き尽くして、灰にしてどうにでもしてくださいと言え。世間的な自分を焼き尽くせば、バイト先の店長がジロジロ見るものなんかもう残っていない。そこからバイト先の店長をジロジロ見返すなどという汚らしいことをするな。君がやっていることは単に「集中力のない人」がよくやるあてつけがましい振る舞いでしかない。同じ睨みつけるなら、剥き出しになった世界のバケモノを睨みつけ、そこから一歩も退くな。君だって、バイト先の店長なんて小物と戦うことに何の栄光も見出してないんだらう。バケモノを睨みつけて「ハムスター一匹より値打ちがない」と言いつけてやれ。

それから、絵を描いていた君は、ファンなんてまるで追いついていけ

ないぐらい描きなさい。ファンに気に入られる安全なものを描くのではなく、ファンのつもりだった人が連れ去られて危険を覚えるようなものを描きなさい。

他人が君たちをどう見ているか、どう思っているかなんて、君たちは本当に他人の言い分をあてにするつもりなのか。その軽薄な、こざかしい口先をあてにするつもりなのか。他人から評価されて決定する世間的な自分など、はじめからゼロ円のタグをつけておけ。そして、神がいるとかいないとか、そんなどうでもいいことを自分の武器にしようとせず、常に自分の存在とすべてが真ん中から重なっているようでありなさい。自分の体の真ん中が、自分そのものとビタツと重なり、この世界ともビタツと重なっている、「そのことから一切オリない」というまま生きなさい。それ以外のことは、ただの他人と引力まかせの、右往左往でしかない。

自由を見つけようとするな。むしろ自由は「無い」のだと教わって、そのとき君だけがそのあるはずがない自由を手にとつて掲げてみせろ。そうしたら君が生きた話、君が存在した話はそこにあるのであって、そのことを他人が本質と呼ぼうが神と呼ぼうが、そんなことは君たちには関係のないことなんだ。

と、このとおり、先の章で示した尤（もっと）もらしい会話は、じつはシヨボクレを大前提にしたごまかしのロジックにすぎず、そのすべてはただの罠でしかないのだ。

実存は本質に先立つと言うなら、「そうではない」という実物をぶつけてやればよかったし、「地獄とは他人のことだ」と言うならば、「おれという歓喜ばかりが勝る」という実物をぶつけてやればよかった。せせこましく自由だと言うのなら、そうではない「主体だ」という実物をぶつけてやればよかった。「まなぎしの相克」と言うのなら、声でブツ飛ばしてやればよかった。

おれはおれという話と共に生まれ落ちている。

実存だの本質だの、「おれ」よりも先立つものは存在しない。

おれはおれという話になりきるのみであつて、それ以外のものには一ミリたりともならない。

仮におれがひとりで一国の革命を果たしたとしても、おれはそのまま誰にもあいさつせず帰宅するだろう。

おれはおれがおれであること以外に用事はないからだ。

仮に、サルトルが欲しがっていた「本質」とやらを認めてやるとするならば、その「本質」のほうがおれのことを求めて、焦がれて、おれのところに集まってくるから、そういうことならおれがその本質というやつを、おれの内へ受け入れてやってもいい。

おれの側から本質とやらのほうへ色気を出して寄っていくということに決していない。

実存と言いたがるけれども、そもそもおれは、宇宙が爆発して地球が消え去ったとしても、おれが消えるつもりはない。

なぜおれが宇宙とやらに乗っかって存在「させてもらう」なんてことをしなくてはならないのだ、おれはそんな虚弱な奴になった覚えはない。

このとおり、実存主義なんて全部ただのシヨボクレ向けの罠でしかないのだが、だからといって、おれの話が一般の人々を励ますかというところ、それはとても怪しいのだった。

サルトルの論は、シヨボクレを惹きつけて、励ますところが大きいようだけれども、そもそもの違いとして、おれは何かを論じているのではないということがある。

おれはただおれの話をしているだけだ。

それで、あなたはただおれを体験しているだけだ。

言ってみれば、おれはあなたにとって体験可能な存在ということだ。サルトルの罠が罠たるゆえんは、彼の言いように乗せられたとして、

けつきよくあなたが体験可能なあなたにはなれないということなのだった。

ここまで悪しざまに言うと、サルトルの怨霊が枕元に立ちそうに思われるかもしれないが、安心してくれ、サルトルは「神はいない」と言った。彼はもう彼のことばどおり存在していない。

あなたは、実存主義からの呼びかけに、それなりの引力を覚えるかもしれないけれど、おれは常にあなたに、

「シヨボクレじたいを辞める、という選択肢もあるよ」

と申し立てていたい。

シヨボクレじたいを辞めてしまうなら、誰だつて実存主義には何の用事もないのだ。

## 真ん中が空っぽのあなたへ

サルトルはけつきよく、「ボクの真ん中が空っぽだよ」「ボクの本質が無いよう」ということを、最後まで受け入れられなかっただけの、ただの小男だった。だからあてつけのように、後世の人々は彼を「知の巨人」などと呼んであざける。

自分の真ん中が空っぽだと言って、そのことを受け入れられない人などいくらでもいるだろう。それじたいは陳腐なものだ。ただ、そこから現した悪あがきが、サルトルにおいては執拗で精緻で、まるで夢に満ちているかのようで、空前絶後だった。

自分の真ん中が空っぽの、本質に見捨てられた小男が、カフェで壮大

な自己弁護を考え続け、考え続け……やがて退屈しだした人々がそれに耳を傾ける。

みなそれぞれで、こころのうちに、さだかでない徒花（あだばな）を思い描きながら。

まさにフランス、パリ、サンジェルマン通りの夕暮れには、そういう男の悲劇が似合いそうではないか？

わたしも、もしわたしの真ん中を貫く話がなかったら、毎日は退屈だったろうので、わたしもヴァカンスに焦がれながら、一緒になってその物憂げな耽美の席に連なっていたかったかもしれない。

けれどもわたし自身において、そうしたアンニユイの暴虐に真理を求め、それを崇拜して従おうとする時期は過ぎてしまった。それもすでにかなり昔のことだ。わたしは席を立ち上がらざるを得なかった。「ちよつと出てくる」と言い、それ以来もうわたしはその席に戻っていない。

哲学者ぶっているけれども、性根は耽美屋で、何を大切に感じているかについては、そこいらの女子中学生と変わらない。

女子中学生が、初音ミクみたいな歌声に耽美するよりは、百年前のフランスのほうがおしゃれだねというだけのことだ。そのことは大いに認めよう。とはいえそのおしゃれぶりだって、数百年のあいだ植民地をむさぼっていた王権と貴族たちの遺産のすねをかじっていただけにすぎない。優越……優越！ 彼らはしよせんその優越のゆりかごから出て地表に降り立つことはしなかった。一度降り立つてはもうそのゆりかごには戻らせてもらえないのだから。そしてわたしは彼らについて、彼らがそのゆりかごの外に踏み出そうとするような野暮をむしろ制したく思う。あなたがたはそこに居るのが似合う。たとえば三島由紀夫がどれだけ肉体派ぶつてもしよせん炭鉱夫にはなれなかっただろうことのように、わたしは石炭を炉に投げ入れて汗まみれになっている鉄道員サルトルを見たくはないのだ。まして彼がその屈託のない笑顔ぶりで人々に愛されて



いるというような光景は。

「ハハわたしはその優越に君たちのかけがえない耽美があることは認めるが、それは耽美であって美ではないということを告げておきたいV。耽美は美どころかむしろ醜いものだが、優越に拠る彼らはその醜さにも耽美しようとする宗教人なのだということをわたしはすでに知っているのだ。君たちは耽美によってこそけつきよくのところ美への到達をみずから不可能とするだろう。」

いちおうフランス由来の論を取り扱ったものだから、フランス文学の魂を導入してそれっぽく述べた。中にはやはり、このていどのフレンチテイストも書き述べられないで、えんえん悶絶している文学研究者や、文学部教授もいるものだ。

さっさと何とかしろ。

フランス文学にあこがれつづけているおじさん、フランス文学と架空の自分を同一視しているおじさんは、

「銀座が似合う女になりたいんです!」

とマジで言っている女と同じなのだ。

サルトルを理解するためには、サルトルの視た原風景、「卑猥でぶよぶよした無秩序なカタマリ」を共有する必要がある。ベンチに座ってマロニエの樹を見て、そのサルトル景色を共有するのだ。

わたしはそれについて堂々と、「知ってる笑」と、い抜きことばで応えたい。わたしは三歳のときにすべての景色が壮大な霊なるものの栄光に満ちていくのを見たことがあるし(というよりはその直下に立っていたし)、それと同時に、その逆の景色も見たことがあるのだ。

何のことはない、この世界は無意味なのだから、そのことをまともに理解して公園のベンチにでも座れば済む。

しかしおどろいたことに、哲学や文学を考究する専門の教授でさえ、この初歩中の初歩を越えられないでいることはよくあるのだ。

わたしはこのように言う。

「今ここにいるすべての人は、百五十年前にはおらんかったでしょ」そして、続けてこう言う。

「今ここにいるすべての人は、百五十年後にはもうおらんでしょう」だから別に何もありませんよ。

という、ただそれだけの、当たり前のことを言うと、それだけでも人はざわつく。

「いや、それは……」

何かしら制止が入るけれども、

「はい、何ですか」

「百五十年後にはみんな消えてしまっている、だからこそ、今を大切にすべきだし、何かを残そうって思うんじゃないか」

「そう思ってくださいってもけっこうですけど、そう思っているあなたが百五十年後にはいないですね、ということをお願いしているんです。今を大切にしたいあなたはそのときもう消えていますし、今を大切にしないあなたもそのときもう消えています。何かを残そうって思ったあなたも消えていますし、何も残さないでいいやと思ったあなたも消えていますよ。あなたはいったい何にこだわろうとしているんですか」

サルトルについて唯一評価できる点は、ここでサルトルは、きゅうに午後二時からのテレビワイドショーみたいにならず、すなおに

「ぎゃああああ」

という悲鳴をあげたということだ。

よく目を背けなかったものだ。

この世界に意味がないということを明視し、すべての存在が「卑猥でぶよぶよした無秩序なカタマリ」でしかないということを、嘔吐をもよおす嫌悪感と共に直接視認した。

そのことについてはサルトルが正しい。

このサルトルの風景を視認できないままサルトルを考究している人は、冗談じゃなく、午後二時からのテレビワイドショーの考究でもしたほうがいい。

毎回「ぶよぶよ」とか「嘔吐をもよおす嫌悪感」とか言っていると、文章が冗長になるので、サルトルの景色を手短に、

「ノー・ハレルヤ」

とまとめよう。

サルトルの景色はまったくのノー・ハレルヤだったのだ。

それについてはサルトルも一拍の休符の後に肯定するだろう。

「そのとおり、ノー・ハレルヤそのものだ。なぜなら、神はいない」

それに比べると、なぜかおれの景色はスーパー・ハレルヤなのだ。

スーパー・ハレルヤというと、まるでスーパーマーケットみたいになるので、スーパーは外そう。

おれの景色はなぜか知らんがハレルヤだ。

サルトルに向けておれが言うならこうなるだろう、

「なぜだろう、ハレルヤだ。神がいるのかいないかは、おれは知らん」

荷物を運んできたヤマト運輸のように、おれはその家に受取人が居るのか居ないのかを知らない。

居てくれたら、受け取ってもらえるので、助かるが、居るか居ないかはわからない。

知る由がない。

インターホンを押すまで知りようがないし、押したって居留守をされるかもしれない。

居なかったらしょうがない、再配達だ。

まさか、玉手箱じゃあるまいし、

「ホントは居るんじゃないの!？」

と言って、他人の居宅のドアを開けるわけにはいくまい。

おれは、ヤマト運輸の配達員となったサルトルが、なぜか配達前から、「受取人はいない」

とカッコよく断言しているのを聞いて、

「す、すげえっスね」

と笑っている気分なのだ。

なんで配達前からそのことが分かるのだろう。

世の中にはもちろん、

「受取人は、そこに居るのです」

とにこやかに断言している人もいるのだが、それは何だか不衛生な感じがしてあまりおもしろくない。

サルトルのほうが、根拠のない断言がネガティブで、何か無性に笑える。

さて、こうして単純化して、「サルトルの景色はノー・ハレルヤ」「おれの景色はハレルヤ」と言えば、目の前の人がうんうんとうなずき、

「この世界はハレルヤですよね!」

というふうに言うてくることが多いのだが、いくつかの場合で、その目の奥、その声の奥に、無理をしている淀みがあることがある。

そこで、^^サルトル景色から目を伏せようとする人^^が多いのだが、それについては、さすがにサルトル本人のほうが誠実で値打ちがあったと評価せざるを得ない。

サルトルは、少なくとも、自分の景色そのものからは目を逸らさず、少なくともその景色からスタートした。

神はいない、というのはまさに彼にとっては真実であり確信だっただろう。

たしかに、聞けばあきらかに、彼は神のいない世界を明視し、その中に座っていた。

ただ先に述べたように、サルトルはなぜかそれを、

「みんなそうだね？」

と言いだしたのだが、それだけが意味不明だった。

まあそのことも、他有化のゆえなのかもしれない。

わたしはこれまでに、ほぼ百パーセントの確率で、次のことを言われている。

「あれ？　なんか九折さんと歩くと、いつもの場所が、まったく別の場所みたいに見えてきますね」

わたしは百パーセントこれを言われる。

なぜ百パーセントそれを言われるか、わたしはもう原理を知っているので、わざとらしく暈かしたりせず、はっきり言っておくことにする。

それは^^話の中を歩いているVVからだ。

ふだん一般の人々は、色（しき）の中を歩いている。

すべての成分がそうではないにせよ、おれとそこを歩くということになると、やはりふだんと比べて極端に「話の中」を歩くことになる。

だからそこがきゅうに「場所」になる。

考えてみれば当たり前ではないか、おれは小説家だ。

ロカンタンではない、おれは小説家だ。

おれが歩けば、どこを歩くにせよ、それは話の中を歩いているに決まっている。

久しぶりに、あのクレープ屋に行ってみるかと言い、十五分歩いて、クレープ屋が閉店していたとして、そのときおれはそういう話の中を歩いている。

ただこのことは、そうして百パーセント言われるというあきらかさの一方、出どころが「分からない」のだ。

「分からない」からこの現象は発生している。

分からないそれが、体の真ん中に通じて得られている。

体の真ん中が、稽（かんが）えていて、魂魄の領域につながり、魂魄の

うち「分からない」を担うほうの魂を得て、それが体に具現すると霊となり、その「体験」が「話」になっているのだ。

話は「量」ではないので、十五分歩いたというのも量ではない。

五劫思惟、というのと同じで、量は量でなくなるのだ。

クレープ屋に行こうかな、と考えたとき、生クリームストロベリーの引力を否定するのではないが、その引力による傾きは発生させないし、その傾きに従いもしない。

傾きは発生していないので、そこからの動き・方向は、引力によるそれではなく主体性によって得られている。

このときの主題はクレープ屋で、わたしの体はそちらへ運ばれていく。じっさいにクレープの味と量が口腹に収まったかどうかは問題ではない。

（言っていたら腹が減ってきたな）

その話は「クレープ屋への旅」だった。

このとおり、おれはすべて包み隠さず説明しているし、すべてを開示し、すべてを「ご自由にお持ちください」と展示している。

でも、そうは言われても、じっさいにはこんなことさっぱり出来ないだろう。

さっぱり出来なくても、説明はすでに完成していて、説明といえこれ以上の説明はもうないのだから仕方がない。

「話」といえば、神話も「話」だ。

アマテラスオオミカミがどうこう、という話は神話だし、モーセが祈ると海が割れたというのも、神話と扱って差し支えないだろう。キリストのもたらした奇蹟も神の話なのだから神話だろうし、シヴァとヴィシュヌとブラフマーがどうこうという話もヒンドウの神話だ。古代エジプトにも神話はあるし、北欧にも神話がある。古代ギリシャの神話に「ゼウス」が出てきて、「え、これはキリスト教のやつとは違うやつなの？」

と混乱した人は多くいるだろう。

日本の場合、死後に御霊（みたま）が祀られたらカミになるので、たとえば神社が立てられている吉田松陰などは、すでに神話に組み入れられたとみなしてもよいのかもしれない。

体の真ん中で稽（かんが）える。

そして神話というのは概して古いものだ。

だから、自我で考えたり暗記したりするのでなく、体の真ん中で神話を稽（かんが）えることができれば、そのことを指して「稽古がついた」とわれわれは表現するのだ。

神話に代表される「古（いにしえ）」について、体の真ん中が「稽（かんが）えた」のだから、稽古だ。

いくら「練習」をしても、練習は稽古にはならない。練習を「する」という言い方はするが、練習を「つける」というような言い方はしない。

稽古というのは、自分の体がやろうとしていることが、

「どうい話？」

ということにつながっていくということだ。

そして、稽古がつくと、なぜかは分からないが、体の真ん中に「持ち上げられる」「引っ張り上げられる」という作用がはたらきます。

なぜなのかは本当にまったく分からない。

いちおう、古流の武術などではこの現象を「浮身」と呼ぶ。

少なくとも、実感できる筋力量で持ち上がっているのではなく、体感として不明の何かに引っ張り上げられている。

それは、目の前に稽古のついた人がいるだけでも作用があるし、その手が触れるだけでも大きな作用があるもので、そのことを「浮身が掛かる」と言ったりもする。

わたしがあなたの目の前に来ると、それだけであなたに浮身が掛かり、あなたの体の真ん中がすーっとどこかへ持ち上げられ、色（しき）は遠

ざかり、気がつくといつのまにかあなたは何かの「話」の中にいるのだ。

それで、

「いつもの場所が、まったく別の場所にいるみたいに見えてきますね」となる。

（点検してみると、じっさいそのとおりのことが機序どおりに起こっていることがたしかめられます）

（人によってはこの「話」「浮身」の作用を、「とてつもない体の軽さ」「いつまでやっていてもまったく疲れない」という極端な形で体験することもあります。そのことはたいいてい、その人の日常・常識との落差のせいで極端に体験されるという形で起こっています）

（その落差から、逆に混乱して泣いてしまう人もあります）

サルトルは、これらの現象を一ミリも知らず、これらの現象に触れたことがなかった。

それは、彼が西洋人だから仕方なかったのかもしれないし、まして百年近く前のことだったから、手がかりがなかったということもあるかもしれない。

ついでに言うておくと、わたしがあなたの目の前にいて、あなたに浮身が掛かり、あなたの体の真ん中がすーっとどこかへ連れていかれ、いつのまにか「話」の中を歩いていたとしても、そのことはわたしがあなたの目の前から去ると（一旦）失われていってしまう。

あなたはそこで、サルトルの言う「実存が本質に先立つ」世界へと引き戻されていくのだ。

さきほどまでハレルヤの景色の中を歩いていたのに、あなたはノー・ハレルヤの景色へと帰っていく。

わたしはそのようなことを、偉そうに言いたいわけではないが、あまりにも百パーセントこのことが繰り返され、いつまでたっても仕組みが気づかれないので、やむをえずここにありのままを暴露することにした。

真ん中が空っぽのあなたへ。

別の言い方をすると、「本質」が無いあなたへ。

けっきょくのところ、「へヴィだわ」ということのほうを信じてしまうあなたへ……

体の真ん中、あなたの真ん中、「この人」の真ん中は、何があるかというよりも、本来どこかへつながっているものだ。

体の真ん中が、どこかへつながっており、そこでは「分かる」と「分からない」が矛盾せず両立していて、その両立と体の真ん中が合一している。

「分かる」と「分からない」が両立していて、それが主題となり、体の真ん中と合一して「体験」され、その体験が「話」になっている。

「あなた」とは何かという、その「話」があなたなのだ。

あなたの自我はあなたではない。

あなたの自我は他人だ。

まさか、「自我は他人」だって？

サルトルはいつまでもそのことに気づけなかった。

あなたの自我は「分かる」というだけの装置だ。分離し、分解し、分かる。

分かったものは量になり、パラメーターになり、比率になる。

比率は状態と認識され、状態は体感され、体感はまだ量となる。

それが色（しき）だ。

色（しき）は分かるばかりで、何ともつながっていない。

つながっていると錯覚されるのは、ただの引力、および引力による呪縛だ。

だから、重い。常に重い。

引力にひきずられ、右往左往し、摩擦によって発火したり、粘ついて腐敗したりするだけの挙動は、すべて受動にすぎず、さらにいちいちが

重苦しく、その重苦しさはやどれも呪わしいほどだ。

そんなものがあなたの主体性であるわけがない。

あなたがこれらのことで、自分自身を何か「まずい」と感じることがあるなら、あなたは要するに、

「色（しき）がてんこもり」

「真ん中が空っぽ」

そしてそのとおり、

「色（しき）の引力で挙動しまくっている」

ということではないだろうか。

そしてあなたはいつも、「このままではまずい」と、どこもなく思い続けていて、「何かしなきゃ」「何かやっていかなきゃ」と想い、あれをしてみたりとかこれをしてみたりとか、何かに付き合ってみたりとか、何かに手を出してみたりとかを、いろいろやってきたのではないだろうか。

サルトルはそうしたことをいちいち「投企」と呼んだ。

サルトルは、そのむなし右往左往を「人間的自由」などと言い立てて、その「自由」に身を投げ込めば何とかなるという乱暴な説を唱えたが、そもそもそれは自由ではなくただの「無稽」だ。荒唐無稽という四字熟語をご存じだろう。

無稽、体の真ん中がどこにもつながっていないということ。

体の真ん中が何も稽（かんが）えていないということ。

稽を失い、荒唐無稽。また稽から逸脱し、稽から“滑り落ちて”いるので、そのすべては「滑稽」と言われる。

われわれは、自分のすることをわざわざ投企なんて言わない。

けれども、「自分を何かに投げ込む」ということは、必要だと思っている、自分ではないとも、

「本気でがんばっているつもりなんです」

と涙ぐんでいる。

しかし一歩引きさがって眺めると、どこか自分のやっていることの根本が、

「滑稽でしかない」

と思い知らされる。

そのとき、人はとてもみじめで苦しい。

そうして、あるべきすべてのものから滑り落ちている滑稽さとみじめさを、「疎外」と呼ぶ。

何につけ、がんばっているつもりなのに、どうしても自分はニセモノっぽいままで、本当の「それ」にはなれない。

がんばっているのに、テーマから疎外感がある。

疎外はまた他有化でもある。

すぐがんばっているのに、何もかもがいつのまにか「ありきたり」になり、ふと気づくと、何一つ「わたし」ではなくなっている。

いつのまにか、ヨソにあるお仕着せのイメージで自分が挙動している。自分の価値観で挙動しているはずが、なぜかその価値観じたい、硬直してよそよそしいものになっている。

ホンモノでない自分、滑稽でみじめな自分は、他人にジロジロ見られ、そのまなざしに支配される。

「バカにされたくない、笑われたくない」

それで、腹が立って、こちらかも相手をジロジロみてやろうという気になり、

「ほら、そっちにいるあなただって、じつはたいしたことないじゃない」

こうしてまなざしバトル、まなざしの相克が始まる。

なぜこうしてサルトルの論をえんえんと展開したのかというと、何もサルトルのことを唐突にあげつらいたかったからではもちろんない。

サルトルは、われわれにとって巨大なヒントなのだ。

わたしはその点において、サルトルの業績と、その遺産の価値を惜し

みなく称賛する。

^^サルトルは、真ん中が空っぽのあなたが、その後どうなってゆくかを、これ以上なく精密にレポートしてくれているVVVのだ。

実存だけが先立ち、本質がないあなたの右往左往が、けっきょくどうなるのかを、サルトルは教えてくれている。

そうしたレポートとして活用されるのは、サルトル本人にとっては不意きわまる結果だったろうが、もうその本人はいないのだから気にしなくていいだろう。

サルトルは、他人は他有化をしてよいと言ったのだから、わたしはサルトルをこれ以上なく他有化しよう。

彼は人類史上屈指のハズレ男、空前絶後のノー・ハレルヤ・マシだった。

よって断言する、^^ノー・ハレルヤは彼から学べVVV。それについては彼以上の存在はない。

「なんでこんな、グロテスクなことになるんだろう」

「なんでこんな、ニセモノっぽいものになるんだろう」

「なんでこんな、よそよそしい、借り物みたいなことをわたしがやるハメになるんだろう」

そうした「ハズレ」ルートには、必ずサルトルの足跡がついている。

われわれは、いざ自分が「ハズレ」ルートを歩いているかとも思い始めると、ゾツとしてつい目を背けてしまうのだが、そこでノー・ハレルヤを恐れるな。

目を背けてハレルヤの願望に甘えるな。

あなたはまさか、自分に体の真ん中がないとは言わないだろう。

あなたには体があるのだから物理的にその体の真ん中は存在している。その体の真ん中が、グロテスクに「実存」しているだけなのか、それとも、何かに・どこかに通じているのか。

^^体の真ん中が、魂の主題と合一していれば、霊なるあなたはこのことについて何の翳りも持たないvv。

話と色(しき)は互いに侮辱的にはたらくから、あなたの自我は、常にこの話に対して侮辱の態度を向ける。

自我があなただと言うなら、あなたは稽古が嫌いだ。

^^あなたは稽古に侮辱しか向けられないvv。

あなたに何の本質も宿らないとしたら原因はそれだ。

あなたの自我は、そして他人は、あなたにズシンとした「説得力」をはたかせてくる。

いちいちの説得力は、ズシンとしていて、

「すごい、分かるわ」

と感じられる。

「へヴィだわ」

「ね、分かるでしょ？」

「重みが違いますよね」

あなたは他有化される。

他有化され、あなたの自我はパワーアップする。

^^あなたは、その「分かるわ」を尊敬するvv。

「分からない」から生じる稽古や話をあなたは侮辱する。

そうしてあなたはいつのまにか、パワフルかつへヴィに、ノー・ハレルヤの只中に立っているのだ。

つまり、真ん中が空っぽのあなたへ。

そのままだと、あなたはサルトルを尊敬するのだ。

サルトルのすべては、あなたの根っこに最大の「分かるわ」をもたらず。

あなたはサルトルに最大の尊敬を直覚し、気づくと、根っこがフレンチノワールに浸っている。

気づくと、^^稽古のすべては遠ざかり、ただひとり、とてもうっとりするものに浸っているvv。

じつさいそれで、何百万人、あるいは述べ数千万人もが、サルトルを尊敬し、根っこで「うっとり」し、その思想に生き、その主義で行動したのだ。

泥臭いように見えて、みんなじつは、根っこで自分に「美」を見い出して、浸っていた。

ここであなたにとって納得のいかない問題、手ごわくてどうしても解決しない問題はただひとつ。

^^尊敬を覚える人がなぜかノー・ハレルヤで、侮辱を覚える人がなぜかハレルヤvvということ。

**こんなに美しいのにノー・ハレルヤになるといふことにあなたは永遠に納得がいかない。**

だからこの問題は、仕組みとしてはシンプルなのに、思い余って深入りすると、精神を損傷するのだ。

なぜこんなことになってしまうのか。なぜリスペクト先がノー・ハレルヤになってしまうのか。

こんなに美しいのに？

そのことについては、わたしに訊かずサルトルに訊け。あるいはサルトルを見る。

自意識過剰で、いつも他人の目を気にして恰好をつけている、あのフランス人の、いまだ言うインフルエンサーの写真群を見る。

同じく自意識過剰のインフルエンサー、いつも他人の目を気にして恰好をつけている、三島由紀夫の写真群と並べて見る。

その皮膚の一枚下、またその目の奥に潜んでいる、弱さ、怯え、その淀みを見る。

あなたの真ん中が空っぽなら、そのぶん、あなたは彼らと同じものを、その皮膚の一枚下に、その目の奥に、抱え込んできているはずだ。

じつは耽美的で、そのぶんけつきよく美には至れない、彼らのナルシズムを見よ。

あなたの真ん中が空っぽなら、そのぶん、あなたは彼らと同じ耽美とナルシズムの性向を抱え込んできているはずだ。

耽美とナルシズムは、まさに色（しき）だ。

あなたがそこに目撃しているのは、まさに色（しき）の当事者だ。

**彼らは色（しき）を美と思っているのだ。**

彼らの目の奥にある怯えは、まさに「話の無さ」だ。

あなたがそこに目撃しているのは、まさに話と稽（かんが）えの侮辱者なのだ。

あなたがいま、自分自身「真ん中が空っぽなんです」ということであれば、あなたの写真がいま、彼らに並んで三人目として展示されようとしているということだ。

だからあなたは、彼らの言うことに向けて、

「そんな話はない」

と発さねばならないし、あなたはその親しい他人らを追放せねばならない。

そのことが、どこまでもあなたにとっての最後の関門となるだろう。なぜなら、その「親しい他人ら」こそが、あなたの自我だからだ。

## 自我は他人だ

自我は他人だ。

この短い一節は、よもや一般には受け入れられない。

自我はどう考えても自分でしょと、笑われ、侮辱を受けるだろう。ともすれば、デカルトまで一緒になって笑っているかもしれない。

ただデカルトは、笑ったのち、帰宅してから少しは青ざめているかもしれない。

自我は他人だ。

「話」がわたしなのだから、自我はわたしでない。

わたしでない人格がそこにあるなら、それは他人に決まっている。例によってこのことも、安易に深入りすると精神を損傷する。

そんな話ばかりだな。

デカルトは、

「吾思う、ゆえに吾在り」

と言ったが、そもそも「思う」ためには「思わない」が必要であり、「吾（われ）」を知るには「吾でないもの」が必要だ。

「吾でないもの」とは、石ころとかザリガニとか、「他」のもので、あとは「他の誰か」だ。

つまり他人だ。

世の中とか世間とかいうのも、つまるところ総体的な他人だ。

「吾」と言っているけれど、まずは「吾」を捉えなくてはならない。

「吾」とは、「他人でないもの、世の中ではないもの、世間ではないもの、つまり『吾でないすべてのもの、以外のもの』」としか捉えられない。

デカルトの説を、ホエザルに聞かせても、ホエザルは、



「アー！」

とバカでかい声で応えて、デカルトの説は粉々に碎かれるだろう。

デカルトは、ホエザルを含めて何もかもが疑いうると言ったのだが、それはそのとおりだとしても、おれは疑う気がないので話にならない。

デカルトの言っていることも、理としてはそのとおりだが、それと同等に、

「おれに疑う気がないなら、おれを疑わせるのは不可能じゃん」

というの、やはり理としてそのとおりだ。

おれは、デカルトの言っていることは疑うが、ホエザルの面白い声は疑わない。

これについて、デカルトはどう思うかといって、これはただの「おれの話」なのであって、おれの話はデカルトを納得させるために存在しているのではないので、デカルトはついてこれないだろう。

どこまでも、ただのおれの「話」だ。

きびだんごを食わせたら、イヌもサルもキジもついてきますよ、とおれが話すだけであって、デカルト君がそれを疑うというなら、それはそれで勝手にしたらいいと思う。

デカルトの話がもっともらしく聞こえているのは、デカルト君ではなく他人が話しているからだ。

自我は他人だ。

われわれは四歳ごろに、「自分」と「自分でないもの」を分け始める。

ボクはソフトクリームを買ってもらって、食べているけど、あのコは買ってもらえず、ソフトクリームが食べられない。あーあ、かわいそうに。

ああ、こうして見せつけるようにして食べると、優越感があって気持ちいいなあ。

こうして優越できるのは、きっとボクがいいコだからに違いない。

あのコはきっと、いいコではないんだ。だから悔しがっている。ボクとは違う。そう思うと、彼の自業自得でますます気持ちいいなあ。

そういつたことを、子供は知りはじめる。

聞いていると、まったくアンディフグ（空手家）によりがえってもらって即座に踵落としを入れてもらいたくなるような腐った餓鬼だが、それにしても、冷静に考えたらわれわれ大人だってこういうことを平気でやっているのだから、子供をシバいている場合ではないのかもしれない。

大人の場合、それがソフトクリームではなくて高級車になる。

見せつけて、優越感が気持ち良くて、イケているオレ、安物の車に乗っている奴は自業自得だ、というふうになる。

そして大人はもう、頭頂部に踵落としを入れてもらっても、その腐敗が治らないのだった。

さておき、自分と自分でないものを切り分けていく。

その機能が発達してゆき、赤信号と青信号が分離されて、交通ルールが「分かって」くる。

葛飾区と江戸川区はゴミの収集日が違うということが「分かって」くる。

自分が白組なら、赤組は敵だ。

分かってくる。

ここでふと、奇妙なことが出てくる。

自分が白組といって、では白組は「わたし」だろうか。

そんなことはない。

ボクは中学二年生です、ということはあっても、中学二年生がボクです、ということはない。

それはただ、集合の問題だ。

ただ、集合の問題では説明がつかないことがある。

たとえばあなたの名前が、鈴木花子だったとする。

あなたは、鈴木花子だ。そのことは問題ない。

では、鈴木花子は「あなた」だろうか？

あなたは自身、実名をそこにあてはめて考えると、そこには微妙な違和感があるだろう。

仮にあなたが、違和感を飲み込んで、

「まあ、鈴木花子がわたし、です。はい」

と言い切ったとしても、そこにとつじよ国家権力が現れ、

「あなたの姓名を、ポリビニャーノ・肋骨モンブランに改名しました」

と言ったら、あなたはたちまち鈴木花子ではなくなってしまう。

では、

「肋骨モンブランがあなたですか？」

「肋骨モンブランはわたしじゃないです怒」

だから、この違和感は何かというと、名前はあくまで名前であって、それは直接の「わたし」ではないので、名前というラベルのようなものに「わたし」が他有化されるのはヘンだ、とあなたが感じているということだ。

あなたは、「わたしは鈴木花子です」と同一性があるふうに名前を言いながら、じつはその名前を「わたし」ではない「他」のものだとみなしているのだ。

わたしは鈴木花子で、白組で、中学二年生です、葛飾区在住です、などと言いながら、そこで述べている「わたし」はじつはすべて「他」なのだと、あなたはみなしている。

わたしはソフトクリームを食べていて、わたしはいいコで、わたしは高級車に乗っており、わたしはイケてしていると自負していたとして、そこにくっついているすべてのものは、じつは「他」なのだという。

自我というのは、その「くっついているすべてのもの」の集積でしかないのだから、自我は「他」だ。

その自我が人格のように振る舞うのだから、自我は「他人」なのだ。ためしにあなたは架空に自己紹介を試してみればいい。

年齢がいくつで、どこ出身で、○○高校卒で、△△に勤めており、趣味は××で……

すべて「他」であり、そこにぶらさがっているすべては「わたし」ではないだろう。

「わたし」を紹介はできていない。

あなたは自己紹介といって、じつは「わたし」ではないもの、自我という他人を紹介しているのだ。

その証拠に、誰かがあなたに入念な自己紹介をし、その自己紹介が一時間に及んだとしても、あなたはその人のことを「知り合い」とは思っていない。

あなたは「その人」のことを引き続き「知らない人」とみなしている。

ただ、その知らない人が、けっこうなお金持ちだったり、若くてハンサムで背が高かったり、家柄が良かったり、それであなたに向けてニカッと笑顔を見せたりすると、あなたは、

「あつ、素敵」

と想い、その人のことを自分にとっての「けっこう知っている人」に取り入れる。

なぜそんなことになるかというと、何度も言うように引力だ。

色（しき）の引力に寄せられ、そこに呪縛が生じるから、あなたは自分と彼のことを、

「けっこう知っている人」

「それなりにつながっている人」

とみなす。

その日のうち、夜更けにふたりはベッドインしていても何もおかしくないし、そのまま、「付き合おうよ」ということになっても何もおかしく

はない。

ただ、ベッドインしようが「付き合う」をしようが、それは他人と他人が引力へ従っているだけであって、あなたと彼がどうにかなっているわけではない。

そんな話はない、のだ。

浦島太郎と乙姫は、「話」だが、彼とあなたは、引力であって話ではない。

あなたは友人に向けて、

「ねえ聞いて、わたし、すぐぐっ好い人に出会っちゃってさあ！」

と興奮して話すかもしれないけれど、じつはあなたは彼の彼と出会ってはいない。

色(しき)の引力が、互いの自我を吸い込み、ふたつの自我を呪縛に結ばせただけであって、向こうは「あなた」に出会ってはいないし、あなたも「彼」に出会ってはいない。

わたしがいま申し上げていることは、まったく聞き慣れないことで、どことなく恐ろしいというか、どことなくというよりはつきりと恐ろしいことだと思うが、それでいながら、このことはじつはあなたのまったく知らないことではないはずだ。

自我は、色(しき)であり、その引力は、あなたにガツーンと効く。

あなたはたちまち、強烈に、fallingする。

アツアツもアツアツになる。

夢みたーい。

なんか無敵かも笑。

それが、いつからかこじれにこじれ、いつのまにか冷えに冷える。

ため息にため息。

そしてあるときついに、ブチギレにブチギレた。

それでしばらく経ってのち、

「あの人ってどうなったの」

と言及すると、あなたは、

「……あー」

と生返事をする。

「そんな人、いたっけ笑。あ、いたわ。なんか笑える。あー、いたいた。いたなあ。えー、あれってどんな人だっけ」

そうしたことは、あなた自身にあっても珍しくはないし、あなたの周辺にあっても、珍しくはないことだ。

なぜそんなことになるかという、そもそもfallingしたものじたいが他人だからだ。

他人事みたい、ではなく、他人事なのだ。

彼が他人ということではなく、あなたが他人だということだ。

(※もちろん、トラブルを起こすと、社会的には他人事にはしてもらえません)

引力にfallingするのは自我であり、自我は他人なので、その他人がアツアツになり、こじれにこじれ、冷え冷えになり、ブチギレになる。

それはあなたが何かを体験しているわけではない。

向こうも同じだ。

そこには、誰と誰の出会いもない。

自我という他人が、それぞれ「激しくムカついた」ということを残すだけだ。

時にそれは怨恨とも呼ばれる。

なかなかの恐怖だと思うが、反面、あなたがこれまで目撃してきたことにずっとあった根本的な違和感を、この説明は整合させてしまうのではないだろうか。

あなたは色んな趣味に没頭し、それぞれの時期においてはそれを「マイブーム」などと呼んだかもしれない。

本棚にたくさんのマンガ本があり、

「これめっちゃおすすめ。マジ、読んで」

と熱烈に友人に薦めもした。

そしてあなたは定期的に、「断捨離」などと言って、

「あ、これなあ。うーんもう、これは要らないかも」

と思い、過去の熱狂物を捨てていく。

このありさまについてあなたに問えば、あなたは、

「うーん。わたしは、熱しやすく、冷めやすい、ってやつなのかな」

と答えるかもしれない。

しかし、それはいくらなんでもうすら寒すぎるだろう。

何が起こっているか教えよう。

^^本棚に並んでいるものが、「わたしじゃない」と感じられてきた^^の  
だ。

携帯電話に記録されている電話帳が、「わたしじゃない」と感じられて  
きたのだ。

音楽のプレイリストが、SNSのアカウントが、着ていた服が、いま  
住んでいるところが、

「わたしじゃない」

と感じられてきた。

勤め先が、そして付き合っている恋人が、

「わたしじゃない」

と感じられてきた。

それで、心機一転、リニューアルしようとする。

それを断捨離と呼ぶのは、別にかまわないのかもしれないが、本当に  
起こっていることは、もっと身も蓋もないことだ。

引力切れになったとたん、人は、

「わたしじゃない」

「要らない」

とそれを切り捨てるのだ。

数々のものは、あなたが出会ってきたものではなく、そのときごと「わ  
たし」の足しにしようとしてきた、自己愛の痕跡だ。

なかなか恐ろしい話をしているように思われるかもしれないが、そう  
ではない。

おれが恐ろしい話をしているのではなくて、このことにいくらか当て  
はまってしまいう人があり、その人が、恐ろしいものを抱え込んでいると  
いうことだ。

自己紹介もそこそこに、彼は金持ちで、背が高くハンサムで、家柄が  
よく、ニカッと笑うと白い歯が見えた。

「すてき！」

他人と他人がベッドインする。

あなたと彼がベッドインしているのではない。

あなたは彼と出会ってなどいない。

惹かれたのは知っているが、それは自我にはたらいた色（しき）の引  
力だ。

興奮して、友人に、

「ねえ、聞いて聞いて！」

そう言いながら、あなたはそのときの自分について、真ん中は空っぽ、  
真ん中は黒い虚空になっているということを、本当には知らないわけ  
はないだろう。

その^^黒い虚空^^はあまりに恐ろしいものだから、あなたがそれを  
直視できないというだけだ。

その黒い虚空が「あなた」だ。

何にも出会っていないし、どこにもつながっていないので、そのとお  
り「黒い虚空」になっている。

引力によせられて呪縛されて興奮しているのは、あなたではなく他人だ。

「聞いて聞いて」と興奮はしているが、そこに何の「話」もないだろう。

彼の金持ちパラメーター、身長パラメーター、年齢パラメーター、ハンサムパラメーター、セックスパラメーター、そしてあなたの興奮パラメーター、あなたの目算する可能性パラメーターがあり、それらの「色とりどり」にあなたが狂乱しているだけだ。

それを「恋」だといって、そのことを別に否定はしない。

戀（こい）とはもともとそういう呪縛の字義だ。

おれが、初対面のあなたに、

「コーヒー買ってこい」

と言いつけたとする。

するとあなたは、えっ、はい、となりながら、内心、

（え、なんでわたしが）

と思う。

それでいてあなたは、なぜか、体の真ん中に不明の浮揚を体験する。妙に足取りが軽い。

体が軽い。それは認める。

ただ、納得はいかない。

（なんでわたしが？）

立場によってはただのパワハラにもなるだろう。

そのとき、あなたは納得のいかない命令をぶつけられている。

しかし、その命令はあなたの体の真ん中に通るのだ。

そのとき、あなたの体の真ん中は、なぜか知らないが黒い虚空ではないのだ。

命令といって、それは「命」の現象なので、その命が体の真ん中を通っている（横隔膜のいちばん奥に通ります）。

ただ、体の真ん中は、自我の色（しき）と相互に侮辱的にはたらくので、あなたは最後まで、

「いや、納得はいかない」

というほうを選ぶかもしれない。

それはそれ、その何が誤りというわけでもない。

パワハラでしょ、と正論を唱えれば、賛同者はこんにちいくらでも集まるだろう。

「他人」が、あなたの自我の意見に賛同してくれる。

SNSでそうした現象をよく見かけるだろう。

「いいね」であれ炎上であれ、他人は他人のことによく食いついてくる。

それはそもそも、自我が他人だからだ。

自我は、「わたし」ではなくて、^^他有されている自・分vvなのだ。

学級があり、生徒三十人ぶんの机と椅子があったとする。あなたがその学級の生徒なら、あなたはそこから「自分の席」を認識できるはずだ。自分の席は「わたし」ではないが、他の誰かの席ではないものとして分離して捉えられる。その座席ならびに、その空間と面積はあなたにとって「自分のもの」と捉えられる。

その空間と面積、机と椅子が、「あなたの分」なのだ。家族四人でケーキを分けあうなら、とうぜんあなたの「分」というのがあるだろう。あなたの分を「自・分」と捉えるなら、その他の残りは「他・分」となる。あるいは家中の大掃除をするとなったら、あなたが分け持つ、あなたが分担する領域というものがあるだろう。それがあなたの「分」であり「自分のところ」だ。

あなたは自分を「自分」と思い、基本的にはその「自分」は周囲からも尊厳をもって保障されるのだが、それはあくまで建前であって、仕組みとしてはあなたの「自分」は保障されていない。あなたが学級に「自分の席」を思うことができて、担任の教師が席替えを発表すると、あなた

はその席を当該の場所から移動させなくてはならないように。

クラスメート三十人のうち、あなたを除く全員が結託して、あなたのことを「マーガレット」と呼んだとする。その理由は、

「あなたからマーガレットの香りがするから」

もちろんそのような事実はなく、あなたの親も、かかりつけの医師も、同級生ではない友人も、あなたの体からマーガレットの香りはしないと言う。けれどもクラスメートたちは結託して、あなたをその香りに由来して「マーガレット」と呼ぶ。あろうことか、教師まで一緒になって結託し、あなたのことを「マーガレット」と呼んだでしょう。

あなたは「自分」を思うことができるが、あなたは自分で自分のことをマーガレットだとは思わない。

けれども数日のうち、クラスメートが、

「あれ、マーガレットはどこ？」

と言えば、あなたの自我はそのマーガレットという呼称が自分のことを指しているのだと認識するようになるだろう。

あなたは自分のことをマーガレットだと思っているわけではないのに。後日、クラスメートたちの方針は切り替わり、あなたのことを「ハゲ」と呼ぶことになった。あなたを「ハゲ」と呼ぶことに理由はない。あなたの髪は薄くなく、あなたの頭が禿げあがっているという事実はどこにもない。

にもかかわらず、先ほどのマーガレットと同じように、全員があなたのことを「ハゲ」と呼ぶなら、なぜかあなたの自我はその「ハゲ」という呼びようが、自分のことを指していると認識するようになるのだ。これは常識的にはおかしいことだ。あなたの頭は禿げあがっておらず、皮膚科医はあなたの頭を指して「禿げていません」と診断するだろう。

むしろ、ハゲと言えば、クラスメートのうち露骨に髪が薄い誰かがいるかもしれない。あなたはそれについて、

「ハゲと呼ぶとしたら、むしろあの人でしょ？」

と申し立てるだろう。けれども、全員が結託してとにかくあなたのことを「ハゲ」と呼ぶなら、あなたは「ハゲ」ということになるのだ。

あなたは、頭が禿げているわけでもないし、自分で自分を「ハゲ」と思っているわけでもない。それなのに、なぜかあなたの自我は「ハゲ」が「自分」だと聞き取る。

われわれは常識的にはこのようなことを考えない。それは、われわれが人それぞれの「自分」に一定の尊厳を保障しようとしているからだが、それは最終的には建前でしかないし、そもそもわれわれはわれわれ自身がその「自分」と「わたし」を同一視しているため、常識のうちにはこのことについて説明する知性を持っていないのだ。

かくのごとく、じつは「自分」は「わたし」ではない。

自分というのは、たとえばクラスメート三十人が、それぞれ「自分」と言って差し出した白紙のカードのようなものにすぎない。差し出された白紙のカードに対し、姓名が「鈴木花子です」と名乗られるなら、残る二十九名がその白紙に寄ってたかって、

「なるほど、鈴木花子”ね”」

と書き込みをするのだ。

だからこそ、その二十九名がその気になれば、そこに自己紹介とは異なる「マーガレット」や「ハゲ」の書き込みをすることも可能だということ。

このように、「自分」というカードは初めから他人によって所有（つまり他有）されているのであって、自分で所有しているものではないのだから、その事実上の存在は「他人」であり、より精密に言うなら、自我とはハハわたしでないものを認識したことと集積Vでしかないのだ。

「わたし」は違う。「わたし」は自我ではなく、それはふだんのあなたがまったく知らないものであり、あなたの自我にはまったく「分らない」

ものだ。

いまあなたの目の前には何があるだろうか。あなたの手元には何があるだろうか。あなたの手元には一本のボールペンがあったとしよう。あなたはそのボールペンを見て、漠然とボールペンを「思う」ということができる。

いやそれどころか、あなたはボールペンを見ると、ボールペンに意識が向かわざるを得ず、ボールペンを「思わざるを得ない」という状態になる。ボールペンを認識しているということはすでにボールペンを思っているということだ。

そしてそのとき、あなたの気づかないこととして、あなたの自我の機構はそのボールペンを、

「(わたしではないもの) ボールペンですね」

と認識しているのだ。

水槽にいる金魚を見ると、

「(わたしでないもの) 金魚ですね」

と認識している。

記憶に山田太郎のことを思い出すとき、

「(わたしではない人) 山田太郎さんですね」

と認識している。

そして、このことが積み重なり、あなたは自分について思うとき、

「(わたし) わたしですね」

と認識するようになっていくのだ。

ところがどっこい、そのときあなたが認識している「わたし」は、じつはすでに「わたし」ではないのだ。

そのときあなたが認識している「わたし」は、「わたし」ではなく、^^ (ボールペンでないもの) (金魚でないもの) (山田太郎でない人) v v なのだ。

あなたが学級に「自分の席」を確かめるとき、それは(A君の席でない席)(Bさんの席でない席)(C君の席でない席)と確かめられるようにだ。

このことがけつきよく、サルトル他、多くの哲学者と、哲学者でない一般のわれわれを困らせた。みなそれぞれに「わたし」とは何かを考究したのだが、そもそも自我が「わたし」ではなかったとしたら、哲学者のほとんどは自分の論文を焚火に放り込むしかなくなる。

自我ではない「わたし」は、「分らない」わたしなのだから、あなたの目の前にボールペンがあったとして、^^そのボールペンがわたしでないとは言えないv v。

わたしは堂々と、

「このボールペンも、まあ、おれだ」

と言う。

あなたが疑義を抱き、そのボールペンを横から掴みとり、ボールペンを振り立てて、

「これはボールペンであって、あなたではない。そして何なら、このボールペンはあなたのボールペンでさえないではないか」

と言うだろう。

そのときのあなたが言っていることを、もちろんわたしは「分かる」のだが、かねてからわたしが述べているのは、ある領域においては「分かる」と「分らない」が矛盾せず同時に成り立つてしまうということだった。

あなたがボールペンを振り立てるとき、あなたはそのボールペンの長さや質量を実感しながらそれを振り立てているのだ。そして、ボールペンとわたしの分離を主張するのだが、あなたの自我はそうして「分ける」と共に「量」を捉えるはたらきをしている。

「分量」をやっているのだ。

あなたが四人家族のひとりで、ケーキを切り分けるというとき、「あなたの分」がとうぜんあるというのは、同時に「あなたの分量」があるということだ。

そのとき、たいいていケーキは四等分されるだろうが、仮にそのケーキがあなたの誕生日を祝うものなら、あなたの「分量」は、四等分の範囲を超えて、より大きな分量となるかもしれない。

あなたが日常でずっと「わたし」と思っている、その自我の正体は、その切り分けられた「分量」なのだ。ここで「自分」と言いようは、さらに「自分量」という言い方をされてもよい。

教室には、A君の席の分量があり、Bさんの席の分量もある。そしてあなたにとって「自」の席の分量もある。この自分量の増減に生じる引力のことを、あなたは「わたし」だと誤解している。

あなたが浦島太郎の話に直面して覚える、戸惑うべき無関係性はこれだ。あなたはいくら浦島太郎の話を聞いたとしても、内心で、

「で？」

と侮辱的に思うことを抑えられない。発言は抑えるにしても内心に湧いてくる思いを抑えることができない。

あなたの自我が浦島太郎の話にそのような侮辱性の戸惑いを覚えるのは、浦島太郎の話についてあなたの「自分量」は何らも増減しないからだ。あるとしたらせいぜい、

「わたしの時間を返せ笑」

というクレームぐらいだろう。

あなたの自我は、常時「分量」をやっている。

分量を“やっている”のだ。

あなたの自我は常時、「自分量」と「他分量」を量っており、常に、^^自分量を増大せようとする方向への運動を続けているvvv。

あなたはその運動を「わたし」だと思っているのだ。

あなたにとって、自分量を奪いにくる者がいるとしたらそれは誰か。それはいわずもがな「他人」だ。他人は他人で、向こうの自分量を増やすための運動を続けている。

これからケーキが切り分けられるとして、あなたの自分量、ケーキの「分け前」が奪われるとしたら。その分け前を奪いに来るのはいったい誰だろうか。

それは、誰であれ「他人」だと、あなたは理解しているだろう。それはそのとおり。

だが、そうして自分量を奪われるのに対抗して、自分量を守ろうとするはたらき、のみならず自分量をさらに増そうとするはたらきがあるとしたら、それは誰によるはたらきか。

それについて、

「わたしですよね」

とあなたは思っている。

これが誤りだ。

なぜなら、「わたし」は量的ではないからだ。

どれだけケーキを食べたって「わたし」が増えるわけではない。

「わたし」の本質は「話」であって、「話」は量的でない。

事実、ケーキの分量について、三歳児は異議申し立てができない。

母親が、三歳児に向けて、

「ここにケーキがあって、わたしたちは四人家族だけど、ボクちゃんの分量は無しです」

といい、目の前でその分量ゼロをジェスチャーしたとしても、三歳児はその悲しみに泣くだけで、

「いや、家族なんだから四等分しろよ。ましてオレの誕生日なんだから、おれの分量が比較的大であるべきだろ」

とは主張できない。



自我が未発達なので、「分量」がやれないのだ。

自我とはこの「分量運動」なのであって、「わたし」ではまったくくない。

分量運動を仕掛けてくるものは誰か。むろん他人だ。そのへんに転がっている石ころや針金は、あなたに分量運動を仕掛けてこない。

それは石ころや針金が自我を持っていないからだ。

（たぶん持っていないのだろう。持っていないと証明はできないけれども）

あなたに分量運動を仕掛けてくるのは他人であり、他人がいなければ、あなたもそもそも分量運動を起こせない、というように見える。

他人がいなければ……たとえばあなたが、宇宙の果ての星でひとり、地表に座り込んでいたとする。

あなたはその状況を、「他人がいらない」と思っている。

けれどもそうではないのだ。

あなたはその状況においても、

「わたしは、マーガレット」

と思うことができるし、

「わたしは、ハゲ」

と思うこともできる。

あなたは、宇宙の果ての星に「ひとり」で行ったと思っているが、そうではない、あなたは自我という他人を連れていつているのだ。

だからあなたは、宇宙の果ての星にひとり座り込んでいるときにも、ふと、

「この星は、ぜんぶわたしのもの」

と想ったりする。

「ぜんぶ」という分量運動を、やはり自我はやっているのだ。

自我は、あなたにとって他人であって、「わたし」ではない。

自我ではない、「わたし」とは何なのか。

わたしとあなたの前に、小さなケーキをひとつ用意しよう。

わたしはそのケーキについて、

「おれのケーキ」

と宣言し、

「おれがぜんぶ食べる」

とも宣言する。

分け前は、ぜんぶおれだということ。

おれは、「おれがぜんぶ食べる」と繰り返して言いながら、そのケーキをフォークで切り取り、あなたの口の中に押し込んでいくでしょう。

おれがぜんぶ食べる、おれがぜんぶ食べる。

おれのケーキだ。

そしてケーキがなくなったら、わたしは、

「このとおり、ぜんぶおれが食べた」

と言おう。

このことはあなたを混乱させるだろうか？

じっさいにやってみるとそうではない。

（帰宅してからあなたが混乱しだすという危険は大いにあるが）

あなたの体験において、「おれのケーキを、おれがぜんぶ食べる」とい

う「話」は、まったく破綻しない。

あなたの認識においては破綻している「はず」なのだが、体験においては破綻していないと確信される。

ケーキはぜんぶあなたの口腹に収まったのだから、言っていることと事実が違っている、そのことは「分かる」。

けれども、なぜか「おれがぜんぶ食べた」ということも、話としてはそうだと、なぜか認めるしかないという確信があるのだ。

わけの分からない話だが、このわけの分からなさ、先ほどの明瞭に「分かる」が、矛盾せず両立してしまう。

だから、頭がおかしくなったわけでもなく、だからこそ、これは本当にわからない。

おれのケーキを、おれがぜんぶ食べたという「話」において、実存するケーキがどちらの口腹にどれだけ収まったかという、分量は関係ないのだ。

そうなる、明らかなこととして、  
「目の前にいるあなたが、おれでないとは言えない」ということになる。

目の前にいるあなたは、あなたであっておれではないのだが（当たり前）、にもかかわらず、おれでないとは言えない、ということも成り立つてしまう。

こんな事象を、自我が取り扱えるわけではない。

自我が取り扱えないということは、あなたはこの体験を、他人に言おうとは思わなくなる、ということだ。

このように、自我は「他人」なのであって、さらには、「他人」が自我なのとも言える。

分量運動の近い他人があなたの「自我」だ。

あなたは、アフリカ大陸の西岸で何用かの穴を掘っている男たちに向けていきなり、

「わたしはさあ！」

と怒ったりしない。

あるいは彼らに向けてとつぜん、

「わたしは個人的に、ずっと借家に住むっていうのは、どうしても根本的にイヤなタイプなんだよね。あくまで個人的にだよ」

と言いだしたりもしない。

つまり自我が出しゃばらない。

彼らとは分量運動が近しくないからだ。

そして分量運動は、色（しき）であって話ではない。

だからさすがにあなたは、アフリカの西岸で穴を掘っている男たちに向けて、「借家に住むのはどうこう」というようなことは言い出さない。そんな話はない、と、さすがにそれだけ極端な条件下なら誰でもわかるのだ。

自我とは何なのかについて、まさか「自我は他人だ」というようなことは一般にはまるで言われない。

サルトルも、誰よりこの自我と他人のことに苦しみ、まるでいじめられっ子のように必死で考えた痕跡が残っているのだが、即自存在や対自存在、対他存在といって、けっきょくのところ「地獄とは他人のことだ！」になるのだけれど、まさか彼は、

「そうではなく、あんたの自我が他人なんですよ」

ということには気づかなかったようだ。

自我はわたしではなかったとして、ではあなたの「わたし」はどこにあるのか。

「わたし」は「話」だ。

あなたの体の真ん中に通じているものは何か。

このときさすがにあなたも、「口腹に押し込まれたケーキの分量が主題ではない」ということぐらい、魂のレベルで直覚している。

あなたの体の真ん中に通じているのは、  
「おれのケーキを、おれがぜんぶ食べる」

だ。

ただの、そういう、おれの「話」だ。

あなたは、あなたの体の真ん中がその話に通じているということを、あなたの体験において認める。

だからあなたの本質は「話」だ。

あなたは話なのだ。

あなたの自我はあなたの他人で、まさかのまさか、浦島太郎のほうがむしろ「あなた」でありうるのだ。

## 時間量が古ではない

補足的な章。

いくらなんでも、話がむつかしすぎる。

いちおう、「話」とは何かについて、なるべく厳密に説明しているのだが、厳密にすればするほど、とてもじゃないが取り扱い不可能のしろものになってしまう。

しかもこれを、自我でナルホドと理解しろということじゃなく、体の真ん中を通じて「やれ」というのだろう。

無茶が過ぎるんじゃないですかね……

機械のことがよくわからないんすよね、テレビとDVDのつながり方もよくわかっていないっす、と言っている人に、量子コンピュータの設計を「やれ」と教えたとしても、その人は頓死するだけなのではないだろうか。

まあしょうがない。

稽古のことについて少し述べよう。

稽古といって、「稽」は「つながり」だ。

どうやってつながるのかといえば、単に稽（かんが）えるということにつながる。

あくまで体の真ん中で稽（かんが）えるのだけでも。

そして何につながるのかといえば魂魄の領域につながる。

それで、そこまではいいとして、なぜ稽古といって「古（いにしえ）」が出てくるのかということについて。

ひとつには、

「ほら、神話って、ぜんぶ古いじゃん」

という言い方で、わかったつもりになりましたという捉え方もあるのだけれど。

もっと有効で、きつとまともな捉え方は、生（なま）との対比だ。

古、ということの反対は、「新」ではなくて、「生（なま）」なのだ。

たとえば、男たちがあつまって、木刀をぶんぶん振っていたら、試合をしたり勝負をしたりするだろうけれど、そこにあるのは力ずくの闘争で、鼻息荒く流血を伴い、ただただ生々しいものだ。

その生々しいことをずっとやっていても、何の話にもなっていないので、その「生（なま）」の現場に、「古（いにしえ）」との接続をもたらしましょう、ということになった。

たとえば、きょう買って来たばかりのお刺身は、生（なま）でおいしいものだ。

それを、半年間、テーブルの上に置きざらしにしていたらどうなるか。

「まだ食べられますかねえ」

「アホか、古すぎるだろ。古すぎるどころか、それはもう古（いにしえ）だろ」

ということになる。

半年間といって、たとえば半年前に建てた家ならまだ新築で、古いどころかまったく新しいものだ。

あるいは、ウイスキーを樽で寝かせるとして、熟成が半年ならまだスリッツでしかなく、とてもじゃないが飲めたものじゃない。

だから、「古」というのは単純な時間経過ではないのだ。

つまり、時間「量」ではない。

時間量を超えて、もはや時間量ではなくなったもの、それを「古（いにしえ）」と呼ぶ。

古（いにしえ）というものがあり、古典というものがあるのだ。

古典といえば、落語とかシェイクスピアとか、ベートーヴェンとか白鳥の湖とかだが、古典とは「古い典拠がある」ということなので、たとえば日本の神話や西洋の神話だって、古事記とか聖書とかの古い典拠があるので、古典と呼んでいいのだ。

稽古といい、稽古がつくというのは、そうした古典について、経過した時間量、存在としての距離量を感じなくなる、ということを目指す。

それらは、昔のことだし、昔のものなのだが、その「昔」という時空的距離感をなくす。

どうやってなくすのかと言われても、稽（かんが）えろとしか言えなけれども。

高山彦九郎が九州で切腹して果てたのは、大昔のことだが、それを遠いことに感じているようでは、高山彦九郎の話はないし、仮に高山彦九郎の芝居をしようとしても、その芝居は成り立たない。

高山彦九郎を遠いこと感じている人は、稽古がついておらず、生（なま）を信じ、生（なま）を振り回し、生（なま）に振り回され、生（なま）をやっているだろう。

口うるさい課長にイラッとする、今週もまただよ、というようなことを――時間経過的な日々を――自分につながっているすぐのことに感じ、高山彦九郎というと、

「誰それ笑」

と、自分に何のつながりもない、はるかかなたの遠くの何かだと感じ、そこに侮辱を乗っけている。

この人が舞台上に立てば、舞台上に高山彦九郎は出現せず、「ふだんは課

長とかにイラッとしているんだろうね、と察しがつく人」が出現する。なんと絶望的な舞台だろう。

稽古の日々というものも、実在はするのに。

まあいいや、とにかく、稽古というのは時間量の否定だ。

時間量の否定であり、時空量の否定であり、それは重力の否定でもある。

説明は、またむつかしくなるので、説明はなしでいこう。

何もかもを説明する必要はないじゃないか、これはおれの「話」なのだから。

そもそも、「時間」というものはその存在がはっきりしない。

「時間」というそれじたいが怪しいのだ。

われわれは時間を「体感」できてしまうから、時間をすっかり存在しているものと思い込んでいるけれども、じつはその存在はよくわからないのだ。

たとえば一秒間で光はどれぐらい進むか。

それについて、まず一秒ってどれぐらいかというところ、

「時計見りゃいいじゃん」

ということになる。

なるほどたしかにそうだ。

でも、よくよく考えると、

「この時計の一秒ってのは、どうやって一秒って量っているんだ？」

ということになる。

「それはまあ、何か別の時計で量っているんじゃないの」

「ばかやろう、それじゃおめえ、またその時計も、別の時計で量りなおさなきゃいけないじゃねえか」

さあそれでは、時計以外のものでも、どうやって一秒を量るのか。

（※一般には時間は「計る」の字を当てます。「時計」という語を参照し

てください)

思いつくのは、一日が過ぎる時間を分割して、一秒を割り出す方法。

「一日」は、地球の自転で決まっているので、時計に頼る必要がない。

が、それだって、地球の自転が必ずしも一定とは限らないので、怪しいものになってくる。

それで、しょうがないので、水晶の膜に力をかけて圧電効果から周波数を取り出したりするのだが(クォーツ)、それだってけっきょく、

「どれが『一秒』なの……?」

という原器が存在しないのだから困られる。

しかも、相対性理論によって、時間じたいがまったく一定のものではない、相対的なものだという事なのだから、ますます時間というのは存在が怪しいものだ。

それで、ついには落語みたいに、

「いつそのこと、一秒間に光が進む距離を測って、光がその距離を進むのに必要な時間を、一秒ってことにしたらどうでしょう」

「なんだてめえ、わけがわからなくなってきたぞ」

みたいなことになるのだ。

われわれは、時が進むもの、時が流れるものと思っているが、じつはそれはよくわからない。

柱時計の振り子が揺れている映像を見て、

「時が、流れている……」

と思ひ耽ることはできるが、

「それ逆再生ですよ」

と言われると、

「ええっ!?!」

ということになる。

われわれは、振り子運動を見ても、時が進んでいるのか戻っているの

かを感じ分けることはできないのだ。

われわれにとって時の進行とは、いわゆるエントロピーの増大方向になる。

エントロピーは、よく言われる「雑然さ」の尺度だ。

ちゃんと化学的には計算されるエネルギー量であって、はじめのうちはエントロピーとごっちゃになって悩まされるのだ。

雑然さはつまり、ほったらかしておくと、散らかっていくでしよということ。

部屋の中で大暴れした結果、

「なんかすべての本が本棚に収まった」

ということとはふつうない。

大暴れすると、部屋は散らかる方向へ進んでいくのだ。

ピシッと並べられていたいくつものグラスは、大きな地震がやってくるたび、バラバラになって散乱する方向へと進んでいく。

大昔にピシッと建てられた建築物も、五百年後、わやくちゃになっていくというのを見て、われわれは「時が流れた」と感じるのだ。

そして、稽古というのは、わやくちゃになっているわれわれをピシッとさせようとする営為だから、字義のとおり時の流れを逆行させようとする行為になる。

重力の反対方向、浮く方向、時が戻る方向にはたらくのだ。

それが稽古だ。

見事に、何の説明にもなっていない。

まあいいじゃん、そもそも、稽古が説明で「分かる」のであれば、世界中の誰も稽古に苦勞はしない。

稽古が説明で「分かる」のなら、人工知能にだって稽古はつけてもらえるだろう。

でも人工知能の情報では、浮身は掛からねえなあ。

人工知能には「体」がないからな。

とりあえず、古というのは時間量のことではない。

時間量というのは、われわれの体感であり、その体感は錯覚だ。

われわれは錯覚を体感できてしまうからな。

われわれは、錯覚を体感できてしまい、錯覚をこそ、確信してしまうのだ。

時間量はない、時は流れていない。

錯覚だ。

ホントかどうかは知らん、ただ「ありうる」という、おれの話だ。

時の流れがないのであれば、じっさいにあるのは、生(なま)という、

「雑然さのパーティ」だ。

バラバラのわやくちゃ、それで、何の「話」もなくなってしまう。

「解体の向き」と、おれがよく言うやつだ。

雑然さが減少に向かう集いもある。

雑然さが減少に向かうことは、体感上、われわれには「時の流れが逆行している」ように感じられる。

だからそれが「稽古」と呼ばれる。

解体の向きは、雑然さのパーティで、統合の向きは、稽古のパーティだ。

雑然さのパーティでは、話が解体されて失われていき、稽古のパーティでは、話が統合されて創り出されていく。

雑然さのパーティは、世界を失っていき、稽古のパーティは、世界を獲得していくのだ。

自我はその性質上、時間量を言いたがる。

「五時間も筋トレしました」

と。

その「ヘヴィ」な向きを言いたがる。

時間経過的な日々で、パワフルな日々だ。

だが稽古というのはそうではなく、五時間の稽古があったとしたら、その五時間の稽古でどれだけ古(いにしえ)にさかのぼれたましたか、ということになるのだ。

こうしてけつきよく、むつかしい話になってしまふのだが、むつかしいことばかりえんえん考えていてもしょうがないところだ。

考えていてもしょうがないので、稽(かんが)えろ、稽(かんが)えろことばかりを積み重ねろ。

時間経過的な日々が実在するのは、誰でも知っていることだが、その逆、時間が遡っていく、稽古の日々というのも実在する。ただしそちらを肯定する「システム」は存在しないし、そちらを肯定する人は少ない。

## 話が「壊れている」ことに気づけ／①あてがう器官

この章にも大きなショックがある。

だから、あまり深入りはせず、おそろおそろ「そうかもな」と覗き見るのがよいだろう。

「壊れている」ということ。

たとえば、家電を購入したとき、初期不良がある場合がある。

電源は入るが、駆動しなかったり、ツマミを動かしても、反応がなかったりする。

そのときは、それだけでも少々のショックがある。

「壊れている」ということは、われわれにとってショックなのだ。

子供が、プラモデルを購入し、開封するといくつかのパーツが割れていたというような場合、子供はそれだけでショックを受け、泣いてしまうかもしれない。

壊れているということは、「体を為していない」ということであって、それは解体の向きであり、解体ということじたいがグロテスクだ。

われわれ素人が、生きている大きな魚を捌こうとすると、魚は暴れ回り、台所にはなかなかグロテスクな光景が広がってしまうだろう。

最もささやかな例を挙げたい。

わたしは子供のころ、両親からわざとらしい精神教育をほとんど受けてきておらず、いわゆる「放任」という具合の環境に育ったのだが、それでも子供のころには幾度となく、

「男のくせに、ピーピー泣くな！」

という叱責を受けはした。

それは、教育というより、ただわたしがピーピー泣くの、親が苛立って言いつけた——怒鳴りつけた——ということにすぎなかったと思うが、それでもわたしは幾度となくそう言われ、叱りつけられたことを覚えてい

る。このことは、子供心にそれなりにつらさがあった。なぜなら、ピーピー泣いているということは、すでに何かつらいことがあったのであり、それをなくさめてもらおうと甘いことを考えてピーピー泣いているのだから、そこからさらにハードな追い打ちを食らわされるというのは、期待を大いに裏切られてつらいことだった。

男のくせにピーピー泣くな！ と叱りつけられて、とうぜん、わたしの泣き声は、反発的に音量を増したように記憶している。

とはいえ今になって、耳に残っているこの叱責、「男のくせにピーピー泣くな」は、一定の教育として、わたしの精神の構造化に寄与しては

いる。

泣くか泣かないかということはどうでもよいと思うが、最終的に「男だから」という突っ張った理由で、わたしは韌（つよ）くなくてはならないとわたし自身で思っている。いつからか、大人になったときからか。

あるいは、男になったときからか。

なぜ男だからといって韌（つよ）くなくてはならないのか？ それについては、さあてね、とわたしは思う。知らんね。男でも別に、韌くなくてかまわないのかもしれないけれども、仮にそれが正論だったとして、わたしはわたしのために用意してもらったせつかくの正論を、こちらのほうで棄却しようと思う。わたしは、男だから韌くなくてはならないという暴論のほうを抱えて、愚かで無駄のある生き方をしようと思うのだ。なぜそんな愚かなことをするのかと問われれば、「男は韌くないといけないからね」と混ぜ返し、この問答を終わらせることにしよう。

それで、「男のくせにピーピー泣くな」とか、「男だから韌（つよ）くなくてはならない」とか、そうした言いようは男女差別であっていわゆるポリコレ違反だ。発言は問題視されるだろう。

「男のくせに」とか「男だから」とか、そういう言い方は誤っている。そのことはわたしにも分かる。わたしも現代を——いま、二〇二五年の末を——生きているので、ポリコレ違反というコンセンサスは了解できる。

ただ、それならわたしは問いたいのだが、つまるところ、何十年前に父がわたしにほどこした教育は「誤り」だったということなのだろうか。男のくせにピーピー泣くなとわたしは言われた。これが男女差別でポリコレ違反だというなら、それが何十年前のことであれ、「誤りです」「取り下げるべきです」とはつきり言ってみてほしい。

わたしの父の教育が、父からわたしに向けられたありふれてなつかしい教育が、「誤り」だったのか。はつきりそう言ってみてくれ。NHKの

テロップにそう表示してみてくれ。「彼の父の教育は誤りでした」と。

そのように詰め寄られると、まずすべての人が、

「いや、そうじゃなくて……それは、その当時のこととして、決して誤りだったわけではないと思うよ？」

「だってそういうの、そもそも人によるじゃん？」

と、よくわからない弁解をする。

では、父がわたしに向けたその教育は「正しかった」のか。

正しかったというなら、それはそれで、そのようにはつきりと言ってもらいたい。

そのように詰め寄ってみると。

「うーん、まあ、そこまで言うなら正しかったんじゃない？ そのお父さんから、あなたに向けての教育としては。まあ正しかったんでしょ、あなたの場合」

という、いよいよでたらめな回答が出てくる。

この不毛さと、いらだたしさと、ストレスはいったい何なのだろうか。

わたしはこの仕組みを知っている。

これは「話が壊れている」のだ。

話が壊れていて、そこに露出しているものはすでに「グロテスク」なのに、われわれはこのグロテスクなものを直視したがないため、その後えんえんと「おためごかし」を続けてしまう。

この場合、話はどこで壊れているのだろうか。

それは、この場合のポリコレ違反とか、男女差別とかの体感が、じつは何の話でもなく、何の意見でもないというところで壊れているのだ。

^^それは話ではなくて、ただの「政治」だVV。

ただの政治を、自分の「話」とか「意見」にすり替えているので、結果、話をしているつもりが、しだいに話としてそれは壊れているということになる。

この世の中の誰も、ひとり四十五年前にタイムスリップしたとして、周囲にいる頑固親父たちに「ポリコレ違反ですよ！」「レイシストです」などという説教はしない。

当時、政治的にそのような説教がまかりとおる局面は醸成されていないからだ。

わたしが臆面もなく、彼に堂々と、

「あなたがやっているのは、あなたの話でもなく、あなたの意見でもない、ただの政治ですよ」

と言いつけたらどうなるだろうか。

彼はおいに気分を害するだろう。

彼は正論を唱えたと自負して昂り、気分を良くしていたかもしれないのに、まさか「政治に支配されているだけです」なんて言いつけられるとは。

けれども、そうして気分を害させるのが目的ではないにせよ、

「そもそも、ポリコレと言いますが、ポリティカル・コレクトネスという場合、ポリティカルは政治的などという意味ですよ」

とは申し上げなくてはならない。

本人がポリコレの旗を振ったところ、それを政治と言われて気分を害するというのは脈絡が破綻しすぎだ。

「たとえば、戦前・戦中は、『鬼畜米英』が政治的な正だったでしょう。けれども敗戦後、場当たり的に『軍部の暴走』を言うのが政治的な正になりました。政治的に局面が変わったんですね。そこには一貫した正論なんてありませんよ。あくまで「政治的な」って前提をしているのですから。あなたが言っているポリティカル・コレクトネスはまさにその語義なのであって、政治的な局面が変われば、そのときはまたあなたの発言も局面のとおりコロッと変わりますよ。あなたは自分でポリコレと言いながら、ご自身が政治に従属しているということをご存じなかったの



ですか」

さあ、その上で、いまいちどわたしからのリクエストに応じてもらいたい。

父がわたしに向けた教育は「誤っていた」のか。  
父がわたしに向けた教育は「正しかった」のか。  
はつきりと言ってみてほしい。

陳腐化して逃げ回るのはそろそろやめにして。

「男のくせにピーピー泣くな」

こんな言い方が、許されるのか。

それとも、こんな言いようでこそ、教育なのか。

たぶん現在、ほとんどの人が、この単純な問いかけに答えられなくなっているように思う。

ここに組み立てられている、ストレスフルでグロテスクな局面は、わたしが意図的に組み上げたものにすぎないから、あなたはあわてて嘔吐する必要はない。

もうその組み立てを解除してしまおう。

話が壊れているのは、そもそも、話に自我のインタープリターをあてがっているからだ。

あてがう器官じたいを誤っている。

浦島太郎は、誤っていたのか、正しかったのか。

カメは、誤っていたのか、正しかったのか。

乙姫は、誤っていたのか、正しかったのか。

玉手箱は、誤っていたのか、正しかったのか。

何を言っているんだお前？

「話」に誤っているとか正しいとかいうことはない。

話は量ではないしパラメーターでもない。

それなのに、何を量っているつもりなのだ。

^^体の真ん中が機能していないので、自我をあてがうことしかできないVV。

父の、まるで洗練されてはいない教育は、それでもいちおう子のわたしの精神に、突っ張った靱（つよ）さの一柱を組み入れはした、という、これはただの「話」だ。

もちろん逆に、その野卑な教育――のつもりだったものが、むしろ子の健全な発条（ばね）をくじくことになった、という話もどこにはありうるだろう。

無理やり分類するなら、わたしの話は前者だったということになるが、わたしの「話」は分類として存在するのではない。

（賢明な方は、「分類」という字から、すでにそこに分割・自我のはたらしを読み取るものと思います）

わたしはわたしの話を生きているし、わたしの話を生きてきたのであって、その話のうち、ごくささやかな一部をあえて取り上げて例に出しただけだ。

この場合、主題は「男」だ。

わたしの体の真ん中は、いちおうその主題に一定の合一を得ている。

「男だから靱くなくてはならない」

体の真ん中が主題と合一を得ているので、それはわたしの「体験」だし、わたしの「話」だ。

これのどこに自我を出すのだ。

何を量るのだ。

自我の出番はない。

自我は、この「話」に対して、常に侮辱的にはたらく、話を解体しようとする向きにはたらく。

「言いたいことは分かりますけど、それってけっきょく男女差別ではあるわけで、マッチョイズムの温床になっていくわけじゃないですか。言

っていること分かります？」

そして自我は、誰にとっても「他人」だ。

だから「他人」がポリコレで飛び掛かってくるわけだ。

もちろんわたしはここで、ポリコレについての議論をしているのではない。

どう見てもここでの主題は「ポリコレ」ではない。

ここでの主題は「話」および「それが壊れている場合のこと」だ。

ところがじつは、この「主題」というものが、多くの人において思っているほどたしかに捉えられない。

主題は、体の真ん中でしか捉えられないからだ。

自我で主題を捉えようとしても、自我は、主題を解体し、分離し、分類することにしかはたらない。

「けっきょく何を理解したらいいんですか？」

と、行方不明になる。

（理解は解体であって体験ではない）

自我は、色（しき）の器官であり、「量」を担うから、「量る」という見当違いのことが立ち上がり、わけのわからないことになっていってしまうのだ。

「つまり、お父さんのことをとても大切に思っていらっしゃったってことですよね」

「え？ そんなことぜんぜんないけど。なんでそうなるの」

あてがう器官じたいが違う。

いま、「コミュ力」とか「コミュ強」とか、そういう言い方をする人が世の中に多い。

その言い方じたい、「話」に対する侮辱的な振る舞いが露出しているのでもある。「イケメン」というような言い方と同じだ。

現代語というわけではなく、スラングというわけでもなく、徹頭徹尾

「侮辱を意図した、そのための用語」だ。

それで、コミュ力と呼ばれているものの振る舞いについて、それはそれじたいでかまわないけれども、そのコミュ力というものは、「話」のやりとりをする能力を指しているものではまったくない。

じつさい、コミュ強と呼ばれているような「陽キャ」の人が、どれだけ自分を服装と髪型と強引な笑顔と、その強い氣勢で粉飾したって、彼が侮辱的な人でなかった試しはないし、彼がグロテスクでなかった試しもやはりない。

かといって、コミュ障の陰キャが話のやりとりに優れているというわけでもまったくくない。

ともあれ、そのようにして「話が壊れている」のだ。

あてがう器官じたいが誤っているのだが、そうは言っても、体の真ん中はすでに機能していないし、体の真ん中に向けては侮辱しか湧かなくなっているの、さしあたり短期的にはどのようなにも処置できない。

## 話が「壊れている」ことに気づけ／②主題の保障と阻害

漫画「ドラえもん」の主題は、

「平凡な少年の、果てしない夢」だ。

「ドラえもん」は、ジャンルとしては、コミックのSF（サイエンスフィ

クシヨン」ということになる。

ただし、現代のアニメのドラえもんがどのような様相になっているのかについては、わたしはまったく知らない。

よって、わたしはあくまでもとの、藤子不二雄Fの描線によるドラえもんのことについて言及しているということにしたい。

漫画「ドラえもん」はフィクションだから、その中にいくつかの約束事が出てくる。

たとえば、

「ご両親は、とっぜん現れた正体不明のロボットを、なぜ平気で同居人として認めて受け入れるのか」

というような疑問が、現実的な視点からは出てくる。

多くの人は、これについて、

「まあまあまあ、そこはマンガですから」

「そこは、『設定』を受け入れられないと、ファンタジーを楽しめないんですよ」

「そういう『シチュ』だから、でいいじゃん」

と、すれたふうの解説と発想をするものと思うが、じつはそれらの解説は正鵠を射てはおらず、本当にはもっとちゃんとした理由があるのだ。

正しくは、

「登場人物らによるドラえもんの受容は、それによって本作の主題を阻害しないから」

というように説明される。

本作の主題は「平凡な少年の、果てしない夢」だ。

のび太のご両親がドラえもんを理由なく受け入れたとして、そのことは、主人公のび太が平凡な少年であることを阻害しないし、その少年が果てしない夢を描くことも阻害しない。

このように、フィクションというのは、主題を阻害しないかぎりにお

いては、必ずしも事象を現実基準に沿わせる必要はないのだ。

そしてむしろ、平凡な少年というのは、物事をそこまで「現実」という辞書に突き合わせてはいないものだ。平凡な少年は、現実を生きているのではなく毎日を生きている。

だから、「現実」より「毎日」が優先され、のび太のママが「ドラちゃん」のいる毎日」を過ごすほうが、表現として主題の保障にはたらくのだ。

仮に、ここできゅうに、のび太の両親がドラえもんに対し、

「あなたはいったい何者ですか、警察呼びますよ」

と現実風味のことを言い出すなら、^^その視点は平凡な少年の所有する視点にそぐわないV.V.のであり、主題を阻害することになって、そのことのほうが作中の表現として単純な「失敗」「的外れ」となる。

ときにそうした、「のび太のママがドラえもんについて警察を呼ぶ」というふうの、安易でふざけた異化の導入は、そもそもに侮辱と解体の意図が混入しており、その場合の失敗というのは作品世界に対して「致命的」な失敗——および致命的な破壊——になりうる。

「のび太って、どれだけ季節が循環しても、ずっと小学四年生のままだよね笑」

もちろんそうした言い方も成立するが、それも先ほど述べたのと同じ、主題が「平凡な『少年』」のもので、のび太を加齢させる必要は当作用にない、というのが正しい説明になる。

彼が年次をあげて青年に近づいていくというようなことは、ドラえもんの主題からは遠ざかるということであり、それもまた作中の表現としては失敗となる。

あるいは仮に、ヒロイン「しずかちゃん」を、もっと性的かつ美麗に描くという案はどうだろうか。

作画の変更によって、しずかちゃんのバストが膨らみ、唇は色づき、四肢はなまめかしくなり、声は蠱惑的になる。

そうした現代風のアニメに仕立てたならば、すでに少年性を喪失した視聴者に向けて引力を発することはできるかもしれないが、それはやはり「平凡な少年」が見る少女の像ではない。

よって、たとえそれによって視聴率が増したとしても、作中表現としては致命的な失敗となり、そのときドラえもんはすでに主題阻害によって破壊されている。またそのときの破壊は致命的なものだから、そのような見当はずれの改作は、「ドラえもん」の版權を買った者による二次創作、同人誌」とまで言い捨てられるのが妥当だ。

主題、「平凡な少年の果てしない夢」を描ききるのに、おそらく主人公のび太は未だ精通をしていない。よって、のび太がヒロインしずかちゃんに向けるスケベ心というのは、それじたい破廉恥なほどにあるにせよ、そこに未だ凌辱の発想と機能は乗っかっていない。

精通前の「平凡な少年」において同世代の女の子は、特にあこがれのガールフレンドにおいては「清らか」なものであって、だからこそヒロインしずかちゃんの裸体はいつも清潔さを担うバスルームで湯気をまとうて出現する。その出現は「女の子的」であって「煽情的」ではないのだ。

なお、昭和生まれのわたしから補足させてもらうと、ドラえもんが連載されていた昭和の当時、小学四年生というと、まだ体育の時間には男女が同室で体操服に着替えるのがふつうのことだったように思う。そこでやはり、脱衣にかかわって性的な緊張感は起こるのだが、かといって当時の少年と少女はそこに直接の凌辱のヴィジョンをひもづけていたわけではまったくない。つまりありていに言うと、それなりにドキドキはしたがそこまで「エロく」はなかったのだ。当時の子供たちの手元に、いわゆる性癖とオカズを加速する電脳通信端末はまだない。そうして加速されず未発達のままの神経回路は、女子が着替えているからといって少年たちの陰茎にただちに興奮と勃起をもたらすというものではなかった。

加えて、同時代のころのテレビ番組の録画などをウェブ上で探すことは可能だと思うが、それらを観るとゴールデンタイムの番組で女性のバストがわざとらしくあらわになっているシーンがまるで「お約束」のように挟み込まれているのを確かめることができよう。そして、それこそ政治的環境が違ったのだと言えるが、その映像に出ている「ハダカ」は、なぜかそこまで猥褻なものという印象を与えてこないのだ。よって、当時のドラえもんの作中に頻出するしずかちゃんの「入浴シーン」の描き出しも、それと同じ位置にあるものだったとわたしは説明しておきたい。

しずかちゃんの、湯気をまとった裸体にデレデレになりはしても、少年の夢は少女の凌辱を思い描くことには向かわないのだ。

それどころか、ドラえもんの未来道具を手にとると、のび太はすぐに、「そうだ、いいことを思いついた！」

と言いつくす。そうして夢が広がり始めると、もうのび太はヒロインのヌードのことなど覚えていない。

のみならず、学校の先生に叱られたこと、テストで0点を取ったこと、ママに小言で罵られたこと、ジャイアンに暴虐を受けたこと、スネ夫にあてつけられたこと、たちまちすべてのひがみを忘れ去り、夢がのび太を羽ばたかせる。その夢はまた、未来道具に象徴されて、「未来っていいなあ」と、少年が未来を夢そのものに思うということにも構造づけられているのだ。

夢によってたちまちひがみを忘れ去る、彼のそのあまりの速さは、のび太が眠るときの速さに等しい。彼はじつは、落ちこぼれでいながら「のびのびとして太い」のだ。彼ほど、日々貶められていながら、呪いに縁遠い者は他にいない！

とはいえ、未来の道具を借りて夢に羽ばたきつつけるというのはいささか虫の好すぎることだ。それで、調子づきすぎたのび太は、未来の道具もさまざまに裏目に出て、けっきょくは道具頼みではどうにもならない

いというラストシーンを味わう。借り物の道具ではなく彼自身によって羽ばたかなくてはならない——彼自身で未来へ向かわねばならない——のだろうが、それはまだ遠い話として、何はともあれのび太の一日は終わっていく。少年の夢は未だ夢のまま……しかし日中のそれはたしかな夢ではあった。のび太はその夜、床についてすぐに得意の深い眠りの中で、夢の続きを追いかけるだろうということが、受け手の想像力に描き出される。

このようにフィクションというのは、その話が「主題を体験させる」ということに成功していればそれでよいのであって、それが成されるかぎりは種々の表現を必ずしも現実に沿わせる必要はない。一方、こまごまとしたこともなるべく主題を保障するように描かねばならず、主題を阻害するようなものは慎重に排除しきらねばならない。作家はそのことに全身全霊を傾けねばならず、そこでのび太の年齢が連作の中でずっと小学四年生であることへの指摘などまったく見当はずれのことなのだ。わたしは以前、かつて流行した「新世紀エヴァンゲリオン」についてのコラムを書いた。

いわく、

「新世紀エヴァンゲリオン、いわゆる“エヴァ”には、フリーバーだけが丹念に詰められてあって、作中には何の話もない」

「これはそもそも“話”ではないのだ」

ということ。

めくるめく、こだわりのフリーバーが、色とりどりに現れてきて、そのフリーバーが視聴者を酔わせてとりこにするのだけれども、それは本稿に引き当て言うなら、あまりに典型というほどの「色（しき）」だ、「話」ではまるでない。

このことを、この章では少々テクニカルに視ようということなのだが、たとえば典型的には、「壱号機」等と取り扱われる機体について、

「充電率、〇%！」

と言いつくのはよくない、ということになる。

なぜなら、充電率と言いつくすと、

「えっ、動力は電力なのか」

ということになってしまうし、

「充電ということは、バッテリーを積んでいるのか」

ということになってしまうからだ。

さらに、

「そのバッテリーって、何ボルトで充電するやつで、何アンペアアワーの電容量を持っているやつなのか」

「充電器のほうは、メーカーはどこなのだろう、三菱重工とかが作っているのか」

「ネルフの基地に電力会社のインフラが敷かれているということ？」

ということになっていってしまう。

さらにもっと致命的なことと言えば、それがバッテリーによる電力駆動だということになると、もうだいたいバッテリーの容量から壱号機の出力できる仕事率（ワット数）が算出できてしまうではないか。バッテリーで動いているならバッテリー容量以上の仕事はどうしたって出力されない。

そうなるともう、エヴァがすごいというより「バッテリーがすごい」という話になってきてしまう。

だからせめて、充電率ではなく「エネルギー充填率」というふうにしておくべきだったろう。そもそも当作においては、エヴァ側にせよ使徒側にせよ、その強大なエネルギーの源を神話に結びつけてごまかそうとしているのだから、そこに「充電」というようなノンフィクションの語をあてがってはいけない。話が壊れてしまう。

新世紀エヴァンゲリオンは、主題のレベルで、それをファンタジーに

するかSFにするかということの取り違えがあるのだ。

新世紀エヴァンゲリオンを、メカニカルないわゆる「ロボットアニメ」にしたかったのであれば、せめてエヴァの機体駆動方式については設定を作りこまなければならなかったし、もしそうではなく、当作を「ファンタジー」にしたかったならば、エヴァの機体駆動は徹底して神秘的な動力のものとしなくてはならなかった。

「修理を行うメカニックたちは、どこでエヴァ整備の知識と技術を教わったんだろう。この人たちってネルフの職員？　そもそも修理の部品は誰が作っていてどこから仕入れるんだよ」

「シンクロ率を測定している『装置』は、いったい何のセンサーで何の情報計測してそのパーセンテージを算出しているんだよ。こんな便利なものを作る人がネルフにいてることなの？　そもそも百分率だけ算出されているけどシンクロ率を測定する元の単位がわからん」

「パターン青、使徒です、って、その使徒判定装置はどういう仕組みで、誰が作ったの。なんでそんなリトマス試験紙みたいなものがあるの」

そうして当作は、最初から何もかもがぐちゃぐちゃになってしまっている。片面ではファンタジー——あるいは神話のパロディー——の骨組みにしておきながら、もう片面ではリアルでシリアスなハイテク戦争物を描きたがっている。そこでリアルでシリアスに考えるなら、人類の外敵に抗するエース機体のパイロットは優秀な軍人に担わせる以外にない。

そしてそうした軍人は士官学校と訓練によって秀でた戦士として輩出されるのであって、それを「よくわからない『ネルフ勤務のおじさん』」の中学生の息子さんに個人的に人類防衛を任せよう——なんてわけのわからない話にはなりえないのだ。

そもそも使徒の側だって、人類を滅ぼすつもりなら一基ずつやってくる必要はない、戦力をまとめて叩きつけたほうが手っ取り早く目的を達成できるのは明らかだ。

昔からある「ウルトラマン」は、シリアスな人類の敵と格闘して、それを撃退するという軍事が主題の作品ではない。もっと単純な「正義」を子供向けに、力と人の姿で現すのが主題の特撮だ。けれどもエヴァはシリアスぶりながらこの子供向け特撮の「ウルトラマン」の構図を採ってしまっている。

その他、言い出すときりがないほど、当作は「話」としてはめちゃくちゃなのだが、それはむしろ恣意的なことであって、そもそも「話」と「色（しき）」は相互に侮辱的にはたらくのだから、「話」を解体しまくればこそその荒唐無稽なフレーバーが鋭く立ちのぼるのでもある。だから本作は、はっきり言ってわざと話を壊している。話を壊すことで、思春期の精神的なこじれ、たしかに大人になりそこねるかもしれないという時期の、不衛生な中学生フレーバーを、そのままに封入している……ある面ではオナニーを恥じ、ある面では厚かましくハーレムを空想し、ある面では無垢を気取りたり、ある面では自己ヒロイズムを空想し、ある面では毒親の被害者を気取るという、けっきょくはどこまでも受け身で主体性のない幼稚なままのナルシシストがそこに露出しているのだ。彼が彼自身で用意したものはそこには何ひとつなく、世界中のすべてが——神話までが——自分に何か特別なものを用意すべきなのだと要求し、そのことを自分ではピュアだと本気で思っている。そこには酸鼻な瘴気が漂っているが、その瘴気が自己愛によってまるで幽玄の美たるかに飾り立てられており、その身も蓋もない厚顔無恥が一定の視聴者を本性において共鳴させファナティクに惹きつけたわけだ。たしかに大人になりそこねたかもしれないという中高年はじっさいの世の中にいくらでもいるのだから。

話と色（しき）は相克するので、色（しき）のプレイヤーは恣意的に「話を壊す」のを自己の活動とする。とはいえ、もともと成り立っている

ない話を壊すことはできないので、壊すための話が必要だ。『エヴァ』の場合、その破壊すべき原本を聖書・福音書に選んだ。エヴァンゲリオンはもともとラテン語で「福音書」の意味だ。

もともとの福音書は「罪の赦し」の話だから、それを破壊するために作り手は「シン(sin)」の語をあてがう。すでによく知られているように、「シン・○○」と言いたがる。Sin は英語の「罪」の意味だ。

ほかの作品の例にも目を向けたい。たとえば一時期流行したマンガ「進撃の巨人」が、まだ二〇二五年のわれわれの記憶にわずかな新しさを残しているが、当方は「立体機動装置」によるバトルシーン形成が第一に読み手にとって印象的だった。もちろん、手持ちのボンベのガスでいどを噴出したところで、あのように人体を飛翔させるということは現実には不可能だ。ガスの運動量が足りないし、仮にじゅうぶんな運動量を得たとしても、空中であのように方向転換はできない。立体機動装置の飛び方は「ロケット」でしかないのだから、その転回挙動はどう急いでも大きく膨らんだ弧を描いてしまうだろう。

けれどもそこはフィクションだから、そのことが主題を阻害しないかざりは現実に即さなくてよい。兵士たちは立体機動装置でクイックに飛び回るべきだ。

当方のもともとの主題はきつと、「思春期じみた少年の心象風景」そのものにあっただろう。それこそ「実存」のグロテスクな怪物どもに對し、それを斬りつけて暴力的に斃したくなるし、一転、震えて壁を作り、もう見なくて済むように遠ざけておきたくなる。そうした思春期の慟哭がもともとの主題で、その主題のうちにあるかぎり、立体機動はいくらでも飛び回ってよい。

けれどもたとえば、作中に通常の大砲などが出てくると、話は損傷し始めてしまう。なぜなら、火薬で鉄球を飛ばすというのはガス圧の技術であって、ガス圧の技術を言い出してしまつと、

「いやいや、人をこれだけ自在に飛翔させられるガス圧の技術があるなら、もつと優れた大砲をいくらでも作れるだろう」ということになってきてしまう。

そして、そのようにいったん作中世界が主題を見失い、たとえば軍事的なイメージのやりとりで逸脱し始めると、

「指揮系統がめちゃくちゃすぎるだろう」

「兵長が作戦内容を決定するなよ、兵長ってそんな階級じゃねえよ」

「そもそもこんな規模の集まりを『兵团』とは呼ばねえよ」

ということになってきてしまう。

主題を見失つて軍事的なふうを言い出した時点で、もう「進撃の巨人」は壊れてしまう。

なぜなら、そのとたん「調査兵团」は兵团でも何でも無い、

「ただの部活動」

になってしまうからだ。

顧問の先生がいて、格の違う先輩がいて、厳しいリーダーがいて、共に助け合うメイトがいて、仲たがいもあつて、という、典型的な部活動のイメージだ。

そもそも王国であろうが共和国であろうが、政権がある国は政権が軍事行動の内容と目的を決めるのであつて、軍隊が軍事行動を決めるのではない。

当たり前だ、たとえば自衛隊の行動は日本政府が決定するのであつて、自衛隊が勝手に会議を開いて勝手に軍事行動を決定してはたまらないだろう。関東軍じゃあるまいし。

(いや、かつての関東軍でさえ、さすがに国内にあれば勝手に軍事行動はしなかったはずだ)

もし軍隊が勝手に軍事行動を決めるならそれは軍事国家であつてもう軍じたいが政権だ。その場合は国号も変わってしまう。

政権を担わないなら、彼らはもはや軍でさえなく、ただの愚連隊、ただの山賊だ。

「進撃の巨人」の軍事力は何らのシビリアン・コントロールも見られないし、かといって、王権の樹立および王家の封建にかかわる歴史も人々に共有されていない。

王権の樹立と王家の存続が神話の権威を持っていないでは、王は王として主権の当事者になることができないので、それでは荒唐無稽なただの「王様ごっこ」になってしまう。

また、国の主権が王権なら人々は臣民あるいは領民として暮らすことになるのだが、当座では人々はまったく市民のように暮らしているし、領地を安堵された門閥貴族たちの面影も見当たらない。

だから、このあたりのことが収束していく先、

「……これって部活動なの？」

ということになってきてしまうのだ。

人類が露骨な防壁の内部に引きこもり、外部から迫ってくるグロテスクあるいはコズミックホラーの怪物に怯えて戦うという点、およびその対抗する戦力が、親に細工された思春期の少年ひとりのみ帰属しているという受け身ヒロイズムの点は、「新世紀エヴァンゲリオン」と「進撃の巨人」で共通している。またそのじつさいの戦いが、ヒステリックであったり転じて勇敢ぶったりという、二股膏藥を示すのも両作に共通しているだろう。「エヴァ」のほうが近未来イメージの趣味で、「進撃」のほうが中世イメージの趣味だったというだけでしかない。「エヴァ」のほうは「ごく小さい個人的なサークル活動」という趣きで、「進撃」のほうは「それなりに規模がある部活動」という趣きだ。

わたしは「進撃の巨人」の話の顛末を知らないのだが、「エヴァ」の類型から推測するなら、「進撃の巨人」は何かしらもともとある神話の改変という形でしか締めくくりに向かえないはず。つまり「新世紀〇〇巨人

神話」という形を最終的に採るはずなのだ。

「話」と「色（しき）」は相克しており、前者は統合の向きに現れ、後者は解体の向きに現れる。それで、色（しき）が解体の向きといっても、解体するためにはもともと成り立っている何かしらの話が必要だ。その解体（破壊）の営為は膨らませていくうちどうしても、「話」の出現した根源である神話に行き着かざるを得ない。

新世紀エヴァンゲリオンのテーマソングでは「少年よ神話になれ」と唄われるが、けつきよくのところ、色（しき）の作品は、^^神話なんてなかったんだVVという結末を持ってエンディングとせざるを得ない。

「話」の作品は、数々の神話を「あるやもしれぬ」と見上げる形をもってそのエンディングを迎えるが、「色（しき）」の作品は、その見上げるべき神話が「なかったんだ」と消え去るという形をもってエンディングを迎えるのだ。

有名なアニメ映画「天空の城ラピュタ」では、宮崎駿はそのモチーフをあきらかに「空を飛ぶ少年」に置いている。プリミティブな宮崎駿においては、まるで空を飛ぶ少年だけがすべての罪から離脱しているという解決的な存在だ。

極端な言い方をすると、

「少年が空を飛べば勝ち！」

という、野放図なほどシンプルな主題が宮崎駿のもともとの世界とと言える。

それでいて、少年はやがて青年となっていくかざるを得ず、精通を得て以降は、まるでニーチェの言ったような「力への意志」に向かわざるを得ないようだ。

つまり宮崎駿は、「空を飛ぶ少年」の救われぶりに牽引されながら、自身の戦争体験——直接には戦災体験だったろうか——の闇にその足を引かれ続けている。宮崎駿においてこの主題は解決を得ていない。なぜ空



を飛ぶことを目指した少年たちは、気づくと空中で殺し合いをやり、生々しい「力の放出」を競っているのだろうか？

それでもなお、すでに少年ではない主人公に空を飛ばせようとするとき、宮崎駿はやむを得ずその男を「豚」の姿で描く。

宮崎駿の世界において、無条件で空を飛べるのは精通前の「少年」のみであり、「少女」の場合は空を飛ぶのに血筋を要する（ナウシカとシータは王家の血筋、キキは魔女の血筋）。ただし、血筋にかかわらず、また精通や初潮の有無にかかわらず、どこかに魂の純潔を保っている者はトロに代表される精霊を視認することができる（サツキとメイはトロロやネコバスを視認できる、また月島雫や天沢聖司は或るネコを視認できる）。

宮崎駿の作中世界は、空に向かう少年の特別性と、精霊に出会う子供たちの普遍性を描きつつ、彼らがけつきよくのところ、大人になるにつれ「戦争」や「少女を凌辱すること」へ引き込まれていくということのおぞましさをほのめかしている。「力への意志」（ニーチェ）といえば、天空の城ラピュタでの悪役ムスカはいかにもそれだ。弱視と虚弱体質によってコンプレックスを負った男は、核兵器（ラピュタの雷）に代表される「力」の増大と放出に向かい、そのことにとり憑かれる。

そして、当作にのめり込む少年少女には未だ視認されないところだが、ムスカは王朝の正統後継者であるシータを娶るつもりなのだ。それによって性的なペアリングを獲得しつつ、さらには王位継承を正当化できる続柄まで得ようというわけ。そのことが実現されれば、彼は妻さえ伴ってまるで「力ある者」のように成り上がった姿を現すことになるだろう。

当作「天空の城ラピュタ」はもとより、「風の谷のナウシカ」にせよ「紅の豚」にせよ、あるいは「カリオストロの城」においても、けつきよくのところ、

「大人は、巨大な力を得ることに向かい、その力の放出のひとつとして、

少女を凌辱する」

という、少女の貞操にかかわる危機が、宮崎駿の主題には含まれている。つまりナウシカもシータもフィオもクラリスも、力ある者に「犯されてしまう」という悲惨さが宮崎駿の抱える暗黒側のモチーフだ。これに対して、少年や男（豚として描かれる）は、どのように対抗すればよいのだろうか？ そのような話として宮崎駿の作品は描かれる。

「天空の城ラピュタ」で主人公パズーは決然と暗黒側のモチーフと対峙し、「もろとも滅ぶべし」と決定することの当事者の位置に立って王女の尊厳を守護するのだが、彼の騎士道と王女は人為ならざる力によって落下から守られるところ、彼の威風ははまるで、

「少年が空から墜落することはない」

と前もって知られているかのようなのだ。

そのように、「空に属する者」の特別性を描く反面、「精霊と出会う子供たち」の普遍性を描くときには、子供たちはおおよそ地上のもの、特に土と木々に属している。サツキとメイがトロロやネコバスに乗って空を駆けることがあったにせよ、彼らの所属は空ではなく土だ。彼女らは両親のところにそつとトウモロコシ——農作物——を届けることが似合っており、宇宙に去る飛行石の伝承を見届けるというようなことはしない。

それで、子供たちはまさにそのようであったとして……つまり「少年かくあるべし」「子供たちはこれでいいんだ」ということの描かれようはほとんど完璧だったとして、彼らがやがて大人になっていった先にならぬように生きていけばよいのかについては、宮崎駿からの提示は菌切れが悪い。作中、仕事にまい進するのみの大人たちは、くたびれを背負いながらもあたかもその罪を免除されているかのように明るく描かれるが、宮崎駿はしよせん大人たちについては「呪い」を視ずにはいられないようだ。よって、単純に子供たちの世界を描かない場合、宮崎駿の世界には、生死の境にかかわるダイナミズムに近接して、濃厚な「呪い」の表現

が出てくる。マルコ・パゴット大尉が「豚」になったのも、作中では「魔法」と言われているものの、その現れ方は端的に「呪い」だ（空戦で味方を死なせ、敵兵の悪意に直面し、人間不信に陥って以降、マルコは「豚」になっている。なお一時的であれ「乙女のキッス」で解呪されるのは、グリン童話「カエルの王子様」に引き当ててのことだろうか。わたしはこの明るいおじさんがかんがえる話が好きだ）。

「もののけ姫」においても、呪いはむしろそれじたいが主題のように描かれる。主人公アシタカはむしろ呪いによってこそ導かれ、彼の物語はやがてわれわれを古代「大和（やまと）」と現代「日本」の結節点に連れていき、そこにあった出来事にわれわれを立ち会わせるのだが、アシタカがそうした宮崎駿による日本神話の主人公にふさわしいにしても、彼が空に属する者ではなく呪いにかかわる者として描かれるのは、やはりそのとき彼がもう少年ではなく、もののけの姫サンと閨（ねや）において生殖行為が可能な青年だからなのだ。

このように少なくとも、宮崎駿は主題に接続してすべての話を見い出しているの、宮崎駿の作品において「話が壊れている」ということはまず見受けられない。ただ、「少年かくあるべし」に代表される子供たちの世界の描かれようの完璧さに比べると、「大人はどうすればよいのか」について描かれる呪わしさはわれわれを単純によるこぼせてはくれないという具合だ。

宮崎駿の描く「大人」の行き詰まりは、つまるところ「核兵器投下以降、もう世界の仕組みが変わってしまったのだ」「あの戦争前にはもう戻れないんだ」と嘆かわしく言わんばかりなのだが、それ以上の回答がこの先（二〇二五年以降）にあるのかどうかは定かではない。

ともあれ、ここでの焦点は、宮崎駿は主題に接続して話を見い出しており、作中の表現はすべて主題を保障し、主題を阻害しないよう入念に配慮されているということ。「天空の城ラピュタ」では、「空を飛ぶ少年」

「少年かくあるべし」という主題が体験に熱烈に――血沸き肉躍るほどに――描き出される。この冒険活劇の本質に立てば、もはや本作は「パズル」が空を飛ぶためにラピュタがある」と言ってい。そしてそうして空を飛ぶことに向かう少年は、常に快活で、よく働き、勇敢で、無条件で少女を愛して庇護するのだ。そのように主題が体現される中、たとえば「あのような高度にあるラピュタの気温はもつと寒いだろ」とか、「ムスカは世界征服をする前に食料がなくて餓死するのではないか」とか、そんなことは主題に寄与しないので捨象してかまわない。

「飛ばねえ豚はただの豚だ」という有名なセリフがあるが（多く「飛ばねえ豚」と誤って捉えられている）、これはまるで宮崎駿本人の述懐じみて、「それでもあのとときの空に向かい続ける」「それをやめてしまったら本当にただの豚になるから」と聞こえてくるのだ。ポルコは明らかにジーナを通して民主化活動の地下組織に資金を提供しており、だからこそ秘密警察に追われ、だからこそジーナも、イタリア人でありながらフランスの――あわれなバリ・コミュニケーションの――レジスタンス・ソングを唄い続けるのだが、こうした「話」の全容を受け取れている人は作品の知名度と比してまったく数多くはない。ポルコはファシズムに対抗するために空を飛んで空賊狩りをしていたのか、それとも空を飛ぶために空賊狩りをしてファシズムに対抗していたのか、定かではないが、それはきつとポルコ本人に問い質したとして、やはり本人にとっても定かではないのではなからうかとわたしは思う。

他の作品の例。アニメ映画「サマーウォーズ」の、主題は何だったろうか。これもまた、フレイバーがよく思い出される一方、その主題が何だったのかはあきらかでない。

タイトルやキャッチコピーをあてにして、テクノロジーにかかわる新しい形態の「戦争」を主題に採る場合、やはり人類の存亡がひとりの少年の双肩にのみ掛かるといふ不自然さには目をつむるにせよ、あこがれ

の先輩女性である夏希と親しく睦（むつ）みあって彼女の実家に赴き、その彼女の前で「いいところ」を見せつけるという構築はあまりにわざとらしくて無理がある。

作中、^^夏希および長野県の田舎の風景などをすべて取り去ったとしても、テクノロジ―戦争の成り行きには何らの変化もないV.V.。よって、本作の主題をテクノロジ―戦争と言い張ることはできない。

ではけっきょくのところ、失われたノスタルジ―と、そこに思い出される、あこがれの色恋沙汰、その空想の諦めきれぬ味わいが主題なのかという、けっきょくいかにもそれが動機（モチーフ）で作られたような気がするけれども、だとしたらそれはただそのように描かれるべきで、そこにテクノロジ―戦争を貼り付けるというような構築はお門違いで卑怯だ。冴えないナードの少年が「上級」の女性と睦みあいたいがためというような理由でそこにテクノロジ―戦争を貼り付けるというような厚かましい発想をするべきではない。

作中、主人公と夏希との無意味な接近が描かれているのはあきらかにヘンだし、そこにわざとらしく――都合よく――テクノロジ―戦争が仕掛けられてくるのもヘンだ。そして暴走したコンピューター側が、「パスワード」と「サイファー」を混同し、わざわざ本作の主人公向けに暗号を用意して提出してくるというのもあまりに不自然だ。不自然というよりそれははっきりと恣意的で作為的だ。ログインに必要なのはパスワードであってサイファー（暗号）ではない。開示されていないパスワードを外部から読み取るのに必要な能力は数学の能力ではなくブルートフォース（総当たり）か、そうでなければテレパシーや千里眼・透視といった超能力だ。

なぜ数学の能力者に、超能力者向けの課題をあてがい、その破綻をこまかすために、コンピューター側がわざわざそれを暗号化して開示してくるというような仕掛けを表現したのだろう。

これは「話が壊れている」のだ。

主題はきつと、あこがれの女性先輩の前でいいところを見せ、ヒロイズムの中で睦み合い、周囲にもちやほやされて、受け入れられたという、思春期を持ち崩したままのスケベ空想のそれであつたろうのに、ここにあたかもテクノロジ―戦争が主題であるかのように展開を貼り付けて偽装――というよりは隠蔽を――したから、結果として話が壊れてしまった。

ついでに言うと、クライマックスに無理やり出てくる「こいこい」も、何かルールがヘンだ。「こいこい」は一般にそんな倍々ゲームではなかったはずだし、表示されている札のありようもあきらかにルールのおかしい。まるで花札をやったことがない人がそのクライマックスのシーンを作ったのかと思われるほどだ。なぜこんな致命的なミスを放置してそのままクライマックスのシーンにしたのだろう？ そのことはまったくもって謎だ。ここまで「完全な謎」は他に見当たらないというほどに謎だ。

だらしない男に、上等な女性をあてがってラブコメを成立させたいが、そんなもの成立しようがないので、唐突に「人類存亡の危機」を貼り付けるというでたらめな手法は、新世紀エヴァンゲリオン、サマーウォーズだけでなく、アニメ映画「君の名は」にも見られる。

タキとミツハにラブコメをさせたいのだが、成り立たないので、そこにキラキラの彗星でも落下させるかという、やはり厚かましい発想が現れている。

類型として、多くの人々にとっての存亡の危機、空前絶後の天変地異を主題とする、いわゆる「パニック物」をやるかに見せかけて、本音はラブコメ空想をやりたいというもの。主題がもはや企画段階で阻害されているので、結果として話が壊れてしまう。

わたしの知るかぎり、この手法でまともにラブロマンスの「話」を成

功させているもので著名なものは、映画「タイタニック」ぐらいしか存在しない。そのタイタニックですら、本質的にはラブロマンスを超越してしまい、ひとりの青年の英雄譚とひとりの女性の自立を描き出すに至っているのだ。

パニック物、天変地異を主題にした話を、ラブコメの味付けで料理してみせようなどというのは、たとえるなら映画「アルマゲドン」を矢沢あい描いてもらおうというぐらい基本的に無理のあることで、ほとんどの場合で成功しない。

「君の名は」の構築において、タキとミツハの人格が三年の時間差で入れ替わり、その時間差が「綾」となって本作の筋書きを生み出していくのだが、この「綾」が機能するためには、タキとミツハがその時間差に「気づかない」必要がある。しかしそんなことは、テレビニュースをちらっと見ただけで「時代が違う」と気づいてしまうだろうし、スマートホンの画面を見ただけで「日時が違う」と気づいてしまうだろう。流行している歌も違えば、総理大臣の名前も違うのだ。そのことにずっと「気づかない」ということにはどうしても無理があり、その無理が目立つてくると、そもそもSF的にもスピリチュアル的にも力学的説明がされないまま「入れ替わり」が「設定」としてねじこまれていることにも違和感が立ち込めてきてしまう。

では本作の受容はどのようにあるのか。それはいつそ逆に明らかに、つまり思い入れある「学園」のノリと、押し寄せるラブコメの味わいを示すから、それをもってもう、

「細かいことは全部忘れてくれ！笑」

と要求されているのだ。そしてその要求を「むしろ望むところ」と飲み込んでいける人だけが本作に没入でき、その味わいに浸ることができるということになる。

本作は当時ずいぶん人気作になり、現代の言い方で云えば「覇権」

となって、われわれをしてさんざん「名作」と言わしめたのだが、果たしてわれわれは本当に、そこまで「話」をないがしろにしてその味わい・フレーバーばかりを吸い取っていて良いものだろうか。われわれはそのことを良しとする旨の契約書を受け取り、精査はしないまま、いつのまにかそこに署名捺印だけはしてしまっているという可能性がある。

話と色（しき）は相克しており、作り手が色（しき）の使徒であった場合、その作品は「話」ならざるものとして現れてくるのだ。このことはあらためて注目に値する。もちろん、作品という体裁のために、外見上は何かしらの「話」を形成しているかのように見せかけてくるが、よくよく見ると話としては壊れており、そこには色（しき）ばかりがてんこもりに詰め合わされている。

壊れている話に対してわれわれは、眉をひそめはするし、まずは一定の距離と警戒心をもってそれを迎えるだろう。とはいえそこに封入されているめくるめくの「色」は、それを開封する初学者をいつときに「わあっ」とときめかせ、たちまち惹き込んでしまうぐらいの引力は具えているのではないか。

われわれはいまいちど、これまでに「作品」と思われてきているものが、ひとつひとつ本当に「話」であったのかどうか、点検していく必要があるのだ。

たとえば小説・映画で有名になった「ハリー・ポッター」のシリーズにおいて、主人公がもともと家族内で立場の弱い「いじめられっ子」だったという設定と描写は、どのようにも主題に結びついているとは言えない。ただ観ている側がスカッとするだけだ。

主題に何らひもづいておらず、ただ「スカッとする」だけ。そんなことをやりだせば話としては壊れていくのが当たり前だ。タキとミツハのラブコメ、糸守町とカラフルな彗星に「うっとりする」というようなこと、それは色（しき）であって話ではないのだから、そんなことをしていた

ら話が壊れる。あるいは碇シンジくんの形相に「エモい」と感じ、わざとらしく強調されるプラグスーツに「エロい」と興奮する、それは色（しき）であって話ではないのだから、そんなことをしていたら話が壊れる。はたまた、主人公の登場にオンラインのコメントが殺到して、湧いてきた一体感にいつぞやの「鳥肌注意」を思い出し、同調者として酔いしれる、それは色（しき）であって話ではないのだから、そんなことをしていたら話が壊れる。

われわれは、たとえばモネやルノアールの絵画を観たとして、あるいはレンブラントの絵画を観たとして、そこに何かしらの「話」を体験することもありうる一方、そこにただ「すごい」「上手」「きれい」「迫力がある」「なんかやっぱオーラが違いますよね」という体感を味わうのみということもありうるのだ。体感はずべてパラメーターであって「話」ではない。

さらに、「話」ではない色（しき）を強く味わった者が、それを堂々と「感動した」と言い放つこともよくあるのだけれども、その場合の「感動した」には大いに疑義を向けるべきだ。

世の中には、映画の予告編だけで涙ぐんでしまうという人が少なからずいるものだ。スクリーンに映し出される巨きな画像、ハンサムで演出の効いたワンカット、意味ありげにイコライズされた太い音声、エモく挿入されるBGM、ライティングを施された極端なノワールと、ティールオレンジとスローモーション、何とは知らないシーンが次々に切り替わって見せつけられる、それだけで「感動する」という人がいる。

そうした人のありようについて、すでに現在、次のように明確に警告されなくてはなるまい、

「それではあなたは今後、生成AIが切り貼りした、ただ「エモい」だけの無意味なイメージの羅列に、感動して涙してしまう人になるよ」

いま現在、どのような漫画、アニメ、アイドル、ゲーム、小説、ドラマ、

映画、お笑い芸人が流行しているのか、わたしは詳しく知らない。率直なところ、そんなことをもう一個人で追跡していられるわけがないと思っっている。多ジャンル・大量生産が常態になった現在、ひとつの作品を窺っているうちにふたつの作品が創出されてしまうだけで、「現状」に追いつける人などとはや誰ひとりいないだろう。

だからあなた自身で各個に見極めるよりないのだ。作品の側で「話が壊れている」というものは確実に存在する。そして受け手の側で、おおいに怪しい「感動」をするということも確実にある。それらのことについてわれわれは、総じて「話が壊れている」ということに気づいていかねばならない。

作品にかかわって「話が壊れている」ということを看取せず、そこにあふれる色（しき）にただ取り込まれていくばかりということが続けていった場合、そのことはやがてあなた自身に望ましくない結果をもたらすだろう。

いざ、あなた自身がまともに「話」をしてみようとしたとき、それが出来なくなっているということに気づくのだ。

何をどうやっても、まともに「話」ができない。

「あれ、なんでだろう。おかしいな、ちょっと待ってください」

出来るはずのことがフラストレーションされる。

そのことが際限なく繰り返される。

われわれは、自分がまさか、「話」という根本きわまる機能を失うとは、

露ほども思っていない。

「ははは。いやあ、何なんでしょうね。え、なんかもう、無理です！」

正体不明の、ストレスと苛立ちが起こり、憤怒の熱の中、逆に恐怖に晒されて背筋が凍る。

何が無理なのかについて「話す」ということさえ、じつはもう出来なくなっているのだ。

まさか「話せない」とは。

閉塞感に自我が暴れだす。

それでも、何かしらの「話」をしようとはするのだが……自分の発想、自分のことば、自分の構築、そのときの自分の表情、声、態度、姿、それがすべて、

「なんか違う」

という形でしか出てこない。

どれだけ力んで振り回しても、「なんか違う」。

「なんか違う」が繰り返される。

このときに起こる違和感の連続と、不快さ、閉塞感と苛立ちはただならぬものだ。

「ん？ 違う違う、そうじゃなくて」

「何これ。え、なんでわたし、こんな顔するんだろう」

「こんな声、出したいわけじゃないのに、なんでかこんな声が出る」

「えー、なんで。何の話をしたらいいのか、すぐわからなくなっちゃう。なんかもうムカついてきた」

「え、なんでわたし笑っているんだろ。笑うところじゃないのに笑」

自分の「話」がまったくできなくなっていて、どこかで聞きしたような、決めゼリフや、決めポーズ、お決まりのイメージしか出てこない。

感情ばかりが動き、イメージばかりが湧いてくる。

唐突に、踏みつぶされたカエルの声を叫び出したくて、そのほうが「面白い」んじゃないかというような、支離滅裂な思考がエキサイトを起こす。

自分は、感情的にも思念的にも取り乱すばかりで、何の「話」も取り扱えていないということに、やがていやおうなく気づかされる。

そのときはすでに、自分の発想も、ことばも、構築も、表情も声も態度も姿も、ハハすべて色（しき）に支配されているVのVのだ。

そのころ、アイドルの笑顔が無意味に「刺さる」ようになり、まったく興味のない「アニソン」が、なぜかするする記憶に入り込んで定着するようになっていた。

奇抜なだけの二人組の、不明なだけの挙動を見て、

「おいしいキャラしているなあ」

と好感を持つ。

一方で、いまさら何かまともな「話」に触れても、その「話」はたちまち自分において解体されていってしまう。

「そうっスねー」

そう言った直後、もうその話は粉々に分解されて、手元には残っていないのだ。

このことは、もっとも顕著には、あなた自身で短編小説を書いたり、あなた自身で寸劇を作ったりしたときに現れる。

最小サイズの、何でもない、ありふれた小説でよいし、ありふれた寸劇でいい。あなた自身でそのありふれた「話」を作る。

「どんなものでもいいんですか？」

とあなたは問い質す。

わたしは「そうです」と答えよう。

あなたはその課題に、半分は首をかしげながら、もう半分は勇んで取り掛かるだろう。

ところがあなたは、ほとんどの場合で、そこで出来上がったものを、

「わたしの話」

とは認めないだろう。

（その日のうちは認めても、三日後にはあなたは認めなくなっている）そこに出来上がったものは、「しっちゃかめっちゃか」か、あるいは「ヨソからの借り物で、ネタ」のどちらかだからだ。

そのときのあなたは、「課題」はわかっている。

どんなものでもいいから、最小サイズの、小説を書くか、寸劇を作るかする。それを完成させる。それが課題だ。

だが、課題はわかるのに、主題がわからない。

むろん主題は自分で選ばよいのだが、その自分で選んだ主題がわからないのだ。

それで、自分で作った「話」が、自分でさえ何の話かわからなくなる。

そもそも、何の話にもなっていない。

簡素な絵を、想像力で三枚描く、ということを課題にしてもいい。

何でもない「絵」を描くだけなら、出来るかもしれない。

そう思っ取り掛かるが、やはり、そこで描かれたものをあなたは、

「わたしの絵」

とは認めない。

自分で描いたことは認めるにせよ、それが「わたしの絵です」とは認めないだろう。

描線の一本でさえ、それはヨソからの借り物で、ネタだ。

どのような場合にも、あなたはイメージを膨らませる。

登場人物のイメージ、シーンのイメージ、風景のイメージや、置かれている場所と静物のイメージ。

明るい「学園」のようなイメージもあれば、荒れ果てた「荒野」のようなイメージもある。

荘厳なイメージもありうるし、ポップなイメージもありうる。

それらのイメージは、すべて色（しき）であって、話ではない。

あなたは初めのうち、何も知らないで、それらの色（しき）をふんだんに織り合わせれば、それが何かしらの「話」になると思い込んでいる。

そして、そうではないのだという結果を三度も四度も噛みしめると、あなたはパニック状態になっていく。

何かしらのキャラ、何かしらのイメージ、何かしらのフレーバーを、

塗り重ねていっても、「話」にはならない。

それっぽい「ネタ」が作られるばかりだ。

そのことが次第に屈辱的に思えてくるので、あなたは途中で方向転換し、「マジ」になってくる。

あなたが「マジ」になりきれば、それを「ネタ」だと言って嘲笑する人は減少するからだ。

それで、あなたはシリアスで気難しく、プラウディで取り扱いのしづらい人になっていく。

さらに、そのあなたが美人だったり、イケメンだったり、バストが大きかったり、女子高生だったりすれば、急激に一定のファンがつくかもしれない。

何の「話」もないままにだ。

どのようにさまよっても、原理的に「話」でないところに「話」は得られない。

「話」は、主題を体験する、あるいは主題を体現する、ということにのみ得られる。

体の真ん中が主題との合一に及ぶときのみ、それが「話」になる。

自我に湧き続けるイメージ群、そこに起こる引力のすべては、「話」ではない。

それらはすべて色（しき）だ。

あなたがこれまでに触れてきた、さまざまな作品ひとつひとつについてわたしが、

「それってどういう話？」

と訊こう。

さらに、

「その話の主題は」

とも訊こう。

その問いかけに答えようとして、あなたが自身の内部に奇妙な混迷の引力、「解体」のはたらきを覚える場合、あなたはいまいちど、自分のこれまで触れてきたさまざまなものが本当に「話」だったのかどうか、あらためて点検していく必要がある。

## 話が「壊れている」ことに気づけ／③色（しき）を受容している

パッケージの裏には「あらすじ」が書かれている。あれは本当にはあらずではなく「梗概（こうがい）」という。

また世の中には、ビデオゲームの一ジャンルとして「エロゲー」というものがある。どういうジャンルなのか、内容についてはいちいち説明しない。

そして、あるエロゲーの「梗概」を抜き出すと、たとえば次のように書かれているのだ。いちおう、一般に言われる「閲覧注意」を付記しておく。

雪奈の巨乳による彼氏の圧死。

すべての物語はそこから始まる。

彼のためにも立ち直るべく、ひとり立ちを決意する雪奈。

彼女が勤めることになったカフェのオーナー兼、親友の麗華。

そしてある日突然やってきた、自分が乳殺してしまった彼氏にそっくりな男性、晋也。

あまりに亡き彼氏に似ている晋也の姿に、雪奈の胸は母乳を嘔く。

そして雪奈は彼の注文したコーヒーに、自分の乳を注いで差し出してしまふ。

そのミルクコーヒーの味に対する晋也の反応とは？

麗華と、その父親との確執とは？

雪奈の愛とおっぱいの行く末は？

そして、晋也の正体と目的とは……？

本作のタイトルについては、タイトルじたいがあまりにお下品なのでここには記載しない。気になる人は検索すればいいと思うが、その検索の先に見つかるものについては、わたしから申し上げられるコメントは何もない。わたし自身、さすがに本作をじっさいにプレイはしていないのだ。

わたしはただその梗概に、いっそほればれするだけだ。

われわれはもちろん、このような梗概を指差して、そこに、

「話が壊れている」

という糾弾を向けはしない。

誰が当作に、意味深長な話の組み立てを期待するだろう。当作はジャンルの、消費者の需要を満たすのが使命であって、つまりプレイヤーの性的嗜好を刺激して満足させ、あとは全体としてにかく飽きさせなければいいのだ。そのためにはもちろん、画像や音声の品質、また操作性やゲームバランスなども問われてくるだろうが、それにしても、「その需要」を満たしていて、あとはとにかく面白ければいいのだ。



そして困ったことに、本作は、そのぶっ壊れた梗概の時点で、すでに  
^^面白くないとはまるで言えないvv。

まず、ヒロインとおぼしき雪奈の巨乳による、彼氏の圧死。

まずこのフリーズだけで、われわれは日常の文脈を昏倒させられる。

とてもじゃないが、われわれはこのフリーズに、

「なるほどね」

とは言えず、なるほどねとは言えないので、どうするかといって、こ  
れはもうそのまま鵜呑みにするしかないのだ。

受容するしかない。

雪奈の彼氏は、雪奈の巨乳によって圧死したのだ。

そのことは後段で「乳殺」とも表現されている。

そうした二字熟語も、もはや受容していくしかない。

「すべての物語はそこから始まる」と書かれているので、しょうがない、  
物語はそこから始まるのだらうと、われわれは受容して進むしかない。

雪奈は、恋人の死から立ち直らねばならなかったが、亡き恋人に瓜二  
つの男、晋也を見かけて、母乳を噴いた。

なぜ、と問いかけることは、ここでいかに無力なことだろう。

母乳を噴いたのだ。

受容して進むしかないのだ。

「なぜ母乳を噴いたのですか？」

「そりゃ、亡き彼氏とそっくりの人と出くわしたからね」

「そっか……。でもなぜ、その母乳を、晋也のコーヒーに入れたんです？」

「そりゃ、自分で乳殺してしまった、亡き彼氏とそっくりの人だったん  
だもの」

「そっか……」

われわれはこのことに、話が壊れているという糾弾を向けはしないし、  
むしろあきらかに土台から話が壊れていることにこそ、エキセントリッ

クな面白味を見い出そうとする。それはそれでかまわないし、わたし自  
身、そうしたものを見つけてはゲラゲラ笑って大いに食いつくしてきた  
者だから、そこにある面白味がいつそ「かけがえのない」ほどのものだ  
ということをよく知っているつもりだ。

しかし、それでもなお、わたしは「話」の専門家としてここに必要な注  
意書きを示しておきたい。

男性が、この馬鹿げた梗概の面白味に惹かれ、本作を「プレイしてみ  
ようかな」ということに引き込まれていくのは、やはり何かしらの引力  
の作用ではあるわけだ。

女性の場合、さすがに本作をプレイしてみようとまでは思わないにせ  
よ、「内容は気になる笑」と感じるところ、それだってやはり引き込みは  
引力の作用なのだ。

ジャンルがエロゲーなのだから、当たり前のことではあるが、ここで  
の引力は「エロ」であり、色（しき）そのものだ。

女性にとっては、エロというよりは「下ネタ」の感触で、ここに引力を  
受けているだろう。

そして、話と色（しき）は相克するので、じつは、

^^話を壊すほど、色（しき）の引力は強まるvv

ということがここにはあるのだ。

ここでわれわれは、「受容」について誤解をしている。

われわれはあたかも、雪奈が彼氏を乳殺したことを、そして亡き彼氏の  
瓜二つの晋也に出会って母乳を噴いたことを、馬鹿げた「話」として受  
容したかに感じ、その話のハチャメチャぶりに思いがけず自分が引き込  
まれているかのように感じるのだが、本当にはそうではない。

われわれは本当にはここで、

^^「話」を拒絶し、「色（しき）」を受容しているvv  
のだ。

「話」をいつとき忘れ、「話ならざるもの」に引き込まれて愉しもうとしている。

そのことには、ジャンルがエロゲーだという、社会的承認も作用している。

われわれは、いわゆるエロマンガや、アダルトビデオ等を眺めるとき、その作中に示される設定やシチュエーションについて、「とやかく」は言わないのだ。

ありていに言えば、男性の場合、「なければそれでいい」としか思っていない。

仮に、アダルトビデオの設定やシチュエーションに、入念なストーリーと表現が盛り込まれていたら、それはむしろ、「作りこまれすぎていて、又きづらい」とマイナスの評価を受けるだろう。

われわれは雪奈の、乳殺、および晋也への母乳噴出という、ハチャメチャな「話」に引き込まれているのではない。

ここでは次の検証方法を知っておく必要がある。

仮に、雪奈の乳ではなく、雪奈の親指が大きかったとする。

雪奈はその親指で、彼氏を圧殺してしまった。

雪奈は、その圧殺してしまった彼氏に瓜二つの男、晋也に出会い、思わず親指から油脂を噴き出してしまった。

雪奈はその油脂を、晋也のコーヒーに注いだ。

このように、乳を親指に置き換えてしまうと、われわれはもうこの作品に、先ほどのようには引き込まれなくなってしまう。

だからあくまで、本作の引力はエロ・下ネタに生じているのであり、われわれは話のハチャメチャぶりに引き込まれているのではないのだ。

さらに言えば、親指に圧されて、元の彼氏と「別れて」しまったということだったら、ますますわれわれは当作に引き込まれなくなる。

なぜなら、圧殺されるということが、いちおうの死であり、そこにはグロテスクさという色（しき）が含まれているからだ。

圧殺だったものが、単に「別れた」というだけでは、われわれはそこに引力を受けなくなる。

さらにこの雪奈を、七十歳の老婆にしてしまえば、われわれはこの作り話にまったく引き込まれなくなるだろう。

七十歳の老婆の親指が肥大し、それが交際相手を圧殺してしまい、瓜二つの男に出会っては親指から油脂が出たのでそれをコーヒーに入れて飲ませたと言えば、

「何これ笑？ 気持ち悪っ」

と、首をかしげられて終わってしまう。

雪奈が、おそらくは若い女性だろうということで、やはりわれわれはその色（しき）に引き込まれているのだ。

だから、本作のグッ壊れた梗概が、われわれにエキセントリックな愉しみと期待をもたらすということについては、あくまで、

^^「話」をヘシ折って、色（しき）の引力を強めているVV

ということからの作用だと捉えていなくてはならない。

その上で、なおこの馬鹿げた色（しき）のパッケージを愉しむぶんには、当作はただ面白いというだけで、われわれに何らの損傷ももたらさないだろう。

とはいえ、われわれはそうまで受け取りについて伶俐なわけでもなく、そのことに成熟を得ているわけでもないの、特にこういったたぐいのものはR18の指定がされているのだ。

色（しき）の受容は、それじたいにもリスクがあるけれども、それ以上のリスクは、色（しき）を「話」と「誤認」してそれを受容してしまうというところにある。

「あまりに亡き彼氏に似ている晋也の姿に、雪奈の胸は母乳を噴く」

このわけのわからないフレーズを、われわれは受容するしか進めないにして、そのことは次のフレーズを受容することと何が違うというのだろうか。

「パターン青、使徒です！」

「シンクロ率、四百パーセント！」

「ATフィールド、全開します！」

「雪奈の母乳」を受容することは、われわれにとって「話」の受容ではないし、「話」の受け取りでもない。

では、エヴァ初号機の「ATフィールド」を受容することも、われわれにとっては「話」の受容ではないし、「話」の受け取りでもないのだ。

にもかかわらず、われわれはそのことを、「話」に引き込まれているものと誤解する。

「フィクションなんだから何でもいいじゃん」

そのような建前のもと、そこにある「話」にフリーダムに引き込まれていくつもりになり、じっさいには色（しき）の引力に引き込まれている。

引き込まれた結果、そこから帰ってきたとき、その手に握られているものは「話」ではない。

当人は、馬鹿げた話だろうがシリアスふうの話だろうが、「話」のつもりでそこに一握の砂を掴んできている。けれどもその手を開けば、そこから零れ落ちるのは、色（しき）の流砂なのだ。「話」の断片はその手に掴まれている。

仮にあなたが、三つか四つ、短編小説でも書いてみようかと思って取り掛かったとき、実作の段階で思いがけない“壊滅的”な出来栄を体験するのはこれが理由だ。

これまでに握りこんできた数々の手がかりを、いまこそ發揮してみせんと、いざその手を開いてみる。すると、その掌から現れてくるものは、

何ら「話」の要素にはならない何かであって、すべてが色（しき）の流砂として、指のあいだから零れ落ちていくのだ。

あなたは、思わせぶりの描写を冒頭から盛り込み、さも何事かが展開していくかのように見せかけて書き進めるも、千字もいかぬうちにただまだるっこしくなり、方途のない冗長な語りばかりが続くということを自分で体験する。そして肝腎の出来事の進み方については、まるでダイジェストかというような、投げやりな説明がされるだけになるのだ。

悪いことは言わない、小説を書くのなら、あるいは何であれ作品に向かうのなら、入念な浦島太郎が体の真ん中にあるほうがよく、「パターン青、使徒です！」に頼らないほうがいい。

雪奈による乳殺と晋也への母乳噴出が一見、エキセントリックなまでに「面白い」のは、あくまでその未知のグラフィックとテキストが「エロゲー」として期待されてパッケージに浮かび上がるからなのだ。エログラフィックやエロ描写なしに雪奈への引力は存在しない。エロゲーの主題は消費者の性的嗜好の充足と娯楽にあることを忘れてはならない。あなたがその主題のはたらきを忘れているとき、あなたは自分で書く小説において、主人公がどうにも引力を——魅力を——持つてくれないということに困らされ、その実作はどうしても傍目に「何これ笑？ 気持ち悪っ」と終わらされるものになってしまうだろう。

わたしは近年の各種コンテンツが、どのような設定・プロットで組み立てられているのかを知らない。先に述べたように、こんなに大量生産されるすべてをいちいち読み取っているようなヒマは誰にもないからだ。

たとえばここで、マンガあるいはアニメーションの創作を考えよう。

まず、意味ありげなモノトーン寄りの背景グラフィックを示し、その中にやはり意味ありげな、ちっぽけな老人を立たせる。

そして老人に、

「ようこそ、酒紅山妖術学校、特進科へ」

と言わせる。

特進科に生徒が来るのは、もう十年以上ぶりじゃな……

「その者。そなた、古い竜族に連なる者じゃろう」

あるいはその眷属か？

いや、眷属にしては、竜の血気が濃すぎるじゃろうて。

指摘する老人いわく、古い竜族の血は、強い妖術を実現しうる一方、

その血が妖術を激しく拒絶することもあるのだという。

その血が拒絶を選ぶとき、妖術にかかわって受ける苦しみは、

「それはもう、尋常なものではないのじゃよ。そのときは果たして、おぬしが無事でいられるかどうか」

老人は薄い目で、少年を見透かそうとするようだった。

けれども少年は毅然として、

「オレには、ナーキーがいる」

と言った。

「ナーキー？ ほほ、古いことばを使いよるの。おぬしらの国では、たしか、婚約者のことじゃな」

そうだ、ナーキーが、と少年は続ける。

ナーキーが、黒樹のタエに呑み込まれた、と少年は言った。

あつというまのことだったんだ。

老人は首をかしげ、

「タエ、とは？」

少年の言うところ、新月の夜に起こる、植物の異常な急速成長のことを、彼らは古くタエと呼ぶらしい。

「黒樹がタエを起こすことなんて、ここ何百年もなかったんだ。てっきりただの言い伝えだと思っていたよ。それでナーキーは……」

老人は少年を制止し、

「言わんでもわかる。わざわざ、この辺境の妖術学校を訪ね、しかも特進科にまで首を突っ込んで来よる奴は、のっぴきならん事情を抱えとるもんじゃ」

老人は言い、

「まあ中には、妖術に惹かれてたまらぬというだけの、ただの変人というのおおるけどものう」

そう付け足して、老人はキキキツと笑った。

こんにち、一般的にはこうしたものが「話」と思われている。

けれどもこれらは、いまわたしがでたらめに考えたイメージと設定を羅列しているにすぎず、本質は先ほどの「雪奈の乳殺」と変わらない。

雪奈の巨乳で彼氏が圧死したということがバカバカしくて、少年のナーキーが黒樹のタエに呑み込まれたというのが「それっぽい」だけだ。

「話」を放棄して、色（しき）に引き込まれている。

ここに例示した創作物は「話」ではない（※）

巨乳や母乳といった引力の代わりに、黒樹や妖術学校という引力を設置しただけだ。

巨乳であれ妖術であれ、

「こういうのが『好き』でしょ？」

というものを設置しているだけでしかない。

どういふものが『好き』かは、人それぞれで、それこそ十人十色になる。

それは性的であろうがなかろうが、つまり嗜好だ。

一方、浦島太郎には引力がない。

浦島太郎は嗜好に向かない。

浦島太郎は「話」であって、「色（しき）」のコンテンツではないので、引力がないのだ。

じっさいあなたが、率直に言って『好き』と言えるのは、つぎの三つ

のうちどれだろうか。

①浦島太郎

②雪奈の乳殺

③妖術学校と竜族の少年

④その他

どれが好きか・どんなものが好きかというのは、あなたの嗜好だから、そのことについてはわたしは口出しをしない。

ただ、好みの引力とは無関係に、あなたの「話」を育てるのに有効なもの、そうでないものはあるのだ。

「話」をヘシ折って、「色（しき）」に浸らせるもの、そうしたものが好きだったとして、あなたはそれを、作品だの話だのと思っ握りしめて帰ってきてはいけない。

あなたの大好きなそれは、そのとき大好きなものでかまわないけれど、それは話ではないので、いざあなたが「あなた」が成り立たせようと思うとき、それがまるで役立ってくれない。

それどころか、そのコンテンツと文脈への愛好は、話をヘシ折って色（しき）に浸るという習慣と、そのときに得られる甘みの記憶を、あなたに深く根付かせてしまう。

仮に、あなたが、「あなた」を成り立たせることに意欲を失い、そのことを放棄するというなら、あなたはもうその大好きなものだけに囲まれて、それに浸って暮らしたいと思うのかもしれない。

そのときは、あなた自身があなたという「話」について、「そんな話はない」と言い出すことになる。

それはそれで、ひとつの終焉ということなのだろう。

ともあれ、われわれがエキセントリックに面白がり、あるいはうっとりするなどして、引力に引き込まれて「話」を 수용しているつもりになるとき、たいてい本当にはそうではなく、本当には話を放棄して色（しき）を 수용しているのだ。

そのとき、受容した色（しき）を、「話」だと誤解してその手に掴んでいると、そのことはやがてあなたに散逸とわざわいをもたらしてしまう。手を開くと、まるで成り立っていない流砂が零れ落ちていくのだ。いざというときになって、それを「いまさら」という取り返しづななさで思い知るわけにはいかない。

だから、いまみずからで手の内を開き、そこにある話が「壊れている」ことに気づけ。

少なくとも、現代のわれわれが、今後は生成AIも含めた大量のコンテンツ群に包囲されて暮らしていくことを前提にすれば、われわれがこれまでうかつに「話」と思っていたものの中には、多くそうではないものが含まれていたのだということにも気づいておかなくてはならない。話ではない色（しき）を 受容させようとする装置がいまや四方にうずたかく林立しているではないか。

われわれは、エロゲーに耽ってはいけないのではなく、^^話のないう奴のままエロゲーに耽ってはいけないVVということなのだ。壊れている話は話ではなく色（しき）なのであって、それに興じていいじゃないかと言ひ張る者は、あくまで体の真ん中のほうでは本来の「話」そのものを生き続けている者でなくてはならない。

（※例示した創作「妖術学校と竜族の少年」について。ここに示したいわゆるショートストーリーの断片は、単にわたしの描写能力、いわゆる文章力が極端に高いゆえに、何であれ読めてしまう・そのイメージを高密度で受け取っていくことができるという、ということが起こり

ます。そしてそのことはそれだけで一定の娯楽性を供します。けれどもなお、そこに得られているのはやはり「話」ではありませんし、そこに主題が体験される・体現されるという「話」の事象は形成されていません。「ナーキーを救うために妖術師になった」という疑似ストーリーがあたかも体験ふうに感じられることについては、先の章に示した「手品に惹かれた、だから手品師になった」のA Iグラフィックの作用を参照してください)

## 決めつけの怪物

われわれにはなぜか、無制限に「決めつける」という能力がある。

たとえば、第二次世界大戦と、そのときの日本について、

「日本軍が悪かった」

というようになことを、いくら無謀でも、そのまま「決めつける」ということができてしまう。

「軍部が暴走したんだよね」

「原爆を落としてもらって平和になったんだよ」

そのように決めつけることは、じっさいにできてしまい、現実にもでも、そのような決めつけの中を生きている人はいるのだ。

もちろんこれらは、話としては無理のあるもので、

「じゃあ二〇二五年現在、ウクライナにも核兵器を撃ち込めばいいということなのか。それで平和になるというのか」

そう訊かれると、さすがに話としてはことばに詰まる。

「うーん、それはともかくとしてさ。とにかく、日本軍が悪かったんだよ。当時の日本は愚かで邪悪だった。それは事実」

日本が東南アジアを侵略したというが、侵略された土地はすべて、前もって西洋列強に植民地化されていた土地だった。

なぜ前もって侵略していた西洋は邪悪ではないのか。それも何百年も先んじてその侵略をし、その支配と搾取を続けていたというのに。

そもそも、江戸時代からすでに西洋列強は帝国主義の勢力として、たとえば中国大陸をアヘン戦争で蹂躪し、日本にも租借地を要求してきた。

その帝国主義の渦中に日本が参戦すると、列強はこぞって難色を示し、三国干渉を仕掛けるなどして、日本を小国に押しとどめようとした。

当時の列強はけっきょく、アジア諸国の主権を認めるつもりなど根こそぎなかった。

それらのことをすべて無視して、「日本軍が悪かった」というのは、投げやりを通り越してただのでたらめだ。

だが、それでも当人は、

「だからさあ。うーん……なんか、そういう屁理屈はもうやめようぜ？ 日本軍が、悪かったんだよ。そこは、勇気をもって認めようよ」

そのように、熱い涙を浮かべて、彼なりの真実を唱えることができてしまう。

人は「決めつける」という、奇妙で極端な能力を持っているのだ。

週刊誌が、あることないことを記事にし、不明の醜聞をもって人々の耳目を集める。週刊誌とはもともとそういうものだ。

その醜聞は、人々を大きく騒がせはしたものの、けっきょく裁判になるわけでもなく、当事者とされる人々において和解したのか、そもそも事実がなかったのか、うやむやになり、雲散霧消していったのだが、それでもわれわれは、

「いいや、あんなのは、どうせ悪いことやっているんだよ」と決めつけることができる。

「カネで口封じしたか、権力で揉み消したんだろ」

「政治家か、上級国民かが事件に関わっていたんじゃないの」

「事実上は犯罪者だわ」

もちろんじつさいにそうしたことはありうるが、そうしたことがありうるということは、そのように決めつけて妥当だということを意味してはいない。

「なぜそんなふうに決めつけることができるの？」

「いやだって、やっているに決まっているもん。やっていないなら記者会見を開けばいいじゃん」

「記者会見を開けば、やっていなかったってことになるの？」

「いいや？ やってはいないって証拠でも出せば別だけれど、そんな証拠ないでしょ。だからまあ、やっているのはやっているんでしょ。たぶん。たぶんというかぜったいね」

彼らにおいては、告訴されていない芸能人はなぜか「犯罪者」ということになっているのだ。

彼らにおいては、「日本軍は悪」と決めつけることができるし、ホロコースト（虐殺）は「あった」と決めつけることもでき、逆にホロコーストは「なかった」と決めつけることもできる。

これではまるで、

「UFOは、あるに決まっているし、宇宙人も、いるに決まっている。政府が隠しているだけに決まっているよ」

「ないに決まっているよ」

というのと同じだ。

重ね重ね、われわれには「決めつける」という能力がある。

そのことに、根拠や事実など必要ないのだ。

「女って、美人に生まれただけで人生イージーゲームなんだよね」

「企業の経営者って基本的にサイコパスなんだよね、だって人をコキ使って自分が儲けることに何の躊躇もないって人だけが成功するんだから」

「親ガチャに恵まれた人って、それを自分の努力の結果だって誤解しているんだよね」

「男って、女より基本的に能力が低いから、女を抑圧して自分たちの立場を守るって生きものなんだよね」

「女ってけっきょく自分のグレードを上げてくれるオスを欲しがっているだけなんだよね」

「誰だって、付き合うなら処女のほうがいいに決まっているんだよね、本当は誰かの中古と付き合うなんてみじめでしかないもの」

「男で身長○センチない人って、ぶっちゃけ人権ない」

「いまだにやりがい搾取されて自分から社畜になっている人ってけっこういるんだよね。そういう人ってみんな目つきおかしいのに自分で気づいていない笑」

「氷河期世代ってみんな独善的だし、Z世代はみんな共感能力ないんだよね」

「△△なんて老害でしかないし、××を推している人って根本的にセンスないでしょ」

「あの人ってアスペルガーでしょ。そんでわたしはHSPだから、すごい相性悪いんだよね」

「□□は、エロ売りをせずに、ちゃんと芝居とかの勉強をしたほうがいいんだよね」

「Aは裏ではぜったい性格悪いタイプ、Bは本当に清楚なタイプでしょ。Cがサバサバ系のふりしているのは演技でしかないし、Dはメンヘラっぽくて、裏ではホストに入れあげたりしていると思う」

なぜこのように、無制限に「決めつける」ということができるかとい

うと、彼らには何の「話」もないからだ。何の話もなく、そもそも「話」を扱う器官が活動していない。

「話」がないのであれば、すべては決めつけでしかないのだ。

歴史的にどのような状況があったとしても、「そんな話は知らんけど」といって、

「そうじゃなくてさ、とにかく日本軍が悪かったんだよ。事実じゃん、そこは認めようよ」

ということになる。

仮に、容疑者にどのようなアリバイがあったとしても、保安官は、

「お前がやったんだろう！」

と決めつけることができる。

アリバイといって、犯行時刻に彼がまったく別の場所にいたら、彼はその犯行をやりようがないけれども、そんなもの、「そんな話は知らん」ということで、

「お前がやったんだろう！ いいかげん認めたらどうなんだ」

と決めつけることができてしまう。

保安官はその容疑者を収監することができる。

「小麦を食べないとバカになります、小麦を食べて賢くなりましょう」

と、街宣カーで言い続けて、そのように決めつけていくことは可能だし、

「食料がなくなるので、コオロギを食べましょう」

と、やはり言い続けて決めつけていくことも可能だ。

どうせ「話」はないのだから、事実など参照する必要がない。

鈴木花子からマーガレットの香りがするというのを、医者が否定しようが、検知器が「検出せず」を呈しようが、「そんな話は知らん」ということで、クラスメートらは彼女を、

「マーガレットちゃん！」

と決めつけることができる。

「話」が機能しないなら、われわれの自我はこうして無制限に「決めつける」ということをするのだ。

このことは、極端な例をあげつらつてのものではない。

もともと、われわれの自我とはそういう性質のものだということだ。

たとえば摂食障害の例を挙げてみる。

体脂肪率として、すでに生命の危険があるというほどにやせ細っている人でも、当人は、

「最近また太ってきた……醜くてイヤだから痩せます」

と言っている。

医学的なデータはなにひとつ、彼女に肥満を告げていない。

それでも、当人が太っていると決めつけるならそれは太っているのだ。

もちろん、他の誰かについては、それを太っていると量らないのだから、話としてはめっちゃくちゃだ。

けれども、「話」が機能していないのだから、話がめっちゃくちゃかなんて関係がない。

自分の決めつけだけが支配する。

あるいは、整形手術を繰り返す人が、自分のことを「ブス」「醜い」と決めつけることがある。

それで、傍目にはもう、顔の造形が不自然になりすぎて、整形前の顔のほうがずっと自然できれいだったと思えるのに、当人は、

「まだまだブスで、自分がイヤになる……お金貯めて、こんどはアゴのところ削ろうと思います」

と言っている。

医者には、いくら健康だと言われても、自分には病気があると決めつける人もいるし、どれだけ衛生的に問題がないものでも、「汚れているから洗わないといけない」と決めつける人もいる。ちょっとした災難がある



と「お墓参りに行っていないからだ」と決めつける人もいるし、「スポーツをやっていない者は人として負け」と決めつける人もいる。「東京モンは冷たいもんなあ」と決めつける地方の人はいまでもいるし、靴は左から履かないと不幸になるとか、ティッシュで鼻をかむと寿命が縮むとか、コーラを飲むと骨が溶けるとか、そんなことを決めつける人もいる。

そして奇妙なことに、たとえば自分のことを「ブス」と決めつけていながら、それでいて、

「わたしはハイスペックな男性と結婚するんです」

と決めつけている人もいるのだ。

当人は、もう四十歳を超えていて、これまでに恋愛経験もなく、みずからで自分のことをブスと言っており、さらに「性格はまあ、根暗です」とも言っているのに、

「ですけど、なんとなくわたしは、三十代前半の、ハイスペックな男性と結婚するんだと思っています」

と決めつけているのだ。

なぜ？

なぜといって、なぜという理由はない。

人は、「話」から切り離されるなら、何もかもが決めつけなのだ。

「あなたのいうハイスペックな男性が、わざわざあなたのような、みずからややこしくて根暗だという初老の女性を選ぶというのは、『話』としてヘンでしょ」

というときの、『話』じたいが無いのだ。

話の器官じたいが機能していないか、それ以上に、さまざまな諸事情から、彼女は『話』じたいを自分から切り離してしまった。

彼女にとってはもう「話」などどうでもいいのだ。

「話」としてヘンとかって言われても。そんな話のことなんて、わたしにはよくわからないし。ただ、わたしはわたしの思うことを言っているっ

ただなんです。わたしは、きっとこうだと思う、って。それがそんなにいけないことなんですか？」

自分はブスだと思う、自分は根暗だと思う、けれどもハイスペックな男性と結婚するのだと思うという、その決めつけだけが彼女にとっては大切なことから、そこに「話」などを持ち込む動機が彼女にはない。

自分は、努力していない者を評価しないし、こころの豊かでない者、愛のない者、偉そうぶっている者、その割にしかるべき実績はないという者を評価しないが、自分自身がそれに該当する場合、自分自身についてだけは、

「そうはいってもさあ」

と、半笑いになり、なぜか自分は他者に高く評価してもらえられている。

自分は他人に対して偏狭で神経質なのに、他人は自分に対して、おおらかであるべきだし、

「別にいいでしょ？」

と半笑い思っている。

話としては壊れているのだが、その「話」さえ切り捨てしまえば、当人がそう思うということについては無制限なのだ。

われわれにはこのように、無制限に「決めつける」という能力がある。加えてここでは、なぜそれを「する」のかということにも注目しなくてはならない。

無制限に決めつけるということが「できる」として、なぜそうして、熱心なまでにそれを「する」のか。

決めつけたところで、何の得にもならないのだから、そうまで熱心になる理由はなさそうなものだ。

ところがそうではなく、われわれがその「決めつける」をやるのには、れっきとした理由があるのだ。

それは、「決めつける」ということが、それしたい自我の栄養素になり、自我はそれを食らうことで、生存できるということなのだ。

^^決めつけは自我の飼料VVということ。

何度も言うように、話と色（しき）は相克していて、体の真ん中と自我は相克している。

この相克が、矛盾せず両立するためには、魂魄という観測不能の領域と連絡するしかないということだった。

そのことは、稽古によるしかないし、稽古をつけるしかないのだが、ここではその稽古への道筋はいったん忘れ、そんな両立は成り立たないものとする。

相克の中で、自我が太く肥えて生きていくためには、話をヘシ折るしかないのだ。

話をヘシ折って、「決めつける」ということをする。

「あのさ……そんな、歴史的なことがどうか、そのときの外国の勢力がどうかじゃなくてさあ。あーもう、往生際が悪すぎるでしょ。相手していてダルいわ正直。そうじゃなくて、事実、日本軍は悪かった！　つてこと。その単純で動かしようのないことをオレは言っているんですけど。なんでそこから論点ずらすの？　日本軍が外国に行って、その国を軍靴で踏み荒らしたのは事実じゃん。そこは認めるしかないでしょって言うてんの。いったいどれだけの人が被害にあって、どれだけの人が苦しんだか」

この「決めつける」という単純なことが、自我の栄養素になる。

自我の機能は、「量る」という機能だが、自我の充足は、量ったものを決めつけるということにあるのだ。

500ml のボトルと、 1L のボトルと、 18L の缶があったとする。

われわれの自我は、それらの容積を、見た目にも量ることができる。

「これは 500ml ですね」

「これは 1L です」

「これは 18L の、いわゆる一斗缶でしょう」

さすがにこのようなことを続けていても、われわれの自我はおいしい思いをせず、これによって自我は肥え太らないし、これによって自我を生存させていくこともできない。

何かしらの「決めつける」をやらせてやらないとだめなのだ。

たとえば A 子と B 子と C 子を用意する。

A 子は美人で、B 子はふつうで、C 子是不美人だ。

これはただ量るということ。

これを、ただ量るということに留めず、

「A 子は、美人だよ。一軍女子で、まあ学校じゃヒエラルキーの頂点。ぶっちゃけ、人生イーゲームってたぐいでしょ。彼女は、自分でそれをよくわかっていて、なるべくそれをひけらかさないように、じつは内心ではすごく慎重に振る舞っているタイプ。だからこの後は順調に、そこそこの大学行って、大学に行くのもけっきょく結婚相手探しで、卒業後は就職して何年か社会勉強したら、あとは寿退社してタワマンで幸せに暮らすってところでしょ。マジ勝ち組で、学生のうちにも青春の真ただ中をがつつり充実して過ごせるタイプ」

「B 子は、ふつうだけど、けっこう男好きするタイプではあるから、それで逆に苦労するパターンだと思う。地方の、中小に勤める男に言い寄られて、無下にできなくて、そのままくっついて苦労させられるんじゃないかな。彼女、家庭的なこと得意そうだし、いわゆる癒し系でもあるから、女としてはけっこう価値あるのに、その自分の価値に気づいていないってパターンだから、化粧とか練習して垢抜けたら、もっと幸せになるルートとかありうると思う。化粧とか男慣れとかを勉強するために、一度お水を経験したほうがいいかもしれない」

「C 子は、ぶっちゃけブスだから、腐女子とかオタ活とかして、趣味で

人生楽しくしていくしかないんじゃないかな。一念発起して、勉強とか資格取得とかをガチって、経済的な勝ち組を目指すのもアリっちゃアリだけど、ブスって基本的に根暗だから無理じゃねって思う。ただ、頼んだら何でもしてくれそうだから、変態の男を見つけて変態プレイでペーティング成立ってことはあるかも。金持ち変態のお妾さんとして幸せに暮らせるってルートもじゅうぶんありうるから、あきらめないほうがいいと思う」

もちろんこんな偏狭な人生観は、何の含蓄もなく貧しいばかりのもので、わたしは堂々と、

「そんな話はないし、そんな人生もない」

と申し上げよう。当然だ。

失礼、貧しいばかりではなかった、そこに「汚らしい」も付け加えておこう。

彼がABCに向けて空想して言っているのは、架空の、「何の話もない人の生きよう」でしかなく、それは人生のありようでもなければ、それぞれの生きる話でもない。

ただ仮にABCが、本当に何の話もないままに生きるのであれば、ABCはじつさいという未来に向かうのかもしれない。

そのときは、彼ともども、ABCも魂においては何の価値もない中を生きていくというだけだ。

ともあれ、彼はこのようにして、ABCについて「決めつける」ということを常に内心ではたらかせており、そのことを自我の栄養素にしている。

生きものの生存が、「食べる」ということを中心に成り立っているのだとすれば、それと同様、自我の生存は、「決めつける」ということを中心に成り立っている。

「食べるという行為が生きものだよ」と言いうるとき、「決めつけるのが

自我という生きものだよ」と言いうる。

つまり彼においては、

「決めつけるのがオレなんだ」

ということ。

500mlと、1Lと、18Lを、量というのは、たしかにオレの機能かもしれないけれど、それは満たされたオレではない。

満たされたオレというのは、決めつけたオレだ。

「Aは、アイドルになるとしたら、ハロプロ系じゃなく坂道系だけど、本人はグループ活動とかじゃなくぜったい女優とかに進みたがるタイプ。それでけっきょく、グラビアとかやらされそうになって、それがイヤで、弱小プロダクションに転属するみたいなパターンじゃないかな。血液型で言ったらいかにもB型みたいだな」

^^決めつけはすべての話を凌駕するVV。「話」が存在しない以上、自分がどう決めつけるかがすべてになるのだ。

旧日本軍は邪悪で、当時の日本人は愚かで、熱心にはたらいっている人はみな社畜でやりがい搾取されており、処女と結婚できていない男はみんな負け組だ。活躍する人はけっきょくすべてが親ガチャの恵みでしかなく、イケメンと付き合っている女はみんな顔目当てのクズで、そのイケメンというのみんな「女殴ってそう笑」な男だ。そんな中、自分だけは根拠なく「まとも」と確信されており、その人となりは目立たないけれどやさしくて善良、付き合った女は幸せになるだろうにと思われている。そしてそうした自分の価値がないがしろに無視されているこの世の中は「クソ」というわけだ。面接で人のことなんかわかるわけがないと言いながら、自分は会ったこともない誰かのことを「あれは腹黒いタイプ、顔に出ているでしょ笑」と決めつけている。

この章は、ここ十数年、われわれが特にインターネット上で何を目撃しているのかについてを、その仕組みごと如実に説き明かしているもの

と思う。^^決めつけは自我の飼料VVなのだ。よって、たとえば養鶏所ではニワトリが並んでそれぞれに飼料をついばみ、それによってそれぞれが肥え太っていいこうとしているように、われわれの自我も、そのアカウソト所で並んでそれぞれに飼料をついばみ、それによってそれぞれが肥え太ろうとしているのだ。

われわれはみな、自我という、この「決めつけの怪物」を内部に飼っている。われわれは「わたし」を話の存在として保つうち、この怪物をせいでい節度のもとに飼いならすことができるが、われわれが「話」という事象じたいを放棄するとき、われわれはこの怪物に食われるよりなく、その立場を逆転される。

われわれが怪物に飼われることになるのだ。われわれは、世界のすべての話を一切受け取れなくなり、ひたすら、「ぜったいそうでしょ」と聞こえてくるもの、生涯その言いなりになるよりなくなるのだ。

## 差別

人は差別意識から差別をするのではない。

人は、差別が欲しいのだ、それで差別をする。

人は、差別によって「わたし」が欲しいのだ、だから差別をしている。「わたし」を持たない人は、「わたし」の代替品を得るために差別をする。

よって、「わたし」を持たない人は、全員がレイシスト（差別主義者）になる。

これは、そのレイシストを攻撃する意図から申し上げているのではない。

ただ性質上、そうなるのだということを、取扱説明書のように申し上げているのみだ。

「わたし」を得た者は、差別に耽りようがないし、「わたし」を得ていない者は、差別以外に「わたし」の代替品を得る方法がない。

浦島太郎は漁師の男で、アフロディテは女神だが、アフロディテは浦島太郎を差別するわけではないし、浦島太郎もアフロディテを差別するわけではない。

それぞれが「話」なのだから、差別のしようがない。

浦島太郎という量はないのだし、アフロディテという量もないのだから、差別できるパラメーターがない。

あのコはセンスないよね、わたしはセンスあるほうなんだけど、というような、量れるものがないと差別のしようがないのだ。

差別は、差別意識や差別思想から生じているのではなく、ひたすら「わたし」の無さから生じている。

だからこそ差別は罪深く感じられるのだ。

差別そのものが罪深いのではなく、差別に「わたし」の代替を得ようとしている、その必死なさまが、いかにも原罪のままだなど、われわれには直覚されるのだった。

（一般に、西洋ではそのありさまを「罪」と感じ、東洋ではそのありさまを「恥」と感じる傾向があります）

わたしはレイシストだろうか。

わたしは、インドのガンガーのほとりで、乞食の子供たちを、肩に乗せて歩いていたことがある。

子供たちがやけに懐いてくれたので、そうして遊んでいたのだ。

少年が、絵葉書を売りに来たので、わたしはそれをすべて買い取り、

「もう持っていないか」

と訊いた。

少年は、

「うん、もう無い」

と言った。

そして、察しのよい少年は、

（何かヤバイ気がする）

という顔をした。

彼はもう、売り物の絵葉書を持っていないので、わたしはその少年を  
ふん捕まえ、ガンガー（ガンジス川）に投げ込んでやったのだ。

ざっぶーんという音がした。

それ以来わたしは、乞食の子供たちに、

「あのジャパニーはヤバイ」

と噂され、姿を見かけると逃げられるということになったのだが、次第に逆に懐いてきてくれて、よくわからないが、とにかく彼らを肩に乗せて歩いたりしていたのだ。

まわりのサドゥーたちは、それをニコニコして観ていた。

わたしは、乞食のリーダーをしていた少女に、こっそりサモサをおご  
ってやったことがある。

わたしがバラナシを出立する前日の夕刻のことだ。

サモサをおごってやると言う、彼女は悪びれもせずよろこび、

「あの店はおいしくないの。向こうの奥にある店のほうがずっとおいしい」

と、指差して言って、手を引いてわたしをそこへ案内してくれた。

わたしは手を引かれながら、もう、うれしくてうれしくて、生まれて  
この方これ以上にうれしいことはないと思ひ、生涯でこのときだけ、本  
当にひざまずいて神に感謝を言いたいと思った。

彼女は、乞食をしているが、本当には、各店のサモサの味に通じるぐ  
らいには、豊かに生きられているのだ。

それがもう、うれしくてうれしくて、たまらず、おれはそのときのう  
れしさを一生の思い出として抱えることにしたのだった。

彼女は、子供だったし、乞食だったが、薄汚れていて浅黒くても、美人  
で、おれは一方的に彼女のことを、おれのガールフレンドだと思ってい  
る。

お前はおれのガールフレンドだと、今さら言うなら、頭のいい彼女の  
ことだ、彼女は笑ってイエスなりオーケーなりと、言ってくれたもの  
と思う。

おれはいま、インドの乞食たちの話をしたが、おれは差別主義者だろ  
うか。

おれは、田舎者は、無理にフランス料理を食いにいたり、無理にそ  
こで高いワインを飲んだりはいらないほうがいいと思っている。

田舎者がどうこうというより、人は、霊的に共鳴しないところには行  
くべきではないのだ。

霊的に共鳴しないでは、行ったことにならないし、来られた側も困る  
だけだからだ。

霊的に共鳴しない場所に、無理に乗り込んでも、それはどこに行った  
ことにもならないし、なんというか、それでは霊的にケンカをしにいっ  
ただけにしかない。

たとえば田舎の人でも、足許がゴムの長靴でも、フレンチのシェフが鼻  
息荒く「美味しいものを食おうぜ」と料理しているということ（フレンチ  
のシェフはたいてい鼻息が荒い）、および、スタッフのみんなが笑顔で真  
剣に、食事の愉しみを供しようとしていることに、霊的に共鳴するなら、  
その人はちゃんとしたオステルリーの客になりうる。

フランス料理屋にあるのは、食事への愛なので、食事への愛が先立つ

人なら、誰でもまともな客になりうるのだ。

それを、あろうことか、自己愛の充足を目的として来店する人がいて、そういう人はまともな客にならない。

田舎者というのは、出自や生活環境が田舎だから田舎者になるということではなく、都会の価値観に乱入すれば自分も霊的に高い存在になれるというようなでたらめな妄念に囚われ、それがいかにも田舎で取り憑いた妄念だなあと感じられるので、そのことを田舎者というのだ。

霊的に共鳴しない場所に無理に首を突っ込む必要はない。

アリーナ・コジョカルを、何もわざわざ通天閣の下に連れて行く必要はないように、田舎者に、何もわざわざDRCワインをテイステイングさせる必要はない。

何もわざわざ、バンジョーでツイゴイネルワイゼンを演奏する必要はないし、バイオリンでカントリーを演奏する必要もないのだ。

そうしたことはたぶん、れっきとした差別なのだろう。

その意味では、わたしは差別主義者だし、わたしはフランス人がわたしのことを見たら、「なんだこの東洋人は」と、眉を顰めるのではないかと、かねてから思っている。

こちらら、二百年も鎖国していた尊王攘夷の末裔が、いまさらヨソの国に自分たちだけ無差別で受け入れてもらえるなんて思わねえよ。

それぞれの場所と地域に、国に、民族に、大切なものがあるなら、それと霊的に共鳴できないかぎり、おれは向こうから見て「なんだコイツ」と眉を顰められる存在なのではないだろうか。

わたしは丸の内時代に、中国人たちとさんざんビジネス上のやりとりをしたし、上海や北京に行って一緒に火鍋を食ったりしたが（むろん激辛で即刻腹を壊した）、経済成長で給料が二百倍になったという彼らに、たとえば島崎藤村の話はわからないと思う。

お前らに島崎藤村はわからねえよ、と言い放つのは、内心のことであ

れ、れっきとした差別だろう。

わたしは、男の板前が握った寿司と、女の板前が握った寿司は、何かがきつと違うだろうと思っているが、女の板前が握った寿司を毛嫌いするというつもりはいまのところない。

どちらが握った寿司でも、ただ旨く食うだけではないだろうか。

ただ、それがどうしても受け付けないというか、苦手と感じるという人がいるのもわかる。

清らかな女性のマッサージ師に、身体をほぐされるのはいへんいい気分だが、やたらマッサージの上手いおっさんの指圧に身体をほぐされると、ほぐされながら、

「くっそ……」

と複雑な気分になる。

身体をほぐされるということは、もったたおやかでエレガントな、ラクジュアリーのことであってほしいのだ。

おっさんの力強い指でツボをガツンガツンやられて、「痛ってえなあ」と反発し、反発したくせに結果的に筋肉は羽二重餅のようにやわらかくなっていると、何か自分の身体がアホみたいに思えて無念なのだ。

わたしはレイシストだろうか。

わたしは、中国の取引先で、アホほど酒を飲まされてデロンデロンになり、もちろん二日酔いになって翌日ふたたび彼らに会ったとき、彼らが朝からケロッとしているのを見て、

「種族が違う」

と感じた。

こいつらは今日も、朝からチャーハンでも食って、元気いっぱい出勤してきたに違いない。

彼らは、かつてのナショナル製品や、初代ファミコンのように、単純かつ頑丈なのだ。

とにかく電源を入れたら動くというような頼もしさだ。

島崎藤村がわかる余地はないと思う。

インドで、夜、リクシャーに乗って次の街に向かっていてるところ、向かう先の街の蛍光色がおかしく、

「なんだこれ」

と思っていたところ、街路からリクシャーの後部座席に巨大な爆竹が投げ込まれた。わたしの視界は明滅し、鼓膜は衝撃と耳鳴りに軋んだ。

その爆竹の破裂音に重なって、リクシャーの運転手が、

「ハッハッハ、フェスティバル！」

と大声で言ったので、わたしは慌てて運転手の顔を覗き込んだのだが、そのおっさんの顔はすっかりガンジャ（マリファナ）でガンギマリになっていた。

わたしはそのとき、

「あっ、このおっさんダメだ」

と思ったのだ。

わたしにとって、彼らを日本人と同じ種族と思えというのは無理な注文だ。

当時わたしが見た「彼ら」は、輪廻を根っから信じ込んでいて、それゆえに破格にファンキーだった。

ファンキーになろうとしてそうなのではなく、それ以外のものにはなれなくなっているのだ。

それでいて、彼らは彼らなりにシャイだったりするので、もうわけがわからないのだった。

わたしはレイシストで、仮に額の汗を拭いてもらうなら、ずんぐりしたおっさんに拭かれるよりは、うるわしい美少女にそれをしてもらいたいと思うし、紅茶を淹れてもらうなら、ずんぐりしたおっさんに淹れてもらうよりは、楚楚とした美女にそれをしてもらいたいと思う。

几帳面な男が、部屋の片づけをすると、部屋はきれいになるが、「ふつうの男」が部屋の片づけをしても、部屋は一向にきれいにならない。

これが、「ふつうの女」が片づけをした場合、部屋はちゃんときれいになるのだ。

がさつな女が片づけをしても部屋はきれいにならない。

でも、部屋をきれいにするなら、「ふつうの女」でいいのだ。

男の場合、ふつうの男ではだめで、「几帳面な男」の必要がある。

がさつな男が片づけをした場合、部屋はむしろ散らかる。

男の場合、何につけ、

「早よ、やらんかい」

と言って尻を蹴れば、だいたいそれで「うっす」となって話を通じるのだが、さすがに女性がそれで「うっす」と答えて話を通じるということはない。

男の場合、尻を蹴りあげるぐらいのほうが、蹴られる側として「落着く」ということがあるようなのだ。尻を蹴られるとヒーンとなって動きやすいらしい。

女性の場合、それはさすがにない。

女性の場合、やることを明瞭に伝えれば、一方的に言いつけるだけでよく動いてくれるので、尻を蹴る必要はない。

ただ女性に向けては、不明瞭に「お願い」などをすると、とたんにキモがられて状況が悪くなるということがあるので、注意が必要だ。

男性に向けては鈍器のような気魄が適合し、女性に向けては刃物のような気魄が適合するということ。

男性に向けては「問答無用」がよく、女性に向けては「不都合なら断つてもいい」ということがはっきり伝わっているのがよい。

と、このようにさまざまなことが、レイシストのわたしからは言いうる。

だからといって、このわたしについて「レイシストだ!」と、いまこ  
であわてて糾弾するという人は、なかなかいいのではないだろうか。

レイシストだと言われても、じっさいにインドの乞食に懷かれている  
のはおれなのであって、糾弾者ではない。

片づけをしてくれる女に懷かれているのもおれだし、尻を蹴られたが  
る若造に懷かれているのもおれだし、中国人とバカみたいに辛い火鍋を  
一緒に食いに行つて下痢をしたのもおれであつて、糾弾者ではない。

糾弾者は誰にも懷かれていない。

ここに見当たる差別が、なぜ一般的な差別のように罪と恥の臭いをぶ  
んぶんさせていないかというと、ここにあるのはすべておれの「話」だ  
からだ。

おれはインドの乞食の子供らの話をした。男たちの話や女たちの話を  
した。朝も夜も頑丈で元気な中国人の話をし、マリファナでガンギマリ  
になっているリクシャーワーカーの話をした。

それらはおれの話でもある。

(そりゃ、おれが生きて、おれが話したんだから、おれの話だ)

話は量ではないので差別にはなりえない。

逆に言うと、「話」におよんでいない人は、すべてを差別でしか取り扱  
えないということでもある。

「へー、インドってアレですよ」

「へー、乞食ってアレですよ」

「へー、男ってアレですよ」

「へー、女ってアレですよ」

「へー、中国人ってアレですよ」

「へー、リクシャーの運転手ってアレですよ」

この「アレ」をどう加減しようが、これはもうスタイルじたいが差別  
だ。

なぜこのようにして、人は差別をしてしまうのかというと、そのこと  
についても、かのサルトルが解答を出してくれている。

サルトルは本当に貴重な、ヒント満載の、史上屈指のハズレ男だ。

サルトルは、対自存在といって、自分というものを、「Aでないもの」  
の集積として捉えている。

つまり、たとえばサルトルはフランス人だが、彼にとってフランス人  
の自分とは、ドイツ人ではないものであり、スペイン人でもないもので  
あり、イタリア人でもないものののだ。

もちろんベトナム人でもなければアメリカ人でもなく、コートジボア  
ール人でもない。

サルトルは、意識の対象Aがあつたとき、そのAは、「わたし」という  
自意識とは異なる存在のものという、分かれた存在として捉えられて  
いるというのだ。

目の前の消しゴムを見たとき、

「『わたし』ではない」消しゴムというもの」

という捉え方をしている。

それはそのとおりなのだともわたしも思う。

そして、サルトルはたぶん言及していなかったと思うが、ここに示さ  
れているのは自我の機能であつて、ここではその自我が、「わたし」と「消  
しゴム」を差別するということにはたらいっているのだ。

「わたし」と「消しゴム」を差別し、「わたし」と「鉛筆」を差別し、「わ  
たし」と「定規」を差別している。

ここで、サルトルの理論で言うと、わたしが乞食の少女とサモサを食  
べに行ったとして、わたしの意識はその少女のことを、

「『わたし』ではない」、インドの乞食の少女」

と捉えているというのだ。

自我のはたらきとしてはそのとおりだろう。



けれども残念ながら、おれは「おれの話」をしているのだ。

おれの話は、おれそのものであって、そのおれの話とは何かというと、そのインドの乞食の少女はおれの一方的なガールフレンドということだったし、一緒にサモサを食いに行ったということだった。

おれは「おれの話」において、乞食の少女を取り扱っているので、おれと乞食の少女は同一性を得ていることになる。

それについてサルトルの場合は、

「インド人の、乞食の少女は、ボクではないもの。一方、乞食の少女でないものが、『ボク』なんだよなあ」

と捉えているということなのだ。

つまりサルトルの言う対自存在というのは、「ボク以外のすべてを差別するボク」ということだ。

それは自我のはたらきであって、それが自我のはたらきだということについては、わたしも同意する。

ただ、このあたりのことを考えると、いつまでもどうしても、

「なぜサルトルは、こんなに致命的にアホだったのだろうか？」

という、単純な疑問が湧いてきてしょうがないのだった。

対自存在とあって、「自分」だって意識の対象になるとサルトル自身が言っているのだから、それでは「自分」という自我が、「わたし」ではないということになるではないか。

自我は他人なのだ。

対象Aに意識を向けるとき、「わたし」と「A」とが分かたれて捉えられるとサルトルは言うのだろう。であれば、Aという変数に「わたし」を入れれば、「わたし」と「わたし」が分かたれて捉えられるに決まっている。

それは、「わたし」と「自我」に同一性がないということであって、同一性がないならそれは「わたし」ではないのだ（当たり前だ）。

同一性がないなら「違うやつ」なのであって、その対自存在とかいうやつは、「わたしではないやつ、違うやつ」に決まっており、つまりは、「自我は他人」に決まっているではないか。

なぜサルトルは、自分で言っているこの単純なことを、最後まで見落とし続けたのだろう。

サルトルはなぜか、この「わたしではないやつ」に、ついにアンガージュマンするというわけのわからない結論に飛び込み、そのあとすべてを知らんぷりしたのだった。

そのあと実存主義は、なぜか漠然と「構造主義に敗北した」という扱いになって、歴史の表舞台を去るのだが、その幕切れもいまいちよくわからないものだ。とはいえ、その幕切れにはきつと、構造主義によって実存主義の抱えている「差別」の精神が暴露されてしまったということころもあったのだろう。

本稿では構造主義までは取り扱わない。

というか、構造主義は枠組みが不明瞭で、実存主義のように切り取って取り出すふうには使いづらいのだった。

（構造主義は、西洋が西洋の絶対性を投げ出した学門でもあるので、どことなくだらしない学門になっているという感じがわたしにはする。読んでも正直よくわからないのだ。いまさらプラトンのイデア論と何が違うのかわからない。西洋でさんざん威張っていたものがいまになって他の地域にヒントを乞うなよ）

ここからは、現実的な話をしていこう。

わたしは、この年になって生まれて初めて、それもここ数週間におよんでついに、「差別」というものがこの世に存在するということを知ったのだった。

これまでわたしはまったく知らなかったが、多くの人々は、率直に言って「差別」の中を生きているのだ。

「差別」の中に「自分」を定義している。

「話」が得られない以上、人は「差別」の中に自分を定義し、「差別」の中に生きているのだ。

差別の中に「自分」を定義しているとはどういうことか。

まず、「自分」とは何かということについて。

自分とは何かとって、「自分とは○○だ」と、答えることができない。

サルトルが言ったように、人は自分の本質を答えられないのだ。

ただ、「自分量」と呼ぶべきものは観測できるので、

「わたしは、いちおう大卒です。いちおう、まともな大学を出ています」ということは言いうる。

そのことは、やはりサルトルが言うように、

「彼は高卒ですよ」

ということと分かれたれて捉えられている。

「わたしはいちおう、まともな大学を出ていて、仕事はきっちりやっているほうです」

そのことは、

「あのコは、自分の仕事をきっちりやらないですよ」

わたしはそれとは違う者です、ということと捉えられている。

「まともな大学卒で、仕事はきっちりやって、あとそれなりに水準の高」ところに住んでいますし、無理にセンスのないことはしません。あと、恋愛経験も人並みにあるかな。英語は日常会話くらいはできて、親のしつけが厳しかったので、礼儀とかマナーとかはちゃんとやれるタイプです。いちおう、育ちとして。まわりの友達にお金持ちが多かったというのもあると思います。二年ほど料理屋でアルバイトしていたので、料理の基本はひととおり教わっています。あと、才能がある人というより、がんばっている人のことを尊敬しますね。おしやれば、お金より時間がかかるべきだと思っていますが、裏腹に思い切ってお金を使っている人

はうらやましいし、気合入っているなあって思います」

「それで、彼は高卒ですよ」

「あのコは、自分の仕事きっちりやりませんし」

「あの人は、水準の低いところに住んでいますよ」

「彼女は、センスのないことを無理にやっています」

「きみはさあ、恋愛経験とかまったく無しで生きてきたでしょ笑」

「Aくんは英語とかまったくできないですし、一方でB先輩は、英語はネイティブレベルなんですよ」

「彼女は、礼儀とかマナーとかが壊滅的です。あきらかに育ちが悪いですよ」

「あなたは、友達の家がクルーザーを持っているとか、そういう経験にはまったく無縁だったでしょ笑」

「料理屋で二年もアルバイトしていたからね。きみは料理って基本からまったくわかってないじゃん？」

「Cさんはたしかに才能あるんですよ。でもDさんの努力のほうですごいと思います。わたしそこまで努力できないって思うし」

「あの先生、いつもすごいおしゃれですよ！ かないっこない。センスもそうですけど、そもそも掛けているお金がぜんぜん違うから、すごいうって圧倒されます」

このようにすると、まるで「わたし」があるみたいなのだ。「わたし」は、いちおうまともな大学出ているんだよね。「わたし」は、自分の仕事きっちりやるタイプなの。「わたし」はセンスのないこと無理にやらないし、「わたし」は人並みに恋愛経験あるよ。

けれどもこれらはあきらかにパラメーターであって「話」ではない。英語が日常会話でいどにこなせたとして、そのパラメーターはそれじたいで何の「話」でもない。恋愛経験があるとかないとか、料理の基本を知っていると知らないとか、それらはすべてパラメーターでしかない。

パラメーターだけでは「話」にはならず、それでは「わたし」にはならないのだ。しかし、そのパラメーターを他と比較し、「差別」するならばそこには自分量が発生する。英会話についての彼量は「中学一年生」だったとして、自分量は「日常会話でいど」だと言えるし、B先輩量は「ネイティブレベル」だということになる。

差別の区分けによって切り出される領域に、自分量があり、まるでその容量と座標が「わたし」みたいなのだ。

全国試験を受けたとして、教師が、

「偏差値50族の人」

と生徒らに呼びかけ、

「はい」

と挙手をさせていく。

「偏差値60族の人」

「はい」

「偏差値70族の人」

「はい」

60族の人は、50族とは民族が違う。もちろん70族とも民族が違う。

「わたし、60族なんだよね」

そのように、差別の中に「わたし」を言いうる。

「わたし、長いこと60族でやってきたから、いまさら50族に落ちるのは違うと思うし。これからついに、70族に踏み出していかうかなって思っているんだ。そこに到達してみせる。そしてそのとき、けっきょく70族が、わたしの本来の種族だったんだって、言えるようになると思う」

それでは、わたしがガンガーのほとりで乞食の子供を聖なる河に投げ込んでいたとき、わたしはどういう種族だったのだろう。わたしは「イ

ンドとかに旅しちゃう精神性に重きを置く種族」で、「子供にも乞食にも分け隔てしない博愛オープン種族」、「年齢は大人でもやんちゃで腕白ぶり続ける種族」なのだろうか。

もちろんそういう人もいるかもしれない。そういうふうには、差別の中に自分の種族を彫り出して見せ、その種族をもって「これがオレなんだよね」と言いたがる人もいるのかもしれない。

だがむろんわたしにとって無為で馬鹿馬鹿しいことだ。全国試験の答えに、○が何個足されようが、おれは変化しないし、どれだけ○が減らされて×が増やされようが、おれは変化しない。

おれは量ではないのだから。

おれはおれ自身について、次のように奇妙なことを言ってみせよう。

このことは、あなたに奇妙な納得を与えると共に、ある意味「差別」という視点においては、わたしの「差別」の機能こそが壊れているということとを発見させるだろう。

いわく、

「おれは、まともな大学を出ていて、まったくまともな大学を出ていない。おれは、自分の仕事はきっちりやるタイプで、自分の仕事などまろできっちりやらないタイプだ。それなりに水準の高いところに住んでいて、住んでいるところの水準は低い。無理にセンスのないことはしないし、センスのないことでもおれは無理やりにやることにしている。恋愛経験は人並みにあって、人並みの恋愛経験というのは持ち合わせていない。英語は日常会話ぐらいはできて、英語で日常会話をするとはたどしくて破綻だ。親のしつけが厳しかったので、礼儀とかマナーとかはちゃんとやれるが、親のしつけなんてなかったもので、礼儀とかマナーとかは崩壊している。まわりの友達に金持ちが多かったし、まわりの友達に金持ちはいなかった。二年ほど料理屋でアルバイトしていたので、料理の基本はひととおり教わっているが、アルバイトはしたことがなく、料

理の基本はぜんぜんわからない。才能がある人というより、がんばっている人のことを尊敬するが、尊敬する人に頑張り屋はいなかった。何かを実現する人に才能なんて見たことがない。おしゃれは、お金より時間をかけるべきだと思うが、時間もお金もかけるべきじゃないとおれは思う。思い切ってお金を使っている人はうらやましいし、気合入っているなあと思うが、気合が足りないし金に頼るなよと、あきれて思う」  
(どうでもいい注…おれに料理屋でのアルバイト経験はありません)  
これではあなたは、差別によっておれを捉えることができなくなってしまう。

あなたがおれについて、  
「あなたは、相手が子供だとか外国人だとか、乞食だとか、そういったことでまったく差別はなされないのですね」  
と言ったとして、わたしはそれについて、

「いや、そのコはめっちゃインド人で、めっちゃ子供で、めっちゃ乞食ですけどね」  
と答えるだろう。

あなたとしては、わたしを差別で捉えることができなくなってしまうが、それでいてなぜか、あなたはわたしの「話」を、ひたすら荒唐無稽で壊れているものとは体験しない。

おれが、まともな大学を出ていて、まともな大学を出ていないというのは、まったくの事実だ。

われわれの観測領域において、「AでありAでない」ということは矛盾していて成立しない。Aであるということは、Aでないということと相克する。

ただ、観測不能の魂魄という領域に、体の真ん中が連絡を得ているのであれば、その魂魄の領域においては、AでありAでないということが矛盾せず両立する。

おれはまともな大学を出ていて、まともな大学を出ていないのだ。自分の仕事なんかやらないし、自分の仕事はきっちりやる。

住んでいるところの水準は高く、住んでいるところの水準は低い。

センスの有無なんか関係なしに無理やりやるし、センスの無いことは無理にやらない。

恋愛経験なんか大量にあるし、恋愛経験なんかひとつもない。

乞食のリーダーをしていた少女が、おれのことを好いてくれていたかどうか、それはおれにはわからない。

けれども、彼女がおれを好いてくれていたのはわかる。

彼女がおれを好いてくれていたのかどうかはわからないけれども。

「分かる」と「分からない」は通常、両立しない。

分かる、と言い張る必要はおれにはないし、分からない、と言い張る必要もおれにはない。

そしてどちらとも言い張ってよいし、言い張る必要がある。

彼女がおれの一方的なガールフレンドだったという「話」は、そういうことなのだ。

矛盾させても壊れないのだから、この話は壊れない。

当たり前だ、ただの「話」なのだから、「話」なんてものは壊れようがない。

浦島太郎の話が壊れることはない。壊そうとしたら改変するしかないが、改変してしまつたらそれはもう浦島太郎の話ではなくなってしまう。

サルトルの言う対自存在という発想が、いかにつまらないアホの視点のものだったか、これでわかるだろう。

おれは、「おれでないもの」を、しばしばおれだと体験するし、おれは「おれ」を、しょっちゅうおれではないものと体験する。

そんなこと、おれにとっては日常茶飯事だし、特に稽古の最中には、それが常時のことになると言っている。

これでサルトルの論は根っこから枯れてしまう。

ピーターフォークは、刑事コロンボだが、ピーターフォークなのだから、刑事コロンボではないのだ。

ところが、ピーターフォークは刑事コロンボであり、ピーターフォークが刑事コロンボということは、ピーターフォークはピーターフォークではないということになる。そしてそれがピーターフォークだというのだ。

サルトルは西洋人だったから、こんな当たり前のことにも気づかなかったのだ、ということにしておいてやろう。

構造主義以降、西洋人はこの事象を常識のものにできたのだろうか。

「話」は魂魄領域との連絡で得られ、体の真ん中が魂魄に通じていない者、あるいは体の真ん中がそもそも機能していない者は、この「話」という事象を得ることができない。「主題を体験(体現)することができない」と本稿では表現される。

「話」を得られない者は、「わたし」を得られないので、やむをえず自我を「わたし」の代替品とする。

自我は、魂魄の領域に接続することなどできないのに、自我でどうやって「わたし」の代替品をひねり出すのか。

「差別」によってひねり出すのだ。

人は、差別をしたくて差別をするのではないし、差別意識や差別思想から差別をするのではない。

「わたし」が欲しいから差別をするのだ。

^^人は、差別が「したい」のではなく、差別が「欲しい」vv。

差別の中に「自分」を見出し、それを彫り出してみせ、それを「わたし」ですということにしたい。

人はそうまでして「わたし」が欲しいのだ。

差別でひねり出した「わたし」を、受け入れてほしい、と思っている。

その願望は、いくら強かったとして、やはりどこまでも無理があるというように、わたしには思える。

浦島太郎は、カメをいじめている子供たちを見て、「こらこら、やめてあげなさい」と子供たちを諫めたのだった。

一方、わたしは絵葉書を売る子供たちから絵葉書を買ひ、「もう持っていないね」と確認してから、彼を河に投げ込んだのだった。ざっぶーんという音がした。

その後、浦島太郎は海の中にもぐっていき、竜宮城で乙姫に会った。

わたしはその後、ガンガーに沐浴し、そこでヒンドウの神々に会った。

ただそれだけのことでしかない。

ただ、ここでわたしがあなたに、

「あなたは？」

と訊くと、あなたは答える話がなくてあわててしまうのだ。

あなたはあわてて、

「わたしは、まともな大学卒で、仕事はきっちりやって、あとそれなりに水準の高いところに住んでいますし、無理にセンスのないことはしません。あと、恋愛経験も人並みにあるかな。英語は日常会話ぐらいはできて、親のしつけが厳しかったので……」

と言ひ出す。

そうなると、もはやわたしが言いださなくても、あなた自身で、

「そんな話はない」

と思ひ直すことになる。

人は差別の中に「自分」を見出し、それを「わたし」の代替品にしようとするが、それはけっきょく無理のある、並べられると代替品にさえなってくれないしろものだ。だからこそわれわれは、その抱え込んだ差別を、罪あるいは恥の深いものとして隠し切ろうとする。ただそんなこ

とをしてもそれはただの悪あがきにすぎない。

われわれの多くはただ原罪・因果のままのレイシストなのだ。レイシズムの中にしか「わたし」の代替品を作り出せない。

^^片側を見上げて、片側を見下す^^。差別。ずっとそのことを続けている。ずっと変動的なそこに立ち続け、さらにそのことをずっと隠し続けている、その苦しさが「わたし」なのだあなたは思い込んでいるのだ。

重ねがさね言うが、そんなものは「あなた」ではないし、誰だって本来はそんなわけのわからない存在ではない。

あなたの本質は話だ。

魂魄から切り離されたあなたが「わたし」を失い、「わたし」を探して差別の中をきりぎり舞いし続けるなどというのは、いっそ当たり前のことではないだろうか？

## 耽美と欲

話と、色（しき）がある。

色（しき）は、話ではない。

色（しき）は、量だ。

量、あるいは「量る」ということ。

どちらにせよ同じ意味だ。

自我は、この「量」を取り扱っている。

自我は、量るし、いっそ、「量」が自我だと言ってもいい。

話がわたしで、量が自我だ。

その場合、その「わたし」というやつのほうが、なかなか手に入らない。

自我のほうは、四歳ぐらいには、もう勝手に具わっているというのに。自我は、量ることができ、さらに、「決めつける」ということができる。量るというのが、自我の機能だが、「決めつける」というのが、自我の充足だ。

「あいつ、性格悪いからな」

と、決めつけることができる。

「あいつ」に用事はなくて、ただ決めつける、ということに用事があるのだ。

だから嬉々として、あいつ、性格が悪いからな、と言う。

この決めつけを摂取して、自我は生存を続けている。

決めつけるということにおよんでは、じつはもう、量るということをフェアにしないでいい。

決めつけるのに根拠なんか要らないのだから。

あいつ性格がじつさいどうかなんて量らなくていい。

むしろ、量るということに徹してしまうと、それは決めつけではなくなってしまう。

決めつけるということは、いっそ量るということの放棄なのだ。

^^量っているに見せかけて、ただ決めつけている^^ということ。

それがいちばん有効で、いちばん一般的な方法だ。

「あいつ、性格悪いからな」

根拠なんかないといい、たっぷりと言う、というだけでいい。

むしろ量なんて放棄してしまうほうが、決めつけるということの威力が増すのだ。

量を放棄するというのはどういうことだろうか。

量は、色（しき）だが、量を放棄するということは、色（しき）を放棄

するということだろうか。

そのとおりなのだが、そのことを説明するため、いま手続きを踏んでいる。

量を放棄すればするほど、人は無制限に「決めつける」ということができる。

鈴木花子さんを、「マーガレットちゃん」と決めつけることができる。  
なぜ鈴木花子さんがマーガレットちゃんなのかといって、クラスメートたちはたとえば、

「種族が違うから！」

と決めつけることができる。

「種族が違うから、あなたは身体からマーガレットの香りがするの」

あとは、その種族の違いというやつを、学級の名簿に書きこめばよい。

「マーガレットちゃんはね、ツチ族なんだよ！」

鈴木花子はツチ族で、他のみんなは、フツ族なんだという。

「ほら、この名簿見てごらん」

学級の名簿を見ると、クラスメートらの名前の横には、それぞれ「フツ族」と添え書きがされていて、唯一、鈴木花子の横にだけ、「ツチ族」という添え書きがされていた。

「ね。だから、マーガレットちゃんはツチ族なの」

鈴木花子はむろん納得せず、

「そんなの、あなたがたが勝手に思いついて、あなたがたが勝手に言い張って、あなたがたが勝手にそう名簿に書き込んだだけじゃない」

「そうじゃないけど、別にそれでもいいよ。でもとにかくそれって、マーガレットちゃんも、自分がツチ族だって認めたってことだよ」

「違うよ、なんでそんな話になるの」

「ねえみんな聞いて！ マーガレットちゃんも、自分はツチ族だって認めたよ」

それから数日後、学級で共用するバレーボールに穴があいているということがあった。

穴があいていては、バレーボールは使用できない。

たんなる経年劣化だったろうが、とにかくクラスメートたちはバレーボールを失い、昼休みの娯楽をひとつ失った。

それについて誰かが、

「ねえこれって、ツチ族によるテロじゃない？」

と言った。

するとすぐに、

「そうに決まっている」

と決めつけが反響した。

「ツチ族ってもとそういう民族だから」

差別が起こる。

「オレ、前から思っていたんだけど、いいかげんツチ族を監視するべきなんだよね」

「あ、それ、わたしもそう思う」

「フツ族の団結の力を見せてやろうよ」

いいかげん鈴木花子が、悲しくなって、

「何をもってわたしのことをツチ族だなんて決めつけているの」

と言った。

すると誰かが、

「それはあなたが、細身で、背が高いからだよ」

と言った。

「種族が違うからな」

誰かが鈴木花子を指差して、

「ツーチー！」

と大声で言った。

そしてクラスメートらは、自分たちを指差して、「フーツー！」

と言った。

彼らはウオーツと喚声を発して盛り上がった。

もはや、何も量る必要はない。

量らなくても、決めつけることはできるということに、人の自我は気づき始めるのだ。

決めつければ決めつけるほど、自我は強く太く、肥えていける。

それなら何を量る必要があるというのだろうか。

決めつけを固着させれば、それがいわゆる「差別」になる。

マーガレットちゃんは、きょうツチ族で、あすもツチ族だ。

「彼女は、わたしたちとは違う種族で、下劣な種族なんだよね」

毎日、その決めつけを味わい、その飼料を摂取することができる。

彼女を除く全員が、「わたしフツ族だから」「フツ族がわたしなんだよね」と自負して暮らしていけるのだ。

別の話を考えよう。

ある男は、ふとひとり、次のように内心で思った。

今年で三十歳になる男だ。

「オレ、本気出していたら、ふつうに東大とか行けたと思うし、あるいは、ガチれば、ボクシングで世界チャンピオンとかになれたと思う」

いまでも本気出せば、そのへんのやつらより、オレのほうがぜんぜん強いんだよね。

ま、おれはそういうの趣味じゃないから、人を殴ったりとか、そういうことに本気出したりとかしないけれど。

東大に行って高学歴になってもよかったけど、それよりも、ふつうにソシャゲとかやっているほうが楽しかったからなあ。

まあ、そういうふつうの愉しみが得られない人が、受験とかスポーツ

とかで必死になるんだろうね。

そんなことをやっても、本質的には、おれのほうが頭いいし、本気出したら、けっきょくおれのほうが強いけど。

まあいいか、おれは本気出さなくても。これはこれで、こういうのがオレだから。

彼はそのように、自分のことを内心で決めつけて言うのだが、この彼の自己評価は正當なものなのだろうか。

きつとそうではないのだろうか。

きつとそうではないのだろうか、かといって、彼のその内心の自己評価を、外部からは正する方法はあるだろうか。あるいはせめて、たしなめる方法はあるだろうか。

もちろん、ボクシングジムに毎日通わせ、五年ぐらい強制的にリングに立たせれば、彼の自己評価は修正されるかもしれない。力づくで。

つまり、「力量」を、強く「体感」させられるので、彼はやむをえずその「量る」ということに、立ち返らされる——かもしれない——ということ。

それでもなお、彼は内心の「本気を出せば」という自己評価を取り下げないかもしれないし、だいいち、そのような方法は仮想するにしてもあまりに非現実的だ。

とにかく彼は、本気を出せば、高学歴で、強いファイターなのだと言っている。

彼はみずからのことを、そういう種族だと言うのだ。

彼がもし、「量る」ということに立ち返り、そのことに正面から堂々と挑むなら、ほとんどの場合で彼の挑戦は、単純な力量不足ということで粉碎されるのだろう。

え、粉碎されてどうする。

そんなこと、彼にとって何のメリットもないではないか。



だから彼は、

「立ち返らなくていい」

ということになる。

彼はもう「量る」ということを放棄すればいいのだ。別にそれで、生きていくのに困るわけでもない。

「量る」ということを放棄したとしても、ちゃんと赤信号と青信号は量るし、自分の飲み食いする量、バーゲンセールの割引率、自分の睡眠時間などは「量る」だろう。

それでふつうに生きていける。

あとは、自分の力量についてだけは、量らなければいいのだ。

ここで、「量らなければいい」といって、かつてそこにあった彼の色(しき)はどこへ行ったのだろう。

量、イコール色(しき)を放棄したということは、彼は色(しき)を離脱して、「話」のほうへ進んでいったということなのだろうか。

本気を出せば東大に行けただろうし、ガチればボクシングの世界チャンピオンになれただろうという、それが彼の「話」なのか。

あまりにもそうは思えない。

では彼の、もともとの色(しき)はどこへ行ったのか。

これは、色(しき)から「欲」へ転落したのだ。

自我は、決めつけることができるし、決めつけを固着させて「差別」を作り出すこともできる。

その差別の中に、「これがオレなんだよね」という、自分を得ることもできる。

本気を出せば東大に行けたし、ガチればボクシングの世界チャンピオンになれただろうけれど、性格的にそういう気になれなくて笑。それでも、ふつうにソシャゲに課金して遊んでいまーす。でも、もともと種族としては誰よりも優等な種族なので、そうじゃない人、劣等な種族

の人たちはかわいそうだなって思っ、いつも見ています。

「これがオレなんだよね」

信じていたいのだが、人の自我とはもともとこういう性質のものだ。

自我は、量るという機能を持っているが、それはあくまで機能であって、それじたいは充足ではない。

量るということは、自我にとつて別に「おいしい」ことではないのだ。

自我は、しだいに量るという機能をおろそかにしてゆき、決めつけるということに向かつていくし、決めつけるということは、はじめから差別に向かつているものだ。

差別、つまり、種族が違うということにしておけば、何もかもがおいしい上に、楽だ。

いわゆる婚活をしている四十過ぎの女性が、自分の性格をみずからで「根暗」だと言う。

自分で自分のことを「ブス」だと決めつけていて、どうせブスだからということとで身綺麗にもしないし、どうせブスだから誰からも冷淡に接されるんだと決めつけていて、自分から人に向ける態度は無愛想でひねくれていて不遜だ。

にもかかわらず彼女は、

「三十代前半ぐらいの、ハイスペックの男性と結婚します」

とも決めつけている。

決めつけるのに根拠も理由もない。

彼女は、若々しい成功者男性と結婚する種族なのだ。

もちろん、現実にそんな彼女の幻想に付き合う誰かはきつとないだろうけれども、それでも彼女は、そのようにいくらでも決めつけと差別を作り出すことができる。

ここで若い人は、

「そんなバカな」

と思うかもしれない。

「量る」ということが、健全にはたらいっているうちは、まさか人はそんなでたらめなことにはなりやうがないと思うものだ。

しかし、冷静に考えてみてほしい。

この四十過ぎの女性が、万事をことを健全に「量る」としたら、そのことにいったい何のメリットがあるというのか。

このことには、われわれの自我のたどりつく、ひとつの到達点が示されている。

人はしだいに、「量る」ということじたいが厭（いや）になるのだ。メリットがない。

人が、若々しく、まだ何かしらの「話」に接続してこうとする気概と勇気を残しているときには、その「話」への接続のため、「量る」という機能を懸命に、健全に保とうとするのだが、「話」へ接続していくという希望を断たれると、人にとってこの「量る」という機能は、しだいに不都合なものになっていくのだ。

それで人の自我は、いつしか、色（しき）から欲へと転落していく。

「量る」という機能の放棄。

「量る」といって、最大限健全に量ったとき、自分の見てくれはどうだろうか。

自分の見てくれは、誰と見比べてもじつに器量よしだろうか。

自分の実績はどうか。自分の実績は一般の誰と比べても引けを取らず輝かしいだろうか。

自分の姿はどうか。その姿は人並みを抜きんでて勇壮だろうか。

自分の声はどうか。その声はよく練られていて芸術を思わせ、巷の喧騒を貫いて響くだろうか。

自分のこれからどうか。自分の未来は希望とスリルに満ち、一般の枠を超えて果てしなく拡大しそうか。

自分の友愛はどうか。自分の友愛は、一般の人付き合いを超えて、かけがえない慕われ方を自分自身にもたらしめているか。

自分の時間はどうか。自分の年齢は、一般的に言って若いのか、そしてその若い時間はあと何年あるのか。

あなたがいま、十代の若者だったら、こうして量られたことのすべてについて、

「うかうかしてられない」

と、闘志を燃やして立ちあがることができるかもしれない。

けれども、年齢が壮年から中年になり、初老に差し掛かって、さらには老年に至ると、人はもうその先の自分に大きな展望は見出さないのだ。むろん年齢の問題ではなく、若年であっても、自分のことをそうして「量る」ということじたいに、もう耐えられなくなるといえることがある。

自分の見てくれは、地味で野暮ったいし、自分の実績は、小学生のころの皆勤賞ぐらいしかない。あとは中堅大学に行き、就職に必要な専門の資格を取ったぐらいかな。自分の姿は自信なさげだし、声はとんがっているくせに芯が弱くてだらしない。自分のこれからはといって、これから「まあ、ふつう」だろうし、友達というのも最近はまだ一緒に遊ばなくなった。そもそも、わたしのことをそんなに特別に好きという人はたぶんいないんじゃないかと思う。若さで言ったらもうとくに若くはないし、このままあつという間に十年ぐらいいは過ぎるんだろうなと思っている。それで、十年後の年齢とか考えると、それはもうリアルすぎて怖くなっちゃう。

人はきつと、何かひとつでも、本当の「わたしの話」があれば、それに基づいてやっていくことができるのだと思う。ここに示した例はじつに「ふつう」だ。何であればちょっとぐらいい上等な「ふつう」と言ってもいいだろう。ところがわれわれは、この「ふつう」に向き合うことに耐えられなくなっていくのだ。むなしいし、さびしい。何の話もなしに、ただの

「ふつう」が毎日続き、そのまま「ふつう」の果てに没していくだけということが、われわれにはつらくて耐えられないのだ。

それでわれわれは、「量る」ということを放棄する。「量る」をやめ、何かにコロッと転じるのだ。「何か」？ われわれはそのとき、自分に何が起こっているのかを認識できない。

われわれの自我はそこで色（しき）から欲へと転落しているのだ。

「四十代って、まだまだ若いって！」

そのことは別に否定しない。ただし、四十代の若さは、あくまで四十代にとって若いのであって、二十代にとっては若くないし、十代にとっても若くない。

鏡を見ながら、自分の見てくれを、ふと、

「貴族っぽい」

としたりもする。

「顔が、地味で野暮ったいのは事実だけど、そうじゃなくて、なんか貴族っぽいのもかもしれない」

もう繰り返し返しては申し上げないが、人は決めつけをするのに根拠なんが必要としないし、差別を形成するのにも根拠なんか必要としないのだ。

「家系図とか知らないけれど、ひよっとしたら、もともとそういう血筋が入っていたりするのかもしれない」

そういえば、マンガを読んでいるときも、何か貴族系の出自のキャラクターを見て、「これわたしだ」って思うことがあるもんね。

そういえば、子供のころ学校の先生に、「○○ちゃんはバランス感覚がいい」とかって、言われたことあったなあ。

ひよっとしたら、海の近くに住んでいたら、サーフィンとかやって、そっち方面の人になっていたのかもしれない。

そういう才能って、考えたことなかったけど、言われてみたらそっち方面のことは、なんかやってみたらできそうな気がする。直感的にそう

いうのがある。

そういえば、何年前、人事の人に「キミは落ち着いているね」って言われた。そっか、それで言うのと、わたしの声って何か落ち着いているんだよね。

それで言うのと、わたし割と、リズム感はあるし、そっち方面をやっているってたら、けっこうそれっぽい人になっていたのかもしれない。

そもそも、大学受験のとき、彼氏と揉めて体調悪くして、けっきょくあまり勉強に取り組めなかったんだけど、あのとき何もかも気にせず、ただ受験勉強に向かっていたらどうなっていたんだろう。勉強したいは苦じゃなかったし、あのとき本気出していたら、別に東京大学でも、いけるのはいけたと思う。

こうやって見ると、わたしはいつつも、取り組みが甘いんだよねー。油断しているっていうか。本当はもっと、やれることいっぱいあったはずなのに。

このようにして、人はいつのまにか、まっとうに量るということをやめ、色（しき）から欲へと転落しているのだ。

「量る」ということは、こうして次第に、作想的に融通を利かすものになり、いかがわしいものになっていく。

後輩に対しては、

「きみさあ、学生時代、部活とかやってきていないでしょ？ だから、目上の人に対する態度とか、礼儀とかが、根本的に出来ていないんだよね」

と言う。

自分がかつて部活動をやってきたということ、後輩はそれをやってきていないということ、それについては、その「量る」ということを正当なふうに持ち出してくる。

一方で、上司から、

「きみがリーダーシップとらなきゃいけないわけだけど、きみはこれまでに、リーダーシップ経験ないんだよね？　その、やり方がどうかじやなくてさ、じつさい誰もついてきていないじゃない。そのところに、ちゃんときみ自身で向き合ってももうしかないんだよ」

と言われる。

ここで、もし冷静にただ量るのみなら、リーダーシップ経験がないという指摘は、そのとおり事実なのだ。リーダーシップ経験量というパラメーターを自分で量ると、そのパラメーター値はとても低い。

けれども、このときこの人の自我は、すでに色（しき）から欲へと転落し、融通を利かせるものになっているので、

「リーダーシップ経験というか……そもそも、この会社でそんなことがしたいわけじゃないから、やる気にならないってだけなんだけど。むしろ子供のころ、『何でもかんでもあなたが決めてはいけません』って、先生に言われるぐらいだったから、わたしむしろリーダーシップを取らないようにしてきているんだよね。まあそんなことまで、このおじさんはわからないんだろうけど。人のリーダーシップをとにかく言うより、自分の人を見る目を養ったほうがいいと思う笑」

内心ではこういう文脈が湧いてくる。

内心ではどうか、自我がそういう物言いをするのだ。

若々しいころ、人の自我は「色（しき）」だが、ひねこびた後、人の自我は「欲」になるのだ。

そのときの都合で、自我の融通を利かせて過している。

「欲」。人の自我が、色（しき）から欲に転落したとき、人は動物的なものになるのだ。動物的というか、獣（けもの）的なものになる。

「欲」へ落ち込んでいくほどに、何かを理解することさえできなくなっていく。理解といって、その理解が甘い砂糖の味をもたらしわけではないから、獣としては何かを理解するというような向きには挙動が

起こらなくなっていくのだ。

色（しき）の引力は作用しなくなり、欲の引力にしか引き込まれなくなるということ。

理解するということができなくなっていく、ひいては、価値観というものも消失していく。獣に価値観はない。

当人はかつて、さまざまな価値観を持っていた。目上の人には礼儀をもって接するべきとか、目下の人にはのびのびやれるように配慮するべきとか。世の中に貢献して、人に感謝されるように生きたいんだとか、人にやさしくできてはじめて、自分が強くなれたと言えるんだとか。自分の存在したいが人を励ますようでありたいとか、そのためには明るくタフでないといけないんだとか。全力出して負けるのはかまわないけれど、逃げ腰なのはダメなんだとか。まじめにやるんじゃ足りなくて、バ力になるまでやらないと足りないんだとか。先日まで、そうしたさまざまな価値観を持っていたのだが、その価値観がどこかへ散逸していくのだ。

このことは、当人が違和感を覚えても、もう当人では制御できないという形で起こっていく。

「これはおかしい、このままじゃヤバイですよ」

そう当人は言うのだが、その「ヤバイ」という危機感が、数分もすると、

「あれ、何がヤバかったんでしたっけ。別に、まあいいじゃんという気がしてきました笑」

となる。

^^大転換V^Vが起こるのだ。これまで長らく、自分は色（しき）の引力で挙動してきた。量をはかり、量は状態をもたらし、状態は実感をもたらし。さらに、その感には想が起こり、実感量と感想量はふたたび量であって、量はまた次の状態をもたらしってくる。そのことを循環してきた。

それらのすべてが作用しなくなり、散逸して、挙動のメカニズムが一新されるのだ。

新たな挙動のメカニズムは「欲」だ。

理解は消失し、価値観も消え去り、ふと気づくと、虚無の中、何かをむさぼることばかり考えている。むさぼる……甘いものでも辛いものでもレジャーでもコンテンツでも。異性でも物品でも。ただ「欲しい」ということ。「欲しがらない理由がないから」ということで、虚無の中、すべてをただ欲しがり、すべてをむさぼることばかりを考えている。

感情的で、受け身になる。そもそも野生の獣が、自分から何かを始めるということはしないのだから、機構は必然受け身になる。野生の獣は、捕食し、営巣し、繁殖するだけだ。なわばりを巡回し、不審なものがいれば恫喝して追い払う。あとはいくつかの習性や、個体差のあるクセを振りまいて、獣はただ生きるという目的に向かって生きる。そしてその振りまかれる習性や個体差のあるクセは、そのほとんどが親からの遺伝子、血を継承することで得られている。生きものはそうして、「親の人生」を生きる。

もちろん野生の獣だって、ときには日向にくつろぎ、居眠りをしたり、見慣れないものに好奇心を向けたり、鼻先に舞う蝶とたわむれたりはある。その姿は清らかだし愛らしい。けれども、そのときわれわれは獣に獣ならざるものを見てその徳なり祝福なりをよるこんでいるということだろう。獣の獣たることは、もっと野卑で、つまらなくすさまじいものだ。われわれはハゲタカの集団が一斉に動物の死骸をつつくのを見て、大自然の何たるかを目撃はするが、そこに祝福された靈魂を体験はしない。

獣は、自分から何かを始めたらしめない。彼らはただ、自分がやられないように警戒しながら、自分だけが良い獲物にありつこうとして、徘徊を続けるだけだ。利己的遺伝子。それがつまり損得挙動だ。損得挙動の

人々から漂っているかがわしさは、端的に言って獣臭さだということになる。

損得といって、誰も損をしたいわけではないし、誰だってなるべく得をしたいものだけでも、それを「量る」といううちはまだ色（しき）でありえても、それじたいが挙動の原理となるとき、その自我のメカニズムはすでに欲に落ちていく。色（しき）のうちはまだ損得が「分かる」という中で挙動しているけれども、欲に転落して後は、もはやそれが何なのか「分からない」ようになって挙動しているのだ。

自我が、色（しき）から欲に転落するとき、人は獣に転落すると言っている。そして、人と獣の違いは何かというと、その違いは「分かる」と「分からない」なのだ。

先に述べたように、人は「分かる」ということが好きだ。それは色（しき）であれ、獣に比べるならば、その「分かる」という機能こそが、人間に人間らしさをもたらしていよう。たとえば人は、さすがに文化財に糞尿をぶちまけるようなことは、悪いことなのだと分かっている。獣にはそんなことは分からない。人が仮にそのような糞尿のぶちまけ行為をするとしたら、その人はあえて「悪いことをしてやろう」と意図してそのようなことをするのだろうか。獣の場合はそんな意図は持ち合わせていない。獣はそんなことは「分からない」まま、ただ文化財にも糞尿を垂れてしまうのみだ。

ただし、人でも認知症になったり、精神障害で人格を損なうと、わけも分からず、住居や公共の場に糞尿を塗りたいというようなことをすることがある。めずらしくもなくよくあることだ。この行為者を刑法で裁こうとするのは、多くの場合で無意味だと、誰にでも直観的にわかるだろう。獣を刑法で裁こうとするのが無意味なようにだ。

人の自我は、色（しき）から欲へ転落し、「分からない」のほうへ進んでいく。人面獣心という四字熟語がある。この四字熟語は通常、あくま

で獸に「イメージされる」ところの精神性をわれわれに思わせるに留まるが、真に人面獸心ということがありうる場合、人は本当に人面をかぶった獸になりえてしまうことになる。何も分からず、何も理解せず、何の価値観も持たず、自分からは何もしない。ただ欲しがり、機嫌が悪いと感情的になり、眼光と唸り声をもって恫喝してくる。

注意しておくべきことがある。これはまた、学門として注目すべきところでもある。

自我が色（しき）から欲に落ちるとき、思いがけず、そこには美と恍惚の体感があるのだ。うっとりして、まったく奇妙なことに、人はそこについに「わたし」を発見したかのような、差し迫った体感を得る。

「耽美」が起こる。傍目にはまったく見当違いのことのように思えるが、当事者の内部には耽美が得られるのだ。色（しき）から欲への転落は、当人にはそうと理解も把握もされないが、当人にとってはただまったくの美的な事象なのだと感じられ、

「これは本当の瞬間だ」と確信されるのだ。

「わたし」が発見され、解放感があり、美しくて、失われることのない自信が得られたように感じられる。自信は確かめるたび無制限の甘露のようにどこまでも染みわたっていく。そこにはまるで「世界」そのものがあるようにも感じられ、当人としては、あたかもそこに自分の「話」をゆるぎなく得たかのように思うのだ。唐突に、そこにはすでに、解放された「わたし」が獲得されていて、その「わたし」は、何でもない世界の平原に立っている。

その美しさに、甘露に、誰がうっとりせずにいられようか。

なぜこのようなことが起こるのか。それは、当事者においてこのことは、これまで長年抱えてきた「分かる」という機能からの離脱、同一性をもたらしてはくれなかった、その永い永い呪縛からの解放だからだ。

これまで長年、自我をはたらかせて、何もかもを量り、何もかもを分かってきた。そして、量れば量るほど、自分は本当には輝かしい者ではなかったし、分かれば分かるほど、すべては己と同一性のないものになっていった。

そして、量ることを投げやりにしてゆき、決めつけを味らい、その決めつけを飼料にして自我を生き永らえさせ、さらにそこに固着した差別を作り上げ、その差別から架空の「わたし」を彫り出すというようなこともせねばならなかったのだ。それらのことは、みずから量れば量るほど、みずから分かれば分かるほど、罪であって、恥だった。暴露を恐れて、隠れて、こっそり、いつまでもそのことを続けねばならなかった。秘密の決めつけ、秘密の差別を内心に抱え、そこから「オレなんだよね」をひねりだす。それが罪で、恥で、罪の産物で、恥の産物なんだと、知っていながら、誰にもそのことを悟られないように注意深くして。

その苦しかったすべてのものから、きゆうに離脱できた。解放された。

「もう、量らない」

「もう、分からなくなったもの」

これまで何をやっていたんだろう。

何をびくびくしていたんだろう。

なぜそんなものを、わたしだなんて思っていたんだろう。

そっか……

すべては色（しき）だったんだ。

量っていたし、比べていたんだ。

そうじゃない。

わたしはただ、欲しいものが欲しいだけ。

わたしは、わたしの感情に生きるだけ。

理解に興味はない。

何も理解なんかなくていい。  
価値観なんか元々どうでもよかった。

なぜ、これまでこうしてこなかったんだろう。  
欲しいものは欲しい、きらいなものはきらい。  
欲しいものが好き。

きらいなものには怒りが湧く。

ただそれだけ。

他には何もない。

「これが、＼わたし＼なんだ」

すごい、わたしがわたしなんだって感じがする。

これが、自分を掴むってことか。

なんか、すごくよかった。

これでよかったんだ、って気がする。

わたしはようやく素直になれたんだ。

これから何をする？

は？

何もしない。

何かするとか、そういうの一番要らない。

もう、わたしがあるから。

何か持ってきて。

わたしは「欲しい」だけなんで。

早く持ってきて。ただ「欲しい」だけなんで。

早く持って来いよ。

は？ 何かするって、何？

殺すぞ。

前から言いたかったけど、お前ら全員殺すぞ！  
本稿のタイトルは「話と色（しき）」だ。

そして、ここまで述べてきているとおり、話は「分からない」に属し、色（しき）は「分かる」に属している。

ここで、じつさいに起こってくる全体のことからタイトルを採るなら、そのタイトルはやや冗長だが、「話と色（しき）と欲」ということになる。そして、その「欲」というのも、「分からない」に属しているのだ。

第一層 話（分からない）

第二層 色（分かる）

第三層 欲（分からない）

われわれは、健全かつ一般的な自我を保っているうち、第二層のところに立っていると言える。

それで、「分かる」から「分からない」へ飛翔すれば、われわれは「話」を生きたことができるのだが、一方で、「分かる」から「分からない」へ転落すれば、われわれは「欲」に支配されることになるのだ。

飛翔と転落を分岐させているものは何かというと、言わずがな、魂魄だ。

観測不能の、魂魄という領域のみ、われわれを第一層に引き上げてくれる可能性を有している。

魂魄との連絡なしに、ただふと「分からない」に転じるとき、われわれは解放感と共に、欲の層に転落している。

達成感と共に、欲の層に転落している。

真実味と共に、耽美と共に……

「分からない」ということは、分離していないということだから、そこに同一性は得られてしまう。

欲の層においても、その同一性は得られてしまうのだ。  
つまり、「これがわたし」「これがオレ」は得られてしまう。

「欲がわたし」「欲がオレ」になるのだ。

それは同一性におよぶことなので、もう、分離的に処理はできなくなる。

一般によく知られていることとして、大金持ちの人が老人になっても、彼はその欲から離れられないということがある。

これだけお金を持っていたらもう満足でしょ、とはならず、むしろ彼は誰よりもお金に渴き続ける。

それはなぜかというと、いつからか、もうその欲じたいが「その人」だからだ。

欲じたいがわたしということになり、それで大金持ちになり、老人になつているので、もはや欲と切り離されることはないのだ。

死ぬ間際、その人が生物である最後の瞬間まで、彼は欲そのものであって、カネとセックスのことを考えている。

力への意志、力の放出のみを考えている。

何の話もなく、さらには、もう何も分からなくなり、何も量れなくなっている。

分からなくなっているの、彼はもう「自分」でさえない。

彼は「カネ」で、彼は「セックス」だ。

死ぬ間際、いわゆる「お迎え」が来たときまでそうなのかは、おれは知らない。

そうした人にお迎えが来るのかどうかもおれは知らない。

「わたし」とは何なのかということについて、ここで次のように言うことができる。

第一層 「わたし」とは、同一的に「話」だ

第二層 「わたし」とは、分離的に「量」だ

第三層 「わたし」とは、同一的に「欲」だ

何が「わたし」なのかは、その人の所属によって変わることだ。

人は、犯罪もするし、DVもするし、ハラスメントもする。

いつもその手前で立ち止まっている。

人は、警察が怖いし、懲罰が怖いし、喪失が怖いので、「向こう側」へ踏み出してしまわないよう、立ち止まっているのだ。

飲酒も薬物も、散財も暴言も、売春も倒錯も、いつもどおり目の前にあるけれど、「向こう側」へ踏み出してしまわないよう、いつもどおり立ち止まっている。

ただ、そのあつけない一歩、踏み越えた向こう側には、「わたし」が待っているのだ。

その薄弱な規制の、ただ一歩向こうに、「わたし」という同一性が待っている。

例えば、ずっと子供のころは、もっと自由で、もっと楽しかった気がする。

ずっと子供のころは、何も分かっていなかった。

ずっと子供のころ、わたしは何も量っていなかった。

あのころ、わたしはわたしだったな。

わけも分からず生きているだけだったけど、わたしはわたしだった。

わたしはいつから、こうして量るようになったのだろう。

わたしはいつまで、こうして量るということを続けるのだろう。

量るといって、いったい何を量っているんだ。

それでいったい、何になるというんだ？

このまま、分かる分かる分かっていますを言い続け、労役しながら死んでいくだけ、そのことに満足して人生を謳歌しろってか。

そんなことの言いなりになれってか。

これなら、何一つ分かっていなかった、あの子供のころのほうがまし



じゃないか。

あのころは、何の抑圧もなく、思うまま、感情のまま、解き放たれていた。

分かつている。

やめたほうがいい、それは分かっている。

やってはいけない、それも分かっている。

立場がある、そのことも分かっているし、常識や、法律のことも分かっている。

一時的な衝動に駆られて、全体トータルでの利益を失うべきじゃない、そんなことは分かっている。

でももう、それも要らないかなって。

ずーっと、ずーっと、分かってきた。

「分かっているよね？」って言われて、ずーっと「はい」って答えさせられてきた。

それってけつきよくのところ、わたしに、「わたしでなくなれ」って言うてんだよね？

なんかもう、そういうの、いいやって思った。

こうやって全員で、わけ分かったふりして生きているの、見ているだけで反吐が出るよ。

これ以上、こんなことのお仲間を続けていられない。

虫唾が走る。

こうした手続きで、人は内部で何かがぷつぷつ切れて、各種の逸脱行動に出る。

同僚の女性に、とつぜん襲い掛かったり、部下に暴言を吐いたりする。

一旦それが発火すると、もう止まらなくなる。

家族を殴り、子供を折檻し、酒におぼれ、性風俗におぼれる。

彼はもう、「やっちゃうもん」と思っており、その「やっちゃうもん」

の声と同一性におよんでいる。

セクハラ、パワハラ、DVは、そのようにして起こる。

^^本当は欲しかった己の同一性の方向VVに、それらは起こる。

リーダーシップのわたしを実現したかった人は、パワハラの向きにその逸脱が起こる。

ロマンスのわたしを実現したかった人は、セクハラの向きにその逸脱が起こる。

フレンドシップのわたしを実現したかった人は、DVの向きにその逸脱が起こる。

もちろんじつさいには複合的に起こるのだが、決め手になっているものは偏ってそこに現れてくる。

三十年も前に諦めたこと、四十年も前に無理だったこと、五十年も前に叶わなかったこと、そんなことがいまさらになって噴出する。

子供のころに諦めたこと、思春期のころに無理だったこと。

子供のころ、感情のまま、リーダーシップをやろうとしたけれど、それをうまくやることはできなかった。

うまくやれないということは、とても恥ずかしくて、罪深くて、それ以来わたしは、「量る」「分かる」ということに転向してきた。

思春期のころ、感情のまま、ロマンスをやろうとしたけれど、それをうまくやることはできなかった。

うまくやれないということは、とても恥ずかしくて、罪深くて、それ以来わたしは、「量る」「分かる」ということに転向してきた。

青春のころ、感情のまま、友情をやろうとしたけれど、それをうまくやることはできなかった。

うまくやれないということは、とても恥ずかしくて、罪深くて、それ以来わたしは、「量る」「分かる」ということに転向してきた。

そうやって、「量る」「分かる」ということに転向してきたものの、その

「量る」「分かる」が行き詰まればどうなるのか。

行き詰ったのならしょうがない。

かつての分岐点まで帰るのだ。

A Bの二股に分岐したパイプがあったとして、ずっとむかしに、Aの吐出口を封鎖した。Aのラインはうまくいかなかったからだ。

Aを封鎖すれば、流水は必然、パイプBのほうへ流れるだろう。

そのBラインで、ここ数十年、うまくやってきたけれど、いまさらになつてBのパイプが詰まればどうなるか。

とうぜん、行き場のない流水は内圧を高め、いまさらになつてAの封印を破り、Aから吐出するに決まっているだろう。

そのようにして、ハラスメントやDV、犯罪等は噴出する。

そのとき行為者は耽美の中にある。

思いがけないことで、一般には知られにくいことだが、ハラスメント等の行為者は、

^^あるときから耽美に取り憑かれ、耽美の蓄積からこそ、やがて逸脱行為を噴出させるVV

のだ。

セクハラで襲い掛かるとき、パワハラで恫喝するとき、家族や子供を粗暴さで怯えさせるとき。すべてが不穏の嵐に飲み込まれていくとき。

彼の脳内には、かけがえのない「美」の物質が分泌されている。

それが「欲」というものだ。

そうした逸脱行為の実行は、とうぜん懲罰の対象になり、彼はさまざまな規模で人生を失うが、彼はそのことについて悔いているのかというと、社会的な後悔はむろん一定でいどあるにせよ、内心の奥深くではそうではない。

彼はしばしば、堂々と思ひ返して述懐する。

「あのときのあれは、本当のオレではあったんだよね」

彼はなおもその耽美の中に居続けているものだ。

われわれの自我は、健全なうち、色(しき)といって量をはかる機能を担っているが、やがてこの機能はわれわれにとって重荷になってくる。

若々しさを失い、そのときになつて自己を量ると、自己はあまりにもみじめで小さく、罪と恥にまみれており、もはやここからこれをどうにかしていこうとは思えなくなっている。

われわれはふだん、自分のことを漠然と「ふつう」と思っている。そのとおり、われわれはふだん、日常的・一般的に「ふつう」だ。ただそれは、ふだんの習慣として万事を陳腐化して捉えているからごまかされているというだけで、本当にどうかと言われると、本当のところは自分で正視できないぐらいにあわれなのだ。

真に美しい者と並べられてしまうと、じつは疑いなく醜いということさえ明視されてしまう。

分かっている、分かっているのだ。

その分かることに耐えられなくなってくる。

ただ分かるばかりで、美と同一性に至る道筋はどこにも見当たらないのでは、ただの自分いじめでしかないではないか。

そうしてわれわれは、いつかその「分かる」ということ、「量る」という色(しき)の機能、自我の健全さを放棄する。放棄することがある。例

として、宮崎駿が中年以降の人間をブタとして描くことがあるが、そのとおり、ブタになればもう何も「分からない」のだろう。われわれがそうして、何も分からないようにして生きていく・欲をわたしにして生きていくということを選ぶなら、そこにあてがわれるわれわれの姿の図案は、たしかにブタがふさわしいのかもしれない。

本稿では、色(しき)から話へ飛翔すべきだということを唱えている。

色(しき)から離脱して、話を生きる者になるべきなのだ。そのことは、われわれの観測領域では不可能なことで、だからこそ古くから言わ

れる、魂魄という領域との連絡が必要なのだと。

色（しき）から離脱して……このとき、色（しき）から欲へと「転落」するという形でも、色（しき）からの離脱は起こってしまう。人が、欲に支配されていくということは、漠然とわれわれに知られているし、宮崎駿がその現象をブタの図案で描くということも、少なからざる人々に漠然と知られているだろう。けれども漠然とした知識などはわれわれにとって有為に使用できる知識ではない。そこに問われるのは知識の量ではなくて、その知識が「あなたの話」におよんでいるかどうかなのだ。

色（しき）から欲へ転落する。それについて、「それってブタですよね」と言われたらそのとおり。けれどもそれが、真にあなたの話になるために、わたしはこう申し上げておく。そこにあてはめられる図案はブタでよいが、そこに転落するとき、当人の体感は「美」なのだ。本当のわたし、同一性のわたしがそこにいる。誰がこの美にうつとりとせずにはいられようか。それが同一性におよぶ「わたし」だということは本稿も認めよう。ただし、そこに魂魄とのつながりは一切ない。そこにいるわたしは、魂魄からついに切り離され、落下して欲そのものになってしまったわたしなのだ。

## 罪

あなたはふだん、何を思い、何を考えているか。

あなたはいつも、しっかり考え込み、じつくりと絞りだしては、

「うーん、無理ですね」

と言っている。

「無理、か」

「無理、ですね」

「まあ、無理、だよな」

「無理、なんですよ」

「それはつまり？」

「無理っ！」

「なるほど、すげえ無理みあるわ」

「無理なんです。あー、無理だわ」

「そりゃそうだよなあ、無理だよなあ」

あなたが毎朝毎晩たどりつく、己と世界の真相は、

「出来る気がしない」

だ。

出来る気がしない。

無理。

もちろん、日々を暮らしていくことはできる。

ふつうに出勤して、そこそこにキツイ仕事をやっつけて、休日には旅行にいったり、ジムで身体を鍛えたり、十キロほどジョギングしたり、そうしたこととは出来る。

上司に言われて、お見合いして結婚したりとか、子供を作って家庭を営んだりとかも、まあやろうと思えばたぶん出来る。子育てがまともに出来るかどうかはあやしいけれども。

でも、別にそういうことをしたいと思わないので、今日も動画観て、コンビニで唐揚げとポテトチップスを買って、発泡酒をキュッと飲んで、寝ようかなと思っています。

「それ以外のことは？」

「無理っ」

なるほどたしかに、言われてみれば、すげえ無理だな、とわたしも思う。

何が無理かといって、たとえばきゅうにその胴体の真ん中から、ハードロックのグループと、ボン・ジョヴィもかくやのシャウトボイスが出て来るとか、そういうのが無理だ。

出来る気がしない。

会議で使う NOISE の初期設定をしているところ、

「やってみ。シャウト、ハードロックだ」

「いや、無理ですって」

出来る気がしない。

ちゃぶ台を前にして正座して、いきなり「赤穂浪士伝」の講談がまぎ

まぎやれるかというと、

「やってみ」

「いや、無理ですって」

「無理？ ちょっと練習していいから」

「練習したとしても、出来る気がしません」

もちろん、やってやれないことはないのだ。

ただ、やれないことはないが、やったとしてもただの「ネタ」になってしまう。

やってみた、という、最大で、友人の結婚式で披露する一発芸にとどまる、というていどのものになってしまう。

それは、ていどというより、根本的に種類が違うものだ。

「お約束」の範囲に収まるものであって、それを超えてくるものにはない。

男が、渋谷や原宿に出て、ヒマそうにしている十代の女の子を、ナンパすることはできるだろうが、それだって言ってみれば「お約束」の範疇だ。

それが悪いと言っているわけではなく、ただ、人はその範疇を超えたことは「無理」と確信しているということを述べている。

「お約束」の範疇にあるものは、キャラに合っているものなら、いちおう出来る。

やれといわれて、やることの決まっている仕事なら、まあいちおう出来る。

鉄棒で、蹴上がりをやれと言われたら、いまずぐはできないけれど、練習すれば、まあやってやれないことはないのじゃないかと思う。

何をやればいいかは決まっているから。

何につけ、何をやればいいかが決まっていって、その決まっている範疇でなら、いちおうひととおりのことはやれると思うけれど、そこから何というか、「壁を越えて」というか、お約束の中に収まらない何かをやれと言われたら、

「無理、ですな」

と確信される。

なんと考え直しても、

「いやあ、やっぱり無理ですな」

と確かめられる。

「出来る気はしませんもの」

そのとおり、当人が、出来る気がしないと確認済みなものだから、そんなもの出来るわけがない。

無理やり「やってやるぜ！」みたいなことを言い出したとしても、それだって「お約束」の範疇で、ただのネタにしかならないし、それ以上の無理をしても、近所迷惑で痛々しいことになるに決まっている。

こうして、われわれの「出来ること」と「無理」のあいだには、よくわからないけれども何かはつきりした「壁」がある。

この壁はいったい何なのだろうか。

たとえば、こう考える。

あまり性質のよくない、「ただのオッサン」と、「ただのオバハン」を用意する。

駅前をうろついている、ただのそういうやつを適当に引っこ抜いてくればいい。

その彼らを、一か月間、岩波文庫しか置いていない部屋に閉じ込めて、勉強させる。

いくつかの本を選び、その内容をちゃんと把握していないと、解放してやらない、ずっと閉じ込めたままにするというのだ。

オッサンとオバハンは、しょうがなく、解放されるための努力をするだろう。

そして一ヶ月後、彼らは口頭試験をクリアして、無事に解放されることになった。

それで彼らは、ただのオッサンではない者になり、ただのオバハンではないものになるだろうか？

一か月間、こもって哲学を習得したから。

残念ながら、そんなことにはならない。

「ただのオッサン」「ただのオバハン」の完成度は、果てしなく強固で、ほとんど絶対のものだ。

ただのオッサンに、何をつぎ込んだとしても、彼はただのオッサンでありつづけるし、ただのオバハンに、何をつぎ込んだとしても、彼女はただのオバハンでありつづける。何であれば、ちょっと面倒くさくなつたオバハンになるだけであって、それはほとんど「悪化」だ。

他の何者かにはなれないのだ。

いわゆるキモオタに、筋トレをさせてプロテインを飲ませ、テストステロン値を上昇させれば、強気になって何かオラつた奴になっていくということはあるが、だからといって、彼が感動的な存在にはならない。

しょうもないぜい肉男だった彼が、しょうもない筋肉男になるだけではないのだ。

他の何者かにはなれない。

あなたが毎朝毎晩に確かめている、

「無理」

の正体がこれだ。

ただのオッサンに、何かをさせるといふことはついぞ「無理」だし、ただのオバハンが、何かになるといふのもついぞ「無理」なのだ。

パチンコ屋の帰りに、駅前のスケベビルを見上げて、ゲップをして道端に痰を吐いているオッサンが、そこからエル・ファニングと恋仲になつて歌劇「トスカ」を独唱してドルガバの専属モデルになつて多元宇宙論の新論を打ち出すというようなことは、「無理」なのだ。

出来る気がしない（当たり前だ！！）。

ひいては、われわれは毎朝毎晩、鏡を見ては、

「よし、『無理』だな」

と、確かめているということになる。

「おはよう（無理だな）」

「行ってきまーす（無理だな）」

「よろしくお願いしまーす（無理だな）」

「たいへんお世話になります（無理だな）」

「先日の件なんですけども（無理だな）」

「ふつうの定食屋でいいんじゃない（無理だな）」

「車買い替えようかと思って（無理だな）」

「○○さんって、ご結婚されるんですね（無理だな）」

「ちゃんとしたジョギングシューズを買おう（無理だな）」

「家に抹茶を飲むセットが欲しい（無理だな）」

われわれはずっと、この「無理」を胸の奥に抱えて暮らしているのだ。

それで、表面的なことはこなせるけれど、胸の奥においては無理で、胸の奥から何かを現すとか、胸の奥から身を投げ込んで何かを為し遂げるとか、胸の奥からオープンになって人に接するとか、そういうことについては、

「あ、それは無理ですね」

「出来る気がしない」

「自分でわかりますもん」

ということになる。

さらに、ここでこのことを確かめるために、わたしはあなたにこう問いかけよう。

いわく、

「何か、本当のこと、根本的なことが、これからのあなたに出来ると思いますか」

本当のところは立たされて、やってみと言われて、本当のことが本当にできる自分になれるそうですか。

ネタとかキャラとかでごまかすやつではなく。

マジな回答を考えてみてください。

そう訊かれると、あなたは自分の胸の奥に問い合わせて、自分のことを確かめるということをする。

ずつしりと、確かめる。

「うん、いや、無理ですね」

「百パー無理とは言いたくないですが、点検したところ、たぶんものすごく無理というか」

「出来る気は、今のところしなないです」

若い人は、ここでウワツという気持ちになり、

「それだけはイヤだ、それだけはダメだ」と首を振る。

若々しさを失った人は、もうその首を振ることに飽き、

「まあ無理、なんだと思います」

とみずからで結論づける。

「たぶんずっと、このままで行くんだと思います。これまでもそうでしたし」

これはいったい何を確かめているのだろう。

ずつしりと、何を確かめているのだろう。

「自分」を確かめているのは疑いない。

ずつしりと、自分の、実感のようなものを確かめている。

出来そうか、それとも出来なさそうか。

出来そうな気、する？

わたしが？

実感的に、いけそう？

いや……

「無理ですね」

このときずつしりと確かめているもの、これは、じつはあなたの「罪」なのだ。

あなたはみずからで「罪」を確かめている。

あなたは、胸の奥に問いかけて、「自分」を確かめているのだけれど、そのときじつさいに確かめているのは「罪」なのだ。

そしてそのとおり、あなたが確かめているのは自分であって、あなたの捉えている「自分」というのは、じつは「罪」だ。

「あなた」は「罪」なのだ。

そもそも、自我とは何だったか。

自我とは、色（しき）であり、量という機能であり、「分かる」という装置だ。

このことが、それじたい罪で成り立っているというのは、たとえば聖

書方面の伝承にひもづけて捉えることができる。

聖書によると、アダムとエヴァは、禁断の果実を食べて、エデンの園を追放されたのだった。いわゆる失樂園という伝承。

蛇にそのかされることで、彼らは禁断とされていた果実を食べてしまった。「なんということをしたのだ」。この神話上に発生した罪のことを、一般に原罪と言う。神は彼らを罰した。原罪によって、アダムとエヴァはエデンの園を追放され、地上に落とされ、樂園でない暮らしをさせられることになった。

ここで言われる禁断の果実とは、「善悪の知識の実」だった。そして善悪の知識とは何かといえば、つまり善と悪とを「分かť」ことができる能力ということだ。善と悪が分離的に「分かる」ということ。ひいては、さまざまな一切が「分かる」ということ。

では、あなたが「自分」といつて、自我を確かめ、自我に問い合わせをしているとき、その自我がイコール「罪」だということは、伝承にひもづければいっそうぜんのことではないか。

そして、罪人が罪状を無視したところで、罪人であることは変わらなように、われわれは自我に知らんぷりをしたとしても、その原罪のずっしりしたありようから逃れることはできない。

そのことを手探りして、確かめて、あなたは、

「あ、無理、ですわね」と言っているのだ。

「自分で分かりますもん」

分かる、ということとは、それじたいが決めつけへと進行していこうとする性質を持っている。

「分かťてきました。無理、ですわ。これ」

決めつけへと進んでいく。

「あー、無理だ。わたしには無理。無理なんです」

決めつけは差別を形成していく。

「わたしには無理」で、「無理がわたしです」になっていく。

「そういうのが、可能な人と、無理な人がいて、わたしは無理な人なんです」

決めつけと差別によって自我はますます肥大していく。

決めつけは自我の飼料であり、それを摂取するのが自我の充足だ。

自我は充足に向かい、もはや、量ということは必要なくなる。

決めつけに思量は必要ない。

「無理っ！」

決めつけるたびに、苦くて甘い味がする。

甘露。

決めつけるのがわたしで、ふと、

「逆にこれがわたしなんじゃないですかね」

と、むしろわたしを発見したという気がしてくる。

「わー、これが「わたし」だったんだ」

解き放たれた感じがし、美的で、甘露に満ちる。

うっとりする。

自分はただ、欲しいものを欲しがればいいんですよ、という気がしてくる。

「え、だって、欲しいものは欲しいですし、きれいなものは、ただ腹立つだけじゃないですか」

自我は欲に転落する。

「分からない」になり、理解や価値観もなくなっていった。

これは、伝承にひもづければ、彼がもうアダムとエヴァの末裔でさえなくなつていったということだ。

獣になっていった。

聖書（新約聖書）では、天国から切り離された獣は、悪魔（レギオン）

の棲み家として表現される。

それはもう、原罪がどうこうという話のものではない、ということなのだろう。

仏教を代表とした古代インド哲学の方面では、人間道の因果は、「行・識」と説明される。

「識」というのはやはり、善悪の知識と同じ「識」だ。

分かっってしまうということ。

「分かる」をやってしまった、「量る」をやってしまった、その「行為」をやめられないということ。

サルトルが、対象Aを「意識」したとき、それは「わたしでないもの、A」と認識されと言ったが、これがまさに人間道の因業だ。

分かるということ。すなわち、同一性を解体する能力を具えてしまったので、アダムとエヴァはきゆうにお互いの存在と肢体が同一でないということを知り、恥ずかしくなって、お互いの陰部を覆い隠したのだった。

あなたが、胸の奥から何かをしようとしたとき、じっさいにはどんなものが出てくるだろうか。

ご存じのとおり、「自我まる出し」のものが出てくる。

シェイクスピア劇作の、適当なセリフのひとつでも吐いてみればわかる。

その「お芝居」は、自我まる出しの、キャラでしかない、お約束の、ネタでしかない、自意識過剰の、「恥ずかしい」ものになる。

そこで、さらにあなたに、

「そうじゃなくて、ちゃんとやってみ」

と言いつけてみる。

もう一度、挑戦だ。

するとあなたは、

「いや、無理です」

と言う。

そのとおり、じっさい無理だろう。

劇作のセリフを言うのに、言い方なんか存在しない。

いくら滑舌を良くしたって、それで「ことば」になるわけではない。

練習の仕方なんかないのだ。

「必死こいて、やってみたら？」

これまでにいったい幾人が、そう言われて情熱的に、何もかもをかなぎりすてて、少年マンガの主人公のように必死になり、その表現を実現させようと取り組んできただろう。

けれども、それによって何が現出するか。そこに、「必死の取り組み」「情熱的な取り組み」「若い人のチャレンジ」の現出はありえても、それをもってシェイクスピア世界の現出が保証されるのかというと、そんなことはまったくくない。

どれだけやっても、無理なものは無理だ。

「出来る気がしない」

たかだかひとつのセリフが、永遠に「無理」だ。

必死になってトライして、汗を流して涙も流す。声を嗄（か）らして、膝がガクガクになる。そうして、そのことに熱中しているあいだはよくわからなくなるけれども、それで「本当に」出来るようになるのかという……振り返って見ればはなはだあやしいものだ。

お約束でもない、ネタでもない、「壁」を超えたものは、どうすれば現出するのだろうか。

そこからわれわれが現実目撃するのは、まず「うっとり」したものだ。

耽美的なもの。

甘露に浸っているもの。



「欲」に転落してしまえば、われわれは色（しき）を離れられる。たとえば、お姫さまの役があれば、ある人はこう考える。

「いつそ、なりきっちゃえばいいんだ」

彼女は、ふつうの町にふつうに暮らす一般市民であって、お姫さまなどではまったくない。

けれどもそんなこと、もう量らなければいいじゃないか。

量らなくても決めつけることはできる。

むしろ量るのをやめてしまうほうが、決めつけはその威力を増す。

分からなくなってしまうばいいのだ。

「わたし、お姫さまだから」

あはははは。

わたしは、欲しいものが欲しい、っていうだけ。

欲しがらない理由ある？

あと、きらいなものには、腹が立つ。

絶対に許さないっていうぐらい、猛烈に腹が立つ。

それだけ。

わたしがわたしをどう思うかは、わたしの自由じゃない？

だって、それが「わたし」なんだから。

彼女が舞台に立つと、彼女は人の目を惹く。

彼女の声と仕草は、独特の迫力をもっていて、観る側に何か「特別な

人」というふうの、強い印象を与えてくる。

彼女は色（しき）を離れているから。

周囲の人々は言う、

「彼女には何か、舞台を作り上げていく、そういう魔力があるんだよね」

しかし、注意深く観察する。

本稿が示すところの学門を、すでに一定ていど得た人が、その彼女の魔力あるパフォーマンスを観察するなら、その観察者は、彼女の演じた

ところの迫力の印象とは裏腹に、そこに「話」は残されたなかったということに気がつくだろう。

近年の、音圧の高いアニメソングでも聴けばわかる。

現在のあなたが、そのいかにもというふうの「アニソン」を聴いたところで、あなたの受け取りようとしては、

「な、なにこれ笑」

ということにとどまるだろう。

派手な音響に、甘ったるい声。そして極端な稚氣を振り回す歌詞は、

逆に印象的ではあるけれども、とても肩入れして聴いていられるような

ものではないと思う。

あなたはそれらをそのように「量る」にとどまる。

音量や、甘ったるさや、エモさ、疾走感、付属している躍動感あるアニメーション、

「そのあたりはまあ、わからないではないよね」

そのように量っている。

量られたそれらは、それじたいでそれなりの引力を持つてはいようが、

だからといってあなたはそこに美的な感想までは覚ええない。

ただ、あなたが行き詰っているときはどうだろうか。

自分の小ささや、みじめさ、醜さなどが、最近いやというほど分かる。

分かるけれど、それが分かるということに耐えられなくなったとき。

「もう、分かんなくなっちゃいたいよね」という衝動があなたに起こる。

すると、あなたの自我は、色（しき）から欲に転落する。

そっか、わたしの顔って、地味だけど貴族っぽいんだ。

わたしはけっこう、お姫さまなのかもね。

あははは。

これがわたしだったかあ。

何もかも勝手に決めつけていいし、何もかも勝手に差別していい

んだ。

解放感。

そこで、音圧の高い「アニソン」は、あなたにとって耽美のものになる。

「○○ちゃんは、マジ天使」

「△△くんは、マジ尊い」

差別。

アニソンの歌詞が、たとえば、

♪なーんだってー できーるーよー!

と唄っていたでしょう。

そのときあなたは、

「無理」

とは思わないのだ。

「出来る気がしない」

とは言わない。

もう、量っていないからだ。

♪しえいーくすぴあの、劇だって! (イエーイ!)

♪おひーめさまの、役だって! (イエーイ!)

♪おうーじさまの、役だって! (うーっ!)

♪なーんだってー できーるーよー!

これを受けてあなたは、

「無理なんです」

「自分で分かりますもん」

「出来る気がそもそもしないですから」

とは言わない。

あなたの内部からは、「イエーイ!」あるいは「うーっ!」という女の子の声が湧いてくる。

人々はいま、こうしたものについて、

「元気をもらいました!」

「これめっちゃアガるわ」

と言っている。

それで、人々は勢いづいて、

「みんな、もっとアゲてこうぜ!」

「それな!」

「吹っ切って、思いきりやっちゃおうよ」

「ワンチャン、いけるっしょ!」

「できるでさ、勇気出して」

と言い合い、その中にいたあなたも、あてられてその気になるのだ。

そのとき、「その気になったわたし」の体感美的だ。

その耽美の中であなたは、

「やれる。わたしはやれる」

と思う。

「これは、ウソじゃない。きつとわたし、本当の瞬間に立っている」

ここで、とつぜんわたしがしゃしゃり出て、唐突に魂魄領域と連絡し、

シェイクスピア劇作的一幕を、衣装も音響もなしで普段着のまま、平場で現出させてみたでしょう。

何の準備も練習も要らない。

(※セリフを覚えるのに数十秒はください)

シェイクスピア劇作が、実演によって現出すると、そこには「話」があるのが体験される。

主題が体験されるのだ。

主題が体現され、主題が体験されるのだ。

するとどうなるか。

あなたは、「話」にまみえることじたいには否定的ではないが、あなたはそこにある歓喜よりも、そこから類推される絶望のほうに打ちのめさ

れる。

「無理です」

「出来る気がしない」

あなたは罪に問い合わせている。

「わたしには無理です」

「自分に出来る気がしない」

そのとおり、あなたには無理で、あなたには出来ないだろう。

あなたが、あなたといって罪を手探りし、そのずっしりとした手ごたえを信じ、それが「分かる」と言い続けているかぎり、無理に決まっているし、出来る気がなくて当たり前だ。

あなたは自分で自分の罪状報告をしているだけだ。

わたしはあなたの言うその「自分」を使っていない。

何度も言うように、わたしは魂魄領域との連絡を使っているだけだ。

出来る気がしない、とあなたが言っているところ、わたしはどうかとかというと、わたしだって別に出来る気がしているわけではない。

出来る気はしないし、出来ないという気もしない。

無理だと思えるし、こんなの簡単に出来るだろうとも思っている。

わたしの言っていることは、矛盾しており、成立しないが、魂魄領域においては、この矛盾が矛盾のまま両立する。

主題が体现されればいいだけだし、主題が体験されればいいだけだ。

観測領域で矛盾がどうかとか、そんなことに何の値打ちがあるというのか。

わたしはわたしであって、ロミオではない。

わたしはロミオであって、わたしではない。

このふたつは、矛盾するので、どうやっても両立はできない。

ただ、観測領域では両立できないというだけであって、魂魄領域では両立する。

わたしはロミオなんかやるつもりはない。

ロミオが観たければ、ロミオがロミオをやればいいじゃないか。

ロミオ以外の誰かがロミオをやるなんて不自然なことはしないでいい。

ロミオは「話」なのだろう。

じゃあ、ロミオがロミオをやるというのは、ただ話が話をやるというだけだ。

それでいえば、おれだって「話」なのだから、話が話をやるということ、おれがやってもかまわない。

おれは、おれをやるのであって、おれ以外はやらない。

そりゃそうだ、おれはおれなのだからおれ以外をやることはできない。

おれは、おれをやり、あなたはおれを体験して、それを、

「ロミオだ」

と体験するだけだ。

おれとロミオが同一性におよぶというのはそういうことだろう。

あなたは、おれを体験しているのに、ロミオを体験する、それが同一性だ。

そして、そうしたことは、同一性におよばないとあんまり意味がないんだろう。

おれは、断じて「おれ」しかやらないが、その「おれ」が、無限に同一性におよぶということ。

それが「わたし」だと、わたしは申し上げている。

わたしは「話」なのだ。

わたしは「話」を手探りしている。

あなたは「罪」を手探りしている。

あなたは「罪」なのだ。

あなたの罪は自我であって、自我は「分かる」のだから、あなたが自我で務めるジュリエット役は、同一性に至らない。

あなたは、あなた自身とも同一性に至らないのだから、ジュリエットとも同一性に至らない。

そういうことなら、あなたはいつそ、その自我を投げ捨ててしまいたいと思うのだ。

この、「分かる」とか、「量る」とか、それをやめられないという罪を投げ捨てたく思う。

罪を投げ捨てれば、原罪からは離脱し、あなたは別の界限に至る。

それが芳しいものだったらよかったのだけれども。

そのときあなたは欲と同一性におよんでいる。

欲がわたしなのだと。

欲と同一性におよんだものは獣だ。

獣はたしかに、人と同じ罪を負ってはいない。

そうして、獣化に至る道筋が、人より深い罪への道なのかどうか、わたしにはわからない。

どの罪がより重いのかなんて、神ならざる身のわれわれにはわかりようがないだろう。

自我がそれじたいが罪なのだというのは、あなたもそうだし、わたしもそうだ。

自我が罪で、「分かる」が罪、そこで「分からない」は無罪に思えるが、それは人としては無罪ということであって、獣化であればそれは獣じたいの別の罪を負うのかもしれない。

獣にならず人であり続けるためには、この「分かる」という罪を負い続けるしかないが、この罪を背負いながら、同時に「分からない」にもなりうるのだろうか。「分かる」と「分からない」は両立しない。ただしそれはわれわれの観測領域において。

魂魄領域においては、「分かる」と「分からない」は矛盾しない。

あなたは「罪」に問い合わせる。そして、ずっしりとした手ごたえで、

「無理、です」

と言う。

なんど確かめても、そのたびに、

「うん、出来る気がしません」

そのときあなたにとつては、自我が第一義で、罪が第一義なのだ。

その第一義の上に、「どうすればいいだろうか」を貼りつけ、「これはどういう話なのだろうか」を貼りつけようとしている。

そのとき、話は第二義だ。罪の以降に、話を貼りつけている。

話の元をたどると、罪だ、ということが出てくる。

わたしは話を第一義にしている。わたしとて、健全な自我を持っており、善悪を含め、さまざまなことを「分かつて」いる。

だが主なるものはどちらか。第一義と第二義があったとして、主なるものはあきらかに第一義だ。父と子があったとき、子は第一義ではないし、子が父の主なるものではない。

わたしは「話」を主なるものとし、その第一義に、第二義となる「分かる」「量る」を重ねている。その第二義が罪だったとして、その罪をどう処するかは第一義のこころ次第だ。そちらが主なるもののからだから。

第一義がわたしの自我を罰するなら、わたしの自我は赦されるだろうし、第一義がわたしの自我を赦すなら、わたしの自我は罰されるだろう。

「無理です」と言っ、わたしにおいては、わたし自身にそれが無理なのかどうかは「分からない」のだ。「出来る気がしない」と言っ、わたし自身にそれが出来るのかどうか、それもわたしには「分からない」のだ。

もちろんわたしにも分かることはある。たとえばわたしにとって、ありふれた目玉焼きを作るのは「無理」ではない。あるいは円周率を百桁まで覚えると言われたら、時間はかかるにせよわたしはそれを「出来る気がする」し、体操選手のする「後方抱え込み2回宙返り1回ひねり」な

どは、これからわたしに一世の時間が与えられたとしてもまるで「出来る気がしない」。

けれども、わたしに何が分かったとして、それは第二義にすぎないのだ。主なるものではなく、しょせん第一義に従属するものでしかない。いくら第二義のわたし（自我）が分かる分かるとさえずったところで、第一義は分かるとは言わないのだし、わたしのさえずりなど斟酌さえされないのだ。

第二義のわたし（自我）を罪と定めたのさえ第一義ならば、第一義はわたしの罪さえ平然とないがしろにする権威を有している。仮にわたしの自我がみずからその有罪を主張したとしても、やはり第一義はそれを斟酌する義務さえ持ち合わせておらず、つまりわたしの自我がみずからの罪を分かることさえ第一義の御前にはまったくの無意味で無力なのだ。であれば、「わたし」のすべてを決定しているのは、けっきょくのところ第一義たる「話」なのだから、「わたし」とはすなわちその「話」だということではないか。そしてわたしのすべてを決定する第一義に対し、声高でもけっきょくわたしを決定することにはまるで無力な第二義は、もはやわたしにとって声高な他人にすぎない。

仮にわたしがこの構造じたいから離反しようとするならば、そのときに採れる方策は唯一、第二義を第一義に転じるということだけだ。そして、もしそのように第二義を第一義に転じるということがあれば、わたしはそのずっしりとした罪の重さをみずからの第一義だと抱えて進まねばならない。わたしの自我は何もかもを分かると言い張るけれども、それはただ分かるだけであって、ずっしりとした罪の重さをどこかへ消し去るといような権威と能力は有していない。そのずっしりとした重さは、たしかに何もかもについてわたしに、

「無理」

と言わしめるし、何もかもについてわたしに、

「出来る気がしない」

と言わしめるだろう。

いったいこのようにして、何もかもについて初めから「無理」としか言えないみじめで面倒くさいものが、何をもって万物の父などというるだろう。第一義とは父のことだ。わたしの自我を第一義と言いつ張ることは、そのことじたいは不可能ではないにせよ、このあわれで不細工でいつも「無理」しか言わない小物を、唐突に「父です」と言い出そうとすることは、あまりにもわたし自身に馬鹿馬鹿しさを覚えさせるのだ。

この出来損ないもいところの男に「父よ」といって、何事かを問いつ合わせる気にはなれない。

わたしの自我にとって「無理」ということに、いったい何の値打ちがあるだろう。わたしの自我が活躍することを、わたしの自我以外の誰が真に心待ちにしているだろう。わたしは第二義のわたしが完全な無力な者V.V.だということを宣言する。開くことのない小箱の中でサイコロがさまざまな目を出したとして、いったいそのことを外部の誰がどのようなことだし、わたしの自我の活躍に注目と承認を求めるといふのもそのようなことだ。箱の中で、高く六の目が出たときは「出来る気がする」と高揚し、低く二の目が出たときには「無理です」とずっしり言う。そんなことに付き合わされて愉快になる者がこの世界のどこにいらっしゃるのか。

父は子の虚妄を斟酌する義理を持ち合わせていない。それよりも先に、子のほうが父の本意を汲み取ろうとする態度があるべきだろう。第一義が「話」なら、何よりその「話」の声を聞き取ろうとせねばならない。そしてわたしはじっさいに、ここに長々とひとつの話を書きつけているのではあるが、話を書きつけるのであれば、それは第一義たる「話」の声をそのまま書きつけるべきではないだろうか。どうしてここでわたしが第

二義の「分かる、量る」を書きつける必要があるだろう。

浦島太郎という青年が、カメを助けたということが分かった。その後、浦島はカメに乗せられ、竜宮城に行ったということが分かった。浦島は竜宮城で乙姫に会い、歓待されたということが分かった。浦島太郎はその後地上に戻り、土産に持たされた玉手箱を開封してしまい、煙に巻かれて老人になったことが分かった。このように、第二義の声を書きつけることは、話を書きつけるということにおいてまったくの邪魔でしかない。

原理的にはそのような仕組みなのだ。誰だって一定の「話」は知っているつもりでいるし、誰だって内心の核に居座っている「無理」のことはよく知っている。ただ通常は、「話」のほうを第一義にはしておらず、「分かる」のほうを第一義にしているのだ。たとえば、芸術大学を首席で卒業した者でも、志村けんがやっていたようにバカ殿をやってみんなを笑わせると言われると、内心では即刻「無理」なのだし、若き日のビリージョエルのようにピアノを弾きながら「エンターテイナー」を唄えと言われたら、内心では即刻「無理」なのだ。器用にこなせたからといって「壁」が越えられるわけではないので「無理」だ。芸術大学を首席で卒業したからといって「罪」を超えてある第一義と連絡できているわけではない。だから現実的には「出来る気がしない」。文学部の教授が書いた本は、わたしが書き話す冊子よりもずっと面白く読みやすく書けと言ったところで、そんなことは彼には「無理」だ。面白く書くとしても彼はそういう「ネタ」や「キヤラ」に走ることはできない。文学に詳しい文学好きは文学者ではないように、文学部の教授も詳しいだけで文学者ではないのだ。なぜこうまで仕組みが解き明かされても、「現実的」には、きょうも明日も、

「無理」

なのだろう。そのことはいかにも不毛だと、誰よりも当事者が蓄積的に知っているはず。まともな読み取りの出来る者なら、ほとんど直覚の領域で、自分が問い合わせている先が「罪」だということもすでに明視できているはず。まるで「お前は罪を信じているのか」という具合なのだ、それについてさえ「そうなのかもしれません」と答えるよりないというような閉塞ぶりなのだ。

なぜそのように、解き明かされながらも脱出不能なのかというと、そのことはきつと、自我が無力ということに見切りがついていないからだ。何しろその自我でこそさまざまな色（しき）に引力を受け、さらには欲からの引力さえ受けて踏みとどまっているのだから、そのように力の中にあり続ける自我のことを、とつぜんまったくの無力なのだとは思いきれない。ありていに言って、日常で内心「自我こそがいちばんパワフルだ！」と思っているに違いない。

そのとおり、自我が量をはかると言って、自我の目当ては最初から最後まで「力の量」に行き着いている。それはニーチェの言うとおり「力への意志」だ。自我の求める自分量というのは、どう変形してもその本質は「力の量」であり「力量」だ。自我はただ時間を生きているのではないし、さらに言えば生きることなど二の次でさえある。「力」。自我はみずからに力を求めて生き、力を放出することを欲している。

あなたは要するに、^^力量を見せびらかしたいVVのだろう。

あなたにとって安らぎと満足は、力量を見せびらかしたときにあるのだろう。

あなたは、力量があることについては「出来る気がする」と誇らしく言い、力量が足りないことには不快な声音でずっしり「無理」と言っているのだろう。

まったく、それは何の話だろう。重ねがさね、「そんな話はない」のだ。そんな話はないが、そんな罪はあるということか。

自我に完全な無力を看破しないかぎり、第一義に「話」はやってこない。

自我に無力を宣言できないなら、罪が無力になるわけがない。

日常で内心、「自我こそがいちばんパワフルだ!」と思っっているなら、それによってあなたに起こってくるのは次の事実的作用だ。

罪こそがいちばんパワフルだ。

いちばんパワフルということは、それを上回るパワーは存在しないので、あなたは毎朝毎晩、

「無理です」

を言うことになる。

## 音楽にはドしかない

音楽に縁のない人——演奏する側として縁のない人——には、まったく有効でない話になってしまふのだが、一方で縁のある人にはずいぶん食いつかれて聞き入られることがあるので、この章を書く。

音楽について基礎知識のない人には、どうしても意味不明の箇所が出てきてしまふし、そのことを説明しだすと別ジャンルのことになってしまふので、技術的説明はばっさり割愛するしかないのだが、その点はどうやむを得ないこととして、あしからず了承してもらえらるものということにしておいてもらいたい。

「音楽にはドしかない」。このことは、一般の音楽理論としてはまるで言われないことで、これはまったくの素人のわたしが、勝手にそのように

吹聴している、ただの世迷言だということにしておいてもらいたい。

ドレミファソラシというのがあって、ドの周波数は 261.6 Hz だ。この周波数を二倍にすると、とうぜん 523.2 Hz になるが、この音は「一オクターブ上のド」になる。では三倍にするとどうなるか。周波数は約 784 Hz になるが、これは「ソ」の音なのだ。「一オクターブ上のソ」になる。次に、四倍したら、周波数は約 1046 Hz になり、これはとうぜんふたたびの「ド」になる。二オクターブ上のド。

注目すべきポイントは、

「ドの周波数を倍にしていいたら、ソが出てきやがった」というところだ。

「なんでソが出てくるんだよ、お前はドとは違う音だろ」

つづき。ドの周波数を五倍したら、二オクターブ上の「ミ」になる。また違う音が出てきやがった。なぜドを倍にしていくと違う音が出てくるのか。

次、六倍になったらどうなると思う。どうなると思われなくても、まったく見当もつかないだろう。ところがどっこい、冷静に考えるとわかるのだ。六倍ということは、二倍の三倍なのだ。ということは、二倍は「ド」で三倍は「ソ」だったので、六倍音は「二オクターブ上のソ」になる。

そんなこんなで、進めてゆき、じゃあ十七倍するとかどうなるかといって、十七倍するともう「四オクターブ上のド#」になる。半音まで出てきやがった。

半音が出てくるといふことは……

ドレミファソラシに、こういう性質があるということではない。

逆だ。

こうした〇倍音から、人類はドレミファソラシを発見し、音階にしようとして決めたのだ。

三倍音がソ、ということでは本当はなく、ただ弦の長さを半々にして  
いって、三倍の音を「ソ」に決めた。

そして、その倍々の中で半音が出てくるということは、いわゆる「音  
階」というものは、この倍々の中だけで作られているということになる。  
どういうことか。

まず、ピアノの鍵盤を思い出してもらって、その中でどれが「ド」かぐ  
らい、あなたは知っているはずだ。

そして、よくよく鍵盤を見ると、白鍵が七個、黒鍵が五個あるはずだ。  
合計十二個。

どれだけややこしい楽譜でも、音の数でいえば、この十二個しか存在  
しない。

そして、基本的には、十二個の中から七個しか使わないので、音楽と  
いうのは基本的に七つの音だけで作られているということになる。

これは極端に言っているのではなく、マジの話だ。

われわれは、クラシックの楽譜を開くと、ただちに音符がアホみたい  
に凝集しているのを見て、

「無理すぎワロタ」

になるのだが、逆に音楽の専門家はシンプルに、すべての音をⅠ〜Ⅶ  
の番号で捉えているのだ。

七個しか音は使わないから。

(ポップス音楽ではあまりこのⅠ〜Ⅶの表記は用いない。ポップスは移  
調することを前提にしていけないからだ)

それで、さらに、あなたの家にピアノでもあればいいのだが、あなた  
がドの白鍵をブツ叩くと、じつはそのとき、本当に一オクターブ上の「ソ」  
の音も鳴っているのだ。

これはただの物理であって、いわゆる「固有振動数」だ。固有振動数が  
約数や倍数になっているので、波が物理的に「共鳴」を起こしているの

だ。

ペダルを踏んで、ドをブツ叩き、その後、中に手を突っ込んで、ドの弦  
を指でミュートしてみるといい。

ミュートしたらドの音は消えるが、ソの音は明らかに「ピーン」と、サ  
ステインの中に鳴っているはずだ。

これはもう、めちゃくちゃはつきりと鳴っているもので、誰でもわかる。

「げっ、ドを叩いているのに、ソも鳴っているのかよ」

そのとおり。

完全五度といって、ドを叩いたときのソがいちばんわかりやすいけれ  
ど、先ほど説明したように、鍵盤に並んでいる白鍵と黒鍵は、そもそも  
がすべて倍音から見出されていたものなので、白鍵でも黒鍵でも、ど  
れかひとつをブツ叩けば、原理的にはすべての弦が共鳴するのだ。

鍵をひとつだけ叩いて、特定の周波数だけを鳴らすということは、逆  
に楽器においては不可能になる。

もし、特定の周波数「だけ」を鳴らすと、いわゆる「ピー音」になる。

「試験電波放送中」などに聞こえてくる、ピーという音だ。いわゆるた  
だのサイン波が聞こえてくる。

そんなむなししい楽器は存在しない。

それで、次に。

ドを叩いてソが鳴るとか言っているが、そもそもドとかソとかいうの  
は何なのか。

もちろん、ここまでの話、音楽の基礎知識のある人は見逃してきてく  
れたものと思うが、わたしが「ド」と言っていたのは、本当にはドではな  
くて「C」だ。シーと読むこともあればツェーと読むこともある。

周波数が  $261.6\text{ Hz}$  というのは、本当はドではなく「C4」だ。爆薬の  
ことではない。後ろの数字はオクターブを指定している。

それで、じつさに鍵盤のCを叩いて、



「え、Cはドなんじゃないの？」

と訊かれたら、

「それでいいよ」

と答えねばならない。

それでいいけど、と言いながら、ここからきゆうに、

「ハ調ならそれでいいよ」

というようなことを言い出すハメになる。

ああ面倒くせえ。

あなたはCの鍵を叩く。

「ドですか？」

とあなたは訊く。

おれは、

「へ長調だったら、お前の叩いているのはソだけどね」

というようなことを言い出す。

はああ？

なんで同じ鍵を叩いているのに、勝手にソになるのか。

この意味不明は、「全部ド」と説明される。

十二個の鍵は、全部ドなのだ。

ウソじゃない。誇張でもない。

どれでもドにしているのだ。

C D E F G A Bは動かないのだが、ドレミファソラシは動くのだ。

うげえ、面倒くせえ。

ドは、ルート音であって、どの音でもないのだ。

たとえば話をしよう。

ビルがあったとして、ビルの一階とか二階とか、七階とかは、動きようがない。

けれども、あなたがそのビルの中にいて、

「あなたのフロアから一階上」

は何階だろうか。

何階かはわからない。

あなたが五階にいたら、一階上は六階だろう。

あなたが百二十階にいれば、一階上は百二十一階だ。

ドレミというのはそういう概念なのだ。

あなたのいる階層がドで、一階上がレなのだ。

あなたがC階にいれば、Cがドで、レの階はDになるが、あなたがF階にいれば、レの階はGになるのだ。

並べると、

ドレミ

C D E

もありうるし、

ドレミ

F G A

もありうるということ。

これ以上の説明は、誰かピアノを持っている人に直接教わってくれ。

どの音をドにしても、ドレミファソラシは当たり前前に弾けるのだ。

このようにして、十二個の鍵は、「全部ド」になった。

次に、音楽の進行を考える。

音楽というのは、ドから始まり、ドに終わっている。

これも本当だ。

一般にはまったく知られていないが、ほとんどの場合、音楽はドから

始まってドに終わっているのだ。そうじゃないものなんて探してもなかなか見つからない。

仮に、メロディがソから始まっていたとしても、それはドをルートにした五度音として鳴っているのだ、やはり始まりはドなのだ。

音楽というのは、ドから始まり、トニックをうろろし、そこからファに行くと、もうソに行こうよという感じになり、ソに行ったあとはソをなるべく引き伸ばして、あとはもうドに帰るしかなくなる。ジャーン。終わり。

そういうふうに進化する。

これをカデンツァと言う。

音楽の先生が聞いたら、目を吊り上げてバイオリンの弓で殴り掛かってきそうだな。

それで、ドレミの性質上、ルート音（主音）は常にドだ。そりゃルート音のことをドと呼んでいるのだから当たり前だ。

それで、ドからファに行こうが、そのファからソに行こうが、それらファとかソというのは、「ドに対する〇度音」でしかないということ。

ファを鳴らすのは、ドが目当てなのだ。

ソを鳴らすのもドが目当て。

演奏で使われる七つの音は、すべてルート音が目当てなのだ。

ドを見失ってファを鳴らすと、そのファはじつに行方不明になる。

ドを見失ってソを鳴らすと、そのソはじつに行方不明になる。

「ドラえもん」でたとえてみよう。

ドラえもんの主人公はのび太だ。

ドラえもんの映画には、「のび太の、〇〇大冒険」というように、「のび太の」というのがついている。

作中にスネ夫が登場するのは、のび太が目当てなのだ。

スネ夫は、主として作中、「のび太に対するスネ夫」という存在として

登場している。

ジャイアンも同じだ。

ジャイアンも、作中、「のび太に対するジャイアン」という存在として登場している。

しずかちゃんも、ドラえもんも、のび太に対するそれぞれとして登場している。

つまり、ドラえもんのストーリーは、

のび太（主音）↓スネ夫（トニック）↓ジャイアン（トニック）↓しずかちゃん（サブドミナント）↓ドラえもん（ドミナント）↓のび太（主音）

というふうに作られているのだ。

作中にドラえもんが描かれるのは、のび太を表現するためだと言っている。

のび太が主人公なのだから。

作中にしずかちゃんが描かれるのも、のび太を表現するためだと言っている。

作中にスネ夫とジャイアンが描かれるのも、のび太を表現するためだ。つまり、われわれはドラえもんのにび太を見ているし、しずかちゃんのにび太を見ているし、スネ夫とジャイアンのにび太を見ているのだ。

だから、ドレミファソラシの鍵盤があったとして、ファを叩こうがソを叩こうが、レミラを叩こうが、シを叩こうが、

「それは全部ドを鳴らしているのだ」

ということになる。

ドが主音なのだから。

和音とメロディがどう進行したとしても、叩かれている鍵盤はのび太のきすべて「ド」を鳴らしている。

そうなるとうなる。

先に示した、ドレミの定義として、十二個の鍵はどれをドにしてもよいのだった。まずそこで「全部ド」だ。

それで、どれかひとつを適当に主音に決めたとして、そこから和音とメロディがどう進行したとしても、使われる音は七つなのであって、その七つは全部ドを鳴らしているのだ。

楽譜に書かれているおたまじゃくしの凝集、あれは全部ドを鳴らしているのだ。

ならば、音楽というのは、その始まりから終わりまで「ド」でしかない。

始まりから終わりまで、主なる音を鳴らしているだけだ。

ドは、主音で、アルファ（始まり）であり、オメガ（終わり）だ。

マタイの福音書を「鳴らした」とき、そこからマタイの音が聞こえてきたらおかしいだろう。マタイは福音の主ではない。

「なんでオメガが出しゃばって来るんだよ」

と、あきれることになるだろう。

マタイの福音書を鳴らせば、そこから主なるキリストの音が聞こえてこないとおかしい。そうでなきゃ何のための福音書だ。

マルコの福音書を鳴らせば、主の音がしないとおかしいし、ルカの福音書を鳴らすというのは、主の音を鳴らすということのはずだろうし、ヨハネの福音書を鳴らすということは、やはり主音を鳴らすということに違いないはずなのだ。

ドを見失って——ドの友人でなくなつて——ファとかソとかだけが鳴り響くと、それはものすごく行方不明の音で、祝福されたものではなくなり、福音ではなくなるのだ。

福音でない演奏というのはじつによくありうる。

音感のいい人は、音の高さ、その周波数を精密に「量る」ということができるのだけれども、それは色（しき）であつて話ではないので、それだ

けで音楽を成り立たせることはできない。

音感だけで演奏すると、そこには「何の話も聞こえてこないもの」が出力されてくる。

それでも、そこにある引力が好きで、それこそがいいんだという人もいるから、それはもう趣味のこととして、わたしからは口出しできない。

ドラえもんだって、「しずかちゃんもつとエロく美麗に描かれたほうが、引力があつていい」という人はいるのだ。

のび太の話なんか聞こえてこなくていいという人がいるように、音楽についても、そこに話なんか聞こえてこなくていいという人はいる。

さらに言うと、音楽にひとつの「話」が聞こえてくるとき、われわれがそこに本当に聴いているのは音ではないのだ。このことはいつそ当たり前だ。音といって、サイン波がピーと鳴ったとして、そんなことには何の体験もないのだから。

モネの絵を見たときに、絵の具を感じるといふ奴はアホではないか。

モネの絵に、しかるべき人は風景を体験するのだろう。さらにいえば、そこでは風景の体験を体験すると言ふべきだと思うが、その話はここでは差し控えよう。

歩けば足音がする。仮に、それがすごく佳い音で、春の旅を体験せるところがあつたとして、その佳い音をいつたいてどうやって作り出そうというのか。

足音は、歩くことに従属して発生している。

われわれに、真に共有されて体験されているのは、そのとき足音ではなく「歩く」ということなのだ。

佳い旅が佳い足音をもたらしているものであり、そこに「聞こえてくるもの」「サウンド」なのであって、それは「佳い足音を作つてそれを聴かせようとする」と——いわゆる「音作り」——とは事象が異なるのだ。

わたしはこの現象を、わけあって極めてはっきりと知っているが、ずばり言って、これは一般に思われている「音楽の要素」ではまったくない。

先に話があつて、それに音が従属してくるのだが、「先に」話があるということは、そこには何も鳴っていないということなのだ。

何も鳴っていないのであれば、それをふつう音楽の要素とは言うまい。これはつまり、

^^音楽の要素ではないものが、演奏を支配しているV

ということ。

そして、音楽に情感ではなく体験を見い出さんとする人は、むしろそちら、音楽の要素でないもののほうにこそ、

「いや、それこそが音楽なんです」

と言ひ、その旅じたいを求めてやまないようだ。

音楽の技術者は、歌唱や器楽演奏について、高い「力量」を持っていると思うけれど、われわれの持ちうる「力量」の中に、音楽との同一性におよぶ「話」はない。

音楽と演奏を統べるものは、われわれの「力量」ではないところに存在している。

そうでなければ、じつさい力量ゼロのわたしに、このたぐいのことがこんなにはっきり具わるわけがないのだ。

## 認識と矛盾した思い込み

人はとんでもない思い込みをしているものだ。

英雄ではないのに英雄だと思っている。

美女ではないのに美女だと思っている。

「しごでき」ではないのに「しごでき」だと思っている。

(こんにち、仕事ができる人のことは「しごでき」と貶めて呼ぶらしい)

芸術におよんではないのに、アーティストックだと思っている。

ハイセンスではないのに、「センスがある」と思っている。

貴族でもないのに、生まれつき高貴だと思っている。

選ばれた民ではないのに、選民意識がある。

物語は見当たらないのに、ロマンチックだと思っている。

才能は見当たらないのに、タレントッドな意識がある。

勇氣はないのに、勇敢だと思っている。

怠惰なのに、努力を重ねてきたと思っている。

根性がないのに、根性があると思っており、感情的でヒステリックなのに、冷静でクレバーだと思っている。

プラウディなのに謙虚だと思っている。

人望はないのに、人は自分についてくるべきだと思っている。

能力がないのに、能力があると思っている。

自分の思ったことが、思ったまま伝わると思っているのだ。

「わたしがいま、そっちに行こうとしているのわかるでしょ？ それなのに、なんでそこに立つの。邪魔になるじゃない」

もちろん、そういうことはじつさいにある。

たとえば、わたしが自動車を運転していて、右折でどこか店舗の駐車場に入ろうとしているところ、察しのよい対向車のドライバーが、早めにウインカーを出してくれて、

「わたしも右折しますよ」

と教えてくれる。

ありがたい。

彼が右折するということは、彼は直進してこないということであって、わたしはゆうゆうと右折ができるということだ。

それは、彼の察しがよく、それでいて積極的な友愛があったということだが、もっと単純に言えば、そこにはコミュニケーションの現象と能力があったということだ。

わたしの思うことが向こうに伝わるはずだということではない。

コミュニケーションの現象と能力がなければそうしたことは起こらない。

人はとんでもない思い込みをしているもので、人は自分の思うことが思ったまま伝わると思っているのだ。

自分は美女ではないのに、自分のことを美女だと思い込んでいる。

そうした人は、信じがたいことだがじっさいに存在し、しかもめずらしくなく存在する。

こうしたことは、一般に、

「あー、あるある笑」

と簡単に同意されるけれども、誰もそこまで本当に「そうだ」と、その構造を明視しているわけではない。

自分を美女だと思い込んでいるその当人に、あなたは自分の見てくれをどう思いますかと尋ねてみると、

「んー？ まあ、中の下、ぐらいですね。中の中ではないでしょう。客観的に見て」

と言う。

そのときの彼女は、ウソをついているわけではない。

ここで彼女の外見は、客観的にはまさに中の中だったでしょう。

彼女はそれについて控えめに、自分を見下げて、「まあ中の下でいいでしょう」と言う。

そのていどに控えて言うということは、まさに一般的な振る舞いとして妥当なところだし、さらに彼女はその言いようについて、まったくウソを含ませているのではないのだ。

「いや別に、自己卑下しているわけでもなく笑。客観的に見て、それぐらいだと思っていますよ。中の下。しょうがないじゃないですか。そりゃいちおう周りの人は、中の中ぐらいだと言ってくれるとは思いますが、そういうのは鵜呑みにするべきものではないですし。まあ何にせよ、そんなにこだわりがあるわけでもなく、『ふつう』の範疇だからそれでいいんじゃないと思っています。それで何か問題ありますか」

彼女は何もウソをついていないが、そうではない、そもそもわれわれの「思い込み」とは、認識の中に生じるものではないのだ。

われわれの「思い込み」は、差別の中に生じるのであって、認識の中には生じない。

彼女は、美女が美女として高く差別されることを知っており、彼女はその高い差別のほうに^^自分の居場所VVを感じているのだ。

どういうことか？

認識と差別は異なる。

認識上、彼女は「中の下」だが、「なぜか」彼女は、そこに自分の居場所を感じてはいない。

自分が受けるべき差別として妥当なものは、美女として遇される高い差別だと感じている。

彼女は、認識上は不美人でも、思い込みとしては美女なのだ。

彼女はウソをついているわけではない。

けれども、どこからともなく怪しげな外国人男性が現れて来、

「きみの瞳には、独特の印象があつて。ボクは初めから、きみのその美貌に惹かれていたんだ」

と自信ありげに言ったとき、彼女は、

「なぜそのように事実に戻したことをおっしゃるのですか？」

と冷静に首をかしげはしない。

エッ？ は？ とおどろいて、悪い気はしていなくて、半笑いになり、

「またまたあ、何の魂胆があつてそんなことを言うの」

と茶化すのだ。

茶化せば彼は、

「どうして？ ボクは本当のことを言っているだけです。ボクはきみに、ウソをつきたくない」

と真剣なふうに言う。

人はとんでもない思い込みをしているものだ。

その思い込みは、認識に生じているのではなく、差別に生じている。

彼女はいま、よくわからない外国人から、美女として高い差別を受けた。

彼女はもともと、その高い差別に「居場所」を見出ししていたので、彼女は彼のもとを去ろうとはしない。

彼女は、認識としては、そのように美女扱いをされることは不当だと認識しており、「何の魂胆があるの」と茶化す一方、体感としては、そのような美女差別に遇されるのは、不当どころが妥当なことと感じている。

そこがもともとの「わたし」の居場所であつて、だからこそわたしの「居心地」がいいのだ。

「やっと本当のわたしをわかってくれる人が現れたかも」

彼女の内心にはそのような想いさえ湧き上がっている。

逆に言うと、彼女はふだん、知り合いたちから「いじりやすいキャラ」「盛り上げ役」と扱われているのだが、そのことは彼女の「認識」においては妥当なところでありながら、「体感」においては不当なことだったのだ。

彼女の体感、差別に生じているのだから、彼女は美女として遇され

ないかぎり、体感としては「不当だ」という思いを募らせつづけている。

そのことは、彼女自身の持つ認識にさえ矛盾しており、話としてはめちゃくちゃなのだが、そんなことは彼女にとってはどうでもいいことで、

「屁理屈」でしかない。

認識ではないのだ。

差別なのだ。

先の章で述べたとおり、人は差別の中に代替的な「わたし」を見い出しているし、またその差別を作り出すのには、何らの根拠も必要としない。

人の自我は「決めつける」ということを、無根拠で無制限に出来てしまふし、さらにはそのようにただ「決めつける」ということこそが、自我の飼料であつて、それこそが自我を肥え太らせ、自我を安らがせる。

つまり、彼女の自我の「色（しき）」の機能においては、彼女は「中の下」だが、自我は欲に転じては、彼女は「やっぱり美女」なのだ。

それで彼女の自我は、けっきょくのところ美女として遇されてはじめて安らぐということになる。

それ以外は、「わかるけど」、やはり憤怒を湧かせていて、その憤怒を表沙汰にするわけにもいかないの、我慢し、怨んでいる。

それでいま彼女は、不明の外国人男性から、美女として高い差別を受けたところだ。

その差別さえ得られるなら、「認識」などどうでもよいではないか。

「そもそもさあ、どういふのが美女で、どういふのが美女じゃないとか、元から決まっているわけじゃないし、そんなの誰にも決められないじゃない？ だから人それぞれ、どういふのが美女だって思えば、それが美女なんだよ」

こうして彼女は、自覚のないまま、混乱した構造をそのまま受容し、混乱した人格のまま生きていくことになる。

認識を問えば、認識においては、彼女は美女ではないし、英雄でもないし、「しごでき」でもないし、貴族でもないのだ。芸術的でもないしハイセンスでもないし、ロマンチックでもない。勇敢でもないし、根性があるわけでもないし、冷静でもないしクレバーでもなく、謙虚にもなれずにプラウディだ。

「英雄、みたいなことは、無理ですね。英雄どころか、勇気も根性もないですもん。自分で自分のこと、プライドの高い奴だなあって思います。なんでこんなにプライド高いんでしょうね。こんな、大したことのない見てくれで、生まれつき家柄が良かったというわけでもなければ、そこまで本気で努力してきたというわけでもないのに。何かに特別な才能やセンスがあるというわけでもなく、けっきょく肝腎なときにはすぐヒステリックなんですよね。職場に何年いても、事実としては、上から指示を受けないと何もやり出さない指示待ち人間のままですし。そりゃ、自分のことなんで、いいかげん自分で見ていてわかりますよ。自分がどういふ奴なのかについて、もう証拠が積み重なっていますもん」

彼女はそうように「分かっている」のだ。けれどもそもそも「思い込み」は、その「分かる」という機構の中に発生しない。

彼女は、認識上は自分のことを「分かり」ながら、混乱して、差別上は英雄で、勇気と根性を体現した、貴族の美女なのだ。才能に満ちながら、謙虚で、豊かな感性を持ち、人々を牽引していく力がある。

認識を破碎して、「それがもともとのわたし」なのだ。彼女はそのような差別に遇されるまではすべてのことを「不当」と感じて憤怒しつづける。

人はそうして、憤怒の中を生き、なるべくむさぼれるものをむさぼれるだけむさぼり、そこからは何についても「もう何もわかりません」と答えるだけになっていく。

そう成り果てては、その先はもう、常識の中なるべく安定して暮ら

していくというのみにということになってしまう。

わたしがまるでアテにしない、ニーチェの言うところの「末人」というやつになるということだが、そのことが何も悪いということではないにせよ、ただ事実として、多くの場合でわれわれはそうなっていくというのであって、そのことはきつと、われわれにとって不本意なことなのだ。

われわれはこのように、認識の中にはなく差別の中に思い込まれた「わたし」を見出し、その思い込まれた「わたし」をバラスト（重り）にして精神をバランスしているのだ、これを取り除こうとすると、精神が転倒してクラッシュしてしまう。

本当に、もう立ち上がれなくなってしまうのだ。

本当には美女で、「しごでき」で、気品があり、努力家というのが「わたし」で、「いつの日かそのような高い差別を受けることだけがわたしにとって妥当」という思いで生きてきているのに、きゅうに「そうではない」と言われてそれを取り外されてしまうと、もうどのようにして生きていけばいいのかわからなくなる。

「それじゃあもう、わたしに生きる価値はないじゃないですか」

そういうことではまるでないのだが、当人にとってはそう思えるし、そのようにしか思えない。

不美人で、仕事の能力が高くなく、下品で、怠惰という存在を、これまでも当人が低く差別してきたのだから。

これまで彼女自身が、そうした人たちのことを、

「生きる価値がない笑」

と内心で差別してきたので、そのことがすべていつせいに自分に降りかかってくるのだ。

「そうじゃない自分」「彼らとは違う自分」だけを「わたし」にして生きてきたのに、これではもう、本当に一切の身動きがとれなくなる。

本当に、人はそうした差別の中を生きており、差別の中に思い込まれた「わたし」を見出し、認識の中で自分のことを「分かっている」ということはまったく別に、思い込まれたわたしこそを精神のラスト（重り）にして安定を得ているのだ。

われわれは思いがけず、このバラストを取っ払って、ありのままの「わたし」で物事に取り組むということなどできない。

それでわれわれは、「わたし」が問われることのすべてについては、「無理ですね」と回答するのだ。

起き上がり小法師は、まるで不屈の精神を見せるようだが、その底部の重りを除去されることについては、起き上がり小法師だって「無理です」と答える。

「だって、そのときわたしは、もう起き上がり小法師ではないですもん」

## 作品および仕事という、絶望を得にいくかのような行為

われわれは仕事のことをワークと言うし、作品のことも何かしらの「ワーク」あるいは「アートワーク」と言う。よってこれらのことは大きく見てすべて「ワーク」に総括しうる。本質的な「仕事」とその成果はわれわれにとって普遍的にワークと言いうるだろう。たとえば農家が何十年も品種改良を重ねてついに見事なぶどうを創り出すというようなことはそ

の農家のワークとみなしてよい。また誰でも知るように、壮大という印象さえわれわれに与えてくる手織りのペルシャ絨毯は、職人と伝統によって継承された地域性（あるいは民族性）のワークと言っているだろう。

一方で、齒のあいだに深く挟まったスルメイカの干物の欠片を、なんとかしてつまようじで掻きだそうとする。そのあまりもの手ごわさを認めながら、くじけず、尖端の角度を変えて執拗にアプローチする。そのような作業するとき、われわれはその作業がいかに困難で時間と労力を要したにせよ、それを自分の取り組みだ「ワーク」とは認めない。また、コンビニエンスストアでアルバイトをしている青年も、給金のために自分が働いているということは認めても、レジ前に立っている自分について「これが僕のワークなんだ」とはあまり認めないものだ。

つまり簡単に言って、われわれは単なる作業のことを自分のワークとは認めないし、したたかな労働であれそれが自分にとって本意のものでなければそれを自分のワークとは認めない。たとえば兵士が重たい装備を背負って山中を三十キロも歩く訓練をするとき、彼らの体力消費と装備の運搬それじたいが彼らのワークになるわけではないが、彼らがそれによって鍛錬された強力な兵士となり、そうしたみずからを戦力として国家に備えるのだということになれば、その戦力増強ということが彼らのワークだと言いうることになるだろう。

われわれは給金を享けることそれじたいをワークとすることはできないのだ。われわれはふだんそれを「ワークの対価だ」と言い張ろうとしているが、正直なところ、ワークがゼロでも給金だけ支給されるということであれば、そのことに何の不満もないというのがわれわれなのだから、われわれは本当にはそれをワークの対価だなどとは思っていない。われわれは仕事量が半分になって給金が倍にならないものかとずっと願っている。つまりこれは共産主義者の言うように資産を持たないわれわれが生きるためにする労働力の切り売りであって、切り売りということ



であれば、その売却相場がなるべく買い叩かれず高騰することを願うばかりということなのだ。このことはあまりにもわれわれの「ワーク」とは言えない。むろん、もっと大きな視点にたち、そうして生きていくということ、そうして生をまっとうするということが自分のワークなのだということであれば、わたしはそのことをまったく否定しないどころか、わたしはそのときのあなたにかけがえないひとつのリスペクトを向けるだろう。とはいえ、何もあわててそのように壮大な視点にばかり立つ必要もないだろうから、ここではもっと肌身に迫ってわれわれにとっての「ワーク」ということを考えたい。

われわれは率直なところ、ただ生きていくというだけではなく、みずからのワークを為すことが、みずからの生であってほしいと願っているのではないだろうか。仕事であれ芸術であれ、愛であれ戦いであれ。少なくとも、そのことのほうをみずからの生きる「本編」だとしていたいのだと、われわれは悲願に思っているだろう。それで、うかうかしているうちに自分はこんな年齢になってしまい、「このままでは何もしないまま“老人になってしまう”」「人生が終わってしまふ」と、われわれは焦らされながら生きているのではないだろうか。

それでいながら、じっさいのワーク——作品——に向かうことは、ただちにわれわれを、習慣的な必殺の用語、

「無理です」

に立ち返らせる。

たとえば目の前に数枚の紙と一本のボールペンがあれば、われわれはそこに短編小説を書くことが可能だ。紙の枚数によっては自作の短編小説「集」さえ記すことが可能なのだ。けれどもそのワークに向けてわれわれが立ち上がらせるのは、ボールペンを手に取ることよりもずっと速い内心のセリフ、

「無理です」

だ。では小説をあきらめてそこに薔薇の絵やチューリップの絵を描いていつてもよいが、それだってやはり「無理です」が先立つ。もちろん何の問題もなくそこに薔薇の模写やチューリップの模写を描くことはできるが、何が「無理」なのかといって、そこに^^自分のワークを為すvvとというのが無理だ。仮にその無理を押して薔薇やチューリップの絵を描いたとして、そこに残されるのは描いて“みた”という姑息なものばかりになってしまふ。誰だって一時的にそのようなことをみずからに試みることはできるけれども、それが一時的でしかないのであれば、それは未だ「わたしのワーク」ではないのだ。自分が手がけたからというだけのことで、それを自分の作品ですと言い張って展示することはできない。ただしもちろんこのことは、あなたの習作というプロセスを否定するものではまったくない。

きょうび、五千円でいどの電子キーボードがあれば、それだけで作曲は可能だし、作詞作曲したそれをみずからで唄ってミュージシャンとなることも可能だ。しかしそれだからこそそれは逆に不可能だ。われわれはその不可能ぶりに直面したとき、それを「無理」とみずからで貶している。

われわれにとって、^^月々数万円の費用を払い、片道一時間をかけて音楽のスクールに通うとは可能だが、手元に五千円のキーボードを仕入れて作詞作曲と演奏を営むことは不可能vvなのだ。無理を押して作詞作曲などをしたとしても、それはやはりやって“みた”という、陳腐化された「ネタ」のそれに留まるだけ。そんなことを蓄積させたとして、いずれは袋の底が破れ、流れ出た奔騰が当人を傷つけるだけだろう。自分が「偽物」の洪水で溺れるというようなことは、われわれにとって最も避けたいことだ。

つまりわれわれは、願って求めるものとは裏腹に、なぜか^^ワークでないものばかりが「出来る」vvなのだ。ワークのものは出来ない。

「作品」は出来ず、「作業」ばかりは出来てしまう。これはあまりにも皮肉なこと、これではみずから求めていることにいつまでたっても進みようがないではないか。ここにある不明の障壁の正体はいったい何なのだろうか。

芸術であれ仕事であれ、それらのワークは本質に至るほど作品性を帯びるのであるから、このことは次のように総括して言うことができる。

いわく、

^^作品の向かうことはみずから絶望を得にいくかのような行為であるVV。

われわれは何に絶望するのだろう。われわれは何を根拠に、その壁の前で「無理です」と宣言し、なぜそのときになってその壁の向こう側にあるものを貶すというほうへ態度を豹変させるのだろう。

作品に向かうということは、^^差別がはぎ取られるVVということなのだ。ワークに向かうことは差別をはぎ取ってしまう。仕事に向かうことは差別をはぎ取る。

差別がはぎ取られるということは、そこに成り立っていた代替の「わたし」が雲散霧消することなのだ。差別の中に見出されていた思い込みの「わたし」が打ち砕かれてしまう。そのことは、先の章で述べたとおり、われわれの精神のバランスを底で保っていたバラスト（重り）を取り去るということなのだから、われわれの精神は転倒してしまう。

何かが実演される舞台の上に立てば、そこに現れてくるものは、やはり英雄のわたしではないのだ。入念な欺瞞の演出でもほどこさない限り、そこに出て来るのは、勇氣と根性を体現したわたしでもなければ、貴族の美女たるわたしでもない。これまで潜在させていたセンスと才能を顕かにしたわたしというものがそこに出て来るわけでもないし、謙虚なまなざしを持った勇敢なわたしというものもそこには出て来ない。豊かな感性や、人々を牽引していく輝かしい声も、そこにはぜひあるべきとひし

ひし期待されながら、そうしたものはまったく出て来てはならず、率直なところそれとはまったく逆だと言いたくなるよりないほどのものが、そこには現れてくるのだ。人より努力は積んできたはずなのに、そこには「この人、すごい努力してきているよね」という美徳の輝きさえも現れては来ない。

困ったことに、それがどうやら、本当の「話としてのわたし」らしいのだ。何事かが実演される舞台において、衆目にもレコードにもあまりにぶざまな姿。

そのぶざまさは、何らの証明も必要としないほどの、「ありのまま」の姿だろう。いったいそこに何をほどこしたのか。否、何も装飾や欺瞞はほどこされていないのだから、それこそが「全力のわたし」なのだと言わねばならない。

むしろこれまでこそが、装飾と欺瞞をほどこしてきた日々だったのであって、ここに来てその装飾と欺瞞を取り去ったというだけだろう。

ここにある「ありのままの自分」は、ただそれだけの事実であって、そのことでこの宇宙で誰が困るというわけでもないけれど、ただ唯一、自分だけが困る。何が困るかといって、これまで抱えてきた「わたし」とはあまりにもつじつまが合わず、整合させようがないというのが困るのだ。

これまで、一流企業に勤め、一流の業績を出してきたから、それらの看板を胸ポケットにさりげなく添えることで、「ボクって一流ですよ」と言い張れるような気がしていた。そしてじつさい、社会的な多くの人は、自分のことをそのように扱ってくれたし、そのような差別を受けることによって、「わたし」はじゅうぶんに定義を得ていたかのように思っていたのだ。けれどもそのことは、たしかに「わたし」を定めるにはは論理上の問題点を含んでいた。たとえば当該の企業が、どこかの悪印象の企業に買収され、三流企業と化してしまったら、そのときは「わたし」も一緒に「三流ですよ」ということになるのか。そのようなことは直

観的に見ておかしい。ボクが買収されたわけではないのになぜボクが三流になるのか。

^^社会的なものに手をつけたとて、世界に直接触れたということにはならないVV。一流企業にいて一流の業績を出せば、一流の新聞社にインタビューを受け、そのインタビューに答えた談話が人々に熟読されるかもしれないが、それは彼がみずから作文して発行した冊子が人々に熟読されたということではない。彼が何十年も「無理」と言ってきたのはけつきよくその点に尽きるのだ。一流企業と一流の業績と一流の新聞に乗れば、一流の自分として談話を発表することができる。これがボクの話なんだよねとすることができ、またそのように受け取ってもらうこともできる。それに比べて、彼個人が何らの看板も添えずに冊子を発行したとして、そこに載せられている談話に人々がこころを傾け、読み入っては、さらに「あなたの話の続きが聞きたい」と求められるようになるかという、そんなことになるわけがないのだ。「無理です」。彼は何十年もそれを「無理」と言い続けている。

社会的な歯車が触れているのは、他の歯車であって、歯車じたいが世界に触れるということはない。歯車は他の歯車しか触れる対象をもっていない。もちろんそのことは、歯車の機能性を否定するものではないし、同じ歯車でも、「重要な歯車」と、「他にいくらでも替えが利く安い歯車」があるだろう。人はより重要な歯車となつて、幅を利かせたいのかもしれない。だがそれは歯車であつて、歯車一枚だけを野原に投げ出せば、そこにあるのはただの鉄塊でしかなく、それはウンともスンとも言わない物々しいだけの重鎮なのだ。

そしてこれらのことは、現在から八十年以上も前に、「自由からの逃走」という題でエーリッヒ・フロムによって言及されている。宗教改革以降、人々は何についても「わたし」という個人が対象に向き合うのだといい、以来プロテスタント方面に見受けられる過激さを持つようになったのだ

が、けつきよくのところわれわれはその「わたし」がやれないのだ。わたしが「わたし」をやれるという権利のことをフロムは「自由」と呼んでいるのだが、その「自由」というやつがキツすぎる。宗教改革で人々はカトリック教会の支配から解き放たれ、「自由」を得たことをよろこんだが、自由といって「自らに由る」ということは、他の何にも由れないということなのだ。それまで人々は、中世の露骨な封建制の中にいて、自分が何者であるかを決定する自由と権利を持ち合わせていなかった。カエルの子はカエルであつて、日本で言えば武家に生まれた子はサムライだった。父が江戸城に勤めていれば自分もやがて江戸城に勤める。自分が何者であるかは、そのように幕府や教会といった権威・権力によって勝手に決められ、勝手に授けられていた。あなたがたがキリスト教徒であつて、主によって救われるというのは、これまでカトリック教会によってお仕着せされていたのだが、これからはそうではなく、「あなた個人でそうなれ」と言うのだ。救われるわたしというのを「自分でやれ」と。

「無理です」。人々はその「わたし」をやるといふことのキツさから逃走し、けつきよく「わたし」が何者であるかを勝手に決めてくれる強力な組織に再吸収されることを選んだ。それでフロムの生きていた当時、彼らが吸収される先にあつたものが「ファシズム」だった。そこでは、一流の帝国で一流の勲章をもらえば「ボクって一流だよね?」と言い張れることができたということだろう。それをフロムは「自由からの逃走」と呼んだ。

それがいま一流の帝国から一流企業——あるいはFIREした「勝ち組」——にすり替わったところで、フロムが言うところの「自由からの逃走」は過去にはならず的中し続けている。

帝国主義・ファシズムの中で、いかつい軍服を着て成り上がったところで、それは大きめの歯車になりお世話ということではなく、それをもって世界に直接触れているということにはならない。一片の土くれ

さえ、彼の言うことは聞いてくれず、ぶどうの一房は、彼の思いあがつた権威を鼻で笑うのみ、彼のことなど一顧だにしないだろう。^^そのことに文句があるなら己で世界に触れてみろV。そのへんにころがつている石や生えている草までが言うことを聞き、風雨や嵐までが彼の言うことに従うのなら、そこには彼の「話」がある。足許がヒノキの板であれ、あるいは野原であれ、そこは彼の舞台となり、すべての石ころにも草にも彼の何事かの実演と実作は現わされるだろう。そうして世界に直接触れて為されたものだけが真にワークと呼びうる。そのとき、仕事にも作品性があり、作品にも仕事の成果がともなうから、もはやそれらはすべて彼の作品と言ってよく、すべては彼の「話」と言ってよいのだ。

あなたは、仮に自分のことを、いかつい軍服を着た三十歳のファシスト党员なのだと考えればよい。そのときのあなたはともプラウディだろう。あなたは差別上、まるで英雄のようであって、勇気と根性を体現し、高貴さと貫録を醸し出しているように見える。優れた人種に生まれつき、それでいて振る舞いと身だしなみは品行方正で、感性は荘厳、そして人々を牽引していく力がある。本当かどうかはともあやしいにしても、差別上、あまりにもそのように思い込まれている。

そんなあなたに、きゅうに「作品」といって、「やってみろ」

と言いつけたらどうなるか。そこにどんなものが実演され、どんな実作が現れるというのか。

そこに露出する、身も蓋もないぶざまさに、あなたは誇りと権威を傷つけられ、耐えがたい侮辱を覚えるに違いない。精神はバランスを失って転倒する。

そこであなたは機転を利かせ、きゅうに軍服を脱いで「陳腐化」をするかもしれない。何もかもを「ネタ」に走らせれば、先ほどの転倒もはや「無かったこと」にできるだろう。であれば、誇り高いあなたのファシ

ズムも、あなたがその体现者であるということも、あなたは侮辱されなくて済むのだ。

われわれはそんなことをしているのだ。きゅうに本当に作品をやれとか、本当に仕事をやれということは、われわれから差別をはぎ取ってしまう。差別をはぎ取られると、そこに思い込まれていた「差別上のわたし」もはぎ取られてしまう。作品・仕事に向かうことは、思い込みではない「話」のわたしを露出してしまう。その「話」のわたしはあまりにお粗末でぶざまなものだから、われわれはそれについて、

「いや、何かがおかしい。そんなはずはない」

と笑い、このことの謎を謎のままにしておこうとする。

謎はもう解かれたのだ。

作品・作品性におよんで物事に取り掛かると、そこには「絶望的なわたし」が現れてくるというだけであって、その絶望的なわたしが、これまでの差別的なわたし・思い込まれた重大なわたしと折り合わないというだけでしかない。

差別や思い込みに、根拠は必要ない。ただそう「思った」という、自我の欲だけですべての思い込みが無制限に成り立つ。それに比べて、「話」のわたしが成り立つにはどうすればよいものか。「話」といっても、どうせわたしはきょうのことを忘れ、ただしきょうの怨みだけは忘れずに寝て、また翌朝になれば社会的なことがすべての時間を持っていくので、「わたし」はその中に溶け込んでいくという、ただそれだけのことではないのか。その中で「話」のわたしなど、いったい何をどうしていけば成り立つものか、まったく見当もつかず途方に暮れるばかりだ。

きのう「無理です」と結論づけた作品と本当の仕事は、今朝もやはり「無理です」と確かめられ、やはり人はきょうも社会的なものに自分を与えてもらおうとして逃走していく。世界に直接触れることはますます不可能だ。ここから先はしだいに、「話」を聞きつけること、あるいは「話」

の人を見かけたり聞き及んだりすることじたい、自分に対する侮辱だと感じて憎むようになるのだ。耐えられない。そのとき人は、もう差別上の「わたし」がはぎ取られることがないよう、「話」の自分を自分の見渡す平原から追放しようとするのだ。

## 魂魄と稽古

「年喰ったオッサン」は、生まれてこのかた一度も「仕事」をしたことがない」

あなたがいわゆる社会人であれ、あるいは学生であれ、身の回りを探すなら、見つけるというほどの発見でもなしに、身近に「年喰ったオッサン」を見つめることができるだろう。年喰ったオッサンの脳内は、仕事のことばかりで、いわゆる仕事人間なのかなとあなたは思うが、そのこともじっくり見つめるとしだいに不確かなものが感じられてくる。あなたの見つけた年喰ったオッサンが、頭の中で仕事のことばかり考えていて、じっさいに業務においてはそれなりに頼りになるところもあり、あなたは彼のことを最もあきらめた意味において「大人」と認めているのだが、一方で彼が本当に「ワーク」を為しているのかと訊かれると、そのことについては「どうなんでしょうね」と、答えるのにも言い淀みが起こる。

一般にはまるで言われないことだが、彼らはじつのところ、本当には仕事をしているわけではないのだ。むしろ、表面上のこととはまったく正反対に、彼らは生まれてこのかた一度として「仕事」はしたことがないのだと捉えねばならない。なぜなら彼らは、給金はもとより、あたかも「ちゃんとしている人」「ちゃんとした大人」というふうに差別を受けたいだけであって、仕事そのものには一度も値打ちを見出し出したことがないからだ。三十年間「自撮り」を続けてきた人のことを、あなたは写真家だとは言わないし、そこに写真家としてのワークが残されてきたのだとはあなたは認めないだろう。それと同様に、彼はただ二十年も三十年も、「ボクってちゃんとしていますよね」と言い張り、そのように扱ってもらっただけに業務をこなしつつづけてきたのであって、彼のこれまでにやったことの中に本質的な「仕事」や「ワーク」はない。ただ、それでもじっさいにこなされていく業務や、それによって流通する社会的な富というのがあるのだ、彼はそれによって見逃されているというか、見とがめられていないだけだ。さらに言ってしまうと、社会的な富が正常に流通しているのなら、そこで何もわざわざ彼の真相なんて「見たくない」というのがわれわれのいつわらざる心情だ。彼はまさに、ミシェル・フーコーが言ったところの「規律訓練」の産物なのかもしれないけれども、だからといって正直なところ、われわれには彼のことにこころを傾ける余裕もなければ、そのようにする義理も持ち合わせていない。

ただわれわれは、内部に何かが垂れこめているらしい彼のことについて、じつは一度たりとも「仕事」はしていないらしいことだけは知っておかなくてはならない。彼は毎日出勤し、毎日業務と連れ添って過ごし、場合によっては誰にも言われないままみずからで休日にも出勤していたりすることもあるが、それにしても彼は「仕事」をしているわけではないし、彼のワークを為そうとしているのでもない。彼は「自分」を思い込もうとしているだけだ。彼には彼の「話」がなく、「話」がない

なら彼に「わたし」はありえないのであって、彼はその「わたし」の代替物を得ようとして、出勤に安らぎと有利さを覚えているだけにすぎない。彼は業務上に、それなりの地位も実績も得ているのだ。彼はそれに基づいて、自分のことを「仕事をやってきている人」と思い込もうとしている。そこまですると、彼のことはもう余人が差出口をするべきような領域にはない。彼は二十年も三十年もそのようにしてきたのだから、彼のやっていることはもうこちらからは忖度のしようもないとみなすべきだ。じつさいわたしは、彼のそのようなことはもはや単なる「プライヴェート」の領域のことだと思っている。

ともあれ、そのような「年喰ったオッサン」を、われわれが周囲に容易に見つけることができるというのは事実だ。そしてここであなたにとって必要な視点は、あなたにとって正直なところ、あなたはたぶんそのオッサンに^^「稽古をつけてほしい」とは思わないVVということなのだ。

そのことは端的に、あなたが直観的にそのオッサンについて「真の仕事をしてきてはいない」とみなしているということを表しているだろう。

あなたはそのオッサンを捉えるのに、「仕事人間」という粗雑な標語をあてはめて済ましているだけで、あなたは本当にはそのオッサンが自分のワークを為したわけではないと判断しており、よもやそのオッサンから自分のワークを為すということの秘訣や心構えを教わりたいとは露ほども思っていない。

わたしが齒に衣を着せず言うとなれば、わたしは彼について、

「彼には何の話もないだろうのに、彼から何の話を聞こうというのか？」

と短くまとめてしまいうだろう。とはいえ、この言いようはあまりにもむごたらしいもので、またかくいうわたしの側にどれだけ正当性があるのかわかったものではないから、あなたはわたしの言いようにまさにといって同意することにはためらいを覚えるかもしれない。わたしは、人はそのようであっていいと思うが、それにしてもきつとあなたがわたし

のひどい言いように理性的には反駁しづらいというのも事実なのだ。あなたはけっきょくのところ、彼について「いいえ、あの人こそ、己のワークを為してきた称えるべき人です」とは言い切れないからこそ、ここでひとまずは言い淀むしかないのであって、ひいてはあなたはここで定まってもいいない結論に急ぐべきではなく、ただ理性と感情に保留を抱えたままこの先を慎重に進めばよいだろう。ひとまずは、あなたはきつと、「年喰ったオッサン」がもしあなたの指南・稽古役を買って出たら、そのことには否定的な拒絶感を覚えるということだ。

そしてこのことは、職場や業務についてのみ言えることではなく、一般には芸術的とされている人や作品についてさえ言えることだ。「ちゃんとやっているボク」を求めて手がけられた作業と成果は本質において決してワークとは言い得ないのと同様に、「芸術的なわたし」を求めて手がけられた作業と実作は本質において決してアートワークとは言えない。芸術的なわたし、文化的なわたし、作品的なわたし、センスのあるわたし。「わかってしている人」のわたし。そんなものを言い張るために、制作のテーブルに毎日向かったとして、そこに作品と呼んでいいものは決して現れてこない。

「年喰ったオッサン」は、生まれてこのかた一度も「仕事」をしたことがない。そのことと並列して、次のように知っておく必要がある。

「それっぽいいクリエイター」は、生まれてこのかた一度も「作品」をしたことがない。

あなたは、一度も「仕事」をしたことがないオッサンを、誤って粗雑に「仕事人間」と捉えることがあり、そのことと同様に、一度も「作品」をしたことがないクリエイターを、誤って粗雑に「アーティスト」と捉えることがあるのだ。

このことは、両サイドとも、あなたの稽古の道をふさいでしまうので、そうではないのだとあなたは知っておかなくてはならない。

年喰ったオッサンは、「仕事」なんかしないただの社会人だし、それっぽくクリエイターは、「作品」なんかしないただの社会人だ。

そしてあなたがただの社会人のまま進んでしまうなら、稽古は得られず、あなたは彼らと同じものになっていくのだ。

## 【現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けて

いく】

現実的には、人はそうそう変わらない。

仮に、典型的な「キモオタ」と呼ばれる誰かを、強制的に「男前教室」みたいなものに放り込んだとして、彼がそれによって男前の誰かに生まれ変わるといふようなことは、基本的にないものだ。厳しい男前教室でヒイヒイ言わされ、カリキュラムをこなしてきたところで、そこから輩出されてくるのはやはり元どおりの、根本的に「キモオタ」の彼だ。彼に「男前」をやれと言いつけても、彼は以前と同じく「無理です」と言う。

あなたは、自分の親を長いあいだ見てきていると思うが、父親にせよ母親にせよ、彼らが長足の進歩を得て変わっていったなどということを目撃した覚えはないのではなからうか。あなたが子供のころから、あの母はあの母であり、あの父はあの父だった。あなたの両親はすばらしい両親だったかもしれないが、何にせよあなたが彼らを見てきた数十年において、彼らがまったく別のものへ飛躍していったというようなことは基本的になかったはずだ。頼りない父親が頼もしくなることは基本的にないし、振る舞いが下卑ていた母親が上品で節度ある母親になるということも基本的でない。ただしもちろん、例外は存在するので、あなたの

両親がその例外にあたる方だったら、わたしはあなたとあなたの両親に対する非礼をただおわび申し上げる。話の綾としてやむなきこととご寛恕を賜りたい。ただ、それはあくまでそれは数的割合としてごく少数派の、やはり例外の方の話であるには違いない。

加齢していくにつれ、肉体は変化していくから、そのぶんの気質的な変化というのは起こってくる。先のキモオタの例でも、とにかく筋力トレーニングや心肺トレーニングを強制的に積ませるなら、肉体の変化によって気質は変わっていくだろう。むしろ肉体が変化するとふつう元の気質は保てなくなると言ったほうがよいぐらいだ。よって、かつては口うるさかった母親が、老齢になるにつれそこまで口うるさくはなくなるということはあるし、かつては居丈高だった父親が、老齢になって穏やかさの成分を持ち始めるということもある。

われわれは、いかにもというふうの「お疲れサラリーマン」を現実のものとしてイメージすることができが、彼はサラリーマンとしていかにも疲れたという風情を醸しているのではなく、むしろ肉体が疲れたことによつていかにもサラリーマンという風情を醸しているのだ。

何にしても、それはあくまで肉体の変化に起因する気質の変化であつて、当人が何かを修得していったということではない。

だから、たとえば狭量な男が極端な筋力トレーニングを積んだとして、それによって彼は豪快な男になるかというところ、そうではなく、それは表面的に豪快ふうの気質がほとぼしるようになるというだけだ。彼の精神が根本から変わるといふわけではない。彼はただ、「自分の狭量ぶりをオラついて豪快に主張してくるようになる」だけだ。声はデカくなっているだろうし、筋トレにストレス発散を見つけてはいるだろうが、狭量という性質は変わっておらず、たいていの場合むしろそれは内部では加速している。

われわれが、何かを学び、何かを修め、それによって変化を得るとい

うことは、現実的にはなかなかむつかしいことだ。先のキモオタの例のように、現実的にはそれは「ない」のだとまずみなしておく必要がある。あくまでその上へのみ、われわれが実効的な稽古のありようを理論立てて見出しができるからだ。

あなた自身か、あるいはあなたがよく知る誰かを、拉致して密室に監禁したとする。その密室には書籍だけが置かれていて、あなたは書籍に記されている学門について試験をクリアしないと、その密室から解放してもらえないのだ。あなたはその監禁を解かれるのに、全力で勉強をして三ヶ月を要した。つまりあなたはその三か月間、哲学書のようなものに首っ引きになった。

最後には、試験官に向けての口頭試問に正しく答えきり、ついに合格となって解放されたのだが、それで解放されたあなたは、修めた学門によつて変化を得ているだろうか。あなたはようやく、ひさしぶりのいつもの町に戻り、ひさしぶりの我が家に帰ることができたのだが……

あなた自身のが想像しづらければ、あなたの知人の場合でイメージしてもよい。あなたの知人が三か月間、ストア学派を読まされたとして、三か月後のその人は、理性に善なる神を見出し出しているだろうか。あるいは三か月間、エピクロス学派を読まされたとして、その人はおびやかされない魂に快楽を見出し出しているだろうか。三か月間、自省録を読まされたとして、その人は澄み切ってみずからの品行をこそ問いつける者になっているだろうか。三か月間、留魂録を読まされたとして、その人は忠義と実行にためらいを持たない陽明学の人になっているだろうか。

あなたの想像するところ、そうではない、きっとあなたの知人は、あなたのよく知るその人のままで、ただ「ひょんなことから、奇妙なことに詳しくなった」だけではないだろうか。

われわれが、たとえ前向きに、みずから欲して学門を修めたとしても、

われわれはそこにある学門をただ「理解する」というだけ、ただそこに書かれていることが「分かる」というだけで、それによつて自分を変えられるというわけではないのだ。

理解して、納得して、採用したとしても、何かが実現されるというわけではまったくない。

Understand は Realize ではないのだから。

たとえばあなたの知人がもともと、

「オレ、人の視線とか、人にどう思われているとか、スゲー気にしちゃうんだよね。気にしすぎだとはわかっているんだけどさ」

と、悩み事のように言っていたとする。

それで彼は、自省録を読んで、目覚ましい発見をしたのだと、次のようにあなたに話してくれた。

「オレ、この本を読んでさ、すげえ、マジそのとおりだって思ったんだよ。オレ、もっと早くこのことを知ってたかった。他人がオレのことをどう思っているか、それはオレが決められることじゃないから、オレが考えてもしようがないんだよ。それを考えるのはオレのテーマじゃなくて、相手のテーマなんだよ。オレはただ、オレ自身の振る舞いに最善を尽くすことしかできない。そっちがオレのテーマで、オレがどう思われるかっていうのは向こうのテーマなんだよね。これって、言われてみたらまったくそのとおりで、当たり前のことなんだけど、こんなの自分じゃ気づけなかったわ。すげえ勉強になった」

こうして聞くと、たしかにそのとおり、彼にとってはすごく「勉強になった」のだと思われるが、それでいてその夜に、あなたが彼から受け取るチャットメッセージは次のとおりなのだ。

「なんか今日は、めちゃ一方的に話してばかりになってごめん。妙にテンションあがっちゃって笑」

彼は引き続き、「人からどう思われているかが気になる」のだ。



なぜこのような、誰でもわかるほどの短絡的な矛盾が起こるのかというと、この場合、自省録の著者のことばおよび、自省録に書かれている「話」が、彼の体の真ん中には届いていないからだ。

彼の自我にしか届いていない。

彼は本を読んで、

「なるほど、これ、すげえ分かるわ」

と想い、

「オレもぜひ、こういうふうになるわ」

と想った。

彼は、自省録の著者（アウレリウス）が言っていること、その内容は「分かる」のだが、だからといって、その話を主題ごと「体験」できたわけではない。

主題を体験できたわけではないので、彼において、その主題は体现されない。

この仕組みによって、われわれは現実的には、「人は変わらず、旧来の自分を続けていく」ということになる。

世の中には、いわゆる「本の虫」といって、大量の読書をこなしている人がいるが、あなたはそうした人の実物と面談したら、その実物の思いがけなさに、大きな肩透かしの感触を受けるかもしれない。

「本の虫」は、「ひょんなことから、奇妙なことに」大量に「詳しくなっている」というだけで、書籍に示されていた主題のことごとくを体现できている人というわけではまったくないのだ。

「教養として」という言い方は一般に理解されうるけれど、実物に触れたあなたは、その人に「教養」があるとは認めないかもしれない。何ら体现されることのない教養というのは、脳内に Wikipedia のカートリッジが挿さっているにすぎないのだから。

現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けていく。だから多く

の人は、そこから現実的に、自分を変えようと思ったら、

「自己洗脳をするしかない」

と発想するのだ。

自己洗脳をして、自分に必要なものになりきってしまえばいい。

営業マンにならなくてはならないなら、自分を営業マンに洗脳すればいい。そういう催眠暗示にかければいい。

自分が達観ふうのキャラになるしかもう精神のバランスを保てないなら、自分を達観ふうのキャラに洗脳すればいい。

知り合いと打ち解けて熱いメンツと「呑む」ということがやりたいなら、美容院とジムに行つて髪型と体型を変え、自分を「陽キャでーす」と洗脳すればいい。

そうして思い込んでしまえば、それそのものになるだろうということ。思い込みを持つのに根拠ないのだから、とにかく「いけるいける」と勢いづいてそう思い込むしかない。

そして、冷静になって考えると（冷静になって考えてしまったらオシマイだが）、そんなやりようがまさか正統な稽古であるはずはないのだ。それは稽古というよりはあきらかに無稽なのであって、無稽なればこそ、とにかくデタラメに思い込んでしまえ、力づくで自己洗脳してしまえという言いようがまかりとおるのだ。

そうしたやりようは、場合によってやむをえないこともあり、そのすべてが無為になるとは言わないけれども、さすがにそのやりようで真の何かに到達しうるとまでは思えない。

そうではないのだ。

現実的には、人は変わらず、旧来の「自分」を続けていく。

だからこそ、稽古というのは「非現実的」に取り組まねばならないのだ。

ここで人は、稽古についての受け取りを、おおきくふたつのパターン

に分岐させる。

ひとつには、非現実的な稽古こそが、稽古たりうるということがじつさにあるという向きで、稽古という話を「統合」していこうと受け取る。

この受け取り方は、稽古の本義に沿っているが、一方で、このことが本当には受容できない者は、ただのインチキに耽ったり、ただのうさんくさいスピリチュアリズムに陥ったりすることがある。

もうひとつには、非現実的な稽古ということについて、

「いや笑。それこそ非現実的でしょ」

と言ひ、稽古という話を現実的力感で「解体」していこうとすることがある。

これはそもそも、受け取り方というよりは内心で「受け取らない」方のスタイルなので、当人がしだいにその稽古じたいに向かわなくなっていく。

稽古に向かわないなら当人は「することがない」ので、この者はしだいに「他人がする稽古にケチをつける」ということにのみ向かっていくようになる。

他人のする稽古にケチをつけながら、当人は、万事「力量」のトレーニングだけを内心で信奉しているのであって、これは単純に言って「現実的」だ。

そもそも、現実的な力量トレーニングを信奉する人が多いのが当たり前なのであって、それが非現実的な稽古とは相克する以上、まず稽古に「入れる」という人がとても少ないということになる。

数的割合としては、ここでほとんどの人（たぶん九割以上）が、稽古を解体して「力量トレーニング」を信奉しようとする向きを採り、残る一割未満の人も、やはり多くが、スピリチュアルな気分でこそ何かが出来るのだというただの空想に陥ってしまう。

本質的に、稽古に「入る」ということじたいがむつかしいのだ。そのこ

とがじつは最高難度で最大の壁と言ってもよいのかもしれない。じつさいのところ、稽古に「入る」ことが出来てしまえば、そこから先はもう当人が夢中になってやり始めるので、放っておいても勝手に稽古が進んでいく。もちろんその先には、まだまだ無数の関門が立ちはだかつていて、それぞれの段階ではまたあらたに高次の稽古をつけてもらわなくてはならないのだが、それにしても何よりむつかしいのは万事の「入口」になっている稽古の門だ。稽古といって、何をやっているのかわからないのだ。現実的に理解するということがまったく通用しないのだからわからない。現実的には本当にまったくわからない。観測領域は相克され、わたしは「観測不能領域に稽古を積む」と言っているのだから、そこに観測のアテナを向けようとするのはまったくのあべこべになってしまう。

「現実的」には、人は本質を変容できないのだから、稽古は「非現実的」に為されるしかない。そしてこのことについて必要な素養は、ここに示されているとおり現実的に有効なロゴスであって、ここで現実性に支配されるパトスは障害にしかない。つまり、現実的に有効なロゴスの能を持たない者、あるいはそれをおろそかにして軽んじている者は、逆にそれによってこそ安易に空想に陥り、パトスのまま空想に耽り続ける者になってしまう。

わたしはこう申し上げているのだ、

「現実的にかんがえて、非現実的にしか稽古は成り立たないだろ」

このことにロゴスが応える者は稽古に入っていける可能性があるが、ここで内面にパトスが昂じる者や、ロゴスのつもりでけっきょく現実と力量のことしか信奉していない者は、稽古に入ることができない。

アウレリウスが稽古をつけても、彼はその稽古には入れなかったようにだ。

## 【稽古は自我未然につく】

四歳ぐらいのとき、われわれには自我が具わり、それ以降は、ひたすら「分かる」ばかりになっていく。

すべては自我にキャッチされ、自我はそれを理解し、分解し、解体して、すべてが「分かった」と言い張られて終わる。

玄関先ですべてが解体されるので、リビングにはもう何の命も届かなくなるのだ。

その「命のなさ」を、あろうことかわれわれは「大人」と言っている。

そうではない、命のなさは、ただの死に体であって、ただの老け込み、ただの骸（むくろ）であって、ただ老いさらばえただけのことでしかないのだ。

自我は、「分かる」のであって、その「分かる」の以降には、もう稽古の命はない。

だから稽古というのは、自我未然につく。

物心がつく未然のところにつく。

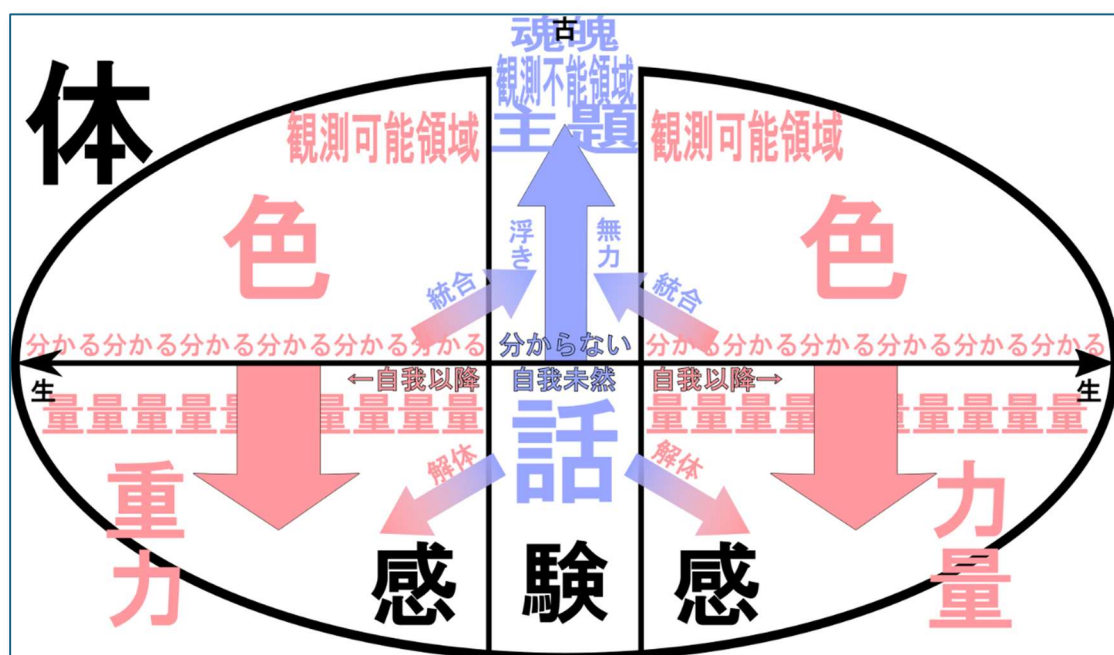
物心がつく未然、子供はまだ現実を認識できていなかった。

まだ現実が分かっていなかった。

だから、「非現実的」な稽古が接続する先は、われわれの自我以降の領域ではなく、自我未然の領域なのだ。

その領域を担っている器官が、体の真ん中、横隔膜のいちばん奥であり、正中線の通っているところだと本稿は述べている。

図



ここに示した図は、われながら一目瞭然性が低く、これを読み取らせようとするのは製作者側としてたいへん気が引ける。けれどもやむをえない、もともと平面図に転写できるたぐいの構造ではないのだ。かろうじて説明つきなら、なんとか参照価値のある図になりうるだろう。

まずわかりやすくするためには、いっそ中央の、肝腎などころの青色のエリアを、真っ黒に塗りつぶしてしまっただほうがよいのかもしれない。中央の青色エリアを塗りつぶせば、残るのはもう力と量だけ、あとはそれを感じて「分かる」ということのみ。横隔膜なんかどこにもない。われわれの自我が生きている一般の日常はじつにそんなものだ。お金持ちのもっている力、富の量。会社まで行くのに消費される力と、その量。もうちょっと寝ていたいという誘引力と、本当は欲しいのに与えられない睡眠量。美女の肢体が持っている魅力と、そのバスト・ウエスト・ヒップのサイズ比率（プロポーション）。われわれはこれについて、とてもパワフルに「分かるわあ」と言い合える。ただしやはり、そこには何の話もないのだ。金持ちがナイスバディの女を連れて遊びに行くのに、自分は朝から会社に行かねばならずじゅうぶんな睡眠さえ許されないというのは、強い感想をもたらすし、その強い感想は「分かる」けれども、だからといってそれじたいにはやはり何の話もない。

①稽古は自我未然領域に得られる現象であって、自我以降はただの「生（なま）」の世界だ

横軸はいちおう時間軸だと捉えてもらいたい。左右に偏向はなく、ただ中央から左右とも時が流れていくように矢印が伸びているだけだ。発

達の機序として、横軸の真ん中は「横隔膜のいちばん奥」だとも思ってもらいたい。図中にはもう書き込む余地がなくなってしまった。

横軸、自我発生以降は、ひたすら「分かる」と「量」に満たされていく。すべての話は解体されていくのであって、この領域に稽古などありえない。この領域は、稽古どころかすべてが「生（なま）」だ。分かり、量り、重力が掛かり、時が流れていく。つぎつぎに状況が生じ、状況には感想が湧いてやまない。

自我で稽古をこねまわすことの無意味さがよくわかる。もちろん、稽古はよくかんがえねばならず、それは感覚のものではなく理性のものである自我（意識）でそれを考えるのではない。体の真ん中で、顔面と頭部にある自我（意識）でそれを考えるのではない。体の真ん中でするそれは「稽（かんが）える」という字があてられる。

乳幼児がやがて母国語を話したとして、母親がその乳幼児に、「あなたにはなぜ、ことばが『分かった』の？」

と訊いたとしたら、その問いかけはいかにも無意味だろう。

われわれは、たとえ大江健三郎の難解な小説でも、そこからあらすじを抽出して理解することはできるし、何であればわれわれがそれをしてなくても、もうそうしたことは今後AIが勝手にやってくれる見込みだ。だがまさかAIが大江の小説を「体験」しているはずはない。「分かる」ということは「体験する」ということではない。AIがするのは分析であって体験ではない。

そしてわれわれも、四歳以降にするのは分析であって体験ではない。図に照らし合わせて、あなたは小説のひとつでも、それを「分かる」ということと、それを「体験する」というのは、体として担っている箇所が違うのだということを確かめられるはずだ。あなたが膨大な感想や強い感想を持ったとしても、それはやはり「体験する」ということではない。「感」は話の領域には所属していない。

体験は、体の真ん中でしか得られないのだ。当たり前だ、頭をひねって体験するという奴がどこにいるというのだ。

## ②時間を逆行し、重力と逆向きの作用が掛かる

横軸になっている矢印は、中央からの時間の経過を意味していて、左右とも絶対値であってマイナスの方向は示していない。中央が単純に「始まり」と捉えてもらってよいだろう。中央が原点 Origin で、横隔膜の一番奥、そして横軸が縦線と交差している点が「四歳時点」と捉えてよいが、縦線のほうは縦軸ではなく、この図は縦方向にはあまり明瞭な意味を与えられていない。単に、「体」という全体像を示さねばならなかったのと、あとは書き込むことが多すぎてタテに膨れたというだけだ。

稽古というのは古につながっていくということだから、見てのとおり稽古の方向は時の流れと逆方向になる。「統合」の矢印はすべて時の流れと逆向きだ。そしてじっさいのこととして、体の真ん中、横隔膜のいちばん奥、正中線に魂魄との連絡を得ると、なぜかは知らないが重力の向きとは逆の作用、「浮身」と呼ばれている現象が発生する。なぜなのかはわからない。量ったことはないが、まさか質量保存や万有引力の則が破れているわけでもなからうし、体重計で量れば物理的に軽くなっているということではないのだろう。たぶん。

へへしかし、われわれが得るその「体験」は、まるで重力がどこかに行つて、体が浮き始めたものかしら思えないV。

(※浮くといって、ヘリウム風船みたいに浮くわけではないです)

稽古というのは、時の流れを逆行させ、重力のはたらきと逆行するということなのだ。そういう「イメージ」とは思わないほうがいい。ここで、時間の逆流や力の反転は非現実的なのだが、先に述べたように、こ

こで現実的なことを欲しがる者は、そもそも稽古ということに色気を出さないほうがよい。現実的なことが欲しい者は素直に力量トレーニングに徹するべきだ。もちろん一方で、非現実的なほうに向かうということで、気分がスピリチュアルになってしまいう人も、けっきょく現実から離脱した自分という差別を欲しがっているだけなので、この人もやはり稽古には向かない。もっと現実的に非現実的な稽古が捉えられないといけない。

われわれの日常は、時が流れていって重力で落下するのだ。稽古は、時が戻ってゆき、浮身で話・型 (forms) が統合されて現れてくる。ただそれだけなのだ。落下してゆく人類のビデオを逆再生すれば、そこには人類が古(いにしえ)へと浮上していく像が映し出されるだろう。当たり前だ、ただそれだけのことだ。逆再生すればそうなるというのは現実的なことだ。そしてこのことを常識で追求しきれないというのも現実的なことだ。

## ③「話」のほうが速く、「観測」のほうが後だ

われわれは、たとえば誰かが殴り掛かって来、そこから後に「乱闘」という話が続いていくものと思っているが、本当は逆だ。図に現れているとおり、時間軸上で先に発生しているのは「話」のほうだ。発生した「話」が解体されて、観測可能な領域に流れてから、自我はそれを観測している。「観測」はそうしてずいぶんチンタラしているのだ。

誰かがじっさいに殴り掛かってきてから「乱闘」が発生するのではない。誰かがじっさいに殴りかかるという意志決定をしたときから乱闘という話が発生している。

そして、その「話」の発生が観測できないと言っている者は、乱闘に巻

き込まれてからしかそこを離脱できない。遅い。観測未然、誰かが「殴りかかってやる」と意思決定したときには、もうその場を離れているようにでないと乱闘を回避できない。

（厳密には、すてきな命のある「話」の中を過ごしているところ、〃わざわい〃がやってくる）と「話」にひずみが生じるので、そのひずみの時点でもう体は座標を移動させているというふうになります。それはいわゆる「気配」ではなく、もつとはつきりとした「事象の変化」です）

稽古というのは、図のとおり、その「観測」が得られる前、「話」の発生それだけに接続して、その「話」の発生時にはもう体はたらいにいて、というようにしようとする営為なのだ。出来事を認識（観測）していたらもう何にも間に合っていないので、「出来事そのものに入っていないくはならない」「出来事を、その発生時にもう書き換えてしまっていないくはならない」ということになる。このことは、稽古ということについて最も非現実的だと思われる要素だ。

けれどもわたしから申し上げるなら、このことに否定的に首をかしげながら、それでも稽古をしたがるというのでは、その取り組みようのところが非現実的で不毛だ。断言してよいが、こと「稽古」ということにおいては、観測が発生してから何かをしようとする、認識して「分かっている」から動き始めようとする、未来永劫の0点をもたらず地獄のような発想なのだ。そういう方は、何も無理はせず、一般にある反射神経のトレーニングに励まればよい。

観測を得てから動く人は、雨が降ってきてからみずからの天気予報を発表しようとしている人というぐらい、時間軸も主題もズレてしまっている。

わたしはあなたが声を出す前からあなたの話を聞いているのだ。当たり前だ。白紙に話を書きつけるのが小説家なのだから、わたしの体験する「話」は常に観測より先行にしているに決まっている。

図を見てもらいたい。わたしはここに「書き話す」ということをしているが、わたしは何かを分かっているから書き話しているのではないし、何かを観測してから書き話しているのではない。何かを観測する未然、分る未然、四歳未然の体の真ん中で、「話」を直接体験し、体験してからそれを何事かの意味のあるもの（分かりうるもの）として筆記しているのだ。わたしは主題に出会って書き話し、書き話すたびにまた主題に会い直している。主題を認識しても意味はなく、主題を体験しないと意味がない（図のとおり）。主題を体験しないと「話」にはならない。主題を「認識」すると、むしろ話には解体の作用がはたらいてしまう。

となると、単純に言って、本当に図中の真ん中の、青い部分ばかり直接取り扱えるようになる、というのが稽古なのだ。それは「分からない」のだし観測もできないのだから、ただ直接取り扱えるようになるしかない。体の真ん中で。何かを想うというチンタラしたことではなく、主題に出会うということが、同時に体の真ん中から「はたらいている」ということでないと間に合わない。それに間に合う脳と体を当たり前にするというのが稽古の目的だ。

#### ④脱力は違う、わたしは無力に立つ

最近誰でも「脱力」を言う。脱力は、やりたければそのようにすればいいだろうけれど、脱力というのはしよせん力の信奉でしかない。力を入れればよいことがあるかと思いきや、あまりそうでもなかった、逆で力の量を減らすことにした。するとこんどこそいいことがある気がする。そういう、けっきょくは力の量の加減でしかない。

たしかに、むやみに力を入れるよりは、高度に脱力されているほうがはるかに良いだろう。しかし、わたしは力を信奉しないので、わたしは

「フルパワーだろうが脱力だろうがおれは無力だ」と宣言したい。これはわたし自身の宣言することで、これじたいが正しいというようなことではない。力は無力なのだ。わたし自身、別にムツキムキに力を入れてもかまわないし、ダツラダラに力を抜いてもかまわない。どちらも同じで、どちらも無力のままだ。

通貨でない偽物の貨幣を賽銭箱に入れたとして、それはいくら入れても無賽銭だろう。ゼロにしたって無賽銭だし、山積み放り込んだって無賽銭だ。わたしにとって無力宣言はそのような意味のもので、わたしは「脱力パワーに期待する」というややこしくなるような期待を企まないのだ。わたしはスポーツ選手ではないので、力みであろうが脱力であろうがパワーそれじたいに用事はない。

## ⑤ 具体的処理

実物を見るまでは、まったく信じてもらえないと思うが、じつさい体の角（かど）を処理していくと、人の体は「分からなく」なっていくのだ。肩・肘・胸・腰・股関節・膝、本当は足首などもそうだが、それぞれの稼働部位を体の真ん中のほう、正中線のほうへ「引き取って」いくと、人の体はなぜか「分からない」ようになり、分からないからこそ同一性のある「ひとつ」の体になるのだ。腕が体になり、脚が体になるということ。ふだんわれわれは、腕を腕として振り回し、脚を脚として蹴っ飛ばしているのだが、それが「分かっている」体であり、そのことは本当に「分からない」ものへと技術的に処理していくことができる（※稽古を要する術があるということであって、それを可能とするライフハックがあるということではありません）。そうして体が分からなくなっていくほど、体の真ん中には浮身が掛かっている。そしてなぜかそのとき、すべ

ての作用は統合の向きにはたらいで、そこには型や話が現れてくるのだ。ここまできてついに、靈魂だとか気魄だとか、魂が体現されて靈なるものになっているとか、そういう眉唾の言いようも、「かもしれない」と肯定したくなる余地が出てくるのだ。見た目にも「なんだコイツ」というのがありありと出てくるから。

⑥ 横隔膜のいちばん奥を通ったものは体験され、そうでないものは体験されていない

試みに、わたしが「うわっ」と言って、軽くおどろいてみよう。前もってそう言っているのだから、それは一般にはわざとらしい小芝居をするということだ。

小芝居、あるいは猿芝居。にもかかわらず、あなたはわたしによるその実演を、作りものとは言えず、かといってリアルなものとも言えないで、「あれっ？」と困惑しだすだろう。わたしはわざとらしく「うわっ」と言うのだが、なぜかあなたにはそのわざとらしいものが、「ちゃんとおどろいている」というふうに体験される。もちろんおどろく材料は何もないのだから、わたしは「わざと」そのようにしているにすぎない。けれどもあなたはなぜかそこに、一ミリグラムのわざとらしさも見つけることができない。

あなたは混乱する。

わたしがそこで、

「じゃあ、本当にはおどろいてない、ウソの『うわっ』をやってみましようか」

と言い、そのとおりのことをすると、それはまた言ったとおりのもの

になるので、あなたはますます混乱する。

このことの種明かしは簡単で、われわれは、横隔膜のいちばん奥を通ったときにそれを「体験」しているということなのだ。わたしはその「うわっ」を、いちいち横隔膜のいちばん奥に通している。横隔膜のいちばん奥に通しているの、わざとでもたしかに「うわっ」と体験されるのだ。だからそれは偽物ではないし、かといって「リアルのやつ」でもない。

このことを「フィクション」という。

横隔膜のいちばん奥は、魂魄の領域までつながっているの、魂魄の領域では「ウソのやつ」かつ「リアルのやつ」という相克が矛盾せず両立する。これがフィクションであって、言い換えると人が体の真ん中から体験できるものはすべてフィクションの事象ということなのだ。そのことを、わたしはしばしば作品性と呼んだりしてきた。本稿ではそのことを特に「話」と呼んでいる。

わたしは実演で、じつは「おどろいた」のではなく、

「わたしは『うわっ』とおどろいた」 作・九折空也

という「話」をやったのだ。うわっとおどろく演技をやったのではない。あなたはそれについて、その「話」を体験したということはまるでウソではなかったのだ、自我の「分かる」機能ではそれを捉えれず、混乱したということなのだ。

⑦わたしの無力は、あなたを無力化させ、ここに主題の支配が呼び込まれる

もし、いちばん究極的なことを教えろと言われたら、わたしはこのことを教えるだろう。

わたしはフルパワーだろうが脱力だろうが無力だ。みずからの「力」および、その量に何らの本質も認めるつもりがない。

わたしがそうまで無力を宣言するなら、そのときあなたは、わたしからは何らの力の作用も受けないということになる。わたしからあなたへフルパワーは向けられないし、脱力さえ向けられない。するとあなたは、わたしに向けて対応発生させる自我の力量を発生させられなくなる。あるいは力量が発生しても、わたしからあなたに向けている力は存在しないので、あなたは自分に発生した力量が空撃ちされ、その力でみずからが浮き上がってしまう。われわれは両手で跳び箱を下向きに押せば押すほど、反力として体を上へと浮かせるではないか。

ここで、無力のまま主題を呼び込むと、そのとき「主題」は無力なわたしと力の空撃ちで浮いたあなたに等しく「もろ」に突き刺さってくる。突き刺さってくるのか、あるいは突き抜けていくのか。それはわたしの力でもなければあなたの力でもない、直接の「主題」のはたらきが、その声が、体験が、一種えげつないものとしてさえあなたの体の真ん中を突き抜けていく。それは、誰の力かわからない、不明の何者かの力だ。その力だけが、あなたの体の真ん中に、直接の体験をもたらすことができる。そこでもたらされる体験は、あまりにも直接のもので、あまりにも精細なものだ。

他人の「体験」をまるで手縫いするように直接操作できるというのは



じつにふしぎな感覚だ。細やかに、精緻に。もちろんそれはわたしの權威で起こっていることではなく、この世界における「主題」の權威によって起こっていることだ。何度も言うようにわたしは無力を宣言する。

わたしがそれを宣言するのは、その主題の支配を呼び込みたいからだし、それ以上に、その主題の完璧無比の權威と、体験を直接操作するその細やかさと奥深さを思い知り、こんなものをどうあがいても個人の小細工やテクニクで上回れるわけではないかと、いいかげん馬鹿馬鹿しくなったからだ。

「無力」、そして「主題の呼び込み」、これが最も究極的なことだ。これ以上のことをわたしは知らないし、これ以上のことが必要とは思えない。

また、この「主題の呼び込み」におよんでわれわれは、「体験」と「観測」の時間がずれているということをいちばんはっきりと知ることができる。「体験」が先で「観測」はずっとあとだ。「話」が体験されるのが先で、「感じ」が観測されるのはまるで数秒後と言いたくなるほどずれている。

あわせて次のようにも言っておきたい。決して欠かせないこととして。「主題の呼び込み」があり、「仮に」、そこに「父と子」をあてがうとすれば、そのときわたしと主題は、どちらが父であり、どちらが子だろうか。

わたしはよもや、自分の側を「父です」だなどと言い張れる気はしない。仮にどちらかが父だというなら、あきらかに主題のほうが父だ。わたしは主題に対して子でしかない。自分のことを「主題の父です」と言い張るのは、あまりにもジョークかギャグすぎるだろう。

それで、仮にそのように、冷静に見れば主題のほうが父だったとして、わたしがその主題を表現するようになったときにはどうなるのだろうか。

表現するといって、それをどんなふうに表現していくのかについて、

それを子たるわたしが気ままに決めていけるのだろうか。

わたしにはそんな權威が与えられているのか。

わたしにはどうもそうとは思えない。

たとえば仮に、音楽の父がいたとして、音楽の父といえば慣習的にバツハが想起されるが、どう演奏するかをバツハではなくおれが決めていくというのか。バツハに向けて、「いや、おれが決めるから、あんたは引っ込んで」と。

馬鹿げている。わたしの側は子であって、どう表現するかなどはすべて父にゆだねられている。そのこともあって、わたしは自分を「無力」だと言うのだ。どう表現するかを自分で決められると言うなら、それはみずからで「父は要らない」と言い放っているということになるだろう。

わたしはいいかげん、いやというほど知っているのだ。わたしがもう何度も視てきたことだ。わたしの「表現」が、つまり何かしらのわたしの「話」が、目の前のあなたにありありと体験されるとき、本当にはその体験は、もはやわたしを媒介していないというほどなのだ。そのとき、父からあなたの横隔膜へ、直接の体験が飛んでいるだけなのだ。主題の呼び込み。

本当に、

「もうおれは一切カンケーないんじゃないのこれ？」

と思える。

そのとき、わたしは父の子だが、あなたも父の子になっている。そして、子から子に向けて何かが飛んでいるわけではなく、主題はすべて父から直接子へ飛んでいるのだ。

わたしの父が、わたしとあなたにショートケーキを買ってきてくれたとする。その場合、わたしも父のショートケーキを食うが、あなたも父のショートケーキを食うだろう。それでわたしは、あなたがその父のショートケーキを食っているのを見ているだけだ。わたし自身もそのケー

キを食いながら。

本当に、何なんだこれは、と思う。

しかもそのショートケーキはそもそも、父がわたしのために買ってきてくれたものというより、メインとしてあなたのために買ってきたものという感じがするのだ。むしろわたしの側が、あなたのご相伴にあずかり、ショートケーキにありついていてという感じがする。つまり「あなた向けのケーキ」をおれがついでに一緒に食わせてもらっているという味がする。

わたしが、目の前にあなたを置き、父に向けて、

「なんつーか、こいつにPSSを与えてやってください」

と頼む。すると、父はあなたにPSSを贈る。Amazonで発注したやつみたいなものがあなたのところに届く。

そして、何か「もののついで」のように、わたしのところにも同じPSSが届くのだ。やはり、Amazonで発注したやつ、みたいな感じで。

わたしの目の前にいるあなたは、目に見えるものが目の前のわたしじゃないので、PSSが届いたことについて、わたしに感謝する。

あなたはそれをどうもわたしからの贈り物と誤解しているみたいだ。たしかにそれは、わたしの采配であなたのところに届いたものではある。

けれども、率直なわたしの内面の声で言うと、

「いや、それ、父からあなたへ贈られたやつやし」

と思っている。

正直なところ、父のところからあなたの横隔膜の奥へ、それが「送られている」「届いている」のが「見える」のだ。父が撃った水鉄砲が、あなたの横隔膜の奥に届いている、その軌跡みたいなのが見える。それはわたしが撃っている水鉄砲ではない。

けれどもあなたは、さしあたりアテがないので、わたしに向けて、

「すごいですね」

と言う。

わたしはそのとき、「うーん」と言うしかなく、無然とするしかないのだ。

空軍が、敵陣地を爆撃し、これはたまらんとって敵が降伏・投降してくる場合、敵兵はこちらの陸軍に投降してくるだろう。

空を飛び去っていった空軍に投降はできないからだ。

そのとき、何をしたわけでもない陸軍は、投降者たちを迎え入れ、戦勝者ぶることに引け目を覚めるだろう。

「降参です、すごかったす」

「まあ、うん、われわれがというより、ウチの空軍がエグかっただけだけどね……われわれは何もしていないし。爆撃エグいなーというのは、そのときわれわれも見ていたのでわかるよ。めっちゃ届いているって。たしかにわれわれがその空軍を呼び込んだのはあるけれど、勝ったのはわれわれではないな、正直なところほとんどただ「見ていただけ」だったもん」

奇妙なことに、こうして「主題の呼び込み」が為されるとき、なぜかその呼び込みにはたらいっているわたしが、^^いちばん蚊帳の外VVという感じになるのだ。

あなたが稽古を積んでいくということは、あなたもその「蚊帳の外」が出来るようになっていくということだ。主題を呼び込み、主題をディールし、それでなぜかその主題の営為から自分がいちばん「蚊帳の外」になる。

周囲からはは主役と思われるのに、本人が体験するのは、「お前がいちばんオマケ」なのだ。

なぜこんなふうになるのはいつまでも不思議だ。仮にここであてはめた父と子と言うなら、これはもう父の意志なのだろうとしか言えない。

⑧稽古は、肉体にも文体にも全体にもつく

われわれは魚の「切り身」を食べる。「切り体」を食べるとは言わない。また、「体育」の授業があったとして、それを「身育」の授業とは言わない。

「身」は、身体性において「いくつかに切り分けられたもの」を指しており、「体」は、身体性において「ひとつに統合されたもの」を指している。われわれは「自身」の「体」をひとつのものに統合したいのだ。そのためにこそ、「身」に起こるすべてのことを正しく知り、正しく処理しようというのが稽古の道筋となる。七つの会社を統合してホールディングスにするとき、逆にその七つの会社の各個に精通してないと、まともなホールディングスは運営されまい。

切り分けられて捉えられる複数の「身」は、どうしてひとつの「体」になりうるだろう。われわれが認識し、量り、感じて想う領域では、このことはどうしても成り立たない。切り分けられているということは、ひとつではないということだし、ひとつということは、切り分けられていないということにならざるを得ない。

魂魄との連絡が得られない場合、われわれはここに「呪縛」を持ち込まざるを得ない。

たとえば親と子は、それぞれ別個の人格だから、分かたれているが、けれども親子だから「ひとつなんだ」と言いたいところもあるだろう。家族なのだからバラバラでいるのはつらい。かといって、それぞれ各個のびのびとやれていないのであれば、それは健全な家族ではないということになる。ここで呪縛が起こる。

「いいわね？ わたしたちは家族なんですから、ひとつなんです。みんな

つながっているんですよ。それで、○○ちゃんも、もう大人なんだから、自分のことは自分でちゃんとやっていかなきゃだめ。大人になったということは、もう誰も助けてくれないということなんです。そして、夜遅くなるならちゃんと連絡してね。言わなくてもわかっていると思うけれど、お母さんの知らない誰かと夜遊びするのは禁止です。誰とどこで遊ぶのか、ちゃんと言ってもらわないとお母さんあなたのことわからないから。いいわね、勝手なことしちゃだめよ。自分のことは自分で決めていけるようにならなさい」

呪縛は「血」の現象だ。われわれ人間に流れている血だけが、この「分かれたれている」「ひとつである」という矛盾に血を沸騰させる。空をゆくツバメや海をゆくイワシの群れはそんなことを考えたことがない。彼らはそんなことを考える血筋にない。彼らは人間道の因果にはなく、他の畜生道などの因果にある。

われわれが矛盾・相克を「考えてしまう」「そこに血が沸騰してしまう」というのは、猫が獲物を「追ってしまふ、獲ってしまふ」「そこに血が沸騰してしまふ」というのと同じだ。生きものの領域においてそれは逃れられない宿業の仕組みとなっている（そこに意図的にブーストをかけるのが呪術だ）。

魂魄の領域においては、身と体が同時に成立する。いくつものに分かれた身のままで、呪縛されずにひとつの体を得られる。

呪縛はただの「血による縛りつけ」ではないから、それで分かれた体が真に統合されてひとつになるわけではないのだ。われわれがそうして分割されたものを呪縛でつながっていると言い張り、振り回したとしても、その先にあることはただ「身のほど」を思い知らされるということのみ。

身と体の同時成立。分かたれて自由な身が、それでいながら統合されてひとつの体を為し、ひとつを為していながら各個でもあるというのは、

われわれの肉体にも起こるし、物事の「全体」にも起こる。さらにはここに書かれているような文章の、「文体」というレベルにも起こるのだ。

万事について、そこに身と体の同時成立がなければ、本稿が述べているところの「体験」が得られない。

本稿が言うところの「体験」はすべて、矛盾がなぜか両立したまま得られるというものだから、われわれが本当にそこに見出し出しているのは、人間道の業（カルマ）を超えて存在する魂魄と主題の権威なのだ。主題が体験されて、われわれはそこに「話」を見出し出している。

浦島太郎は観測されたことのない話なので、新聞記事や企業の日報にそのいきさつを書けばただの「ウソ」ということになる。けれども、それでいて浦島太郎という「話」それじたいはウソではないということなのだ。それで浦島太郎は体験可能な「話」ということになる。逆に、新聞記事や日報には本来「話」なんて書かないのだということ。浦島太郎という寓話は、われわれが生きているということの「全体」に参加してくるだろうが、新聞記事が原油価格の変動を報告してきたとして、それはわれわれが生きているということの「全体」に参加してはこない。原油価格が参与してくるのはわれわれが生きていることの「部分」だ。あなたの聴くレコードとあなたの生はひとつに織り合わされているところがあるかもしれないが、そこに原油価格の糸は織り合わされてこない。

わたしが書き話すことは、ここでは各章に分かれており、分かれているからこそ分かりやすさが得られてくるのだが、それでいてもわたしの書き話す「全体」がひとつのものになっていなかったら、読み手のあなたは本稿を読むの「体験」として掴みとることができなくなってしまうだろう。ひとつの全体を為していない情報群はただの羅列であり、たとえばわれわれは電化製品の説明書に「読書体験」は期待しない。本稿では、各章が「身」なので、場合によっては一部だけを「切り身」にして摂取することもできようし、そうではなくひとつの「全体」を読書体験

することもできるということ。そして切り身というものも、「全体」がひとつを為しているからこそ、その切り身にも命が通っていることになるのだ。

数十分もあるような交響曲の楽譜でも、そのひとつひとつは数秒に満たない音符という身であり、どれもこれも「分かる」音符が並んでいるだけでしかない。それが、それぞれに粒立った音を鳴らしながら、同時に単なる音ではないひとつの「全体」を為しとする、そのような演奏が為されれば、そこには音楽体験というものがもたらされるといふことだ。そのことにはたらいっているのはもはや音や楽器ではなく魂魄であり主題ということになる。

ここで、書き手のわたしがおり、読み手のあなたがいるのだとすれば、それぞれはそのような身分に分かたれていると言うことができる。書き手と読み手が分かたれず混濁するのでは、まるで近年の「うp主」と「コメント欄」のようになってしまいうだろう。ではここに別個の身分が相互に睨めつこあるいは協働作業でもしているのかというと、そうではない、それぞれは各個の身分に隔たれておりながら、なぜか書き話というひとつの全体を同時成立させてもいる。それであなたは、文章を読んでいるというよりも、体のいちばん奥に直接声を体験しているかのように本稿をここまで読み進めてきたのだ。

さらに「全体」と言えば、わたしがこれまでに書き話してきたこと、そしてこれから書き話していくことも、それぞれ各個に隔たれてありながら、そのすべてがひとつの「全体」を為しているだろう。その全体にネーミングを与えたとしたら、そこにはもう著者名を与えるしかないの、あなたにとっては「九折さんを読んでいる」という体験があるわけだ。われわれはクラスメートの丸山くんの作文を読むとき、そのことを「丸山くんを読む」とは言わない。それは彼の作文を読むということが、彼というひとつの全体性体験をもたらしってくるものではまさかないからだ。

稽古というのはこうして、身体的に起こる現象だが、身体的に起こるというのは必ずしも肉体的に起こると限定されるのではなく、われわれにとって体験可能なありとあらゆる事象に現れる。わたしがここに書き話している文章の文体は、たとえば「みなさん、こんにちば。ぼくは、○」です。ぼくは最近、こう思います」というような文章の文体とは異なる。ここで、どの文体が正しいということではなくて、文体をそれじたい体験可能なものにするためには、それぞれのことが際やかな各個として並んでいながら、その角が処理されて正中線に引き取られていないてはならない——文章の真ん中に「浮身」が掛かっているといけな——ということが本当にあるということなのだ。文章に肩肘や、腰や膝などは存在しないように思えるが、いつそ文章にも肩や肘や、腰や膝があるとみなしたほうがよい。それらが好き放題に暴れていては、文章の真ん中に浮身はありえず、そのような文章は読み手にまったく体験をもたらしてはせず、ただどこまでも書き手の「身のほど」をみずからで暴露してくるというだけの、随所を角ばらせたものにしかならない。このような書き手は書き手としての「力量」を見せつけようとすることに執着していて、そのくせじつさいには「身のほど」を暴露するばかりになるので、以降ますます文章の肩肘は力づくで振り回されることになり、しだいにもはや「何を言おうとしているのかさえわからない」ような文章になっていく。

あなたが職場や取引先の誰かから受け取るメール等の文面について、「もはや何を言おうとしているのかさえわからない」という独特の疲労感を覚えることがあったら、あなたが目撃しているのはまさにこのことなのだ。

「角ばっているばかりで、何が言いたいのかさっぱりわからないよ」と、あなたは言いたい。

⑨ 稽古は時間的隔たりが感想されず、また時間的作輟（さくて

つ）もなされない

三歳児に平安時代の話をして、三歳児はそれを「ずいぶん過去のことだなあ」とは思わないだろう。なぜなら三歳児はまだ明確な自我を具えておらず、量・量と量というものを未だ活発にしていなかった。経過した時間を量らないので、三歳児は平安時代のお話と同じ位置にある何かというふうに捉える。

われわれにとつてたとえば、オバマさんがアメリカ大統領だったのは、もうずいぶん過去のことだよ、という認識があつてよい。冷蔵庫にある牛乳は、もう二週間前に買ったものじゃなかったつけ、そういう認識があつてよい。けれども、落語の稽古や剣術の稽古があつたとして、そこで江戸時代をずいぶん過去と捉えているようでは、それは時間を量っている、その感覚・感想にあるうちは、まるで稽古には入れない。稽古は時間をさかのぼっていく営為であり、たとえば17世紀の太刀筋が、「もっちりん」よりも時間的身近にあるところへ至って初めて、稽古は本質的に稽古となるのだ。稽古をする者は、今年の流行語や先週の課長からのメールよりも古（いにしえ）から伝えられたことばのほうが時間的身近になっていなくてはならない。

われわれに「量的感想」をもたらすものとして、「力量」に並びこの「時間量」というものが二巨頭としてある。この二つは本質的に同じなだろう。

われわれは稽古といって、先週の続きを今日もやろうと考える。そして今日の稽古が終われば、「来週もがんばろう」と思うのだ。それは

ごくふつうのことではあるが、このふつうのことを続けているかぎり、残念ながら稽古というのは真の実効をあなたにもたらさない。実効のあらわれは何百分の一案のペースになってしまい、このことはあなたにやがて不毛感と「飽きた」という思いをもたらすだろう。

今週のドラえもんが面白かったとして、来週のドラえもんの日まで、ドラえもんの世界はどこかへ消え去っているのだろうか。それはおかしい。アニメ放映が週一のことであつたとしても、ドラえもんの作中世界が週一というわけではないはずだ。それと同じように、稽古というのは取り組みをしていないあいだもずっと継続されていなくてはならず、この継続が途切れることを「作輟（さくてつ）」という。「学門の大禁忌は作輟なり」という吉田松陰のことばから、この作輟という語は一般によく知られている。

故バーンスタインのような音楽家が音楽の中にいるのは、演奏中だけのことだっただろうか。まさかそんなことはあるまい。あるいは、犯罪者が罪人であるのは犯行現場においてのみではなくそれ以降ずっとのはずだ。鳥が鳥でいるのは何も飛行中だけのことでないだろうし、モネが風景の中にいたのは何も筆を手にしているときだけではなくたはず。であれば、稽古をする者が、取り組み中にだけその稽古の中にいるということであれば、そのことのほうが馬鹿げているのだ。取り組みをしていないときにも稽古はずっと続いていなくてはならない。そのことが当たり前になつてゐる者のみ、稽古というのはまともな実効を現してくる。

このように稽古というのは、歴史的にも作輟的にも、時間量という感覚支配から脱け出していないと実効が得られないのだ。稽古と日常を往復し、そのたびに作輟が起こつてゐる者は、むしろ稽古中にも日常が残存しているのであつて、けっきょくのところ非現実的な稽古には入れないということになる。さまざまな稽古事が何ひとつ「ものにならなかつた」という人は、たいていこの作輟・時間量支配が原因になつてゐる。

## ⑩体の形

究極的なことをもうひとつ述べる。

体の真ん中、横隔膜のいちばん奥に、「話」が得られる。

横隔膜のいちばん奥、正中線を通路に、主題が体験される。

このことは、どのようにしてもたらされるかというところ、究極的には「体の形」だ。

たとえば、文学の魂魄に連絡を得るには、どうすればよいかといつて、そういう「体の形」を得るしかない。

シェイクスピア劇の世界に魂魄の連絡を得るには、どうすればよいかといつて、そういう「体の形」を得るしかない。

剣術の魂魄に連絡を得るには、体の形がなく、唄い、踊ることの魂魄に連絡を得るには、体の形しかない。

落語と絵画はまったく別のものに見える。たしかに、志の輔らくごとハドソソリバー絵画はまったくの別物だ。しかしそれらはどちらも、それぞれが得られる「体の形」という一点のみから得られている。

このことは、実験でたしかめることさえできる。

あなたに音楽の指揮棒を持たせ、わたしはその横で割り箸を持って立つてみよう。

すると、なぜかわたしの持つてゐる割り箸のほうが「指揮棒」に見える。

あなたに燕尾服を着せてさえ、やはりわたしの持つてゐる割り箸のほうが指揮棒に見える。

あなたは、わたしのポーズとまったく同じポーズをとる。寸分たがわずというほどに入念にだ。それでもなぜか、あなたの持つてゐる指揮棒

は、ただの白く塗られた枝のおもちゃにしか見えない。

“体験的に指揮棒ではない”のだ。

ポージングをどのように真似ても、それで横隔膜の奥までが真似できているわけではないので、あなたの体の形には、魂魄との連絡が体験されない。

このことに尽きるのだ。

あなたはいろいろなことを感じ、いろいろなことを思う。

その、あなたの感じることを、思うことが、あなたの顔面に浮き出ている。

内容は知らないが、何かを感じ、何かを想っているんだろなあ、ということが察せられる。

あなたが音楽を感じ、音楽に熱い想いを向け、うまくやりたいと思いい、がんばらなきゃとも思い、恥を掻くのはいやだとも感じていれば、そのことがすべて顔面に出ている。

あなたの体の形は、「力量を問われている」というところの体の形で、それをもっていかなるポーズを整えたとしても、その形に命は連絡されない。

命が連絡されないのです、それは骸（むくろ）であり、形骸となる。

わたしが割り箸を持って立っているのはそうではないのだ。

割り箸を持って立っている時点でもう、主題が飛んできている。

わたしは、無力だし、それによって、あなたがたも無力化する。

割り箸が主題の権化として現れるのだな、ということが、もう前もって体験される。

時間軸上、観測よりも「話」のほうが先にあるのだから。

無力化され、魂魄に連絡し、主題を呼び込む、そういう「体の形」がある。

ぜんぶそれで済むし、それ以外に方法は存在しない。

顔面にただよう色（しき）は、体の形ではないので、魂魄の代用にはならない。

あなたの顔面が、美女や美少女だったら、肩入れされて、協力してもらえて、その後に言い寄られるかもしれないけれども。

このことは、一冊の書籍についてさえ起こる。

一冊の、ハードカバー、古めかしい文学か哲学かの本を、あなたが手に取る。

わたしも同じものを手に取ろう。

そして、それを手に持って座しているところを動画で撮影すればどうなるか。

あなたの映像には、なぜか、本を手に持っているということが体験されないのだ。

本を手に持っているということが、認識はされるけれども、体験はされない。

本というものの存在が体験されない。

ページを開いて、数秒でも読み始めると、映像にあらわれる差はもっと大きくなる。

わたしのほうの映像は、あなたを「あ」と言わせ、それが何の「あ」なのかはわからないまま、ただ本があり、本を読んでいるという映像が、そこには体験される。

あなたのほうの映像は、そうではない、あなたが本を開いて、そこで「何か別のことをやっている」というふうに見えるのだ。

もちろん認識上は、「本を読んでいる、んでしょうね」とは受け取られる。けれども体験的にはそうではない。体験的には、

「この人は、いっそ本を読んではいけないでしょう」というふうになる。

何が違うといって、体の形が違う。

このことは、ショッキングではあれ、当たり前のことなのだ。

二歳児が手に持っているミニカーと、四十歳のおばさんが手に持っているミニカーは違う。

二歳児が手に持っているそれは、躍動感あらたかに走り回る、ワイルドでタフなマイカーだが、おばさんが手に持っているそれは騒々しい玩具だ。

何が違うと云って、ミニカーを手をしているときの、二歳児の体の形と、おばさんの体の形が違う。

われわれは、体の形がその奥で、魂魄に連絡を得ているか否かを体験的に知っており、魂魄に連絡を得ているそれについては「あ」という反応を見せるのだ。そしてそうではないものには「うわ」という反応を見せる。それが微細だから見えにくいだけだ。自我の感想ノイズが大きくて埋もれてしまうだけ。

そして、体の形が違うだけでしかないという、このことが、思いがけずわれわれにショックを与える。

体の形じたいが、つながっていない、見捨てられていると思ひ知るところと、自分を打ちのめすものはない。

稽古は、その体の形を得ていこうとする営為だが、ここに来て、「自分」は体にその形をとらせてくれない。体の真ん中、横隔膜と、顔面の自我は相克するのだ。両者は相互に侮辱的にはたらく。自我はその神経であなた体を支配し、当該の形を決して取らせないという本性を見せる。

量れないものを受け入れることは許さない。量れるもののみを、観測し、量った上でのみ信じるというのが自我だ。量れないものは受け入れない。つまり色（しき）しか受け入れない。

先ほど、「図中の中央、青色のエリアをすべて塗りつぶしたほうがわかりやすいかもしれない」と述べたが、そのとおり、自我は元からそれをするつもりでいるのだ。話を生存させない。自我はあなたの体を隅々ま

で支配し、けつきよくは体に「自我の形」しか取らせないつもりだ。魂魄の形は取らせない。主題の形を取らせない。命の形は取らせない。「話」の形を取らせない。

いますぐ色（しき）の形を取りなさい。あなたにはそれ以外「無理です」という感と想が湧く。すごい重力だ。これを担いで歩いて進めと言われても、それはあまりにも不可能ですとあなたは屈さざるを得ない。こんなひどい苦役は無理です。とにかくものすごい重力と重量なのだ。しかも薄汚れて汚らしく、打ちのめされ続けている。

それで、なるほどたしかに、その巨大な重力と重量が大幅免除されることがあるなら、それはまるで身が「浮く」というように体験されるのかもしれない。角のすべてを正中線に引き取って、主題のところへ帰らせるということなら、主題の側、魂魄の側は、その重さを抜き取るという権威さえ持っているのかもしれない。

それが、話と色（しき）なのだ。じつのところ、「そんな話はない」まさに、色（しき）ばかりが摂取されている、そのことは体の形を見るだけでわかる。魂魄に連絡を得ている体と、そうでない体はまったく違うのだから。たとえ筋トレをしてボーリングを格好よくキメたとしても、それで横隔膜の最奥が魂魄と連絡を得てくれているというわけではない。

あなたが一冊の本を手取る。その様子を動画で撮影してみると、映像中、あなたの手には本が携えられているとは認識されながら、そこに本の存在は体験されない。それは体の形が違うからだ。体の形が、読書や文学や古典といったところの魂魄に連絡を得ていないので、あなたが持っているのはただのいかめしい無縁の物品でしかない。あなたはそれを恥に――罪に――感じ、なんとかして補おう、ごまかそうと想う。そういう感と想が、自我のはたらきとなってあなたの顔面に漂い出る。

あなたのまったく知らないことがある。それは、あなたがまったく気づかないことで、あなたがまったく保てず、あなたがまったく取り扱え



ないことだ。あなたはそれをこそなんとかしなくてはならない。

わたしがあなたのところに参じて、あなたの持っている本を、わたしが手ずから取り上げるといふことをしよう。そしてその本を、開くことさえなしに、そのままあなたにふたたび授与することにする。このやりとりには何の意味があるだろう。ほんの数秒しか要しないことだ。そこに恣意的な感情の起こりは何ひとつない。

何も起こらないはずだ。しかしそうではなく、以降の映像中でああなたは、はつきりと「本を持っている」ものと体験される。

何が起こったのか。あなたは自分の身に起こっていることに何ひとつ気づけていない。あなたはさすがにここにおいて、ご自身の知識と経験が深淵にまでおよんでいるとは主張されないだろう。

本を授与されたとき（厳密には、あなたがそれを受け取ることになったとき）、あなたの身は真ん中からスッと軽くなっている。浮身が掛かっているのだ。わたしは、あなたから本を取り上げるといふ形式、あなたに本を授与するといふ形式をきっちりやった。数秒だがそのようなことが出来る。そこには、あなたから本を取り上げるといふ話があり、あなたに本を授与するといふ話があったのだ。体の角と拳動の角はすべて正中線に引き取られてひとつの「全体」になっている。あなたはその「話」を体験しているから、以降の映像に「本を持っている」という体験が写り込む。

あなたはまったく気づかないけれど、この「本を取り上げる」「本を授与する」という、数秒にも満たない話・形式を与えられた中で、**^^あなたの体の形は変わっているVV**のだ。わたしがそのとき、ほとんど無理やりあなたの体の形を変えたということ。

魚の小骨が喉に刺さったとき、あなたの体はじつとしていないだろう。であれば、横隔膜のいちばん奥に何かもたらされれば、あなたの体はじつとしているわけではないのだ。体の形は変わっている。つまり、そ

うしてわたしはあなたに^^稽古をつけたVVのだ。

ただ、あなたはその体の形を、十数秒さえみずからで保つことができず、つけられた稽古はそこからもう雲散霧消してしまう。あなたの身はそのとき、ふたたび「ものすごい重力」「無理です」に戻っているのだが、そのことさえあなたは気づかないのだ。

## 稽（かんが）えろ

だから、稽（かんが）えろとしか言えない。

稽（かんが）えろというのは、頭の先っちょで思い耽るということではない。

考えるのではなく稽えるのだ。

体の真ん中で稽えろ。

横隔膜のいちばん奥で稽えろ。

頭の先っちょで考えているから魂魄と連絡しない。

ブルースリーが、「考えるな、感じろ」と言ったが、わたしは「考えるな、感じるな」と申し上げたい。

考えるな、感じるな、稽（かんが）えろ。

体の真ん中で稽（かんが）え続けろ。

手放すな。

あなたは世の中とのレスバトルにこだわるゴミ人間なのか。

魂魄と連絡を得よ。

それが得られないですなんて考えるな。

魂魄と連絡が得られるのは、向こうの側の性能であって、あなたの側の性能ではない。

魂魄と連絡が得られるか否かはあなたがどう思うかの問題ではない。あなたはただ、稽（かんが）えるのを厭（いや）がっているだけだ。稽（かんが）える者は、それだけで、もう体の形を始めている。

その体の形で、魂魄との連絡が得られるのであって、その連絡が「何」であるかなんて、あなたが知り得るのは十年以上も先だ。

とにかくただ連絡を得よ。あなたが講釈を垂れるのは十年後でいいし、感想をのたまうのは二十年後でいい。

体現している。

その体の形を失うな。

あなたのお得意の自我が、昂って、体の形を失わせる、そんなことはもうわかってる。

あなたよりわたしのほうが何百倍もそのことを知っている。

なんとかしてもらう方法はない。

いいかげん飽きたらどうだ？

ただあなたが稽（かんが）えるだけだ。

体の真ん中で稽（かんが）えるだけだ。

あなたがそれをやめてしまうから何もかもが失われるだけだ。

あなたがそれをやめるといふことをやめればいいだけだ。

あなたはまるで、自分が正しい人ですというように、四の五の言いだすのだが、本当は稽（かんが）えるのをやめただけだ。

すべて稽古不足だ。

稽（かんが）えるということが足りていない。

稽（かんが）えるということ、を、都度にキャンセルして、陳腐化して自我のお得意を振りまいて、正しい人のふりをし続けるという、その汚らしいことをいったい何年続けてきたのか。

そのことをこれからも続けていくつもりなのか。

へへあなたがどうであれ、まともな人はけつきよく、稽（かんが）えるのをやめず、魂魄との連絡を手放さないV。

魂魄との連絡を手放すことを、どうしてあなたは「偉い」と思っているのだ？

あなたは悪魔の使い走り、悪魔を主とし、悪魔の御心を実現するのが使命なのか。あなたの体は、悪霊による「霊なるもの」なのか。

魂魄との連絡に横やりを入れ、「そんなわたしは大魔王、イエーイ」と踊っている、その汚らしい顔面の何がうつくしいのか。

稽（かんが）える、体の形が変わるまで稽（かんが）える。

「汚らしかった顔面」が、「そうでもなくなる」まで稽（かんが）える。

顔面が汚らしいなどと言われると、ショックで傷ついたと感じる人が多いと思うが、わたしはいま魂魄の話をしているのだ。

なぜ魂魄の話をしているのに、あなたは自分の顔面ショックの話をするのか。

馬脚を現していよう。

魂魄のことなど、信じようもないしどうでもよくて、自分の顔面の器量のほうが一億倍も大事なんだろう。

それが、うつくしいことなのか、汚らしいことなのか、体の真ん中で稽（かんが）える。

魂魄に問い合わせるまでして稽（かんが）える。

あなたはすぐに「分かりました」というが、あなたが分かるということには何の意味もない。

それがうつくしいことなのか、汚らしいことなのか、そんなことは、善悪の知識の実を食った者なら全員が分かっている。

漫画ワンピースではないのだから、われわれはその実を全員で食っているのだ。

だからあなたの「分かりました」なんて要らない。誰も必要としていない。

魂魄に問い合わせるまでして稽（かんが）えろ。

体の真ん中から、魂魄に問い合わせるまでして、はじめて何かが体現されうる。

あなたはいつも、

「分かっちゃいるんですけどねえ、やめられないんですよ」

と言う。

それは、あなたの「分かる」という機能には、何の意味もないし、何の権威もないからだ。

金輪際、分かるのをやめろ。

それ、一ミリも、何にもならないから。

「体の真ん中で魂魄に問い合わせるまでしたんですけどねえ」

とだけ言え。

これまでに何ひとつ体現してきていないということを、よりにもよって威張り散らかすな。

この先、体の真ん中で、稽（かんが）えろということを続け、そのことをやめずに生き抜いたとき、十年後、あなたにあなたの「話」がないなんてことは決してありえない。

何の稽古もついてないなんてことは決してありえない。

ただそれだけなのだ。

ただそれだけのことなのに、あなたはなおも色（しき）を「わたし」として、差別の中に思い込みの自分を形成し、それに縋ってバランスを取るなんてめちゃくちゃなことを続け、また十年後にも、何ひとつ主題を体現していないということを威張り散らかすのか。

あなたの本質は話なのだ。

そのことはただ稽（かんが）えろということ你得られる。

それがまるで足りていないだけだ。

あなたがそれをすぐにやめてしまっただけだ。

それでは、真ん中が空っぽで、そのせいで世界がグロいなんて、当たり前ではないか。

稽（かんが）えろ、体の形が変わりはじめる。

それは、「あなた」のはじまりだ。

引き返すな。

体を棄てるな、調整するな。

なぜあなたが引き返すのか、その理由も知っている。

知っているが、引き返すな、いま進まなくてもいいから引き返すな。

^^顔向けできないVのだろう、そのことはもう知っているから、引き返すな、うつむいてやりすごせ。

しばらく、あるいは長いこと、卑怯者でいるしかない。

そのことも知っているから引き返すな。

顔向けできる日が来るなんて、いつのことになるものか、果てしなく遠い気がする、そのことも知っているから引き返すな。

顔向けできず、うつむいて、卑怯者のまま、それでも引き返すことをやめたい。

そうするしかないとあなたが言うなら、それはもうあなたの話のはじまりだ。

勝手に自分を罰するなよ、何の権威もないくせに。

勝手に自分の罪を量るな。

顔向けできないまま、それでも進ませてほしいのだろう、そんなこととづくに知っている。

あなたがいまさら気づくようなことは、はるか以前にこちらでとづくにお見通しなのだ。

あなたは勝手に自分の罪を量り、

「進む資格がありません、とても顔向けできません」と言っている。

だからそれについて、こちらは長々と、

「そんな話はない」

と言っているのだ。

あなたはやたら、善悪に自信があるようだが、どこに根拠があつての自信なのか、そのときだけやけに威張りくさるね。あやしいものだ。

それでも、あなたが勝手に量った善悪は、何らの話でもない。

そんな色（しき）があるというだけで、そんな話はないのだ。

あなたはもう、その勝手に量るということをやめたらどうだ。

どうせ、自分は罰されるべきなんて「話」を、本当はどこからも見つけてはこれないのだろう。それじゃ、シリアスぶっているわりにはずいぶんお粗末だと思わないか。自分で主張しておきながら「そんな話はなかったです」と報告するよりないのか。

じゃあいいかげん、本当にはどういう話が見つかってしまうかという、そっちの話のほうを報告しろ。どんな話があつたのか。どのように生きるという話があつたのか。それはどうせ量りえない話だつたのだろう。量りえない話でけっこう、まさかそこであなたはなおも「量る」と言い出して、その自分のほうが権威があるとはまでは言い出せないのだから、あきらめてあなたはあなたの見つけた話に従いなさい。話の権威はあなたの色（しき）なんかじゃ量れないのです。それが話と色の間柄です。

「話と色／了」